

語り継ぐ

小学校 2 年生で体験した阪神・淡路大震災を

高校 3 年生の言葉で語る

兵庫県立舞子高等学校

環境防災科 3 年

震災体験集の発刊にあたって		中杉 隆夫	
もくじ			
題 名	被災時の住所	名 前	ページ
初めてだらけの体験	神戸市垂水区	浅野 翔太	1
一番大切なこと	神戸市西区	雨河 彩	5
自然界との関係プレー	神戸市垂水区	石川 理彩	9
あの日の追憶	神戸市西区	植原 麻由美	1 3
震災体験を乗り越えて	神戸市垂水区	大塚 美帆	1 8
当時の日記	神戸市須磨区	岡本 昴大	2 2
変化の目	神戸市西区	奥野 香苗	2 7
黄色い花	神戸市垂水区	神谷 亜依	3 1
私が書く震災体験	神戸市兵庫区	岸本 くるみ	3 6
偶然と変貌	神戸市中央区	黒田 浩志	4 2
現実と真実を乗り越えまた走り出す日	神戸市垂水区	小柴 剛	4 7
過ぎ去りし日々	神戸市長田区	小西 崇文	5 1
忘れられない日	神戸市西区	小林 勇輝	5 5
軌跡	神戸市垂水区	島本 一志	5 9
震災体験	神戸市垂水区	城倉 剛	6 3
蘇るあの日、あの時	宝塚市	杉田 かなえ	6 9
J I S H I N	尼崎市	住友 健太	7 2
あの日の出来事	西宮市	中井 篤	7 7
あの震災から学んだこと	神戸市長田区	長尾 美幸	8 2
震災体験	神戸市須磨区	中谷 悠司	8 7
あの時から考えたこと	神戸市垂水区	那須 裕美	9 0
小学二年生と高校三年生	神戸市西区	野内 沙紀	9 4
忘れられない思い出	神戸市垂水区	八田原 納苗	9 8
恐怖の震災体験	神戸市須磨区	平井 美紗	1 0 2
1995 年からの僕	神戸市長田区	福井 良太	1 0 6
震災から 10 年	神戸市長田区	藤浪 梓	1 0 9
10 年	神戸市東灘区	藤本 諭	1 1 3
B e s t F r i e n d	神戸市垂水区	前川 直	1 1 6
震災を振り返って	神戸市西区	前田 緑	1 1 9
震災から	神戸市垂水区	松井 仁志	1 2 3
いつまでも	明石市	丸山 修平	1 2 7
たくさんの教訓と出会い	神戸市長田区	溝渕 法子	1 2 9
アースクエーク 1 9 9 5	神戸市垂水区	道上 昴平	1 3 2
あのときの経験から	明石市	山口 恭平	1 3 5
忘れたくない思い出	神戸市東灘区	山口 貴之	1 4 0
1 月 17 日という日から	神戸市垂水区	山口 友子	1 4 4
記憶をたどって・・・	神戸市垂水区	山之内 優子	1 4 7
教訓	神戸市垂水区	山本 健矢	1 5 1
あのときを振り返って	神戸市兵庫区	山本 真巨	1 5 5

震災体験集の発刊にあたって

学校長 中杉隆夫

平成7年1月17日

私たちにとって忘れられない日 忘れてはならない日
季節の移ろいの中で あの日からまもなく 十年の歳月が流れようとしている
人には見えず 人には語れぬ
おびただしい時空と言葉を超えた想いを引きずりながら
再びその日は 巡って来ようとしている
かけがえのない肉親を亡くし 大切な友だちを失った者たちの 深い哀しみは
季節がどんなに夙く流れようと 忘却の河床に埋もれることはないだろう
だからこそ敢えて言おう
残された者の責務として 哀しみの涙に倍する教訓を学び取り
これからの自分の生き方に生かすこと 今を精いっぱい生きること
記憶を風化させないこと 今の自分にできることを後輩たちにつなげていくこと
そうした一つ一つの営みが 生半ばにして 無念のうちに逝かねばならなかった
多くの者の想いに応えることと信じたい

本冊子は 環境防災科に学ぶ本校の生徒たちが 卒業作品の一環として それぞれの体験した大震災を その後の生き方も含めて 自分の言葉で真摯に綴ったものです

当時まだ小学2年生で 運命と呼ぶには余りにも不条理かつ過酷な現実を 小さな体で受け止めなければならなかった大変さに思いを致しますが そこには自らの皮膚感覚を通して感じ取った命の大切さや家族のきずな 人のやさしさへの感謝の気持ち ボランティア精神の尊さ 他者を思いやる心 自然に対する畏敬の念など素直に吐露されています

本冊子が生徒一人一人の更なる成長への一里程として また阪神・淡路大震災の貴重な語り部として活用いただけることを心から願ってやみません

平成16年8月

初めてだらけの体験

浅野 翔太
神戸市垂水区

家族構成など

お父さん（会社員）、お母さん（主婦）、ぼく（小学2年生）、弟2人（幼稚園児と4歳）で築20年くらいの団地の4階に住んでいた。部屋の家具の固定はされていなかった。食器棚は引き戸だった。寝る部屋にはタンスなどは置いていなかった。当時はまだ小さかったので家族は全員同じ部屋で川の字になって寝ていた。

1、震災前日

地震がくるとも知らずに当時小学2年生だったぼくは、成人式の振替休日だったけどお父さんがゴルフだったので家で遊んでいた。お父さんが帰ってくる午後6時30分ごろに少し大きな地震があった。しかしお父さんは車に乗っていたのでわからなかったと言っていた。その日の夜は、テレビの野球中継を見ながら家族とわいわい騒いで遊んだ。ぼくたちは、「夜に鳥がうるさいなあ」と思い、午後6時30分ごろに起こったあの地震が阪神・淡路大震災の前兆現象と知るよしもなかった。まだ小さかったので9時30分くらいに「明日からまた学校いかなあかんあ」と思いながらいつも通りに寝た。

2、震災当日

「ゴゴッ〜！！」という地響きで目が覚めた。そのあとすぐに「グラグラ〜！！」というような今までに体験したことがないものすごい揺れが始まった。団地の4階に住んでいたせいか、ものすごい揺れだったので家がとんでしまい、つぶれてしまうかと思った。部屋の天井につるして飾ってあったお父さんの大切な大きなヘリコプターの模型が落ちてきたら大変だと思い、ぼくは学校で教えてもらったことを思い出して、とっさに布団の中に潜り込んだ。まだ揺れているのかと思うくらい長く揺れていた気がした。揺れている間は家が潰れないでくれと思っていた。布団に潜り込んでいたときに何かが落ちてきてぼくのひざを直撃、ぼくは思はず「痛っ！」と言った。しかし布団があったので痛みはそれほどなかった。揺れがおさまった後、何が落ちてきたのか確認しようとしたが暗くて何も見えなかった。その後お父さんが「大丈夫か？」と聞いてきたので、ぼくは「ひざに何か落ちてきた」と言った。お父さんは何が落ちてきたのか調べてくれた。そして5秒くらいした後で、落ちてきたものを見て「木の枠に入ったじじばさんの人形だ」と言った。そのときぼくは、布団がなかったらもっと痛かっただろうなあと思った。

次にぼくは窓の方を見た。カーテンを引いていたので、外の様子は見えなかったが、冬の朝なので日の出は遅く、少し明るくなってきていたところで外はまだ暗かった。電気がつかないことにきづいて、お父さんがリビングにろうそくとライターを取りに行った。リビングまではそう遠くないのになかなかお父さんは帰ってこなかった。ぼくは暗いせいかなあと思った。ろうそくとライターを取りに行って戻ってきたお父さんは、「痛かった〜」と言った。お父さんは足の裏をガラスで切っていた。その後お父さんは「テレビがとんでいた」と言った。ぼくは嘘だと思った。今では、ライト付のラジオや携帯を頭の上において寝ているので電池が切れないうえにこういうことにはならないと思う。スリッパも近くにあるので、ガラスの破片で足の裏を切ったりすることはないと思う。

そしてだんだん明るくなってきて、足元も見えるようになってきたので布団から出てリビングに行った。寝ていた部屋を少し出ると下には割れた食器の破片が散乱していた。ぼくはガラスの破片を踏まないように慎重に動いたが1ミリくらいのガラスを踏んでしまったが血が出るまではいかなかった。次にぼくの目に入ってきたのは、とんでしまっていたテレビだった。お父さんが言っていたテレビがとんでいたというのは事実でびっくりした。テレビには何かに当たって傷がついていた。リビングで寝ていたらどうなっていたことか想像するとぞっとした。そのテレビの傷は今も残っていて、傷を見ると阪神・淡路大震災でテレビがとんだということをおもいだす。他にも冷蔵庫が倒れていたり、冷蔵庫の中身の卵がわれていたり、食器棚の上だけとんでいて、中に入っていた食器ほとんど割れていた。テレビがと

んだりすることはすごい力なのということだけはわかっていた。

ぼくが一番ショックだったことは飼っていた熱帯魚のディスカスが死んでしまったことだった。赤い色のディスカスは床に落ちていて、呼吸ができなくなり死んでいた。しかしもう一匹の青いディスカスは家中どこを探してもいなかった。窓もドアもどこも開いていなかったのにどこへいったのかわからなかった。今もそのディスカスの行方は家族の謎になっている。熱帯魚の水槽の水がこぼれて畳が湿っていたので、ぼくは乾かすために畳をあげる手伝いをした。ぼくは畳が上がることを知らなかったのでびっくりした。それと小さかったし、畳が湿っていたせいか意外と畳が重いこともそのときわかった。

その次に今日は学校に行く日だということを思い出して、ぼくはお父さんに「学校いかにいいん？」と聞いた。するとお父さんは「どこの家も被害にあっているからいかにいいよ」と携帯ラジオを聞きながら言った。ラジオを聞いていると、震源という言葉は知らなかったが、淡路島ということを書いていたので近いことがわかり、神戸全体が被害にあっているということもわかった。今は、震源などは常識みたいになっている。こうしている間にも大きな余震は何度も何度も続いた。お父さんが「余震が続いて危ないから小学校に避難しようか」と言った。その後両親が話し合っ、避難することに決まって避難の準備をはじめた。カセットコンロ、カップラーメン、水、下着、ラジオ、懐中電灯、ライター、ティッシュなどを持って避難した。地震が起きてから準備するのではなく、起きる前に非常持ち出し袋を用意することが大切だとこの時に思った。いま思うと非常持ち出し袋に入れておかなければならない物（軍手、救急箱、ナイフ、石鹸など）の半分くらいしか入れてなかったと思う。

ぼくたちが行くと体育館には、体育館半分くらいまで避難してきていた人で埋まっていた。みんなあまりしゃべっていなかったのも、その場にいづらかった。ぼくたちは体育館の真ん中あたりの壁ぎわになった。少しするとぼくたちの隣にも避難してきた人たちがやってきた。隣の人はおばさんだった。体育館は冬だったのでとても寒く、しかも壁ぎわで毛布がなかったら耐えられないような寒さだった。体育館に来てからも余震は何度も何度も続いた。余震が起こるたびに「わ～！」というような声があがった。体育館の天井についている電気が振り子のように揺れて、落ちてきそうだった。

その日の晩御飯は持っていったカセットコンロで持っていった水を沸かしてカップラーメンをつくった。寒い寒い体育館で暖かいものを食べたので、体の芯まで温まった。その後は体が冷えないように毛布を体に巻きつけて寝るまで過ごした。体育館での生活は壁がなくすぐ隣に人がいたので家での生活と違い、過ごしにくく、冬だったので風邪をひいている人の咳や赤ちゃんの泣き声がうるさくて、ぜんぜん眠れなかった。今あのような生活をするとうごくストレスがたまるし、プライバシーもあると思うのでダンボールのしきりくらいはあったほうがいいと思う。それにそのしきりで空間ができ、しきりがないときより暖かくなると思う。その日1日がめちゃくちゃ長く感じた。

冬の寒い環境で、ほぼ密閉されている体育館だったせいか、風邪をひいている人の菌をもらってしまい、ぼくは風邪をひいてしまった。そのときは両親がとてもあせったと言っていた。薬なんかは持っていかないでもいいだろうと思っていたのもってきていなかった。それなので車でかかりつけのN小児科にいったが、地震があったせいか開いていなかったのもう1つのK小児科にいった。開いていたので見てもらおうと風邪だと言われた。その後に薬をもらった。すると2日くらいで風邪は治った。壁などのしきりがないのでインフルエンザなどの伝染病が流行ってしまうので壁などが必要となると思った。

3、数日後

余震の回数も少なくなってきた。その日は給水車が来て水を配ってくれる日だった。お父さんと誰が行くかということになり、お母さんは弟の面倒を見るのでいけないということで、ぼくが行った。まだ小さかったぼくにとって、2リットル用のポリタンクに入った水は3倍の6キロくらいに感じられた。それを運ぶのはひと苦労だった。ポリタンクを運び終わるのに5分くらいかかっていたので途中でお父さんに手伝ってもらいながら運んだ。疲れがどっとたまった。朝食のパンなどが配給されるときもお父さんと一緒に取りにいった。今思うと家族に迷惑ばかりかけていたけど、あの時は貢献できたかなと思った。

体育館では何もすることがなかったので、持っていったゲームボーイで野球ゲームをして遊んでいた。周りの人の迷惑にならないように音は消してやった。いつもならゲームボーイの取り合いをしていたはずなのにそのときはしなかった。いつもならすぐに飽きてしまっていたけど、そのときは他に何もすることがなかったので、ゲームボーイはいつもやっていたときより面白く感じた。もしゲームボーイを持っていったいなかった避難所での生活はストレスがたまり耐えきれなかったと思う。

震災直後より体育館の中にいる人たちの表情もだいぶ明るくなってきて、笑顔も見えはじめてきた。

大人たちが世間話や地震のことについて話をする声や子供たちの笑い声などが聞こえだし、遊ぶ姿が徐々に見えてきた。ぼくたちは3日間くらい体育館で過ごした。避難所は楽しいところではないと分かっていたが、毎日同じ生活の繰り返しで本当に楽しくなかった。余震も震度が小さくほぼゼロに近くなってきた。次の日くらいから徐々に避難所から出ていく人が増え始めてきた。ぼくたちもその次の日の昼過ぎくらいに家に帰った。ぼくたちが避難所を出たときには、3分の1くらいの人が帰っていた。そのときぼくは、残りの人はいつまでここに残って生活するのだろうとちょっと不安になった。

避難所の体育館から帰ってきて団地の下に来ると入るところの段差が盛り上がり土が見えていた。これも地震が残したつめあとなんだなあと思った。家に入ると、これが、ぼくたちが住んでいた家かと目を疑った。余震が続いていたせいなのか地震直後よりまたひどくなっていたような気がした。家に帰ってすぐに水が出るのにきづいて、家族みんなで喜んだ。その後に乾いていた畳を元に戻すのを手伝い、テレビがとんでいるのを元に戻す手伝いをした。お母さんは、割れた食器のかたづけや割れていない食器の分別などをしていて、ほとんどの食器が割れていて使えなくなっていた。そのとき弟たちは寝ているだけだった。そのときぼくは、弟たちは小さくていいなと思った。

かたづけなどをしていてもう夜かと思い、おばあちゃんの家に風呂に入りに行った。久しぶりのお風呂だったので、とても気持ちがよかったし、今までの疲れがすべてとれたような感じになった。その後数日間はお風呂だけおばあちゃんの家に入りに行った。避難所でも家族そろってご飯を食べていたが久しぶりに家で家族と話をしながらご飯を食べるとおいしかった。避難所で食べたときよりリラックスして食べることができた。数日間は、ずっと家のかたづけの手伝いをしていて。

ぼくは地震がおきる前は「学校いかなあかんあ」と学校がいやだと思っていたが、学校に行けなくなってからは、「早く学校に行きたい」と思って毎日を過ごしていた。友達が無事かどうかもわからなかったのもとても不安だった。

4、1週間後

久しぶりに学校に行ける日になった。ぼくはこの日を楽しみにしていたが、心の片隅にはちょっと不安があった。ぼくは心はずませて学校に行った。地震直後に避難してきたときはあわてていてきづかなかったが、築20年だったせいかぼくたちが大事に使っていた校舎にひびが入っていることにはじめてきづいた。地震後はじめて教室に入る前ぼくはなんて言って入ろうか迷った。しかし教室に入ると友達がいっぱい来ていて、本当に地震があったのかというくらいクラスの雰囲気は明るく、ぼくもその雰囲気にすぐになじめた。さいわいにもクラスの人が全員無事で明るく元気に学校にきていたのでよかった。ぼくの友達みんなが元気で地震の前と変わっていなかったのもとてもうれしかった。

その後は友達と久しぶりにわいわい言いながらグラウンドでドッチボールをして遊んだ。当てるだけの遊びだったが、友達と久しぶりに遊んだのでみんな笑顔でとても楽しく遊べたので、いつまでも遊んでいたいくらいだったがそうもできないのが残念だった。当分の間は4時間目までで授業が終わっていたので、終わって家に帰ってご飯を食べたらすぐに遊びに行き、暗くてボールが見えなくなるくらいまで友達とサッカーなどをして遊んだ。このときに「友達がたくさんいてよかったなあ」と思った。それにグラウンドの隅の小屋で飼っていたクジャクやニワトリ、ウサギなど一匹も死んでいなかったのもよかった。

5、3ヵ月後

だいぶ学校にもなれてきて、友達が地震の前よりまた増えた。毎日が楽しかった。そのときになぜぼくは「学校に行きたくなかったのだろう」と思うようになった。よく見てみると所々に地震によってできたひび割れがみられるようになった。校舎が壊れなくてよかったなあと思った。それからひび割れなどをなおす工事が始まった。その年の夏はプールがひび割れをなおす工事をしていたので使えなかった。このとき地震があったことを思い出すくらいみんなの中から地震があったということが消えてしまっているような気がした。なのでぼくは全部なおしてしまうと地震があったことを忘れてしまうのではないかと思った。

小さな地震があるだけでぼくの家族はびびっていた。ぼくの家族にとってあの阪神・淡路大震災は忘れられないものになった。

6、1年後

ぼくは引越しをすることになった。隣の校区の団地に引越した。その団地の下の入り口の段差も前の団地同様に盛り上がっていた。転向した小学校は、グラウンドの半分が地震によってできたひび割れで使えなかった。校舎にもひびが入っていたのかなおしたあとが見られた。転校した小学校では2年くらいたったせいかまったく地震があったことを感じさせなかった。時々阪神・淡路大震災のビデオを見たり、学期に1回くらいの避難訓練などで地震があったことを思い出したりするくらいで、常に地震は意識していなかった。

7、現在

環境防災科に入って、阪神・淡路大震災当時は知らなかった震源や地震のメカニズムなども習い地震に対する意識が変わったように思う。当時は自分たちのことでいっぱいだったが、当時は裏のほうでいろいろな人が苦勞していたことも学んだ。地震はほとんど予測できないので、被害を軽減する防災にお金をかけなければいけないということも学んだ。耐震化が大事なこともわかった。地震のような天災は「忘れたころにやってくる」ので語りついでいって、被害を減らすことも防災だと思った。

一番大切なこと

雨河 彩
神戸市西区

ドッッカーン！！Don！Do n！DoN！というこの世のものとは思えない程大きな音と地響きで大地震は始まった。缶詰の中に入れられて揺すられているような気分だった。

音と同時に飛び起き、姉を急いでたたき起こし、驚きながらもまだ半寝の姉に私は布団をおおいかぶせた。あの時の私は妙にしっかりしていたように思う。今考えれば姉よりも私の方が脅えていたのかもしれない。日頃から姉は割とオットリしており、それとはうって変わって小心者のくせにせせこましい私。やはり地震の日もそうだった。日頃の性格は非常事態にはさらに濃くなって現われるのだろう。（？）

これは夢なんじゃないか？そう思って仕方がなかった。地震という自然災害の存在を知らなかった私は、なんで家が揺れているのか、なんで布団に潜り込むほど自分が脅えているのか、何もかもが分らなかった。お互いに頬っぺたをつねり合い、夢であるか確かめたがやはり痛かった。

そこへ父が必死にドアを開けようとするが、何かに引っかかって開かない。「懐中電灯ある？」と外から母の声。姉は「あるよ！！」と言い、みごとに探し当て、おもちゃの懐中電灯を照らし、ドアの隙間20センチぐらいから這い出した。家族4人で外に逃げるため階段を下りかけ、父が先頭を行き私は母と姉の手をしっかりと握っていた。そんなに広い家でもないのに、このときばかりは、階段が妙に長く感じた。

揺れが一端おさまった時に電話が鳴り響いた。父は倒れているものや、壊れたものをかき分け、かき分けやっとリビングに行き着き、電話に間に合ったが間違い電話だった。しかし電話は通じるのだと発見した。

階段の踊場で母がガラスの破片を踏んでしまい、心配でならなかった。しかし幸い怪我には至らず、いつも通りの母で安心する反面、次の揺れを気にしつつ慌てて外に出た。

玄関を出ると、どこからかラジオの音がきこえ、車のラジオだとわかった。車に乗ってラジオを聞いたが起こって直ぐだったため、どこが震源で、どのような被害が出ているのかわかるような状況ではなかった。そして、しばらくは毛布をかぶって家の方をボーッと見ていた。

それから何時間過ぎたのか覚えていない。段々と明るくなってくるような感じがするが、電灯はまだついていてという微妙な時間帯だった。

日はすっかり昇り、新しい一日が始まったものの・・家の中は雑然としていた。リビングに入ると金魚の水槽の水はほとんど無く、下のほうに視線をやるとソファの上で金魚が今にも力尽きそうにパタパタ動いていた。急いで水槽の中に戻したが何匹かは死んでしまっていた。

ピアノは大幅に動いており、上に置いていたものは全て落ちていた。ピアノと同じ方向に配置していた2階の両親の寝室のタンスの上にあった人形ケースが落ちて割れていた。それとは逆に、キッチンにある東西方向に配置していた食器棚は何ごととも無かったように食器たちを並べており、2階の姉と私の部屋のタンスも何とも無かった。

キッチン、洗面所、お風呂、トイレ、全ての水が出なくなっていた。今までの学校から帰ったら直ぐ手洗い、うがいという行動は当たり前ではなかったのだと気づいた。そして、電気もガスも使うことができず、みんなの中での『当たり前のもの』は全てなくなった。

水の確保は父が勤め先からくんで帰ってきてくれた。車に水の入った大きなバケツを積み、それをこぼさないように気をつけながらだったため、とても大変だったようだ。

近くの公園に水が出ると聞き、父、姉、私で家にあった全てのバケツを使って運んだ。初めは根気よく運ぶ私であったが、しだいに「重い・・もうこれくらいでいいにしようよ」といって駄々をこねた覚えがある。その水を台所に置き、食器を洗うのに使った。

父は勤め先へ、母、姉、私は家で片付けをしていた最中に電話が鳴り、母が出た。おばあちゃんは泣いていた。もともと心配性で涙もろいおばあちゃんだから、なおさらこの時も心配してくれていたのだと思う。「よかった。もうつながらんとした・・家から何度も何度も電話したけどつながらんでえもうだめかと思っとった。近所の人が『公衆電話ならつながる確率があるかもしれないけんはよ一かけてみんなさい』と教えてかーさった」と言った。おばあちゃんは県外で一人暮らし。とても孤独だったにちがいない。私もおばあちゃんが無事で胸をなでおろした。神戸ほど揺れも被害もひどくないが、約50年経つ木造であったため、多少の揺れでもヒビができたようだった。

何日かして長田の方へ家族4人で見舞いに行った。そのきっかけは、当時姉の担任の先生が長田にお住まいだったので心配し、何かできることはないのかという気持ちからだ。どういふ状況なのかが行く前では想像できなかったが、生活に不可欠な水・カップ麺・水のいらないシャンプーなどをもっていった。1人1人自分のリュックサックを持ち、その中には非常食であるカンパン・水・貴重品をいれた。

私は当時から西神南に住んでいたわけではなく、西神中央に住んでいた。長田へ向かう時は西神中央から板宿までは地下鉄が使えたが、そこから先は運転停止だった。長田へ歩く途中で見る風景は立ち並んでいるはずのビルが重なるように倒壊し、不自然にデコボコな道。どうしてこんなことになったのだろうと唖然とした。そしてさらに、長田一帯は焼け野原だった。戦争の後もあんな風だったのだろうか。母は「焼けている地帯と、倒壊している地帯がクッキリし、新しい家だけがポツポツと残っていたのが印象的」と言う。これは地震前の風景を思い出させる。きっと昔からの家が密集して建ち並んでおり、新しい家は近日建て直されたものなのだろう。今になって考えるとその情景と小学校の国語の教科書でやった『ちいちゃんのかげおくり』という物語を思いだし、その戦争跡の光景とかぶる。小学生の私にとってとても恐怖の映像だったのに違いない。

先生の住所を見ながら必死に探すけどほとんどの家が原形を留めていなかった。それでも近所の人をつかまえ、聞いた。「たぶんこの辺りであっていますよ。」その言葉をきけたが、安堵できなかった。先生がいない。そしてまた近所の人に、この辺一帯の方は小学校に避難していると聞き、先生はそのあと親戚の家に移ったと聞いた。会うことは出来なかったけれど、先生の命があつてよかったの安堵が家族4人に広がった。

テレビで『阪神淡路大震災を忘れない』といったような震災を人々の心に残そう、伝えていこうとするスペシャルがあるが、そこに欠かさず映る高速道路は、地震が起こる2日前に奈良の若草山の山焼きに行った帰りに通っていた道だった。数日前に通った道があんなことになっているなんて恐ろしくてしかなかった。もし地震当日に通っていたなら命はなかっただろう。「もし・・・だったら」と考えたらきりがないのはわかっているが、どうしても考えてしまう。それは、本当に印象的でショックを受けた証拠なのだと思うし、決して人事ではないのだと言い聞かされる気持ちである。

西区の被害は軽く見られていたが、近所でも場所によって、半壊という家もあった。なぜかというところ、そこは昔池だったところを埋め立てた場所だったことを耳にした。地盤がやはりしっかりしていなかったのだと言われている。

西神南に引っ越して来て約8年。あの当時は家を申し込んでも落選ばかり・・・。家が欲しい人が多かったのであろう。西神南6団地、私の家の神戸市供給公社が売り出した住宅の名前である。倍率4.3倍、中には100倍以上の倍率の家もあった。52件の住宅中、38件が罹災者優先の住宅で、ほとんどの住宅が罹災者しか申し込めないような状態だったが、時がたつに連れて、仮設が段々と減っていき、西神南には高層の神戸市市営住宅が立ち並ぶまでになり、復興に向けてどんどん進んでいった。

地震があった日から何ヶ月間かは家族みんなで、リビングで寝た。住んでいた家のリビングは天井が高いだけで、そこは2階に面していなかった。「2階は危ない。2階が落ちてきて一階が潰れてしまう恐れがある」などと聞いていたためリビングは寝るのに最適な場所だった。

父と母が私と姉を中にし、枕元には必ず貴重品、懐中電灯、非常食。私もありったけのお金（小学2年当時の大金）と姉からももらったお気に入りのクマのぬいぐるみを肌身はなさず持っていた。

目覚めたら「またアレが起こるかもしれない」という恐怖心があったはずだし、明日の命の保証なんてどこにも無いはずなのに、どこか「もう大丈夫」という安心感があった。変な安堵。それはどこから湧いてきたものなのだろう。今改めて考えてみると、それはこの世で一番大切なことなのかもしれない。隣に家族が「当然」いることではなく、隣に家族が「幸い」いること。その重みを感じることが私にそういう気持ちを抱かせたのだと思う。何でも当たり前だと思っはいけない。自分が今ここにいることも幸いなから。

久しぶりにお風呂の水が出た時ビックリした。その驚きの矛先は「色」だった。水面に自分の顔が透き通って映っていない時点で透明でないとわかるが鉄が錆びたような限りなく食欲な褐色。水が出たことが嬉しいのやら、切ないのやら分らなかった。

段々とライフラインが復興し始めたころ、近所の公園には仮設が立ち並んだ。どこもかしこも仮設、仮設、仮設で驚いた。これだけたくさんの仮設にどれだけの人が住めるのだろうか。どうしてあんなにも早く完成したのだろうか。その大量な材料の発端はどこなのだろうか。住む人はどうやって決まるの

か。などと当時の私は考えなかったが、今この機会だからこそ様々な疑問が湧いてくる。

仮設が満杯になる頃、そこに犬2匹と住むおじいさんに友達と会いに行くようになり、その犬と遊ぶのはいつしか日課になっていた。ポメラニアンと何かの雑種でとても愛らしく、いつも目はうるうるしていた。見ていて飽きず、嫌なことを何でもチャラにしてくれるような彼らにしかない秘密の特効薬をもっていた。おじいさんはこのような癒しの家族に囲まれていつも朗らかだった。大の将棋好きで、行くときはいつも同じく仮設に住む人と対戦していた。仮設にも様々な係わりあいがあり、それは震災という辛い経験をし、同じ場所に肩を寄せ合った人どうしならではの集いである。将棋の対戦が終われば、また同じく仮設に住むおばあちゃんが世間話をしにくる。おばあちゃんが帰っても誰かが声をかけにくる。こんなこと普通のマンション・団地にあるだろうか。おそらく、復興住宅には普通のマンション・団地などとは別にもっと大きく、深い絆があるのではないだろうか。自分たちが傷つけられる程の経験をしている分、人の痛みも分る。そういう暖かい付き合いであったにちがいない。

私は地震で特に大きな被害を受けたわけでもなく、これといって失ったものもない。だからなおさらこの環境防災科に入って学んだことがたくさんある。家で、地域で、そして学校で、どこに行っても人間関係は欠かせない。

淡路島では地震直後の救出で助かった人が何処よりも多い。消防団やレスキューが懸命に救出活動に励むがなかなか追いつかない。では、誰が救出活動に手を差し伸べたのか？それは、住民であった。日頃から近所付き合いが根強く、人の家の家具の配置、何処に寝ているか、パジャマの色、時間帯で何をしているかと想像がつくなどあらゆることを知っている。救出がスムーズに進んだのはそのためであろう。

授業でも話し合うとき、1人1人大体どんな子なのか知っているため、「この子だったらこういう風に言うかな」と想像できたり、自分の意見をパッと言えたり、周りの意見にも耳を傾けられ、好き嫌いなく誰とでも話す。授業で出た課題を分担し、協力しながらするため、スムーズに進めることができる。遠回しすぎるかもしれないが、そういうクラスの雰囲気はどこか災害時の支えあい に似ている。それは様々な校外学習を重ねる中でも一つ一つ成長してきた。

私にとって環境防災科みんなで参加したもので心に残っているのは、消防学校での実体験である。消防学校体験では、規律訓練から始まり、搬送訓練、救出救助訓練、煙中活動訓練、救助訓練（垂降式）、炊き出し訓練、情報収集訓練などがあった。一番印象的だったのは搬送訓練。グループごとにタンカで実際に人間と同じような重さの人形を搬送した。すごく重たくて、手が痺れる程だったが、声を掛け合いながら、交代しながら団結力で乗り切ることができた。

次の日は体力調整から始まり、水防訓練、放水・消火器訓練、ロープ結索訓練があった。一番印象的だったのは、放水・消火器訓練。一人一本ずつ消火器が渡され、大きな鉄の入れ物にガソリンを入れて火をつけた。黒い煙をたくさん出しながら火は大きくなり、離れていても熱く、異様な緊張感があったが、実際に冷静になってやってみると、意外と簡単だった。どんなときも「平常心」でいるのが大切だと思う。しかし、本当に火事になったときは、どんなに訓練している人でも冷静さを失うだろうし、未経験ならなお更だと肌で感じた。私は消防学校へ行くまで全くの若葉マークで、実は今でも上手く対処できるかは分からないけれど、やはりやったことがあるのと、無いのとでは全く心構えも対処の仕方も違って来るはずで、やったことに意味があるのだと自分に言い聞かせる。

消防学校での最後の経験となった2年3学期になってからの実体験は、酸素ボンベをつけてグループで煙が立ち込めている部屋に入り、出口を探したり、グループにわけられその中で各自役割を持ち、まるで本物の消防団のように合同放水訓練をしたり、腰にバンドのようなものを巻きつけ、ロープを渡ったり、自分の太ももから腰にかけてロープを巻き、自分の手の力だけで何メートルもの壁を登るのに挑戦した。どの体験もハードで、体は悲鳴をあげており、『特に』と言えば綱渡りだった。消防学校の方が手本を見せてくださったときは、簡単そうに見え、自分にもできるのではないかと淡い期待を抱いていたし、順番が回ってくるまでみんながするのを観察しようと思い、余裕綽々だった。が・・・そんなご気楽もつかの間、私は一番初めに恥をかくこととなった。順番は私からだった。しゅしゅ進んでいきなんか妙に冷や汗をかいていた。腰にバンドを巻き、金具をロープにかけ、豚の丸焼きのような体制になり、いざ出発！出だしからもう限界だった。足をあげ、頭を垂らさずに『一の字体制』で手だけで進む。足がなかなか上がらないし、お腹もこれでもかと張る。なにより手の力がなさすぎた。回りのみんなが「頑張れ！もうちょっと足上げて！」など応援（大半が笑い）してくれるが、つかれてしまう。進み出せばスムーズにいったのかもしれないが、進みだす以前の問題だったため、途中で止まり、止まりでやっとたどり着いた。消防学校の人もさすがに苦笑い。こんなにできないとは思ってもみななかったという感じだった。

出来栄えに関係なくこれらの体験で自然に『声援』がクラスの中で出ていい雰囲気だった。話が大部分それた気がするが、笑い合い、応援しあい、励まし合う。人と人のつながりはこういう身近な場でも生かされているということだ。

もし、クラスがひとつの街で、一人一人が住民だったら。そこで地震が起こったら、まず一番身近な友達であったとしても、一人残さず無事を確認し、助け合うだろう。話が大げさすぎたかもしれないが、地域のつながりも、結局は身近な人間関係なのではないか。汚らしい話、耐震補強でお金はかかっても、人間関係を築くのにお金はかからない。誰だってできるのである。耐震補強、地震の仕組み、復興など大切なことは山ほどあるが、それら全ては『命』あつてのものなのだ。まずそこからみんなが深く考えていかなければならない。3年間勉強してきて自分がこんな考えをし、今ここに書いているとは、想像もしていなかった。それは周りの環境がそうしてくれたのだと思う。クラスには様々な個性があり、震災体験もそれぞれだ。経験を聞くこと、それは時に私に考えさせ、自分自身の視野、考えを広げるものとなった。そのような学科で3年間学んでこられたことを私は誇りに思う。

自然界との連携プレー

石川 理彩
神戸市垂水区

1、この揺れはなんだ！？

自然界というものは、人間以上の能力を持つと感じたのはこの日を境にだ。1995年1月17日、あれは忘れもしない神戸、大阪、淡路その近辺を大きな揺れが襲った。まるで、大きなゆりかごに入れられ誰かに荒く揺らされているようだった。これが後に言われる「阪神・淡路大震災」なのだ。

2、垂水の家

震度7が来たとき、私たち家族は、大きな揺れがおさまるまで布団の中に入っていた。そのときのことは、まったく覚えていない。気づけば車の中で、近くの公園の前に止まっていた。朝早かったせいもあり、私はまた車の中で寝てしまっていた。このとき、まだ地震というものは知らないのである。揺れたことにさえ、気づかなかった。とにかく親に連れられて車に乗せられたという感じだ。地震が起こったときに、住んでいた家は垂水区の団地で、たくさんの人が密集して住んでいた。後から聞いた話によると、父親は私と同年で父親のいない母と2人で暮らしている人の家に助けに行ったという話を聞いた。地震で玄関が開かなかったので、テラスから這い登ったそう。このときにはすでに、近所と助け合うということが普通にできていた。今になって「近所で助け合う」という教訓が世間に知れ渡ったけど、別にそんなもの知らなくても、私たちはできるのだ。そう感じずにはいられない。

3、須磨の家

地震が起こってちょっとしてから、須磨の祖母の家に様子を見に行っていた。須磨の家は、垂水と同じ地震がきたとは思えないほどぐちゃぐちゃになっていた。家の中がぐちゃぐちゃという、そんな甘っちょろいものではない。家自体がなくなり、どこをみても家らしきものはなく、瓦礫がどこまでも、どこまでも続いていた。このとき、父が当時の家の周りの写真を撮り、それは今でも残っている。地震とは、不思議なものだ。「ドン」と数秒の出来事を、この先の何年にも跡形を残していくのだから。人の人生までを奪い、変えてしまうのだから。須磨の道は人が歩けるどころか、存在したかどうかさえ疑いたくなるようなものだった。祖母は近くの小学校に避難しており、怪我もなかったようだった。そこには数え切れないほどの人が集まっており、教室で布団にくるまったり、ごはんを食べたりしている人がいた。想像を絶する人数が、狭い教室にぎゅうぎゅうにいれられていた。廊下で寝ている人もいるくらいだ。避難所というものはこんなものなのか…。恐怖を肌で感じる瞬間だった。

4、父の同級生の家で起こった不思議

祖母の様子を見に行くついでに、父親の同級生が住んでいた家を見に行こうという話になり、ついていった。ここで聞いた話は、一生忘れないと思う。いや、忘れたくても忘れられない話だ。この家には大きな池があり、そこには金魚やこいなどをたくさんの数を飼っていたそう。今まで何十年とその池の水は抜けたことがなかったらしいが、震災の起こる1週間ほど前から、ちょっとずつぬけはじめたらしい。そしてあっという間に気付けば、水どころか金魚やこいまでもが跡形もなくなくなったそう。猫にでも食べられたのかと家主は思ったらしいが、水もないのでそうではなさそう。水や金魚、こいが抜けそうな穴もなかったそう。もし仮に穴が開いていたとしても、大きなこいは池に残るはずだ。どうやら、考えられない何かが起こったようだ。家主は、これは震災が起こった後になって考えてみると、自然界からの何かのメッセージではないかと話していた。他にもこの家では猫や他の動物も何種類か飼っていたらしい。しかし、金魚などと同様みんなどこかへ行ってしまったらしい。ますます、この話は小学校2年生の私にとって忘れられない不思議な話になった。今になってもそのペットたちは帰ってこないらしい…いったいどこにいったのだろう。

5、みんなが入れなかった風呂

1 番困ったことに、大体の人が答えるのが水や電気、ガスが使えなかったことだろう。私の家は、団地だったせいもあり地震がおきた数時間だけ、電気や水が止まった。その後は普通の生活が送れた。何回か団地に水を運んできた車を見た日もあった。バケツやタンクに水を入れ、重そうに運んでいる人がいたのを覚えている。その頃私の家では、割れた食器を片付けたり、部屋をそうじしたりした。水は屋上にある貯水タンクに溜めてあったものが使え、電気も使えた。ガスだけが使えなかった。今になって振り返れば贅沢だが電気ポットでお湯を沸かし、大人が1人入れるようなステンレスの鍋のようなものの中に適当にお湯を入れ、お風呂代わりにしていた。小学生だった私は、このときみんなお風呂に入っているものだと思っていた。こんなに水を必要としている人がいるのも知らず。申し訳ない。

6、マスコミ情報

1月17日から毎日家の周りでは、救急車・消防車・自衛隊・レスキューの車を見ない日はなくなった。それに加え、報道の車・ヘリコプターなども来るようになった。テレビでは、毎日長田や須磨の現状がひっきりなしに映っていた。地は真っ赤に燃え上がり、空は煙で充満していたようなテレビの映像がうっすら記憶に残っている。あいまいではっきりとではない記憶だが…。テレビのアナウンサーの手元には新しい情報が次々に舞い込んでいた。なかにはデマもあったらしい。亡くなった方や行方不明の方の名前の一覧も並んだ。画面の向こうのあわただしい雰囲気がこっちにまで伝わってくる。本当にこれでも、地震が起これないと言われていた関西か？まさに戦場だ。(実際戦場がどんなものかは知らないが。)

7、長田の街

地震が起こった数日後、父親が長田の町を見ておいたほうがいいというので、家族で歩いて見に行った。マスコミの報道通り、なんともいえない焼け野原が広がっていた。数週間前までは、活気あふれる商店街が建ち並んでいた。今ではその跡形さえ残していない。灰といたるところに花が置かれていた。ついさっきまで誰かが住んでいたところを、誰が想像できるだろうか。アーケードのビニールシートが無残に焼かれ骨組みだけが真っ黒になってなんとかたっていた。人の声も姿もなかった。ただ、ずーっと瓦礫で平らな面だけ広がっていた。ここで住んでいたなら今頃自分はどうなっていたのだろう。

8、ボランティア

被災した街に他府県、他国までもから食べ物や服、布団などあらゆる生活用品が送られてきた。私の家に直接は、何ももらわなかったが祖母が避難所で配られたものを分けてくれた。ここで今まで聞いたこともなかった「ボランティア」と言う言葉が有名になってきたのだ。ボランティアをする人には年は関係なく、学生からお年よりの人までが何か自分にできることはないかと、一生懸命貢献してくれた。このことは、私たち神戸の人なら1番身にしみてわかることだろう。

9、小学校に届いた手紙

震災が起こって何ヶ月も経ってから、グランドにはプレハブ校舎が建った。この頃には、何とか地方に引っ越ししたり親戚の家に行ったりで、避難者も減ってきた。まだ住むところが決まらない人が、プレハブ校舎に住むのだ。校舎には、励ましの手紙が他府県の小学生から届いていた。「大丈夫ですか?」「早く元気になってください。」というものだった。素直に心配してくれていることが、嬉しかったことを覚えている。手紙の返事もクラスで書き、送った。その手紙は10年経った今も小学校の教室に飾られている。当時の他府県の小学生は、阪神・淡路大震災で被災した私たちをどう思っていたのだろう。

10、仮設住宅

私が小学校3、4年生だったとき祖母は小学校から離れ仮設住宅に移ることになった。祖母はなかなか仮設に移ることができなくて、最後まで小学校に残っていたそうだ。やっと引越しできた仮設住宅は、プレハブで雨が降れば、ぼとぼと大きな音が響き渡り、隣の家の音まで聞こえた。夏は、蒸し風呂のような暑さ、冬は凍死しそうなほど冷え込むのだ。1番厄介だったのは、台風だ。雨が降れば窓ガラス

を叩き割るようにあたり、風が吹けばプレハブごと揺れる。これが家といえるのか。ないよりマシだが、ひどいものだった。年老いた人が1人暮らししているところが目立った。このときいたところで、お年寄りの「孤独死」がニュースで騒がれた。ひどい場合は、亡くなっても身寄りがいないために数日経って発見されることもあった。6畳もない部屋1つにキッチン、トイレ、風呂があるだけの狭い部屋に5人家族が住んでいたところもあった。そのとき同時に震災で全壊になった須磨の家に、今の私たちの家を建てる計画も進んでいた。

1 1、引越し → 転校

小学校5年生の夏休みに須磨と垂水を行き来する毎日が続いた。1日に何回も、何日も続いた。引越しだ。5年間通った学校とも離れ、新しい環境で暮らす。私にとっては、新しい家に住める嬉しさと友達とはなれるのがいやという、なんともいえないものだった。周りの家もところどころ立ち並び、元の街に戻りつつあった。夏休み中に、小学校に手続きに行った。震災で木造だった校舎も建て替えられ、綺麗になっていた。ここは祖母がかつて避難していた小学校だったのだ。家族全員が新しい家に来たのは始業式の前日8月31日の夜のことで。一晚寝れば9月1日、初登校。あわただしい引越しだった。始業式の翌日は、竣工式。在校生は、校舎がなくて本当に体育するのほほかの場所へ行き、勉強もプレハブ校舎で行ったらしい。窮屈な思いで生活を送ったのだ。しかし、いきなり来て何の苦労もなく新しい校舎に入れるなんて、ラッキーと正直思った。今はそんなこと、恥ずかしくて言えない。

1 2、亡くなった生徒

転校してきてから震災イベントで知ったのだが、私の学年には震災でなくなった子がいたそうだ。私が転校してくる前の話だ。どんな子だったかも名前も知らない。誰もその子の話はしなかった。その亡くなった子のお母さんは、新聞で「この子が生きていたことは忘れないであげてほしい」と話していた。前の学校にはなかったが、「地震資料室」みたいな部屋も何部屋かあった。相当地震にはなじみの深い学校のようなのだ。こういう話を記すべきかどうか迷ったけど、載せることによって生きていたたくさんの人がいたことを、時々ちょっと心にとどめておく必要もあると思う。

1 3、中学入学…新しいマンション

中学に入ってから地震の話は消えなかった。震災のときよくボランティアした方は、ここの学校名は大体1回は聞いたことのある名前の1つだろう。そう、入学したのは「鷹取中学校」だ。私が入学する前、ここには何をした人かははっきり聞いていないが、震災にかかわった有名な先生がいたらしい。海外に行ったという話も聞いた。他校の中学校よりかは避難者が多く、最後まで避難所として使われていた中学校だ。その頃、祖母は仮設住宅から開放され、建てられたばかりのマンションに住むことになった。高層マンションで地震以降、設備がかなり整っているのだ。1人暮らしのお年寄りのために作られたマンションのようで、いたるところに非常ベルがついている。部屋のどこにも段差がなく、とても配慮されたつくりになっていた。トイレのドアも普通の家と違い、スライド式になっているのだ。ここでも、震災とお年寄りに配慮した構造が見受けられる。仮設住宅のときは、孤独死や急死の記事が目立った。その点、このマンションは充実しているといえるだろう。今も祖母はそのマンションで毎日を楽しんでいる。

1 4、ボランティア委員会

中学には、いつからできたのかは知らないが聞いたことのない委員会があった。「ボランティア委員」だ。他の学校ではない珍しい委員のようだ。中2のときに何か委員に入らなくてはいけなくなって、正直気がすすまないままに入れられた委員だ。仕事内容は、名前どおりボランティア！！校内、校舎周りのボランティア清掃から始まり、学校を早退してまで行う校外ボランティアと幅は広い。休みの日には学校の近くの老人ホームやマンションを回り、話をしに行ったり学校行事の参加をお誘いしたりもした。鷹取中学校のボランティアで、1番有名なものはなんといっても毎年恒例、新長田のピフレ前で行う「1・17震災行事」だ。1ヶ月から1ヶ月半の時間をかけて校内から卵のパックを集め、ろうそくをつくるのだ。卵のパックの中にろうそくをたらし、それをとにかくたくさん作る。ボランティアはすべて、ボランティア委員と参加したい人で行われる。それと同時に歌の練習もする。これを何ヶ月もかけて行うのだ。

毎年1月17日当日は、日が出ているうちは出店やライブなどが開かれており、午後6時になると鷹中生徒による点灯が行われるのだ。何年たっても地震とは忘れてはいけないもので、おもいだしてふりかえらなければならないものなのだ。機会があれば、ぜひ1回見に行ってみて欲しい。新聞やテレビでもよく報道されているので、知っている人もいるだろう。

15、高校決定

このボランティア委員がきっかけでボランティアする楽しさを覚えた。中3の受験ぎりぎりまで、高校は電子科に行こうと決めていた。電子に興味があったからだ。しかし、ボランティア委員の担当の先生に新しく舞子高校に「環境防災科」というものが新設されると教えられ、ボランティアに興味があるならいってみたらどうだと言われたのだ。この一言で私は工業高校の道を止め、環境防災科に入ることを決断したのだ。環境防災科に惹かれた理由は、ボランティアよりも「大学教授の話が聞ける」というところだ。当時の私にしたら、高校生でありながら大学教授の話を聞けるということにすごく惹かれたのだ。地震というものはきいても切れないことなのだ。

16、大切なことって…

環境防災科に入ってから、いろんな人のたくさんの話を聞くことができた。毎日地震と向き合って考えてきた。でも、今ここでたくさんの人の話で共通して言えるのは「伝えること」は大切なことだ、という話だった。今の時代「IT時代」と言われるように伝達に困ることが少なくなってきた。伝えることから始まることが多いと思う。私たちが小学2年生で体験したことは、何だったのだろう。正直なところはっきり覚えてないし、何を伝えなければならないのかまだわからないところもある。でも、その少しでも覚えていること、他の人が教えてくれたことを1つでも多く、くだらない話と思われても良い、伝えることが大事なのだ。私たちより下の学年はもっと地震のことを知らないし、覚えていない。けど、伝えなくては0のままなのだ。あんまり聞きたくない話かもしれないけど、聞いてもらわなければならないことなのだ。特にこの勉強を始めてから、北海道や東京あたり、四国どこの県も頻繁に地震が起きていることが目につく。地震が起らないところなどないのだ。そこをわかってもらいたい。自然との共存は、できているようでなかなかうまくいかないものなのだ。世界には日本のように豊かな国で生活している人もいれば、水もないし1日の食料も手に入るかどうか死と瀬戸際で暮らしている人もいる。そういう国の差が激しくて統一した防災というのは、難しい。お金を日本から送っても、防災に使われることが少ない国までであると聞いた。難しいと言っているだけでは、なかなか前に進まないから少しずつでも幅広い方たちに何か地震と防災から得てもらえたらいいと思う。

あの日の追憶

植原 麻由美
神戸市西区

1

その数日前から家族の中で流行っていた風邪がとうとう私にまで回ってきていた。

当時、私と弟に与えられていた子供部屋には二段ベッドが置いてあった。いつもならば私が上で、弟が下で就寝している。だが風邪ですっかりダウンしてしまった私達姉弟は、揃って両親の寝室である和室で両親と一緒に眠ることになった。その日に限って家族4人で1つの部屋で就寝した。

熱でなかなか寝付けなかった私もようやく眠ることが出来ていた。その時、いつも通りの明日がくると思っていた私にあの阪神・淡路大震災が襲い掛かった。

唐突にドーン！！という爆発みたいな音がしたと寝ぼけながらぼんやりと思った。次の瞬間には自分が今寝ているこの畳ごと落下したような感覚が私の目を一気に完全に覚ました。その感覚は遊園地のジェットコースターが落下するよりも恐怖を感じた。驚いて起き上がろうとしても体が思うように動かなかった。辺りがガタガタと信じられないぐらい強烈な音を立てながら崩れていった。

今までに体験したことのない状況に対する恐怖と激しい揺れで私は全く身動きが取れなかった。私はただ掛け布団を握り締めてじっとしているしかなかった。

そんな私の上に隣で寝ていた父が覆いかぶさった。父は必死で私の上にのしかかって、私はそれを分かっていたのだけれども逆に父に圧迫されて息が出来なくなりひどく苦しかった。あまりの苦しさに私が抗議の声を上げたが、父は全く聞いてくれなかった。それぐらい父は必死だったのだと思う。父の下から私は母の方を見た。すると父と同じように母が弟の上に覆いかぶさっているのが分かった。母も必死の様子で、両親がこんなにも必死な様子を私は初めて見たから、それが余計に私の恐怖を扇いでいた。

2

私達は11階建てのマンションの最上階、つまり11階に住んでいた。そのために地震の揺れは激しいものだった。マンションの高い建物は高ければ高い所にある程、揺れは大きくなるのは原理としては分かる。同じマンションの3階に住んでいた友人に聞けば、「確かに食器は割れたがほんの数枚だけだった」と答えた。対するこちらは食器がほぼ全滅だったことを比べても、上の方が激しいのが分かる。地震が起こった当日、3階に住んでいた両親の友人の夫婦が私達の部屋へとやってきて驚きの声を上げていた。私達の部屋ではすでにガスは止まっていたが、その友人の部屋ではまだ止まっていなかった。奥さんが私達の家族分の夕飯を作ってくれ、友人の子供と私達姉弟と一緒にカレーを食べた。しかし夕飯を作り終えてすぐにガスも止まってしまった。

水が出なくなる前に私の両親は出来る限りやかんに飲み水を溜めていた。案の定、水はすぐに止まってしまった。そんなに多くはなかったがなんとか飲み水を確保することが出来た。

私の両親が偉かったと思うのは家具を金具で固定していたことだった。よくは覚えていないが、チェーンで壁と家具とを繋ぎ止めていたように思う。少なくとも父と母は家具が倒れないように何かしらの工夫をこなしていた。そのチェーンもいっぱいまで伸ばされて、家具は傾いていたものの、あの激しい揺れに対して結局倒れることはなかった。

私達の寝室にあったのは大きな本棚だったのだが、それも無事で倒れず、私達は最悪の家具の下敷きにならずに済んだ。それでも家の中はぐちゃぐちゃで、揺れが収まって私が父の下から這い出たときには電気もない真っ暗な闇の中で、がらりと変わってしまった風景がそこにはあった。外がいつもよりも暗く感じた。

「懐中電灯を取ってくる」

最初に父がそう言って立ち上がった。

「水槽とか皿が割れているから、危ないからお前達はここから出るなよ」

「靴がいるわね」

父と母はそう言って用心しつつも一旦部屋から出て行って、すぐに戻ってきた。

「寝室から出るときは絶対にこのスリッパを履きなさい。でもまだ危ないから暫くは出たら駄目よ」

と私に言い、それからまたすぐに部屋から出て行ってしまった。私は言われたとおりに寝室から出ずに、

襖を開けてリビングを覗くだけにした。

リビングは水浸しだった。台の上に置いてあった水槽が割れたらしかった。哀れにも投げ出された魚が割れたガラスの中で必死に生きようとしていた。父は懐中電灯を持ってきてから、次にバケツを持ってきて生きている魚をその中に入れていった。沢山の魚が死んで、たった数匹が生き残った。

そしてその隣では無数の食器が割れていた。食器棚の周りを取り囲むようにその破片が散らばっていて、むやみに近寄れない状況だった。

何度か余震があった。その度に私と母は、はっと息を飲んで、小さい揺れのまま収まったことに安堵した。少しすると私はスリッパを穿いてリビングに出た。特に何もすることはなかったが、私は子供部屋に行ってみた。部屋には沢山の物が落ちて積み重なっていて、片付けていかないと歩けないほど散らばっていた。大変だなあ、片付けられないいなあ、とは思ったがとてもではないがそんな気分ではなかったし、そんなことは後回しだと父は言った。

私がリビングに戻ると父が家にあった食べられる物を集めていた。神戸は地震のない土地と言われていたためか、普段から地震の備えなどしていなかったもので、あったのは私達のお菓子などが中心だった。電気、ガス、水道の全てが停止していたためにカップラーメンなどは食べることが出来なかったのが辛かった。それだけでも随分食料は減ってしまった。さらに父は近くのスーパーに行っても出来るだけの食べ物を買ってきた。ほとんど売り切れで手に入らなかったが、幸いにもそのスーパーの輸送車は交通渋滞に引っかかることなく、店の商品は無くなっては新しく別のモノが入り、すぐに売れきれの繰り返しで、結局絶えることがなかった。これはすごくありがたかった。

両親が何をどうすれば良いのか混乱している間に電気が回復して、まず情報を得ようとテレビをつけた。テレビでは灘区や須磨区が大きな被害を受けたと出ていた。この頃はテレビですら情報が混乱していて、須磨区の被害が一番大きいだと色々なことが言われていた。父は須磨にある祖父の家に電話を掛けていた。だが何度掛けても繋がらない。他の地方の親戚にはかろうじて繋がったものの、すぐに切れてしまった。仕方が無いので父は夜中に長い時間を掛けて祖父の家にまで様子を見に行った。幸い家は傾いていたものの全壊はしておらず、祖父と祖母に怪我はなかった。そのことを父から聞いたとき、私はもの凄く安堵した。

私が実際に祖父と祖母の家に行ったのはもう少し後だが、家が無理矢理捻じ曲げられたみたいに歪んでいるのが分かった。外の壁が無残にもひび割れてしまっている。大分落ち着いてきた後に祖父達の家の一部建て直しが行われた。

近くにあったビルで古いものは倒壊していた。父はがらりと変わった故郷に溜息をついていた。車で近くを移動してみても、やけに広くなり過ぎている跡地が何だか空しかった。

さらに祖父達の家近くには高速道路が立っていた。私が震災後初めて祖父達の家に行ったときに、その長い高速道路が折れて、V字型になってしまっていた。いつも祖父達の家に来るときに当たり前のように見ていた高速道路は、いつも人間が作り上げた絶対に崩れないモノなのだと言わんばかりに私には見えていた。それが呆気なく簡単にへし折られているような印象を受けた。それだけ地震というものの力の大きさと、人間の小さな力の歴然とした差を思い知ったように感じた。

テレビで高速道路を走っていたバスが、高速道路が折れてしまったばかりに半分落ちかけている映像を何度も見た。テレビを通して見るよりも、私は実際に祖父達の家近くにある生々しい高速道路を見る方が私にとって大きな衝撃だった。

3

次第に日が昇ってくると部屋の中も徐々に明るくなっていった。懐中電灯なしで歩けるぐらいにまでなるのにとても長い時間が掛かったように思えた。

やっと慣れたと思った頃、地震発生から数時間後に電気だけが回復した。懐中電灯は念のために常に傍に置いていたが、やはり電気がつくのはとてもありがたくて嬉しかった。その頃には恐怖はすっかりなくなって、物珍しさが先立っていた。弟はすでに飽きていて、つまらない、と連呼していた。まだ小さい弟に出来ることは少なかった。そこで父が小型テレビを持ってきて、ゲームを繋いで弟に与えた。

父が水と食糧の調達をし始めた。父は車でひどく遠くまで水や食料を買いに行った。途中で簡単な風呂湯沸かし器のようなモノを見つけて購入したが、後で見ると売り切れ状態だったそうだ。父の行動は早かった。また父は桃山台まで車を飛ばし、米を購入した。水と米と電気さえあれば何とか食べていける。父は、昼間は食料と飲料集め、そして夜には祖父祖母の家に行くということを行っていた。

母は少しずつ家の片付けを行っていった。割れてしまった皿などを回収するのにひどく苦勞していた。私達はそんな両親の姿をただ見ているだけしか出来なかった。

タンク車がマンションの下に来たりしてくれたが、それらはすぐになくなって、結局私達が手に入れることが出来る水はほんのわずかだった。だがありがたいことにマンションの下で水を溜めていたタンクから水が出た。飲み水ではないが、両親はすぐさまペットボトルやらタンクやらを抱えて汲みにいった。11階というのは不便で汲んだ重い水を持って上がらなくてはならなかった。勿論マンションにはエレベーターもあったが、私達の部屋の一番近いエレベーターは停電のため故障しており動きが止まっていた。仕方なく父は重い水の入ったタンクを1階から11階まで階段で持って上がった。後に分かったことだが、動かなかったエレベーターは私達の近くのモノだけで、少し離れたところにあるエレベーターは動いていたようだ。エレベーターが復活した後も利用者が多いということと、乗っている最中にまた余震でもあって止まったら・・・という考えがあった。

最初のうちは、私は風邪でダウンしていたが、エレベーターが復活した頃から少しずつ私も手伝わなくてはいけ、母に申し出た。

私が渡されたのは2本のペットボトルだった。父がタンクを持って汲みに行き、私は時にはそれらのペットボトルを持って汲みに行った。そこでやはり悩むのが、エレベーターを使うか使わないかだった。さすがに階段での上り下りはしんどい。そこで私は下に降りるときは階段、そして水を汲んで上がるときはエレベーターを使用した。時々疲れれば、両方エレベーターのときもあった。水汲みには長い列が出来ていて、毎回その最後尾に並ばなくてはならなかった。いい年をした大人が順番を守らずに私達を押しつけて水を汲もうとする姿を私は何度も見た。その度に怒りがふつふつと湧き上がるのを感じた。だが時間が経つにつれてそういったことをする人はいなくなった。注意をする人達が増えて、繰り返す人が減っていた。初めのうちは自分のことだけで精一杯だった人達も段々と落ち着きを取り戻していつているようだった。大人の中にはそういったマナーの悪い人もいれば、親切な人もいた。

私はペットボトルを担いでエレベーターを待っていた。しかしエレベーターの前には長い列が出来ていて、とても一度では入れそうにはなかった。次のエレベーターを待てばいいと思うかもしれないが、震災時のエレベーター利用者は想像以上に多い。エレベーターが一度最上階の11階まで上がって、また1階まで下りてくるだけでも、1つ上がり下がりすると止まっては乗り降りする人がいた。さらに誰もが大量の荷物をエレベーターに持ち込むものだから1度に入れる人数が少ない。そのためエレベーターは、待つ時間などを合わせると、階段を駆け上がるよりも遅かった。その時の私はそれが凄くもどかしくて、階段を上がることを決意した。

「お嬢ちゃんは何階に住んでいるの？」

私が列から抜けようとしたときに一番前に並んでいた老人が私に声を掛けてきた。あまりに突然に話し掛けられたので、驚いて思わず立ち止まった。頑張って記憶を辿ってみるが、どう考えても面識は全くなかった。私は小さく11階だと答えた。とその老人は目を丸くしていた。

「大変ね。私は4階だから歩いていけるからお嬢ちゃんは次に乗りなさい」

そう言って私に順番を譲ってくれた。私が断る間もなく老人は列から抜けて階段を上り始めていた。

結局私はお礼も言えなくて、申し訳なさそうに老人のいた位置に立った。並んでいる人は誰も文句は言わなかった。

私達が汲んできた水は風呂に溜められ、一回分を入れても数センチしか水面が上がらず、ほんの少ししか足しにならないことを感じた。私は一日中何度も何度も11階から1階まで水を汲みに行き、それを繰り返してやっと久しぶりの風呂に入ることが出来た。あれだけ苦労してやっと一回分のお風呂。しかも水は少々少なめだった。水というものが普段どれだけ私達の身の回りに大量にあり、それを贅沢に無駄使いしているかを改めて思い知らされた。

小学校の教師達が私達のマンションに寄付を求めてきた。私達の地域ではそれ程被害は大きくなかったのだが、震源に近いところでは全然物が足りないらしい。

「何か寄付が出来るものがありましたらどうぞよろしくお願いします！」

私の両親はその言葉を聴いて、母は私達姉弟の買い置きしていた新しい服を、父はボールペンと消しゴムを50個ずつ寄付した。少しでも役に立てればとマンションの住民は次々と寄付をしていた。教師は最後にお礼を言って、必ず被災地へ届けると言った後、また次の地域に寄付を求めに行った。

教師もそうだが、警察官も忙しかったようだった。警官だった母の友人の夫は地震を受けてからすぐ、6時頃には家を出て何日も帰らなかったらしい。教師も警察官も、そしてライフライン関係者も過労死する人がいる程に凄まじいものだった。

それらが少しずつ回復していくと同時に、私達の生活はじわじわと安定してきて元の姿を取り戻そうとしていた。そして当初のどこか必死な様子はほとんど我が家にはなかった。

ぐしゃぐしゃに散らかった部屋を少しずつ整理していった。私達も子供部屋を掃除するように言われた。壊れて使えなくなった物を捨てて、使える物を避ける。それをするだけで驚くぐらい時間がかかった。何せ部屋中がひっくり返ったみたいになりとあらゆる物が飛び出して散らばっていたから、引越しをする前の大掃除をしているようだった。さらに水槽が割れてしまったせいで色々な物がびしょ濡れになり、使えなくなった物が本を中心に沢山あった。

テレビを見ていると連日震災の話ばかりで、次々に増えていく死傷者の数が画面の端に映し出されていた。幸い私の住むマンションは所々にヒビが入ったり、地面が盛り上がった程度で、潰れたところはなかった。だがテレビの画面に映る家は勿論、マンションやアパートまでもが全壊とまではいかなくても一階が完全に潰れていたりしていた。カメラが映し出す全壊した家の周りで大人が数人集まって瓦礫を除いていた。

神戸の震度は6。高いところだと7を記録したらしい。マグニチュードは7.3。そう言っていたが当時の私にはマグニチュードというのが何のことかよく分からなかった。両親に聞いてみたがあいまいな答えしか返ってこなかった。結局分からず終いだったがとりあえず、私達の受けたあの揺れの大きさが震度6であり、さらにひどい揺れの地域があったことだけは理解できた。

私は勿論大変な思いをした。それでも震源地にいた人々に比べれば私達は家族の誰も死んではいないし、マンションも潰れていない。避難所生活をするようなことはなかったし配給に頼ることもなかった。

私達はまだ良かったと思う。決して幸運なわけではなかったけど、最悪ではなかった。

5

学校が再開したのは震災から一ヶ月程後だった。散らばった部屋から何とか教科書と筆記用具をかき集めて学校へ行った。学校へ行くと震災の話で持ちきりだった。学校にまで水を汲みに行った話が一番多く、色々な子がそのことについて、まるで冒険の一部のように熱く語っていた。

震災後の初日は学校といっても暢気に授業などはしなかった。全員の安否確認とその他の諸注意だった。給食も出た。小さなパックの牛乳と、袋に入った今までの給食のパンとは違った緑がかかった丸いパンが運ばれてきた。品数は少なかったが、パンはほんのりと味がついていて美味しかったし、何より久々に友達と顔を合わせて食べられたことが嬉しかった。

人数は思ったよりも多かった。数人登校していなかった子はいたものの、数日経つとぼつりぼつりと登校してきた。結局はクラス全員が無事な姿でまた授業を受けていた。

私の学校で亡くなった子はいなかったと思う。よくは覚えていないが、そんな話は一度も聞かなかった。それだけでも運が良かった。後に他の学校から転勤してきた先生が言うには、自分の受け持っていた生徒が3人程亡くなったそう。クラス名簿を持って1人1人の安否を確認して歩いていたとき程辛いものはなかったと言っていた。

学校の授業は短縮などがあったものの、ほとんど変わる事なく流れていた。家に帰れば震災が残した荒々しい様子を実感するのに、学校ではまるでそんなことがなかったかのようだった。まるで違う世界だと思った。強いて言えば給食の牛乳瓶が全部割れてしまって、そのままパックになったことぐらいだった。パックよりも牛乳瓶の方が美味しいのにどうして瓶に戻さないのかと先生に抗議すると先生は困ったように笑った。

「危ないからね。地震が起こる前から瓶を落したりして怪我をした子は今までもいたし。地震が来て丁度良かったのかもね。パックに変えるいい機会になったのよ。パックなら怪我をする心配はないでしょ？それに瓶でもパックでも中身は一緒だよ」

私達は先生の意見が正論だとは分かっていたが、ひどく不服だった。

数日すると学校はすぐさま授業を再開した。通常の授業に付け加えて、震災から色々なこと学ぼうということを題にして震災学習が行われた。黙祷をしたり、校長先生の震災体験を聞かされたり、震災の歌を歌ったり、最もひどい被災地でのことを先生達は私達に語っていた。その学習は毎年震災が起こった日になると必ず行われて、その度に懲りもせずに校長先生は自分の体験談を熱く語っていた。それは今でも行われている。

6

元々震災前から引っ越す予定だった。マンションの徒歩数分のところで、場所的には大して変わり

ないのだが、夢の一戸建てだった。幸い震災を受けたときに私達の新しい家はこれから建てる場所だったので、耐震にも力を入れることが出来た。震災ですっかり少なくなってしまった荷物がかえって良かった。

私達のマンションは倒壊もなく、すぐに新しい家に引っ越せたためにそう大きな被害はなかった。それでも家の近くを歩いていたら今でこそほとんど見なくなったものの、震災後の数年間は近くの古いマンションや道路のひび割れや盛り上がり、またそれらの修復後が濃く残っていた。それらを見るたびに震災のことを思い出すし、逆にそれらがなくなっていけば震災のことも忘れていくのではないかと思うときがある。今、それらが無くなりつつある。

震災はどんなにひどくてもいつかは記憶と同じように無くなっていくものだから、覚えているうちに次の世代に伝え、何らかの対策を立てなくてはならない。そして一番に忘れてはならないのは、被害の大きさやかかった金額よりも、亡くなった人達のことだと思う。そのことを忘れなければ、同じような被害者を出さないために色々と行動を起こすことが出来ると思うから。

震災体験を乗り越えて

大塚 美帆
神戸市垂水区

―阪神淡路大震災の概要―

発生日・1995年1月17日午前5時46分
地震名・兵庫県南部地震
震央地名・淡路島（北緯34度36分、東経135度02分）
震源の深さ・16km
規模・マグニチュード7.3
死者・6403名
行方不明者・3名
負傷者（重傷者、軽傷者合わせて）・40092名

<http://www.kobe-np.co.jp/sinsai/>（神戸新聞 Web News より出典）

震災の経験を振り返って

1995年1月17日。
その日私は朝方目が覚めた。何故か眠れなかった。
寝ようとするのだからなかなか眠れない。
我慢出来なくなって母の寝ているところまで移動した。
少し安心した私は眠ることができた。

―そしてあの恐怖の時間。―

ハッキリ言って地震のあの揺れている瞬間は覚えていない。とっさに布団の中に潜ったのは覚えている。母に布団から連れ出されるまでは記憶が少し曖昧だった。多分何が起きたのか分かってなかったのだろうと思う。

ちゃんと思い出せるのは車の中に避難したことからだ。身を刺すような寒さの中で、毛布に包まっていたような気がする。灯りは少し大きい蝋燭。

隣に住んでいたお姉さんが泣いていた。私も泣いた。

余震が暫く続いて怖かった。

暫くして自分の家に戻った。団地に住んでいたが、幸い団地が全壊したりとかそういう事はなかった。

友達も、家族も、親戚も皆無事だった。

部屋には割れた食器や棚の上の物が落ちていた。危ないので靴を履いて家上がった。

父がテレビを付けたので私も見た。

写っていたのは長田の町が物凄い勢いで燃えているところだった。

当時の私にはまるで映画のような、現実のものと思えなかった。あの映像は忘れられない。

チャンネルを変えても殆ど同じ映像だった。

私たちが寝ていた部屋は、足元に大きなタンスが2つ、少し小さめのタンスが1つ、テレビと電子ピアノが置いてあった。運良くテレビ以外は倒れなかった。ただ、テレビは私の枕の上に落ちていた。

もしあの時移動していなければ大怪我をしていた。ひどければ死んでいたかもしれない。そう思うと今でも怖い。本当に運が良かった。

飼っていた金魚は全て死んでしまっていた。夜店で買ってもらった金魚だった。

通っていた小学校はほとんど壊れてしまっていた。校舎の中は窓ガラスなどの破片が飛び散り、机と椅子が散乱していた。

壁にヒビが入り、剥がれ落ちてしまいそうな部分もあった。

まだ2年間しか通っていなかったが悲しかった。体育館は使えたようで、避難している人が多くいたが、ずっとそこで過ごした人は少なかった。私は大阪にある祖母の家に避難させてもらった。

祖母も怪我もなく無事だった。

地震から暫くして私たちは家に戻った。電気はすぐ使えたようだけどガスと水道が中々使えなかった。仕方ないので水は給水車からもらい、節約した。トイレも一々水を流せなかった。

寝るところも場所を変えてリビングで寝た。少し狭かったけど前に寝ていた場所はタンスとピアノが置いてあったので眠れなかった。

食べるものにはそんなに困らなかったけど、お風呂に困った。水も少なく、ガスも使えなくて入れなかった。しかし近所でお風呂が使える人がいたので、私たちはその人にお風呂に入れてもらった。

久しぶりのお風呂はとても気持ちよかった。快くお風呂を貸してもらえて本当に有難かった。暫くして水が使えるようになった。

トイレを流せることが変に嬉しかった。

結局ガスが使えるようになったのは最後だった。

家の周りの公園等にはプレハブが建ち並んでいた。道も地面も地震の影響でボコボコになり、家や建物には亀裂が走っていた。全壊、半壊の家はなかったように思う。

でも今思えばまだ幸せな方かもしれない。私は誰も亡くしたり、ひどい怪我をしたりせず無事に助かった。

この地震のせいで大切な人を亡くしたり、大事な家を失ってしまったりした人は沢山いる。心に抱えきれない程の傷を負った人もいるだろう。

その当時の私はこのような事を思う余裕も、考えも足りなかった。

学校は取り壊されて、新しく建て替える事になった。

運動場にプレハブ校舎が建つまでの間、私たちは近くの小学校を借りて授業をした。お昼の少しの時間しか勉強できなかったけど、皆と一緒に過ごせてよかったと思う。校舎を貸してくれた事にも感謝した。

暫くするとプレハブ校舎が運動場に建った。新しい校舎が建つまでの間、私たちはそこで勉強することになった。

運動場自体に校舎が何棟か建っているの、休み時間は満足に遊べなかった。だけどそれぞれが工夫して楽しく遊んだ。狭くても自分たちの校舎・運動場で勉強したり、遊んだりすることは嬉しかった。

体育はさすがに出来なかったの、近くの公園を使って行った。

辛い環境の中だったけど、常に楽しめるように工夫した。

プレハブ校舎の中は、夏は暑く冬は寒かった。少しの音も凄く響いていた。トイレも少し使いにくかったように思う。プールのある日は特に移動しにくかった。プレハブなので傷みやすかった。不便な所も沢山あったけど、皆で授業を受けて、皆で遊んだ事は楽しかった。校舎がだんだんと完成していくのを見るのもわくわくした。

校舎が完成したのは私が5年生になってからだった。

プレハブが撤去される時、何だか寂しく感じた。2年間プレハブ校舎にお世話になった。

それでも新しい運動場を見ると嬉しくて、先生が「新しくなった運動場を1番最初に使おう」と授業もそっちのけで私たちを外へ連れ出した。外へ出てみると他のクラスの子たちも出ていた。

皆同じことを考えていた。思わず笑ってしまった。

チャイムが鳴った瞬間、待ちかねたように皆で走った。土の柔らかい感触、色、とても新鮮だった。運動場の端から端までを思いっきり走った。

これからこの新しい校舎と運動場で勉強できると思うと嬉しかった。

校舎には「新しい校舎 綺麗な心で頑張ろう」というスローガンがかかっていた。

私は旧校舎、プレハブ校舎、新校舎を2年間ずつ使った。何だか不思議な感じだ。私の小学校の経験は、普通の小学生のとは違っているだろう。不思議だけど、プレハブ校舎での生活の方が印象に残っている。それほど自分の中で大きな出来事だった。

時間が経つにつれ、公園内の仮設住宅、水を運ぶ給水車の姿は消え、まちは元に戻りつつあった。

それにつれて、震災の事も少しずつ薄らいできているように思えた。

でもそれじゃあ駄目だと思う。被害を受けて「凄かったなあ」だけでは変わらない。被害を受けて、次に同じような災害が来たときどうするのが大切だと思う。地震から学んだことを生かすことが次に

繋がる。

震災について今思う事

阪神淡路大震災を経験して、地震や災害について興味が湧いた。だからここ舞子高校の環境防災科に入学することにした。

ここで最初に学んだことは地震のメカニズム、地学だった。

どうして地震が起こるのか、どうして被害が大きくなるのか、地層はどんなのか——などということ学んだ。

実際に地層を自分の目で見て、触って、話を聞いたりした。今までの授業にない、まったく新しい環境での勉強だった。

体験したあの頃は地震の正体が分からなくて、得体の知れない大きな存在だったものが、地震の体験を自分の中じゃなく外から見て勉強することによって「かたち」が見えてきた。また、「地震」から様々な角度で物事が考えられることも学んだ。

そしてそれには命の尊さ、大切さを感じた。

色んな角度から勉強したが、全てそこに繋がっているように感じた。

体験したその当時と、今の「命」に対する思いの深さは違うように思う。今、たくさんのことを学んだからこそ感じる深さは違うから。今まで見えていなかったものが見えるようになったような気がする。

そのほかにも教室の外に出て、話を聞いたり、体を動かしたりして体験した。

震災を色んな角度から勉強してみて、災害当時の自分の考えと今の自分の考えは違っている。その当時は被害を受けた自分と、その小さな周りの一部しか見えていなかった。自分中心の小さな世界だった。しかし勉強してみて、自分のこともあるのに影で一生懸命働いてくださった方の苦勞、助け合いを知った。

実際に家族や大切な人が亡くなった人の話も聞いた。話を聞くのがとても辛かった。

何が起こったのかわからずに亡くなってしまうのは本当に悲しい。残された人も辛い。お年寄りの方が1人になってしまい「孤独死」を遂げてしまうことも、震災をきっかけに増えた。

「ボランティア」も震災がきっかけでよく耳にするようになった。

若い人たちだけでなく、遠くの地域の人や海外に住む人が神戸に来て、助けてくれた。救援物資を送ってくれたりした。上手いかなかったところもあったそうだが、皆が「助け合い」を行ったことは凄いと思う。

たとえお互いにいがみ合っていても、いざ何かあったら関係なく助け合えるのは凄いいし、人間の暖かい部分だと思う。この暖かさが、被害を受けた人々の心を少しでも軽くしたと思う。

被害を受けた動物のことも勉強した。

今まで被害を受けた人のことしか頭になかったが、被害を受けたのは人間だけでなく動物も同じだ。飼い主を亡くした動物がたくさんいる。

反対に家族の一員であるペットを亡くした人もいる。震災がきっかけで野良になってしまったものもいるだろう。

これもここで勉強して気づいたことだ。

また、被害を受けた人の心のケアとして、動物と触れ合うこともあることも知った。

あの当時の自分中心の私には、阪神淡路大震災の災害から、こんなにたくさんのことを学びとれるなんて思いもしなかっただろう。災害を外から見て何かを学ぶことの大切さをした。

被害を受けた人の視点と専門的に見た視点では全然違う。そのどちらも学んで自分の意見を持てるようになったのは凄いことだと思う。

自分中心の小さな世界だったものが広がった感じがする。目線が高くなったのかもしれない。

今まで見えなかった「かたち」が見えるようになってよかったと思う。「凄かった」で終わらせなくてよかった。

まだまだ学ぶことは沢山ある。もっと色々と勉強して自分自身の意見を持てるようになりたいと思う。

ここで学んだこと、感じたことを生かしていけるように頑張りたい。

阪神淡路大震災－被害を繰り返さないために－

阪神淡路大震災のあの被害を繰り返さないためには、1人1人の「意識」が1番に必要になってくると思う。昔から「神戸に地震は来ない」と思われていたから、なお意識の向上が必要だろう。もし神戸にも地震は来るという事をしっかり意識していれば何かしら対策は立てていたはずだ。

まずは地震に対する「意識」。地震とはいつ来るか分からない、無くすことは出来ないという事をしっかり覚えておく事が大切だと思う。

それが出来たのなら「耐震」と繋がると思う。地震の少ない地域へ引っ越すなどは急には出来ない。それに日本はもともと地震や火山の多い国だから、地震やその他の災害と上手に付き合う方が賢明だろう。

たとえばタンスを固定出来る金具を取り付けてみたり、災害の時にすぐ使える持ち出し袋を作っておいたり、寝室にスリッパを置いておくなど。これは地震などの災害時にガラスの破片や危険なものを踏まないようにするためだ。そのほかに水を常備しておくなど、色々出来る。他にも出来ることは沢山あると思う。

家族と話し合う事も重要になると思う。昼間災害にあった時の連絡方法とか、緊急の時に集まる公園や施設などを決めておくのも地震に対する対策の1つである。

携帯は便利そうだが使えなくなることもあるそうなので、近所の公衆電話の位置を確認しておくとうい。

あと、「地域との繋がり」も大切だと思う。震災の時、救助された人の多くは近所の人に助けられていた。震災の時は道路が壊れて車等が通れなくなり、自衛隊、消防車や救急車がすぐ駆けつけられない事も影響していると思う。

震災のことを勉強して、いかに「近所とのコミュニケーション」が大切かを学んだ。人と人との繋がりがあったからこそ助かった人も多くいたと思う。「近所づきあい」をないがしろにしてはいけないと思った。

地域の行事に参加してみたり、少し話しをしてみたり――。災害についてじゃなくてもいいから話しをしてみる。

これらのことは全て「命を守る」ことである。まずは自分の命を守ることが大事――。これも震災を勉強して学んだことの1つだ。自分の命がなければ、大切な人の命も、自分の周りの人の命も守れない。

まずは自分の命を守り、そして次に家族の、大切な人の、友人の命を守ること。これが次へと繋がると思う。

災害時は誰でも思っていたとおりの行動が出来なくなるという話を聞いたことがある。確かにそうだ。ならばどうすればいいのかを考える必要があると思う。

普段から緊張して生活するのは無理だから、1年～半年に1回地域で開かれる避難訓練に参加してみたりなど積極的に意識を高めることは出来る。消火器の使い方なども意外と知らない人が多い。もしあっても使えなければ意味がないので確認してみることも出来る。

もう2度と同じ被害を繰り返さないために、被害を受けて悲しい思いをする人が増えないように、「自分の命を守る」とことと「自分の出来ること」をする。この2つが大切で必要になってくると思う。

当時の日記

岡本 昂大
神戸市須磨区

1) 兵庫県南部地震(阪神淡路大震災)とは？(記録)

名称…兵庫県南部地震
 発生日時…平成7年(西暦1995年)
 1月17日(火曜日)
 5時46分
 震源…兵庫県淡路島北部
 北緯34度36分
 東経135度02分
 震源の深さ…約16km
 規模…マグニチュード7.3
 被害…1)死者・6433人(約90%が建物の倒壊による圧死や窒息死)
 2)けが人・35000人
 3)全壊家屋 約10万棟
 4)半壊家屋 約10万棟
 5)火災の発生件数 182件
 6)避難者数 最大1月23日、32万人
 7)建物以外の大きな被害
 ・新幹線橋脚の落下8箇所
 ・JR、私鉄などの高架の落下12箇所
 ・高速道路の倒壊・落下5箇所
 ・水道、地震直後の断水戸数95万4000戸
 ・ガス、地震直後の供給停止86万戸
 ・電気、地震直後に停電になった戸数260万戸
 2時間後100万戸
 1日後40万戸

(参照 <http://www.kobe-c.ed.jp/shizen/strata/quake/whatis/index.html#0105>)

2) 兵庫県南部地震(阪神淡路大震災)とは？(記憶)

地震が発生したとき僕は小学校2年生(8歳)で妹2人(当時6歳と4歳)と母親の4人で須磨区にある家の同じ部屋で寝ていた。当時の家族構成は1階に祖父と祖母、2階に両親、子供3人(僕と妹2人)という状態だった。

地震が起きると子供はみんな目を覚まして布団の中にもぐっていた。父親と母親が大声で動かずに何か会話をしていた。今から思うと安否確認と懐中電灯を持ってきてくれというものだったと思う。父親が飴玉と懐中電灯を持ってきてくれた。そうしていると上から何か降ってきた。地震がおさまってから見てみるとただのぬいぐるみだったがもしこれが重たいものだったら今ここに僕はいないと思う。

トイレを使った後は湯船にためておいた水で流す。湯船は壊れていなかったの水はたまったままになっていた。しかし前日にみんなが風呂に入っているのだから飲み水に使うには無理があった。だから飲み水の確保をするために水を汲みにいった。僕も親の手伝いをするために近くの公園まで水を汲みにいった。幸い家の近くは家屋の倒壊はなかった、しかし電気、水道、ガスは止まっていたので電気、水道、ガスなど日常には当然のようにあるものがどれだけ便利でありがたいかということがよくわかった。

水を汲みにいくのは小学校に自衛隊の給水車がきたので学校まで行った。近くの小さな山の上に水をためているタンクがあったので家の一つ手前のおりまで水が流れてきていた。だから、水が流れ

ている公園まで水を汲みに行った。その公園はとても近くて、公園で遊んでいる子供の声が家の中に聞こえてくるくらいの距離だった。

当時思ったのは公園よりも山に近い友達の家には水が出るのになぜ自分の家には水が出ないのかというものだった。今から考えるとこんなに近くで水を確保できたことは幸運だ。

今までいろいろなことを勉強してきたが、自分の家近辺がどれだけ被害が少なかったと思ひ知らされた。今では近くの公園には防火水槽が設置されている。これはとても強いことだ。

震災のことも一段落したころ親戚の家にお風呂にはいるために行った。このころは家の近辺はまだ水もガスも通っておらず風呂に入ることはできなかった。このとき入ったお風呂はとても気持ちよかった気がする。

お風呂に入ることはできなかったが電気は回復していたのでホットプレートなどを使って料理をしていた。このときほどホットプレートが便利だと思ったことがないと思う。なぜならガスが使えないので物を焼くことができない。それに温めることもできない。しかしホットプレートは電気だけでそういうものを焼いたり温めたりすることができるからだ。

また食器も食器棚が横にスライドさせて食器を取り出すものだったので地震によって割れた食器は1枚もなかった。お隣さんは食器棚が両開きのものだったのでほとんど割れてしまったようだ。

これが今の記憶にある震災時の状況だ。

3) 当時の記録(日記)

震災当時は日記を書いていたのでこれを載せようと思う。文は何が書いてあるのか読み取りにくいところもあるがそのまま載せようと思う。また、日記の途中に()のなかに、書いてあることからわかること・詳しい説明を書いている。

1月17日(火)

6時前ごろのじしんでおきたよ。いちばんはじめにくびの上にもものがおちてきてお母さんがふとんのまんなかに子どもをよせたよ(当時母親と妹二人と自分が同じ部屋で寝ていた)。ふとんの中にモグラのようにもぐったよ。となりのへやからお父さんが大きな声でだいじょうぶかといったよ。お母さんがだいじょうぶだからかいちゅうでんとうをもってきてといった。それでもまだゆれていたあかるくなるまでみんなで手をつないでいました。ぼくはじしんなんてはじめてだったよ。はじめのほうはおもしろかったよ(最初はゆれただけでこう思ったのかもしれない)。朝おきてリュックににづくりをしたよ(母親が何かあったときのために避難用のかばんを作るように言った)。リュックの中には、てぶくろ、ぼうし、1日ぶんのきがえ、かいちゅうでんき。ランドセルの中にきょうかしょぜんぶいれたよ。にげるじゅんぴができたよ。

1月18日(水)

朝おきてしんぶんをみてぐちゃぐちゃだったよ(新聞が配られているということはこの日記を見るまで知らなかった。印刷しているところは電気が通っていたのだろうか)。それをみてこわくなったよ(最初は面白いと書いていたがここで心の変化がおきている)。しんせきぜんいんぶじだったよ。あっちこっちでんわをかけたよ。ときどきしかつうじなかったよ。ゆうがたテレビがついたよ(夕方には電気が回復したことがわかる)。テレビがついてうれしかったけどニュースを見てうちがはれつしたみたいだったよ。おばあちゃんがせんそうのやけのはらみたいだったといったよ。ずっと家の中にいたよ。ときどきゆれたよ。

1月19日(木)

みずくみにいったよ。学校にいったよ。学校には戦車みたいな車がきていたよ(このときになると自衛隊の給水車が到着していたようだ)。ちょっとならんでぼくは水筒に入れてもらったよ。みんなおなべやごみばこやペットボトルやポリタンクにいれてたよ(何でもいからとにかく水をためておこうという考えだったのだろう)。もらってからなみだがでそうだったよ。

トイレのあとは水をながさない。手をあらった水はきめられたところにすてる。その水がたまったらうんこにつかう。ってお父さんがかみにかいたよ。

テレビがニュースばかりでいやだったよ。ぼくたちは家があるからまだましなほうだね。

1月20日(金)

せいしんのお母さんのいとこのところにおふろにはいりに行きました(西神のほうはガスも回復していたか壊れていなかったようだ)。あるいてみょうだにまでいって地下てつのホームには大きなにもつをもった人たちがたくさんいました(地下鉄はもう動いていたようだ。大きな荷物を持った人たちは避難するつもりだったのだろうか)。

おふろにはいっていきもち。お母さんがいきかえったと言ったよ。またきてねと言ってくれました。ろっこうのおばちゃんもひなんしていました。

1月21日(土)

そとにでれなくてのり子とトランプをしたよ(典子は妹、外に出られないというのはまだ余震が続いているから)。でもちょっとつまらなかった。

1月22日(日)

水道がまだでないのでパンダ公園の水をくんできます(パンダ公園は家に一番近い公園で公園まで100メートルもない)。すごくしんどくて手がいたいです。ガスがつかえたから家でおふろがはいれました(うちの近くは5日でガスが回復したようだ。また珍しくガスよりも水道のほうが、復旧が遅れていたようだ)。おじいちゃんとおばあちゃんはきもちよさそうでした。ばんのニュースを見てひなんしているひとたちのこえをききました。こわかったです。

1月23日(月)

なだくのお母さんのいもうとのおばちゃんがいとことたるみおばあちゃんもきたよ(母親の妹が母方の祖母と僕たちから見たいとこを連れてきた。地震があったときおばあちゃんはいとこの家に泊まっていてそのまま行動をとみにしていたようだ。灘のいとこの家はすごい被害だったと聞いた覚えがある)。なぜきたかという家があぶないからだ。まだむこうはガスと電気と水道がつかえません(須磨区の僕がいた家はすでに水道以外は復旧しているのに震災の中心とではここまで復旧に違いが出るものなのだと実感した)。たるみおばあちゃんがこっちのほうがゆれがあさいといったよ(余震自体にも違いがあったようだ)。みんながきてねれるようにしたよ。お母さんとダンスをうごかしたりしたよ。しんどくておもくてしにそうだったよ。きょうは朝からばんまではたらいたからくたくたです。

1月24日(火)

ぼくはきょういとこがおふろにはいるために水くみにいったよ。すごく手がいたかったよ。でもいとこがあがってからきもちよかったといってくれたよ。

2月11日(土)

(父親と父方の祖父がこの地震での被害は見ておいたほうがいいのかということで僕を被害が大きかったところへ連れていってくれた)ちかてつでいたやどまでいってJRたかとりえきまであるいたよ。おみせがこわれてくるまがしたじきだったよ。その中でテレビでみたところもみたよ。それであるいてあるききました。しゃんしゅうののっていたビルのひとつだけ見ました。6かいがつぶれていました。となりのびるはすごいきれいでした。

三ノ宮からバスでみかげまでいきました。家がぺしゃんこになっているのも見ました。ぼくはそれを見て家があるだけいいんだなあと思いました。かえりはたかとりえきのひみつのつうろを通りました。てんじょうがひくくてトンネルみたいだったよ。テレビで見たのとおなじけしきだったよ。ビルがかたむいていてとなりのビルがささえながらななめになってたよ。ちがうほうこうにたおれなかったなとおもったよ。電車の中から公園にかせつじゅうたくのつくりかけを見たよ(約3週間で仮設住宅の建設が始まっていたようだ)。くらいきもちになって帰ってきました。たるみおばあちゃんがいったみたいここは天国やと思ったよ。

2月26日(日)

ろっこうみちのいとこの家におみまいをとどけに行きました。ちかてつでいたやどまでいってたかとりこうじょうからJRのなだえきまで行ったよ。そこでたるみおばあちゃんとごうりゅうしました。それではんきゅうの王子公園えきまでさか道をのぼりました。はんきゅうろっこうまでのつてはんきゅうろっこうからずっとあるいたよ。とちゅう花がそえてありました。家がおじぎをしているようでした(さすがにまだ倒壊した建物は放置されていたようだ)。いとこの家のちかくに知り合いがいたから小さい

おひなさまをあげたよ。その人の名前は山口さんだよ。山口さんはいのちづなだったんだって(山口さんは現在ボーイスカウトの団委員長をしているかたで息子さんが3人いる。当時は家の中は通れなかったのでロープで体を確保して窓の外を通ったそう)。どろぼうも入ってたんだって。まわりの家はほとんどこわれていたよ。すごくこわかったよ。元気村というところがあったよ。いろいろなものがあったよ。すごくおもしろかったよ。てんじょうがなくなったビルもあったよ。でも元気村に行って元気で楽しいよ。みんなでたすけあっているね。がんばろう。

以上

4)環境防災科で勉強して思うこと。

上の日記をみて環境防災科で学んだこととあてはめていって今後必要なものは何か考えてみた。これはあくまで僕個人が考えたものなのでおかしい面もあると思うが勘弁してほしい。

家にあると便利なもの

(水汲み)

- ・ 大きなバケツ

(これは汲んできた水をためておくもの。湯船にためておくのはもちろんのことだが少しでも水は多いほうがいいのであるにこしたことはない) 我が家では震災時に買った。

- ・ ポリタンクやバケツ

(これは水を汲みに行くためのもの。これらのものは地震がおきるとすぐに売切れてしまう恐れがあるので前もって買っておく必要がある。)

- ・ リヤカー

(これはポリタンクなどに汲んだ水を運びやすくするもの。一人で少しでも多くの水を運べるにこしたことはないのであると便利。)

- ・ ロープ

(これはリヤカーなどに乗せたポリタンク等を固定するもの。坂道を登ったりするときはロープがないと水がこぼれたりポリタンクが転がり落ちる恐れがある。)

- ・ ビニールのゴミ袋

(これはバケツなどに水を汲んだとき運ぶ途中に水がこぼれるのを防ぐためのもの。バケツで水を汲んだ場合運ぶ最中に水がこぼれることはほぼ確実だと思う。また大きなバケツに水を直接入れてリヤカー等に載せて運んだ場合坂で傾いてバケツがひっくり返ったり水がこぼれたりすると思う。こういったことを防止するために水はゴミ袋に入れて口を結ぶなりくくるなりして閉じる。これをしておくと水がちゃんと運べる。)

(台所)

- ・ 横にスライドするような食器棚

(両開きの食器棚だと揺れたときにとびらが開いて食器が割れてしまうが、とびらが横にスライドするものとゆれてもとびらが開かないので食器は割れにくい。)

- ・ オール電化にする

(ガスより電気のほうが復旧するのが早いので災害時には便利。)

- ・ ホットプレート

(オール電化にするのは度が過ぎるかもしれない。しかし、調理することができるホットプレートはあったほうが良いと思う。)

- ・ ガスコンロ

(ホットプレートは電気が復旧しないと使えないがガスコンロはボンベさえあれば使うことができる。火を使うことができるだけでいろいろなものが食べられるようになるから出しやすい場所においておくといいと思う。)

- ・ 消火器

(当然のことだが震災時に火事を出すと消すことは至難の業になる。よって初期消火が普段以上に大切になると思われる。)

(持ち出し品)

- ・ 非常持ち出しセット

(これは売っているものを買うほうが早いし便利で確実なのであって損することは無い。)

- ・ テント

(持っていない家族がほとんどだと思うが避難するときには絶対役に立つと思う。)

- ・ シュラフ (寝袋)

(ものにもよるが基本的にシュラフがあればどこでも寝ることは可能だ。毛布よりは暖かく小さくまとまるので便利だと思う。)

- ・ 飲料水

(救援物資が届くまでに3日かかるといわれている。その間は自分でどうにかしないといけない。水は賞味期限が切れかけたら買い換えて古いほうを使えばいいのであまり損は無いと思う。)

- ・ 懐中電灯

(これは一家にひとつではなく家族一人にひとつと考えてそれぞれ個人で持っておくほうがいいと思う。)

- ・ ラジオ

(どんなときでも情報はあるにこしたことはない。それにラジオでは震災時はどこで水が出ているかなどの情報がながれるのもっていないと損をする可能性がある。)

- ・ 携帯テレビ

(ラジオよりも情報が得やすくまたより詳細にわかる。難点はラジオよりも電池を食うということでもそのほかはとても便利だと思う。)

- ・ 乾電池

(上の3つは全てとても必要なものだ。しかし電池がないとこれらはまったくうごかない。また災害が起きてからではほぼ確実に買うことは不可能だと思うので買い置きしておくべきだ。)

- ・ 救急セット

(避難する際に怪我等をしてしまった場合応急処置が大切になってくる。いくら応急処置でもしっかりとした道具を使ったほうがいいに決まっている。)

まとめ(感想)

以上が、僕が思う普段から準備しておいて役にたちそうなものだ。改めて考えてみると普段わからないことなどが出てきてよかったと思う。震災体験といわれても正直記憶に残っていることは水を汲みながら歩いたことだけで日記にあったような被害の大きかったところを歩いたときの記憶はほとんどとかまったく無い状態になっている。これはとても恐ろしいことだと思うしこれが現実だと思う。でもなるべく記憶が消えていかないように努力をすることが大切だと思う。

変化の日

奥野 香苗
神戸市西区

1月17日。今の私が始まる。

私は、当時、毎日変わらない日々を繰り返し過ごす普通の小学2年生だった。当時から今にかけて私は神戸市の西区に住んでいる。西神南駅に近く、コープにも近い。便が良いと言えば良いが、何も無いといえば、何も無い町だ。それは10年前と今と何も変わらない。

1月15日(土) 私は自分で髪を切る。河童のような髪型になる。

1月16日(日) いつもと違う広い部屋で寝た。

1月17日(月) 兵庫県南部地震発生。

5時46分以前。私は1人で母のベッドに寝ていた。その部屋は広く、大きなクローゼットがあったのでタンスなどは全部その中にある。隣のベッドでは父が寝ていた。母は弟が風邪で熱を出していたので、リビングのそばにある座敷で寝ていた。少しずつあの時間になる。私は当然のように寝ていた。音は聞こえなかった。5時46分。私はその激しい揺れで目を覚ました。その感じた揺れの長さは正確にはわからないが、とても長く感じた。あの、やわらかい布団の中で感じる揺れはなんとも、言葉に表しにくいものがある。何かに圧迫されるものも無く、何かから直接振動を受けているわけでもない……。宇宙の中心にいるような、空気の層で包みこまれているような、不思議な感覚だった。今、当時を振り返り考えてみるとあの揺れの中、私は何を考えていたのだろうか。

西区に越してくる前は東灘区に住んでいた。小さい地震が頻繁に起こっていたので(今考えるとその小さな地震は兵庫県南部地震の予兆だろうか・・・?)、地震は何回も体験していた。そんなこともあり、私はその揺れから《地震だ》ということを察したことだろう。しかし、思考はそこにとどまり、《怖い》とか《不安だ》という気持ちはなかったと思う。私には自分の意思でそこまで何かを考える余裕はなかった。

揺れが治まった。私は地震の揺れで気づけなかったのか、どうなのか、身体がものすごく震えていた。本当にあの身体の震えは地震から長い年月がたっている今でも覚えている。そしてあのような激しい震えはまだ再体験していない(幾度か死ぬかと思った事故をしたけれど)。そのとき、初めて《怖い》と感じたのだろう。揺れているときの精神は緊張状態だが、いったんその緊張がほぐれ《生きている》ことを実感すると、すごい勢いでいろいろな感情が込み上げてくるようだ。私はその震えを実感しながらずっとベッドに入っていた。父が「布団からでるなよ」と言っていた記憶もかすかにあるが、私はその言葉に従ったのではなく、身体が、精神が、私に「動いてはいけない」と語るかのように、身体は硬直したまま動かなかった。そして、部屋は私の大きな激しい鼓動の音しか聞こえなくなった。そして私はそのまま少しの間眠ったらしい。

しばらくして私は少し長めの廊下をゆっくりと歩きながらリビングまで来た。父と母と弟(寝ていて父に抱かれていた)が中央にかたまって座っていたがリビングは薄暗く、懐中電灯の光が部屋の隅に向けて伸びているだけだった。私はその輪の中に入った。弟は、前にも書いたように熱が出ていたので、ちょうど地震が発生する前に「のどが渴いた」と目を覚ましていたらしい。地震が発生して、リビングに出てきてから眠りについたようだ。父や母がいろいろな懐中電灯やラジオを持ってきて使えるかどうか試していた。たくさんあったのに使えるのは1つだけだった。少し大きめの古い、懐中電灯とラジオが一体型になったものだ。他はどれも電池がなかったり、壊れていたりだった。ラジオでは男のアナウンサーが誰かが起こった地震のことを中継していた。何を言っていたかは覚えてはいないがとても早口だったと思う。そのラジオをしばらく聴いていると部屋の照明がつき、テレビがつくようになった。しかしその頃には、朝日が昇っていたので、部屋は明るかった。

リビングは悲惨な状態だった。皿はすべて飛び出し、ガラス製品や陶器のものは粉々だった。新しいマンションに引っ越してきて、まだ2年目だったので食器類は新しいものも多く、母はショックだったそう。リビングへ出る廊下のドアのすぐそばで、横幅60cmほどの水槽に金魚を5、6匹かっていた。そのうちの1匹が揺れで外に飛び出し、死んでいた。その金魚は家の外まで埋めに行く余裕がなかったので、処分した。それからリビングの危険物を処理したあと、各部屋を回ってみた。浴室や洗面所などは変化なく普通だった。水も途絶えていなかった。しかし、万が一を考えて風呂に水を張った。弟の部屋も特に異変は無く窓も割れず、落下したものも無かった。しかし、私の部屋はリビングと同じくらい悲惨だった。私の部屋にはベッド、勉強机(定番の形のもの)、大きな古いオルガン、長いすがあった。

当時の私は小学2年生ということもあって、今に比べて教科書も少なく、収納スペースが多い勉強机の上の段には図鑑を15冊くらい並べていた。その図鑑が地震の揺れで全部落ち、机はへこみだらけになった。重たい図鑑は落下とともに重さを増し、机を直撃したのだ。その机の傷は今でも残っている。図鑑は机だけではなく、ベッドにまで散らばっていた。私が寝ていた父と母の寝室も異常はなかった。私も私の親たちも、私が自分の部屋で寝ずに父と母の寝室で寝たことが偶然にも幸運だったと喜んだ。偶然、母のベッドで寝ていたから何も無かったものの、自分のベッドで寝ていたら顔に図鑑が直撃していただろう。座敷の部屋も特に変化はなかった。家全体で見ると、被害は食器などの破損と机の破損、あと壁がひび割れた程度だった。新しいマンションだったせいか、傾いたりはしなかった。あとから知ったことだが、マンション(15階建て)の14階に住んでいる友達の家と2階に住んでいる私では揺れが違うそうだ。上層階に行けば行くほど、折れないように柔軟に作られているのだろうか・・・？

9時ごろになり、いつものように顔を洗い、トイレに行って、朝ごはんを食べた。母はポートアイランドに住む母方の祖母や大阪に住む父方の祖母に安否の連絡をしていた。どちらも大した被害はないようだった。そして、普通の生活に戻ろうとしていた。しかし、その流れはテレビのニュースによって止まった。テレビでは長田か灘の町の上空からの映像が永遠に流れていた。そのテレビの四角い画面には、灰色の町、灰色の空気、黒い家、その住に存在を主張するかのように赤い炎があった。母は絶句とは対象に「え～!!?」と大きな声を出した。私はというと、何のリアクションもせず、単なる映画・アニメを見ているようだった。信じられなかった。これが現実だとは。しかし、この映像が嘘ではないことの証明になったのは前に住んでいた家が映ったからだ。母も私もその映像を食い入るように見た。家は全壊していて、すぐ近くにあったホールか体育館か覚えていないが、その公共の建物が映っていた。その町は火災さえ起こっていなかったものの家屋がたくさん倒壊し、その公共の建物にたくさんの人が避難をしたり、運ばれたりしていた。父の昔の友人もそこに避難をしたそうだ。母は何も言わずその映像を見ていた。私はその事の重大さをよく理解していなかったし、まだ朝だったのでアニメが見たかったのか早くチャンネルを変えてほしかった。しかし母はチャンネルを変えなかった。今思うとほかの番組を見ればよりたくさんの情報を得ることができただろう。いや、番組を変える必要がなかったのだろうか。その映像だけで母は事の重大さを理解することができていたのだから。その頃、父は六甲にあった会社に行っていた。

10時か11時ころになり、近くのコープに母と二人で行った。当時はこの地区に住んでいる人は少なかったのが今思えばそうでもないが、たくさんの人がコープで買い物をしようと列を作っていた。しかしコープはなかなか開店しなかった。後から聞いた話だと、コープの中のガラス製品や窓が割れていて、それを処理するのに時間がかかったそうだ。私はその列に並びながら、なぜこんな朝早くから買い物に行くのだろう、何をかうのだろう、と楽しみだった。しかし、いざ買い物が始まるとその楽しみは消えた。ものすごい勢いで人が人を押してコープの中には入ろうとする。私は勝気な性格なので(小学校時代は特に)一生懸命になった。母に「水取ってきて!!」と早口で頼まれた。私は急いで飲料コーナーへ行ったが、水はなかった。今はボトルの水を飲む習慣が流行っているが、昔はそうでもなかったのが商品としての水も少なかったに違いない。私は母の元に戻り水がないことを伝えると今度は牛乳を取ってくるように頼まれた。再度飲料コーナーへ行くと、今度は店の人が「お1人様1本でお願いしま～す!!」と大きな声を出して言っていた。私はどちらを優先すべきか迷ったので水と牛乳1本ずつもって戻った。水を配ってくることを知った母は自分でも水を持ってきた。しかも4本も。どの客も店員のことばなんて無視に近かった。母を含め、他の客はインスタントのカレーやラーメン、米、お菓子、果物、缶詰、あらゆる食料を買った。

家に戻って一段落ついた私たちは、またテレビを見た。テレビではまだ被災地の様子が放送されていた。今でも覚えているが、私はその時「地震っていう奴なんか殺してやる～!!」と言っていた(私の悪い性格がうかがえるが)。そのころの私は、「地震」に対してどのような感情を持っていたのだろうか…。もう今となっては遅いが、その感情はとても貴重な感情だったと思う。

地震発生から数日が過ぎて、父の会社の同僚の家族が私の家に来た。その家族は地震で大きな被害にあったらしく水も、電気も、ガスも止まったらしい。私の家はその時点で水、電気、ガス、すべてのライフラインは使える状態になっていたのも風呂や食事を人に提供するぐらいのことはできた。その家族とは2日ぐらい過ごした。そしてガスコンロを分けた。また、ポートアイランドに住んでいた祖母が私たちの家で一緒に住むことになった。祖母の家自体は何も問題なかったらしいが、周りが地盤沈下などで大きな被害を受けていたので、安全確保のために住むことになったそうだ。

私のいく小学校は何週間か休校になった。地震があった2日前、自分で髪を切り大変なことになっていたので、「これで髪を伸ばすことできるな」と母と笑い合った。学校が始まり、私たちはいつもと変わらない生活に戻った。子供の話題は遊びやテレビのことに戻り、いつものように習い事に行き日を過

ごした。母によると震災によって近所づきあいが増え、半年間ぐらい地震の話題が話の中心だったそう
だ。しかし、多くの子供は地震ということにあまり執着していなかっただろう。なぜなら、私なんかは
自分の周りの《何の変化のない》世界しか知らなかったのだから。しかし、子供の心には大人と変わら
ないくらい、いやそれより大きな傷が残っただろう。私は地震が今でも怖い。地震に限らず「揺れ」に
対して恐怖心を持っている。特に小さな揺れに非常に敏感になった。それは地震から9年経つ今でも変
わらない。私は地震が怖い。それによって人が死んでいくのがとても怖い。

私の震災体験は他の人に比べるととても薄い類に入るだろう。これといった被害もなく、普通の生活
に戻るのも早かった。父なんかは六甲までの出勤に苦勞したかもしれないが、それは父の震災体験であ
るので書かないことにする。さらに、私も含めてもう家族の中に当時のことを鮮明に覚えている人はい
ない。母が言うにはやはり体験が薄すぎるようだ。戦争などは死の恐怖がいつもついてくる。だから精
神は常に緊迫状態で、ものを忘れる暇さえ与えてくれない。さらに、その被害は国全体に及ぶもので被
災感覚のムラがないと思う。しかし、地震は被害にムラがある上、めったに起こらないのでその体験は
継承されにくく、風化されやすい。現にこの震災はそうなりつつある。さらに、ここが日本という、一
人一人がとても忙しい国であることも災害が継承されにくい理由にあると思う。皆、過去の災害よりも、
その日のことで精一杯なのだろう。

私は今も兵庫県南部地震の被災者だ。それは確実に思う。別に被害を今も受けているわけではないが、
あの地震を覚えている以上、あの地震との関係を断つことはできない。高校生になり、環境防災科とし
て1つの「災害」としての見解で兵庫県南部地震を見るようになった今、むしろその関係は断ちたくな
い。あの地震で言葉にできないくらい大きな、悲惨な被害を受けた人もたくさんいる。現に6400人あ
まりの人が亡くなっているのだから。私は今、被災者として、何ができるのだろう。私は自身を被災者
という言葉によって守ってもらわなければならないと思う。むしろ、その経験によって何か新しいもの
を生み出すことができるのではないだろうか。

私は環境防災科に入ったことでたくさんのことを学んだ。兵庫県南部地震という地震を阪神・淡路大
震災という視点で見えるようになった。そこで学んだ阪神・淡路大震災は私の知っている兵庫県南部地震
ではなかった。テレビで見た、あの様子をそのまま文字や映像、話によって疑似体験したようだった。
私は当時知ることのできなかった《命の重み》を垣間見ることができた。時には涙が出そうときさえ
あった。私の体験した兵庫県南部地震はひとつの断片に過ぎず、被災者の数に比例する被災体験がある
ことを知った。ある防災関係者から「地震によって亡くなった死者には、1人1人違った死因があり、
それぞれのドラマが存在する」という事を聞いた。まさにその通りだと思った。私たちは死者ではない
が、地震によってそれぞれのドラマができた。また死者とは違い、これからがある。私たちの未来は開
かれ、ドラマはさらに選択肢を広げる。さらに、私たちはその選択肢を自由に選ぶことができる！

私は自分が変わったとつくづく思う。私はこんな積極的な人間ではなかったし、人のためになるよう
なことには無縁の人間だった(今でも人のためになるようなことは特にやってないが)。兵庫県南部地震
によって私の中で変化が起った。私はもっと人と話し、私は経験したことを、私が考えることを、私が
してきたことを伝えたい。そして、知りたい。意見をもらい、自分の「身」にして、考えを搾り出す。
私は言葉をしゃべることができる。字を書くことができる。自分で前に進むこともできる。私にはでき
ることがたくさんある。そして生きている価値を十分に発揮できる可能性を持っている。オーバーだが
それこそが唯一私にできる、被災者としての仕事だと思う。難しいことはまだまだ分からないが、たく
さんの可能性が私を待っているのだ。

前に、地震は風化されやすいと書いたが、それは人の意識の風化だけではなく、文献としてもしっか
り残していくべきだとも思う。私は阪神・淡路大震災しか、今まで生きてきた中で「災害」というもの
を体験していない。だから余計に阪神・淡路大震災は風化させてはいけないと思う。犠牲になったもの
をただの「犠牲」として終わらせてしまうのは、たぶん、いけないことだと思うし、変な言い方だがも
ったいないと思う。

私は前にも書いたように阪神・淡路大震災という新しい視点でじっくり調べて学習するという事を行
なった。阪神・淡路大震災を元に防災や消防、ライフラインや心、教育、いろんなことを学んできた。
そこで私は「楽しい」という感覚を持ってしまった。私は、東京やいろいろな場所で、時には学校の生
徒の前で発表する機会をいただいた。そこで今、自分が学んでいることやどんな気持ちで学んでいるか
という意見を出そうとする際に、やはり防災を学ぶことは「楽しい」という考えがまず出てきてしまう。
私はそれがすごく嫌だった。恥ずかしかったし、自分がすごく薄い人間に思えた。阪神・淡路大震災と
いう被害のたくさん出た、哀しい出来事を元に学んできた防災。それを楽しんでいるということは、い
けない感情だと思った。しかし、東京で行なわれた第2回安全安心まちづくりワークショップで理学博
士の武村雅之さんとお話をする機会があり、意外な意見を聞くことができた。その時のお話では自分が

調査のために家一軒一軒に聞き込みに行っているときの事で、「家の人はあれこれ質問されるから皆嫌な顔をするよ。でもこっちは楽しくてしょうがないんだよ。自分の経験できなかった話がたくさん聞けるわけだからね」と言っていた。私はとても驚いた。思いが同じだった。武村さんにとっては何気ない会話の一部だったであろうこの言葉で、私はだいぶ楽になった。「人間の好奇心」と言ってしまうとそれでおしまいが、この「楽しい」と思う気持ちにそれより深い意味があると思っている。

私はこの高校生活で変化の日の終止符を打とうと思っている。被災者であるというプラス面での意識は失わないが、私は自分の中の《再出発の日》が近づいていると思っているからだ。そのキーワードになるのは「防災教育」だ。私は小学校の教師になり、子供たちに防災を教えるのが夢だ。なぜ小学生なのか、それは私が兵庫県南部地震を体験したのが小学生の時代だったことに根源があるだろう。私が地震に対して「殺してやる」といった真相をつかむため、また、環境防災科として小学校へ講義をしに行ったときに感じた小学生の素晴らしい感覚・・・その子供の思考の真理をつかめるかもしれない、と考えれば私はまだ教師になれるなんて決まってもいないのにとても楽しみになる。

最後に、私がこの学校を卒業したら、今までは何もしなくても防災を学べる機会を得ることができたけど、もうそれがなくなってしまうんだなあと、ふと思う。それと同時に私は自ら、阪神・淡路大震災の被災者という思いも捨てることになるだろう。これを書くのが、本当に卒業間近ならもっと思いを書き表せたかもしれないけれど、今は少し難しい・・・。「被災体験」という題でレポートを書く課題だったのに、なんだか違う方向へむいてしまった気もする。しかし、今できる限りの想いを、口に出したくないことまで、全て書いたつもりだ。

英語はそんなに得意ではないけれど、私には1つ、好きな言葉がある。「independent」独立だ。これからは、チャンスを与えてもらうのではなく、自ら掴みにいく。独立した、1人の防災人となるべく学び、活動したいと思う。

黄色い花

神谷 亜依
神戸市垂水区

奥尻島の地震のニュースは子供の私にも記憶が残るほど大きく報道されていた。

地震によって起きた津波の被害にあったそうだ。津波は島の上に乗っていたものをすべて押し流したようだった。津波によっておもちゃのように破壊された町、家を流されて途方にくれる人、肉親が死んで泣いている人。人も破壊された町も映画のセットみたいだった。カメラを載せたヘリコプターは上空を旋回し崩れた積み木のようになった町を電波に乗せた。

その被害の状況を見て本当にこの同じ世界で起こったことなのかな、と疑った。まるで現実味がなさすぎだ。しかもテレビの報道を見ているとそれがすごく珍しいことで、こんなことはめったにないみたいな報道をしていたので自分は地震に遭うことはないだろうと勝手に思っていた。それどころか地面がぐらぐら動くってどんな感じだろう、それって面白そう、と思っていた。

前日は本当に何もない一日で覚えていないくらい平凡な一日だった。明日は近所の人の誕生日だということを母が言っていたことを覚えている。明日はその人の家族が家にいないから今日誕生日会をするといっていたらしい。私は何の興味もなくて、それはよかったね、と適当に返事をして自分の部屋に引っ込んだかもしれない。今日の宿題は漢字ドリルと計算ドリルで明日提出だとか面倒だとか何とか考えていたかもしれない。

トイレに行きたくなって目が覚めた。トイレまでの廊下は暗く足音だけが妙に響いた。外はまだ真っ暗で早起きのすずめも鳴いていなかった。冬なので外は寒そうに少し風が吹いていた。もうしばらく寝られるな、二度寝二度寝、と戻ってきて転がって布団をかけたときだった。

突然大きな 100 円で動く乗り物に揺さぶられるような揺れがあった。

ガーガガガガ！！と下から突き上げるようなぎしぎしと横に揺さぶられるようなよく分からない揺れが襲った。がんと床が揺れていた。私の後ろにあるタンスの上からかごや何か上に乗せてあったぬいぐるみがばらばらと落ちてきた。重いものではなかったので怪我をすることはなかったが痛かった。窓からみしみしと変な音が聞こえ、視界に入った食器棚はぶらぶらと戸を開け中の皿が流れ落ちた。皿はフローリングにあたってすさまじい音を建てるたてながら割れた。上の段から下の段まで順番を決めているかのようにきれいに落ちていった。程なくして食器棚は全く空になり下は食器の残骸の山となった。残骸はリビング全体に粉々になって広がり普通には歩けない状況になっていた。リビングの引き出しという引き出し、戸という戸はすべて開き、中の書類などのものがすべり落ち、さらに床は足の踏み場がなくなっていった。

しばらくして揺れが収まった。辺りはしん、とし誰も何も話さなかった。どこの家の人もみんな呆然としているのだろうと思った。リビングは破片が散らばりまともに歩けない状態になっていた。父が破片を踏まないように底の厚いスリッパをはき食器棚の引き出しに入っているろうそくとマッチを探した。母はテレビをつけるためテレビに近寄る。テレビは揺れのため台から 5 センチほどずれていた。私は窓から外を見たり、リビングに散らばる白い破片を眺めたりしていった。その破片の中にお気に入りのカップの破片を見つけ、あれ気に入ってたのに、などとつまらないことを考えていた。そして事の重大さを知らない私は地震ってすごいなー、今日は学校が休みになるかもしれないな、とあわただしく動き回る父と母の様子を眺めていた。

電気はすぐに復旧したらしい。

7 時頃だったかテレビがつけられて臨時ニュースがずっと流れていた。どこのチャンネルを回しても「先ほどの地震は一」と地震速報ばかりやっていた。アナウンサーも今呼び出されました、という感じで今の被害状況を喋りまくっていた。アナウンサーの顔にも信じられないという様子がありありと浮かんでいた。NHK の放送局の地震直後の様子が流れた。人が何人かいて棚がたくさんあり書類やファイルがたくさん詰まっているような棚だった。その棚が揺れによってふらふらと揺さぶられそこにいる人はわけが分からない、何が起こったのだ、という様子でゆすられるがままになっていた。棚のファイルはすべて落ち床に散らばっていた。その後の片づけが大変だろうなと思った。

破片を踏まないように窓に近づきまた外を眺める。空はどんよりと黒かった。雨が降りそうなわけで

はなく澱んでいるような感じだった。ニュースが長田区の火事の状態などを伝えた。テレビは何本か煙の上がる市街地を映し出していた。この黒い空気は長田区の火事の煙だ、と理解した。ベランダの手すりには黒い煤がたくさんついてた。

北側の部屋から外を眺める。外は駐車場だ。何組かの家族が車のほうに避難していた。エンジンをかけて今からでもどこへでも走っていけるように準備をしているようだった。どの車もやはり黒い煤をかぶりくすんだ色になっていた。

案の定連絡網が回ってきて学校は休みだということだった。なんだか素直に喜べなかった。高潮警報などで休みなら何の被害もないし普通に喜ぶが目の前で被害が起こり放題なので全然うれしくないなあと思っていた。私の小学校は建ってから 30 数年経過しているので壊れていないかちょっとだけ心配だった。

「現在の安否が分かっていない方々は一」

朝からずっと続いている臨時ニュースが安否情報を流し始めた。緑の画面に四角で囲まれたたくさんの名前と所在地が紙芝居のようにどんどん入れ替わっていった。もし助かっていたら〇〇に連絡するようにとも言っていた。いろんな年齢の人がいた。同じような年の子もたくさんいた。さっきのたったあれだけの揺れでこんなにたくさんの人の行方が分からなくなるなんて、とびっくりした。私は奥尻島の地震のニュースのことを思い出した。あの時も安否がわかっていない人たちの名前が画面にたくさん表示された。それから市街地の中に入り込んだ映像が流れ始めた。ビルが倒れていたり火事が延焼していたりでおもちゃのように破壊された街、家をつぶされて途方にくれる人、肉親が死んで家のあった場所の前で泣いている人。瓦礫をひっくり返して泣きながら名前を呼び続ける人。人も破壊された町も映画村のエキストラとセットみたいだった。大きな撮影機材を肩に載せた撮影クルーは上空を旋回し焚き火のあとのような町をフィルムに焼き付けた。なおも黒い煙は空高く上がり粉々に散った建物が画面下を覆いヘリコプターの羽から出る機械音がテレビから流れていた。

親戚のおじさんやらおばさんやらからたくさん電話が入ってきた。私は遠くにいたのに受話器から叫ぶような声がたくさん聞こえてきた。みんな心配してくれているようだった。母はすべての電話に大丈夫やった、と答えていた。今ほしいものは？ 私たちに何が出来る？ と、聞かれたらしい。母は水が出ないので水がほしい、それから食料品店にいても何もないから食料品を少し送ってくれないかと頼んでいた。こういうとき親戚とかの知り合いってとてもいい人たちだなあと思う。もともと遠くに住んでいるので疎遠になりがちだが、何か起こると真っ先に心配してくれる。遠くの親戚近くの他人とよく言うが震災時は近くの他人にもたくさんお世話になったがその人たちも被災者だった。

水も出ないしお湯も沸かせないので炊事や洗濯お風呂などに困った。水は給水車が来たとき白い大きなタンクを持って取りに行った。たくさんの人がいてみんな順番に並んで水を持っていった。その水を家に持って帰ったらすぐに電気ポットに移した。しばらく沸騰させて、水で薄めてぬるめて、タオルをぬらし、顔を拭いた。水のない生活なんてしたことがなかったので心のそこから不自由だなと思った。親戚が「水の要らないシャンプー」なるものを送ってきた。最初の方はものめずらしさで何度も使って遊んでいたがやっぱりお風呂に入っていないことには変わりがなくそのうちに飽きてお風呂入りたいなあ、と思った。あと、「六甲のおいしい水」も送ってきた。親戚は遠くに住んでいるのにその地域でも六甲の水が売られているんだなとびっくりした。なんだか逆輸入だ。

食べるものもなかった。ニュースで食料品や雑貨の棚が空になったコンビニの様子が流されていたが、近所でも実際にあのような状況だったようだ。どこの食料品店に行っても、本当に何もなかった。これから先長く生きてもきっとこんな状況にはめったにお目にかかれないうらなうと思った。最初のうちは冷蔵庫に残っていたものがあつたが3日もすればなくなってきた。時々店に行っては少しだけ残っていたおにぎりなどを買ってきて食べていた。そのうち親戚からの物資が送られてきて中に入っていたインスタント食品などを食べるようになった。

星陵高校に水をもらいに行った。なぜかはわからないけど星陵高校にはまだ水が残っている話を聞いたからだ。大きな白いポリタンクを2つ3つ持っていった。私は小さな水筒なども用意したが、そんなに欲張ろうとしないの、みんなで分け合うの、と母に言われた。同じ話を聞いたのかたくさんさんの車とたくさんさんの人で溢れ返っていた。みんな大きなポリタンクやポリバケツを抱えていて順番に並んで水もらっていた。その中でも一番驚いたのが大きなごみバケツに水を並々と注いで持ち帰る若い夫婦だった。

私は、この夫婦はきっとどんな苦境に立たされてもしぶとくがめつく生き続けるんだろうなとなんとなく思った。呆れるを通り越してもう尊敬する。みんな生きるのに必死だな、と思った。その日のうちに星陵高校の水はなくなってしまったらしい。

父が幼少時代から成人するまで住んでいたという長田区の家を見に行った。行くまでが大変だったことを覚えている。回り道の回り道でたどり着いたそのまわりは瓦礫の山で、私はここに住んでなくてよかったなと思った。3戸並んで建っている家の真ん中の家が父の昔の家だったが、父の家はまっすぐ建っていたが両側の家が父の家に寄りかかるようにしてつぶれていた。柱や枠組みがむき出しでもうほとんど家といってよいのか分からない状況になっていた。この3戸はすべてつぶされることになるだろうなという話を聞いた。まっすぐなのにつぶすのと父に聞くと父はうなずいた。父は少し寂しそうだった。

姫路のほうまでお風呂に入りに行ったら。姫路のほうはびっくりするほど何も被害がなく建物の中にいた人たちも何事もないような幸せそうな顔をしていた。そこに来ていた人たちはきれいな服を着て純粹に風呂を楽しむだけに来ていたようだ。私たちは汚れた服を着ているわけではないが気分的に沈んでいたのでもう見えただけかもしれない。何より驚いたのは同じ兵庫県内なのにこの人たちは地震などなかったかのような顔をしている。少しうらやましいなと思った。久しぶりのお風呂はうれしかったと思うがまったく記憶に残っていない。

あの地震の力はすごかったらしい。私が2年生当時明石海峡大橋は2本の支柱(?)が建てられていた。もちろん設計で2本の柱は寸分のずれもなく海中に建っていたのだが地震の揺れと地面の移動によって3メートルもずれてしまったらしい。人間がたくさんの重機を使っても出来ないようなことを地震は一晩でいとも簡単にやってのけた。それはもう人間が地震を完全に防げる手だてがないことを示していた。

学校が始まった。ひびが入っただけで全然壊れていなかった。地震などがあった場合、学校は他のどの建物よりも丈夫に頑丈に出来ているという話はウソではなかった。30年経っていても倒れないなんてすごいな、と思った。家が半壊して住めなくなってしまったらしく学校にも避難してきている人がいた。その人たちは「絵本の部屋」という低学年専用のカーペット敷きの部屋に集められていた。先生にしばらくあの部屋に本を借りに行ってもはいけません、といわれていたので近寄らないようにしていた。たまたまそばを通りかかったとき閉め切ったカーテンの中の様子が少しだけ見えた。おじさんとおばさんが暗い表情で座って話していたのを覚えている。絵本の部屋は冷暖房完備だったが暗い校舎の端っこだったので夜はとても寂しかっただろうと今になって思った。

壊れることこそなかったが、もともとそんなに新しくない学校はさらに古くなったような気がした。正門の近くの池の噴水は止まり池の鯉はじいとして動かなかった。学校全体の空気を色に例えるなら灰色だった。クラスが、元は5組まであったのに3つのクラスにまとめられた。友達とクラスが別れてしまいちょっと悲しかった。教室は元の教室ではなく、確か音楽室を使っていたと思う。悲しいことに給食がとても質素になった。おかずがなくなった。牛乳がビンから紙パックに変わった。机にわら半紙を1枚敷いて牛乳を置いて魚肉ソーセージが1本。パンはいつも出されるものよりもおいしかったからまあいい。給食は質素になったけどなんとなくその分クラスのおしゃべりの声が大きくなってにぎやかになってよかったと思う。

臨時の担任の先生は音楽の先生だった。勉強した覚えはあんまりないけれど歌をたくさん歌ったような記憶はある。明るくてとても楽しい先生だった。習った曲を今でも数曲覚えていたりする。一番印象に残ったのは、神戸市内で被災した音楽の先生が作った「幸せ運べるように」という歌だった。その作った人は何回かテレビに出ていたりして被災地の人々を元気付けたい、勇気付けたい、と言っていた。私は特にキリスト教を信じていたりすることはないのだが、幼稚園で貰った聖書を読んでいたときに「平和を創り出す人は幸いである」と書かれていたのを思い出した。

「幸せ運ぼう」という震災のことを乗せてある本の冒頭に載っているその歌はその後たびたび歌われることになった。2部合唱でとてもきれいなメロディだった。低学年のうちは主旋律のパートを歌い、慣れてきたらハモるメロディのほうを歌った。毎年地震の起きた日が近くなるとよく歌っていた。全校朝会などで歌ったときのきれいな歌声は多分忘れることが出来ないだろう。作曲者の人は自らも被災して大変なのにこんなきれいな曲を作ってすごいなあとと思った。もうひとつ、市外からのボランティアも

すごく大切だけどまずは市内からの助け合いなんだなとも思った。この曲に慰められたり元気付けられたりした人はとても多いと思う。

久しぶりに水が出たときはうれしかった。外で小さな子供たちが散水用の水道からホースをつなげて水遊びをしていた。それを見てびっくりして家に帰ってみると母がもう水を使って洗い物をしていたりした。水の出る瞬間を見ることの出来なかった私は母にどんな様子だったかを尋ねた。聞くと最初は赤錆のにごった水が出てそれからだんだん透明の水になった、ということだった。その夜はしばらくお湯が張られることのなかった風呂桶に並々とお湯を注いだ。やっぱりうちではいるお風呂はいいなあと思った。

舞子台にある友達の家が地震の揺れによって傾いてしまったらしい。物は転がるしいつ壊れるか分からないから2年の春休みに奈良のおばあちゃんの家に移すよ、伝えられた。その友達は私にとって小学校に入って初めて出来た一番仲のよかった友達だった。ほかのその辺の小学生に比べたら考えることがしっかりしていてよい姉貴分だった。物知りで活発で私にオセロや縄跳びを教えてくれたのも彼女だ。これからはずっとずっと文通とかしようね、と約束した。奈良だったらもう二度と会えないことはないかもしれない。私はその友達に折り紙で箱を作りその中に消しゴムと手紙を入れてプレゼントした。もっと気の利いたものを贈ることはできなかったのかと後からになってすごく後悔したのを覚えている。しかしまだに年賀状を交換していたりしているのでなかなかすごいと思ったりする。友情ってすごい。

彼女だけではない。地震後私の周りの友達は次々と転校していった。もともと仲の悪かった両親が地震を境にさらに夫婦仲がこじれ離婚、母親に連れられ遠くに行ってしまった友達がいた。その子は父方の祖父母によくついていたようだ。私とは学校から家に帰る道は逆だったが祖父母宅に行くときは一緒に帰ったりしていた。いつも祖父母のことをうれしそうに楽しそうに話していたことがとても印象に残っている。ある日その友達が私に聞いてよ、と話しかけてきた。昨日祖父母の家に行ったらそのいつかのことを母親に話したら母親にあの家はもう関係ないのだから寄るな、と怒鳴られたそうだ。友達は平気そうにしてまた笑いながら何かを話していたが、私は大人って勝手だなと思った。大人の問題に子供を巻き込んで、それで会いに行くなといったその子の母親はだめな人間だな、と思った。母親にとって舅と姑は血の繋がらないただの他人だが、その友達にとっては血の繋がった大切な祖父母なのだ。友達はその日もこっそり祖父母宅に行っていたようだ。そして誰にも見送られることなくひっそりと家を出ていったらしい。

地震を経験したことにより得たものはとても多いと思う。例えば以前は近隣の人たちと協力することなんて知らなかったがし、私とほとんど関わりのなかった親戚の人々が優しくしてくれたことなどである。友達はたくさん引っ越していったけどその分文通などで互いの近況を報告したり出来るようなこともあったしそのほうが以前より仲良くなったかとも思ったりもした。私は地震なんか一生あわないなんてタカをくくっていたが実際被害にあった。その後の勉強で地震は日本全体どこでもおきることで地震に遭わないことはほとんどないということを知った。だから私はこのように習ったことをたくさんの人にわかりやすく伝えていく義務があると思う。そしてもうあんなにたくさんの人が亡くならないまち作りに少しでも参加できたらなあと思った。

私の知らないところで私の知らない人たちが朝方に目覚めることなく亡くなっていった。ひとりひとは大きく取り上げられず、ただ紙芝居のように画面の変わるように編集されている画面や、「6400人」という大きな数字で報道された。もっとやりたいことがたくさんあっただろうに、もっと生きたかったと思いながら亡くなっていったのだろう。思う間もなかったかもしれない。するとあまり人生に目的を見出せていないままにだらだら生きている私の存在が申し訳なくなってきた。だから私はこの人たちから、こらお前、ちゃんとせんかい、と怒られないようにしっかり目的を持って志半ばでなくなっていく人々の分までしっかり生きていきたいと思う。

去年父の昔の家の近所に用事があって車で行くことになった。あの震災の面影はほとんど薄れていて伺えない。地下鉄の駅前の道路は広く拡張され見上げるような高い住宅がたくさん建っていた。大きなスーパーがあり人と車の往来がとても激しい。父が昔の友達の家をたくさん発見して、みんな元気でやってるのかなあ、と嬉しそうにしていた。道路わきの商店はまだ時間が早いにもかかわらずたくさんの人で賑わっていた。地震であんなに破壊されつくしてもここまで復興することが出来るなんて、私は人

間の努力と技術は本当にすごいなと思った。たくさんの真新しい家々の中に父の昔の家が建っていた場所があった。道路はきれいに舗装されて、そこにも新しい家が建てられ新しい生活が始まっていた。戸の前にはプランターが置かれ花がたくさん咲いていた。

私が書く震災体験

岸本 くるみ
神戸市兵庫区

いつだったか震災のすぐ後、誰かが私にこう言った。

「何年も生きていてもするかどうかわからない、そんなめったにない体験をこの年でしたんやね」と。そのときの自分の返答は覚えていないけれど、「ああそうですね」としか答えようがないように思ってしまう。でもその後に「これからそれをどうするの？」なんて聞かれてしまったとしたら、答え方を考えなければいけない。発信する、伝える、そういった言葉を見ても、とても自分には似合わない言葉だと思えてしかたない…そんな気分はいつまでもなのである。しかし、今までに何度かやったことのある震災体験の発表は「誰かに聞いてもらえますように」というつもりでやってきた。だから結果としては伝えたい気持ちがあるのである。文字化されるとなんとなく照れくさいだけで。きっと阪神・淡路大震災を体験した人たちは、こんな気持ちを少しでも持っているのではないだろうか。

これは授業での「長田まち歩き」でも感じたことだ。班のみんなと長田神社で話を聞こうと訪ねたときに、私は情けなくも鳩がたくさんいる境内に怖くて入ることができなかった。私は申し訳ないと思いながらも鳥居の前でみんなの帰りを待つことにした。鳥居の前にはたこ焼きやさんの屋台があった。暑い中をぼけっと突っ立っていた私は、そのおじさんにパイプイスを提供していただいていた。ドギマギしながらお礼を言った。実は嬉しくてしかたなかった。授業で来ているということを説明していくうちに、自然と話はあの震災のことになっていった。私はその方のおうちのお話をいろいろ聞かせていただいた。娘さんの心の傷が幼児返りというかたちであらわれてしまったことや、震災当時、家族のために物を得ようとあちこち動き回ったお話などを。いくら「授業で」とはいえ、ほんの数分前に初めて顔を見たような私にこんなにも丁寧にお話してくださったことに感動し、同時に驚いた。

今、考えてみる。もし私が誰かに震災のことを尋ねられたとしたら？私はきっと自分の体験をできるだけ話さだろう。聞かれたら、素直に自分の中にしまっている記憶の箱を取り出して蓋を開ける。別になんのためらいもなく。…震災体験を話すとき私が一番考えてしまうところは、「同じく震災を体験した人が私の話をどう思うだろう」というところである。もっと震災が辛い、いたいものである人もたくさんいる、なのに自分が人前で話していいのだろうかという想いが消えなかった。でもそこを何度考えてみても、これが自分の体験したことで、自分の体験はこれしかないということに行き着くほかなかった。

私が最初に感じたのは、あのどこか深いところから響いてくる音だった。文字で表すと「ゴゴゴゴ」という感じだ。何か恐ろしいものが迫ってくると思った。それからすぐにきた揺れは、何か信じられないような力に襲われているようだった。今でも私は、夜中に音の大きいバイクやトラックなどがたてる音を聞くと体に少しの緊張がはしる。あの時の音ではないかと思うからだ。地震がやってくるのではないかと。そして当時の私は頭からかぶった毛布の中でその音を聞いた。

部屋の電灯がギシギシと音をたてて、激しく揺さぶられていることを知らせてきた。何か物が倒れる音、落ちる音もしていたはずだが、食器が床にぶつけられる甲高い音の他はあのゴゴゴの音に掻き消された。隣で寝ていた母が私の名前を呼ぶ声がした。自分が声を出したかどうかかわからない。いつ目を覚ましたかも記憶にない。

揺れがいったんおさまり、ゴゴゴの音が少しずつ遠ざかっていった。私は自分の毛布の上に何か重いものが乗っかってきていることに気が付いた。それはテレビや本、電灯も落ちてきていた。幸い足元だったのでケガはなかった。「大丈夫？」と母の声と母が寝床から起きだす心配がした。私は何がおこったのかわかっていなかったのも、「毛布をでると危ない」と思い込んで動けなかった。母は他の部屋で寝ている兄と姉の様子を見にいくのだったが、毛布からでるのもいやで、母が隣からいなくなるのもいやだった私は「いやだ！」と声をあげながら母を追った。リビングのソファの上に私を避難させ、母は向かい側にあるそれぞれの部屋の兄と姉を呼んだ。二人とも無事だった。しかしほとんどの食器が床で破片になっていた。とてもじゃないがスリッパなしでは歩けない。

それをなんとか通り過ぎ玄関のドアを開けてマンションの廊下にでると、同じ階に住む人たちも外へ出てきていた。いつもはついている蛍光灯も消えた暗い廊下に、互いの懐中電灯の灯りがちらついた。その灯りは私に安心をくれた。真っ暗な世界に私たち家族だけが取り残されたのではないか、なんて思っていたからである。お互いに声をかけて、階段で一階におりた。そしてマンション一階の管理人室に避難し、そこで夜明けを待つことになった。いない人がいると誰かが見にいたりもしていたようだった。

た。これを思い返すと、同じマンションに住む人同士の仲がよかったことをあらためて感じる。このマンションは何年か前に引っ越したのだが、これほど近所の方々とは親しくお付き合いできていない。あいさつ程度のお付き合いなのである。防災の勉強で「近所づきあいは大切」ということはわかっている。でもなかなか難しい。いや難しく考えることでもないのかもしれないけれど。あのマンションは私が生まれたときから住んでいたところだからとか、あの日あの時だったからということもあるのだろうが。

そしてその管理人室には黒い大きなラジオから音が流れた。そばの部屋のおじさんが持ってきていたものだった。当時小学二年だった私は、そのとき初めてきちんとラジオ放送というものを聞いたのだと思う。震度がどうかということとは当然わからなかったが、自分たちの住む神戸で地震が起こったということを知ってもらった。ノイズ混じりな男の人の声がただ繰り返し原稿を読み上げていた。バックに音楽もない。もちろんこんな非常時にそんなことがあるわけないのだが。でもこの放送のせいか、私にとってしばらくラジオ放送とはそっけない、つまらない、難しいものであった。

ようやく待ち焦がれた日が昇り、じっと待つだけだった管理人室に動きが見え始めた。すると様子を急に外へ出た人が「隣の隣から火がでてる！」と言っていた。それを聞いて不安になった。私の住んでいたマンションは上り坂の上に建っていて、前は大きい公園が広がっている。そのためこのときの私はまだ街の様子を知らない。とにかく部屋へいこうと、みんなと一緒に階段をあがった。そのとき、またゴォッと揺れがきた。私は震えながらそばにいた人にしがみついた。なかなか遠くへと去ってくれない余震に、私はいつも母のそばを離れられなかった。「またゆれてるね」といいながら寝床で動じずにいられるようになったのはこの後のいつごろからだろうか。

部屋ではさっき起こったことは夢ではないんだよ、ということをつきつけられるような光景が私を待っていた。マンション自体はひびが入ったくらいでほとんど無事だったのだが、タンスが倒れている。しかもタンスは横に転がったとしか思えない倒れ方をしていて、転がったときに隣のもう一つのタンスに当たったのか、穴があいていた。テレビも落ちていたし、とにかくめちゃくちゃということばがぴったりだった。そりゃあさっき部屋を出たときもこの状態だったのだが、日の光によってまじまじとこの様子を見ることができてしまった。水もガスも断たれて機能しない台所は、昨日の夕飯のメニューだったカニ鍋の残り汁が散乱しており、いくらふいてもカニの生臭さが残っていた。私の寝ていた毛布の上には、そばに掛けてあったものを全部巻き込んだ状態で電灯が落ちてきていた。そのせいか埃が目立った。お気に入りだったかばんもそれらの下敷きになっていた。マスコットの鼻が汚れていた。そのかばんは現在姪っ子が背負っているが、今でもその汚れがうっすらと残っている。

少しでも片付けようと、換気のために窓も玄関のドアも全開にされた。そんな部屋の中を一月の風は悠々と吹き抜けていった。

そしてこの日私が初めて口にしたのは、イワシの缶詰だった。兄が自転車で駆け回って買ってきたものらしかった。ちなみにこの頃の我が家のあしであったのは姉の原付と兄の自転車だった。当時姉と兄は高校生。一人で動けなかったのは私だけだったのだ。もちろん電気の入らないコタツに入って缶詰を開けた。缶詰があたたかいはずもなかったが、独特の濃い味が口の中に染み入るようだった。

その日の夜に西区に住む親戚が車で迎えに来てくれた。昼間、公衆電話から連絡をとることができたのだ。西区の方がもっとすごいことになっているのではないかとかけたらほとんど被害はなかったという。このときの公衆電話には人が列を作っていたが回線は頼りなく、自分の番が回ってきたらつながらなくなっていたということもあったのだそうだ。今ならほとんどの人が携帯電話をもっているが、あの状況はどうかわるのだろうか。

車と迎えに来てくれたみんなの顔を見て、本当に安心した。連絡がとれなければ、家のそばの高校へ避難する予定だった。私はそれも怖がっていたため、「助かった」という想いだっただろう。

普段なら30分もかからない道のりが、回り道をしたりしたのかひどく時間がかかった気がした。車の中から、私は大きな火をたくさん見た。家から坂を下った通りのあちこちから火があがっていた。火災、という言葉が当時の私は知らない。車の窓を開けると、目の前に見える火の温度が伝わってきた。いつもの通学路はもういつものものではなくなっていた。歩道の上にはたくさんの人が立っていた。家を見ていたのだろうか、燃えている家を囲むようにして立っていた。私には周りが冷静だったという印象がある。

親戚の家までの途中、一度コンビニによった。私の記憶にはなかったが、コンビニにはほとんどのものがなかったという。この日、他のスーパーなどでも物をもとめて並ぶ人がたくさんいたと後で知った。

コンビニからまた出発するときに、私は窓の外に浮かぶ月に気づいた。どっぴりと赤みを含んで見える月だった。本当はオレンジがかった卵の黄身のような色だっただろうが、私の記憶の中には「赤い」

という言葉が似合うように記憶されている。この日から私はこの「赤っぽい月」を見るたび不安になっていた。今夜は地震が起きるのではないかと、その夜はなかなか寝付けずに心配していた。だがこの予想は今のところ当たったことはなさそうだ。

そうしてあの生臭い台所から発掘されたちくわなどをかじるうちに、西区のニュータウンにある親戚の家へ運んでもらえた。家々から灯りがもれていることに驚いて、街の灯に安心感を覚えた。家へ入れてもらおうと、電気がついていて、テレビもだ。コタツもあたたかで、蛇口をひねれば水も出た。あたたかい食事でもらえた。こんなに電気やライフラインをありがたく思ったことはない。こんなに電気に感動したことも。

こうして私たち家族は、自宅の電気が復旧する一ヶ月近くを祖母の家の二階においてもらうことになった。

家も家族も無事だったと書いたが、私たちは家族の一員を失った。この日、夜が明けてからマンションの外の様子を見に行った人が見つけたのは火事ではなかったのだ。「駐車場に猫がおる！」それを聞いて外に出ると、うちの猫がコンクリートの地面に横たわっていた。部屋から驚いて飛び出して、落ちてしまったのではないかと。にゃあにゃあとうめいていた。普段はまったく鳴き声をださないのに、このときはずっと鳴きごえをあげていた。

母と姉は部屋を片付ける前に、猫を動物病院まで連れて行くことにした。マンションの下階に住む人が貸してくれたタオルをしいたかごに猫をいれて歩いていった。もちろん私もついていった。ところどころ地面にひびが入っているところがあった。家がつぶれてしまっている家も見えた。角をまがろうとしたところでは建物が燃えていて、その前ではみんながバケツリレーをしていた。その隣では女の人が泣き崩れていた。そんな道をずっと歩いて病院へいった。小さな犬猫病院の中もめちゃくちゃだった。でも先生は注射を一本、打ってくれた。先生は隣の家の人を助けに行っていたところを帰ってきて、その注射を打ってくれたそうだ。

来た道を引き返して、帰宅。部屋を片付けようとする間も見えていたが、その日の昼に猫は動かなくなってしまった。姉が涙を流していた。私は自分が泣いた記憶がない。でも悲しかったのは確かだった。かごの中で、眠るように体をまるめていた。顔も昼寝をするときと変わらなかった。でも次にさわったときには冷たくて、かたかった。

猫も一緒に親戚の家へ行行ったけれど、その次の日あたりにはペットのお葬式をしている業者の人の車に引き取られていってしまった。

あの日病院から猫を連れて家へ帰った私たちを、買い込んだと思われる食べ物や日用品が待っていた。それは心配して駆けつけた父が置いていってくれたものだった。近所の人に無事であることを聞いて安心したというメモが荷物と一緒に残っていた。

祖母の家にいる間、私はいとこたちも通っている近くの学校へ行くことになった。数日で母や姉は自宅に戻ったり、こちらへ来たりしていた。ちなみに電車が家の最寄駅から三つ前ほどでとまってしまっていたため、そこから家まで歩かなければならなかったという。私は家から学校に行くための道具はほとんど何も持ってきていなかったが、「救援物資」というものをたくさんもらうことができた。広くてじゅうたん引きの図書室に、たくさん物が広げられていた。学校の体操服、文房具、ランドセルまでもらった。わけがわからずに物をもらってきた私に、これは救援物資といって全国のいろんなところからいろいろな人が困っている私たちを送ってくれたものであることを教えてくれたのは、一ヶ月後くらいに帰った自分の小学校の先生だった。ノートや鉛筆、筆箱に鞆といろいろなものをもらった。自宅のほうの学校では特によく配られた。みんなに配られるものやほしい人だけがもらうもの、いろいろあった。どこのだれなのかわからない人の名前入りの鉛筆をもっているのも珍しくなかった。でも本当にありがたかったなあと思う。誰かが送ってくれたものが、直に今も私の手元に残っているのだから。

自宅の近くの高校ではよく食べ物を配っていた。ボランティアというのできている人たちが、丁寧に応答してくれていた。避難している人たちに配った食べ物のあまりは校門の前に積んで、近所の人たちが持っていけるようになっていた。よく母とそれをのぞいてはパンなどをもらってきたことを思い出す。そういえばあのころは、友達との間でも救援物資という言葉が当り前のように飛び交っていたようだ。きちんと意味をわかって使っていたのかはわからない。

一ヶ月弱という超短期間ながらも人生初の転校をした私だが、転校当日早速怒っていた。理由はクラスの男の子が「なんで地震、もっとこっちにこんかったんやろ。学校休みになったのになあ」というようなことを言ったからであった。きっと彼にしてみれば、大雨で警報が出て学校が休みになってラッキーな感覚だったのだろう。小学校二年生。でも私も同い年であって、そんなことを冷静に考えるわけも

なかった。私はその男の子に向かって、「自分の家がそうになったらどうするんよ」のようなことを言っていたのだと思う。その子がこれをどう思ったのかなんて知るはずもない。しかしこの学校には数年後に私が文集の作文に書くほど親切にしてくれた女の子もいたのだった。

学校以外の時にはいどこに遊んでもらうか、テレビを見ていることが多かった。震災後のテレビはいつも神戸のことを言っていたからだ。「ボランティア」という言葉もよく流れていた気がする。しかし自分が知っているはずの地名をみても、そこは知らない景色と化していることもよくあった。テレビに映る建物がどこにあるどんなもので、どう壊れてしまったかを母や誰かに説明してもらわなくてはよくわかっていなかった。近所のスーパーが傾いている、こっちの建物は二階建てだったのに、一階建てになっている…という風に。

この年から学校で震災を思い出した作文を書いたりする機会が何度もあり、よく冊子もつくられていた。私たちが震災のことを勉強する機会もあった。道德の時間などに震災体験の載った冊子をめくるのである。そこから読み取れることや感想を先生に提出し、発表する。その冊子で見た神戸の写真はあのころの私にとってまったく新しい情報だった。あらためて驚いた。震災を体験していても、自分がその目で見たものではなかったからだった。当時テレビでは何度もみたが、あの倒壊した高速道路などを私は実際に見ていない。つぶれてしまった家や燃えている家はいくつも見たけれど、それを写真として見たことはめったにない。

あるとき、いつものように祖母の家でテレビを見ていた。画面に映っているのは、青だったか緑だったかの背景色に亡くなった方の名前が白い文字で映し出されていくというものだった。震災直後から毎日のように放送されていた画面で、そこに見覚えのある名前を見た。同級生の子の名前だった。何度か一緒に遊んだことがあり、彼の作った替え歌はなぜか今でも思い出せる。後日小学校の先生からの電話で、確かにあの名前がその子だったことを知らされた。

震災のときに一番大変だった人の中に先生があがると思う。そりゃあみんながそれぞれに大変だったときなのだが。普段ならばそれぞれの格好をしている先生だが、震災時はみんな同じようにジャージをはいて、厚手のジャケットを羽織って、リュックを背負っていた…ように思う。色はたいてい紺色だった。高校の授業で避難所のお話を聞いてやっぱり大変だったのだと知る。あのとき先生から何度か電話をもらったし、物資の分配などもやっていたそうである。それにくわえてまだ避難してきている人が残る校舎で授業してくれていたのだ。ちなみにこの頃の学校のイメージは、私の記憶の中では埃っぽい灰色がかった校舎である。そんな校舎の前で、そんな格好をしている先生たちの前に並んで話を聞く私たちの姿を撮りにきたのか、新聞社の人がよく来ていたようだった。

二月中旬、あの日から一ヶ月ほどたって私は電気が復旧したので自宅へ戻った。ちなみに自分の誕生日だった。同時に学校にも戻ることになった。学校では私のようにどこかへ避難して帰らない子もたくさんいた。徐々にメンバーが増えていったが、そのまま転校してしまった子もいる。そして私は校舎に驚いた。門を入ると、二宮金次郎像が傾いていた。中庭の池にはひびがあった。校舎はまっすぐ建っていたが、廊下にはまだまだ布団やダンボールがしいてあった。もちろん知らない人が寝ている、生活の場となっているわけだった。まさか学校でこんな状況にでくわすなんて、考えたこともなかった。運動場では炊き出しの配給があったり、給水車がとまっていたりした。

提供されている教室もまだまだたくさんあったうえに、合併したばかりの私たちの小学校では新校舎の建設が滞っていた。なので、しばらくしてから私達は公園のプレハブ校舎に移ることになった。その公園とは私のマンションの前にあるあの公園だったので、実は私はすごく嬉しかった。なぜなら自分のマンションは校区の端っこにあったため、学校のほうから近くへやってきてくれるなんて夢にまでみたことだったのである。なんて不謹慎にも喜んでしまったことは実は他にもある。それは簡易給食が始まったことだった。簡易給食とは、普通の給食のようにあたたかいおかずがなく、パンとパックの牛乳におかずがソーセージやチーズなど簡易なものだけなのだ。当時から食べるものの好き嫌いが多かった私はこの一時期の簡易給食を密かに喜んでいたりした。しかし学校給食で瓶の牛乳を飲むことは永遠のお別れになってしまったことは悲しかった。どれもしようもないことではあるが、当時の私にとってはなかなかの大問題であった。

当時学校で嬉しかったことというと、先ほどの救援物資等があがる。他には色々な人からもらった励ましの言葉だろうか。たしか学校に手紙をもらったこともあったし、コンサートに来てくれた方々もいた。オリックスの選手のサインが配られたこともあった。たくさんの人がこの震災のことを知っていること、私たちのことを考えてくれている人がいることを感じたものだった。

学校から家まではしばらくの間集団下校となっていた。全学年が地域ごとに分かれた班で、各班に先

生が一人ずつついていて。しかもいつだったか、学校でみんなにヘルメットが配られた。「登下校はかならずそれをかぶりましょう」と言われたもので、ほんの少しの疑問を感じながらもそれをかぶって学校へ通っていた。ヘルメットは黄色で、いつからかそれにシールを貼ったりしてくるのがちょっとした流行になっていたりもしていた。

そうやって学校へ行くこと以外にも、当時私には日課があった。それは夜な夜な母と二人で水を汲みに行くことだった。地面から何本か蛇口が突き出ている臨時の給水場のようなところまで五分ほどかけて歩く。母が灯油を入れるようなポリタンクを小さな台車で引っ張っているの、私はペットボトルを持たなければいけなかった。街灯が照らすあの道を母と二人で何度も歩いた。その場面が急に私の心に「さびしい」と訴えてくるときがあり、私はよく歩きながら泣いていた。そんな私に母が提案してくれたのは、リュックサックにペットボトルを入れて背負うことだった。するとずっと楽に水を運ぶことができ、なぜか自分も「もっとたくさん水をくんでくる！」とやる気も出していた。泣きながら水を汲みに行ったことは私にとって一生の思い出の一つだ。ただ水を汲みに行ったことも、給水場で人と出会ったことも、冬の澄んだ空気のなかで母とたくさん話をしながら歩いたことも、どれも忘れられない。…できればもう体験することがないことを希望するが、まあそうなったら私はペットボトル入りリュックサックを背負ってポリタンクを引っ張るだろう。できれば誰かと一緒に行きたいものだ。

水道が復旧する三月中ごろまでこの水汲みは続いたわけだが、ごくごくまれにマンションの下に給水車が止まることがあった。その知らせを聞くと、私はマンションの廊下にやかましく下駄の音を響かせて走り回っていた。「水が来た！」と、各部屋のインターホンを押して知らせにいったのだった。そうして何かお手伝いできていると感じることが嬉しかったのだ。ただ単に。そういった行動も今思い返すと直視しにくい部分もあったりするが。

そのころ学校のトイレは手で水を汲むようになっていた。トイレに入ると個室の前にプラスチック製の巨大なおけのようなものが置いてあり、それをそばにある小さなおけでくんで流す仕組みになっていた。当時は知らなかったがプールや給水車までその水を汲みに行くのも当番制になっていたようだ。ちなみに家のトイレでは、便器の隣にペットボトルかポリタンクが常に置いてあった。節水のために使う回数を減らさないといけないということも頭にあった気がする。

こうした経験から、先ほども書いたことだが本当にライフライン（こう呼ぶということと知ったのも最近だけれど）をありがたく感じた。私が震災を体験して学んだことでこれが一番大きいかもしれない。これがなければ、私は一生「蛇口をひねれば水がでることが当然」だと思って生きていたことだろう。そしてこれがわかったことで、自分の周りにはたくさんの人がいて、たくさんの人の支えがあってその支えがなければ、今の「当たり前」の生活は手に入らないことを知ったのだ。

ところでプレハブ校舎とお別れして元の校舎へまた通うようになってからも、街の様子はなかなか回復していなかった。通学路には空き地がたくさんできており、空き地には瓦礫やガラス片が残っていた。ずいぶんと空白の多くなった街は、写真でしか見たことのない戦後の街の様子に似ているように見えた。

数年前にそのとおりを訪れてみた。引っ越したために実に五年以上歩いていなかったのだが、ずいぶんと変わっている。震災直後より震災前が見えないように思えた。引っ越すまで長い間空き地になっていたところも家や商店になっているし、どの家もきれいになって、道の幅が広がっている。歩道には震災のことに触れているモニュメントがあり、その横に小さなせせらぎが作られていた。公園が増えていた。これを見た私は少しの寂しさを覚えた。本当ならここでは復興したことを喜ぶべきだろうが、慣れ親しんでいたはずの街に空白の時間があることを感じずにはいられなかったのである。でも自分の知らない間ここまで姿を変えた街の背景には、これだけの成果を生んだまちの人たちの力があることを感じる。人間の強いところを見せてもらえた気分にもなれるのだ。

私が見ていた狭い範囲で大きく変わったというと、マンションの前の公園もそうだった。ジョギングコースもあるようなその広い公園の広場には、震災直後いっせいに仮設住宅というものが立ち並んだ。いつも遊んでいた遊具が、人様の家に囲まれてしまっていた。「仮設の前で遊んだら怒られる」なんて周りから聞いていたので、次第に公園で遊ぶ回数は減っていった。震災があった年かその次の年の夏休みに震災の前までそうしていたように姉たちと公園で花火をした。仮設住宅の方に怒られた…らしい。あの頃の私には「なんで自分たちの遊び場で怒られるん？」と、不満だけがあった。「しょうがない」といわれて頷いてはいたが、自分の言い分だけを大切にしていた。それは小学校低学年、仮設に住んでいる知り合いもいなかった私にとって、仮設に住んでいる人はみんな知らない人たちだったのだ。それから九年、仮設での生活だったという人の話をいくつも聞く機会があった。自分の住んでいたところに住めなかったり、意外と壁が薄くて不快だったり…といった問題も聞いた。そんな今ではわかる。とい

うかわからないといけないだろう。自分がただ騒いで遊ぶことがどんなに相手にとってはどんなことかが。自分の思いをどこかに捨て去って、相手の意見を素直に受け入れないといけないとは言わないが、それこそ「相手の立場にたって考えましょう」である。それができずに花火をしたり、勝手に自分のほうが被害者だと思ったりしていた当時の自分には、目をそらして軽く両手をあげておてあげポーズである。これも私にとっての大きな震災の教訓だろう。

さてさて、ここから先（家から学校へ通うようになったくらいから）の記憶はどうやら消えてしまっているらしい。震災の場面が終わるよーとフェードアウトしていったかのように。けれど水が復旧したのが嬉しくてやたら蛇口をひねってみたりしていたことや、水道の復旧がうちよりずいぶん早かった友達の家よりガスが早く復旧して自慢していたしょうもない思い出、「がんばろうや神戸」のようなテーマのコンサートで感動したこと…など覚えていることはいくつもある。でもそれはいつてみれば細切れのフィルムのように場面だけしか思い出せないのである。おまけにそのパーツがほとんど足りないので前後が繋がらないのだからたちが悪い。その時点では家のライフラインもきちんと回復していないのに、自分の中ではもうおしまいなのか？という疑問が残るところなのだがしかたがない。

ついでにいうと、私が震災体験を思い出すときには二種類の場面が思い浮かぶ。一つは自分が見たもののそのもので、もう一つはなぜか当時の自分を外から見ている場面である。外から自分の姿を見ることが、おそらく私にはできないはずだ。なのできっとそれはイメージから自分の中でその場面を勝手に作りあげてしまっているということになる。だから今まで書いた記憶が全部本当のことだったかどうかは怪しい。

今でも復興しきれない地域はあるだろう。目に見えないものでも。そういえば震災後に建てた新しい家のお金のことなんかこのあいだ話に聞いた。人の心に残るものもそう。すると「復興」という言葉が示すのはなんだろうと考え込んでしまう。辞書によると「一度衰えたものがもう一度盛んになること」なのだそう。が、この言葉を思い、使うタイミングはまさに人それぞれなのだろうなあとぼんやり考える。なんせ、この震災を体験した人、知った人の数だけそれぞれに記憶があり、ストーリーなるものがあるのだから。震災体験が本当にそれぞれなのだと思えたのは、高校での授業などで聞く機会のあったお話や、本を調べたことなどからだった。それらは私の興味をひき、私の狭い視野では見えなかったあの当時の様子を見せてくれる。そしてこの「それぞれ」ということばが、私のこれだけしかない体験を發表することを肯定してくれているように思えるのだ。

こうして授業の中で文章をまとめている間にも、意外とクラスの間みんなも当時の記憶の箱をあさりながら震災の話で盛り上がっていたりする。自分の小学校での話だとか、食器棚の話一つでもずいぶんお花が咲くものなのだ。実際に私も「自分のところはこうだった！」と話しに入っているのだから。これでもう「ああ、これでいいんだ」と思える。こうして震災を思うことに重いか軽いかの基準があるのかはわからない。けれどあの頃の私の震災体験を増やすことはできない。でも誰かの話を聞くことはできる、そしてもっと考えることが見えようになることもある。それができればいいのだ、と。

それにこうして振り返ることは、それこそ最初に書いた「めったにない体験」を私がして、その体験をした人たちの中に一応でも私がいることは事実なのだと再認識できる。そのうえ前よりも思ったことが増えていたら、自分の考えが少し広がったかなとも思えるのだ。

偶然と変貌

黒田 浩志
神戸市中央区

1. 震災前の出来事

阪神・淡路大震災のあった小学2年生は自分の人生が変わるほど目まぐるしい1年であった。まずは4月初旬、1年間だけ通っていた山手小学校が閉校し、南側の校区だった下山手小学校と合併、山の手小学校に移った。人口のドーナツ化現象と旧市街地の高齢化による児童の減少の典型的な例のようだった。1年生のころからテレビ朝会（雨天時に教室で行われていた朝会）で合併を告知され、新校舎の完成図が放送されたり、名称募集や校章募集も行われたりした。懐かしの焼却炉や二宮金次郎像が立ち、教室の名称が木で書かれ、教室の半分以上が準備室や特別教室となっていたオンボロの校舎とも、3月の閉校式でお別れとなった。学校は開校式が行われ、真新しい校舎で幼稚園時代の同級生との再会も随所で見られた。開校記念のムードが冷めやらない2週間後の4月19日、家にいるはずの母がいなかった。数日前に言われていたことを思い出し、そのまま家の近くにあった掖済会病院へ走ると、いつもの病棟にいなかった。看護婦さんに所在を尋ねると、病棟の個室にいた。そこでは、半年くらい前からがんに冒されていた父が危篤状態にいた。心拍数は刻一刻と下がり、その日の19時45分父が息を引き取った。それから震災が起こる前までは、詳しくはとも言えないが、今まで体験したことのない生活が続いた。しかしその2つの出来事が震災時に何かと関わってくるとは、震災時に思いもしなかった一。

2. 1995年1月17日 火曜日

平成7年1月16日、成人の日（1月15日）が日曜日だったため振替休日となり、第2土曜日（当時は第2土曜のみ休業日だった）と続いて3連休となった。当時は小学生だったので次の火曜日の時間割を合わせ、ランドセルを玄関に置き、いつもより遅めに就寝したように思う。

1月17日午前5時46分、地震で目を覚ました。何か様子がおかしかった。ゴースという音が至る所から聞こえる。自分の視界にあるものが揺れている。母が布団の中に潜るように指示した。やっと自分が地震に遭っていることに気がついた。今まで地震というものの存在は知っているものの、体験はしたことがなかった。しかも、「神戸には地震はおきないから大丈夫」と物心ついたころから両親に言われていたからだ。やがて地震はおさまった。実際は20～30秒ほどの揺れだったらしいが、自分の中ではとっても長く感じられた。

地震がおさまり、布団から顔を出すとタンスの上にあったものがほとんど落ちていた。タンスから落ちてあったものの中には父の好きだった日本人形がガラスケースの中に置かれていたが、落ちてはきたもののガラスも割れずに済んでいた。たんすの上には父の仏壇も置いてありその仏壇も落ちてきたが、自分と母を覆うような形で倒れていた。しかも、奇跡的に家具類はまったく倒れていなかった。亡くなくても一家の大黒柱として、父が守っていてくれたのだろうか。ベランダのほうを見ると、時間的に暗いはずなのにとても明るかった。この明るさは時間が経つごとにまた暗くなっていったのを覚えている。

しかしその直後、また数秒間揺れた。余震が起こったようである。母は暫く布団の中にいるように言った。6時ごろになり母が起き、玄関の下駄箱の上にあったラジオとサイレンがついた懐中電灯を持ってきた。この懐中電灯は、実は父が買ってきたものであった。ラジオのスイッチを付け、自分が当時唯一知っていたダイヤルだった1008KHzのABCに合わせた。今思うと神戸にラジオ関西があるにも関わらずABCに合わせたことが悔やまれる。何故かという、大阪のABCはあの地震を直後は震度4ないし5ぐらいではと伝えていた。ちなみにラジオ関西は5時45分から体操の録音テープを流していたが約10分間停波し、6時頃から次の番組のDJが地震の情報を伝えたという事を読んだことがある。地元でない分、情報が遅かったようだ。覚え違いかもしれないが、その後すぐ震度6に変わったように思う。しかしこの時、家の外へ出なかったため、ほかの町の様子がまったく見当がつかなかった。まさか自分の家の外が大きく変貌しているとは一。

起床したが、しばらくは放心状態だったように思う。電気やガス、水道を付けたが、なぜか水道はすぐに復旧した。幸いマンションの貯水槽や上水道に被害がなかったためらしい。7時半ごろから家の片

づけを始めた。その時はまだ学校があるのではないかという事を思ってしまった。しかし、家の状態を見ると何故かどうでもよくなってしまった。

12時過ぎ、朝からスイッチをつけっぱなしにしていた玄関の電気がいきなり付いた。電気が復旧したようだ。しかし母も自分も、北海道の奥尻島のように大事にはなっていないだろうと、普通に昼の番組を放送しているのだらうと期待してテレビをつけた。今考えるとくそが付くほどまったく不謹慎な話だ。しかし、どのチャンネルを付けても在京テレビ局の報道センターにキャスターとそれなりの学者が座っている映像しか映っていない。すぐに神戸の被害状況の様子が映し出された。地震から6時間後、ようやく事の重大さに気がついた。映し出されるのは、いまだに阪神・淡路大震災の映像として頻繁に使われる東灘区の阪神高速道路3号神戸線の倒壊現場や、長田区の家屋倒壊現場・火災現場だった。特に今では流されることは少なくなったが、国道28号線の御蔵菅原バス停やバス停付近が印象に残っている。この付近はよく父と生前、何度もバスで通ったところだったからである。物心付いたときから父といろんなところに連れて行ってもらい、この神戸というまち全体が好きな自分にとって、この先どうなるのか、もう以前のようなまちにはならないのではないかと思います、とても悲しく思った。震源は淡路島北部。神戸で最大震度6、マグニチュード7.2。このあとこの数値はどちらも変わることになるが――。

東京の民放テレビ局はニュースやワイドショー以外の番組が休止したが、普段どおりCMだけは放送されているようだった。しかし、近畿地方はCMを一本も流さず、在阪テレビ局の報道センターから被害の詳細を伝えていた。物心ついていないので詳しくはわからないが、昭和天皇崩御以来ではないだろうか。CMを流さないという時点で、自分にはあまり被害がないにも関わらず、何故か不安感が募った。

食事は冷蔵庫や冷凍庫にあった残り物や、冷凍庫に入っていた大量購入していたアイスキャンデーなどを食べ、あまりいい食事ではなかったが、空腹にはならなかったように覚えている。ちなみにこのアイスキャンデーも倒壊したそごうデパートの地下で買ったものだった。その日は何度も起こる余震のなか、家の中が安全だろうと外へは出ずに1日中テレビに釘付けになっていた。その時学者が言っていた「また近いうちに大地震は起こるかもしれない」という言葉が耳から離れなかった…。

3. 一夜明けて――

1月18日、寝て少し気が治まったが、日常茶飯事のように余震が続き、少し身震いしたような気がした。記憶違いかもしれないが、震度1程度ではテレビもいちいち地震速報も流さなかったような気がする。あまりにも多いために、だんだんとおおよその震度がわかるようにもなった。

18日かその翌日に、ようやく外へ出ることにした。当然、周りの様子がおかしい。マンションの住民の多数が向かいの中華同文学校へ避難しており、その旨を伝える張り紙が各部屋のドアに張られていた。その後わかったことだが、マンションのある7丁目住民は山の手小学校に避難することになっていたようだ。家の前が丁目の境であるため仕方ないことかもしれないが…。海側へ行くと、これも父とよく入っていた喫茶ドルマンが1階のテナントで入る兵庫県薬剤師会館があるのだが、薬剤師会館は道を塞ぎ向かいのLPガススタンドを覆うように横倒しになっていた。すぐに解体され、何年後かに再建されたが、喫茶店の姿はなかった。当時、家の近くにあったコンビニへ行くと、店内は真っ暗で商品がほとんどなく、食べ物もほとんどなかったように思う。レジも使えず、電卓で計算していた。何故かスポーツ新聞を購入したように覚えている。もう1件あったので行ってみると、シャッターが半分閉まり、列が出来ていた。中へ入るとやはり食べ物はほとんどなく、菓子しかなかったが、それでも他の客が買いあさっていたのと親に言われたため、菓子を大量に購入したのを覚えている。また、家の近くの自販機はまるで当時の正月のようにすべての商品が「売切」になり、家の前にある一方通行を逆走する車の姿も何故か多く見られた。

家に帰ってテレビをつけるとどこの局も相変わらず昨日と同じく報道特番だったが、大阪ガスのお願いが各局で流れていた。ガス栓の開閉のお願いだったようだが、「ガスが復旧するかもしれない」と言っていたのですぐに実行した。でもやはり、復旧することはなかった。

その次の日だったのだろうか、あまり行くことのなかった家の東へ歩くことにしたが、あまり被害を受けている様子ではなかった。中山手3丁目のコープ方面へ行くと、近くに住んでいながら今まで知らなかった商店街があった。コープや近隣店舗はやはり閉まっていたが、何故か精肉店だけ開いていた。しかもそこでは焼肉が売られていた。といっても薄切り肉みたいな肉を炒めただけで、特に家にそれ以外の食材があるということではなかったが、それでもいいかと購入し、家に帰った。今考えると震災直後に焼肉を食べられたのは貴重なことで、当時小学2年生だったので腹持ちは断然よかったように思う。その後、何故か姫路ナンバーをつけた移動販売のトラックがやってきたので、自分と母は走って追っかけ

た。そこには野菜や肉、卵、うどんの乾麺など結構色々なものを売っており、震災から暫らくの間来ていたように思う。しかしその数年後とあるテレビニュースで、そのトラックで来ていた業者が宗教団体であることを知り、何かは詳しく覚えていないが訴えられていたことを覚えている。震災前はそのトラックを見なかったことから、震災をきっかけにお互い様ということに来ていたのだろうか。

その後買い物は湊川か三宮へ出るようになった。湊川商店街も一部だが営業していた。三宮へ行くと、交通センターも、阪急の駅ビルも、そごうも、ダイエーも、国際会館や新聞会館も・・・震災前によく連れて行ってもらったところは殆ど倒壊した。幸いさんちかだけ通れるようになっていた。JR三ノ宮駅の東にあった「プランタンさんのみや」は臨時でポートアイランドにあったKou'sの支店になっていた。本当は会員制だったが、震災直後は関係なしに営業していた。このKou'sは、2ヶ月くらいあとにダイエーになり、震災直後から現在まで大変重宝している。

また、サンテレビを見ると、2～3時間に1回くらいしか震災情報を放送しておらず、時間外のときはポートアイランドからの映像を流していたが、その時、被災した学校からの生徒向けの情報が延々流れていた。公立小学校からの情報が1本もないにもかかわらず、情報が1周するまで見続けていたように覚えている。その時は学校の再開情報は届いていなかった。

4. ガスが戻るまで

1週間ぐらいしてもまだガスは復旧せず、食事を作ったりお湯を沸かししたりするのは卓上コンロに頼っていた。当然お風呂も入れず、卓上コンロで湯を沸かし、体を洗うという生活が続いていた。

震災直後から仮設住宅撤去までは、テレビのCMでしか見たことがなかった、プロパンガスボンベを多く見かけた。炊き出しを行うにも必ず使われていたからだ。特に印象に残っているのは、南京街が震災1週間後ぐらいですぐに復旧したことである。ラーメンや豚まんなどを、一部損壊している店舗の前で、屋台形式でいつもの値段で出していた。これらの食べ物が温かかったのが冬場にはとてもうれしかった。この事は後にも「助かった」という声を何かのメディアで見かけた。今でも屋台は名物として出ているようだ。

湊川商店街のとある店で買い物をしているとき、その店で流れていたラジオから、「明日、しあわせの村で風呂を2000人に開放する」という情報が流れていた。このしあわせの村も父に生前連れて行ってもらったところである。翌日、臨時ダイヤで動いていたバスに乗り現地へ向かったが、行ったときにはもう整理券の配布が終了しており、泣く泣く帰ってきたことを今でも覚えている。

その後も風呂だけのためにしあわせの村へ向かう日々が続いた。学校があっても午後から行くこともあった。今考えるととてもバス代がかさむので馬鹿馬鹿しい事だが…。そごう北向かいに設置された三宮駅前の臨時バス乗り場から手書きのダイヤに沿ってバスは運行されていた。バス停の目の前がそごうの解体現場だったため、自分も母も当時どこでも売られていた防塵マスクをしてバス待ちをしていた。そのバス停でバス待ちする人は誰もがマスクをするといういでたちだった。当時は山麓バイパスが混雑し、ダイヤが遅延することもしょっちゅうだった。バス待ち中も目の前の光景は解体されるそごうの様子だけで、日が経つごとに解体され、外壁が出て古い外壁が出てきた。この古い外壁も、環境防災科に入って勉強した阪神大水害当時の写真でも見るようになった。からこのどこかの震災写真集の表紙になっていた「梅田・須磨行阪神電車のりば」という今では考えられない看板も印象に残っている。

震災当時はインターネットも復旧しておらず、テレビではEメールでの情報提供はない時代だったため、情報提供は専らFAX主流だった。平日はトークや悩み相談をやる昼間の情報番組でも震災直後は司会者の後ろに掲示板を作り、視聴者のFAX情報が張り出されるというスタイルを取っていた。中には家の近くの小規模スーパーの再開情報などローカルなものも見られた。その中に、湊川のダイエーの再開の情報があつた。早速行ってみたが、野菜や豆腐などの売り場にカップラーメンやインスタント食品がひしめき合うという、とても再開とはいえない状況であった。しかしカセットコンロのボンベが大量に売られており、まとめ買いしたのを覚えている。

その後、ついにガスが復旧した。約2ヶ月半ぶりだった。やっと家の中では元の生活に戻った。当然のことだが、家の外の様子は目まぐるしく変わっていった。家の近くでは解体や工事が行われ、半壊したアパートは工事作業員の事務所に変わった。空き地や公園の野球場には仮設住宅が建ち並んだ。

何故か4月くらいに宝塚へ行くことになった。往路は三宮までは徒歩で行き、三宮から阪急、代行バス、阪急と乗り継いで向かった。阪急三宮駅は倒壊し、ビルがあつたところの南詰に仮設階段が設けられ、コンコースへたどり着いた。この仮設階段、妙に狭かったのを覚えている。それでも沢山の人が行き来していた。阪急のコンコースや薄暗いホームは震災前とまったく変わっていなかった。そこから出る電車は御影までしか行かない。車窓から見える屋根の殆どはビニールシートに覆われていた。震災当

時はこのような光景が多く見られた。倒壊して解体する現場もあった。すべての駅に停まり、御影へ辿り着いた。代行バスに乗り換えたが、かなり渋滞しており西宮北口まで1時間以上かかった。そこから宝塚へ向かった。しかし復路は、一旦梅田に出て考えて大阪から全線復旧していたJRで帰ることになった。このほうが幾分早かったように思う。JRから見える景色も阪急と変わらなかった。

5. 震災後の学校生活

震災後の学校生活はこの章で別にいろいろとお話させていただきたい。幸いにもこの震災体験を執筆中に小学校が当時急遽作った学年文集が見つかり、記憶を辿ることができた。この1年後の小学3年の文集は出版業者がきちんと製本したものだが、この文集は震災直後に作成されたため、表紙には幼稚園と小学校時代は仲がよかった同級生が書いた恐竜の絵がそのままプリントされ、製版テープで製版されたものだった。もし地震がなかったら、創立1年目ということでお祝いの作文がいっぱい載っている文集になっていたことだろう。

地震から数日ぐらいて、先生が緊急の家庭訪問をしていた。自動車が渋滞する中、当時推奨されていたバイクで1件1件安否を確認していたようだ。先生が持ってきた学年通信には当面自宅待機ということが書かれていた。その後連絡があり、学校が2月に再開することになった。当日、久しぶりに学校へ行った。幸い校舎は創立1年目だったこともあり、しかし、もし以前の山手小学校の校舎のままであったら、完成から60年位の校舎はかなり古かったのでひょっとしたら被害が出ていたかもしれない。もし古い校舎で地震の時間がずれ、授業をしていたと思うと一。

学校では寝間着姿の避難者が普通に通りかかって妙な生活感が出ていた。また、今までなかった公衆電話が設置され、全国の電話帳がぎっしり置かれていた。全校生徒は自教室へ入れず、運動場に集合させられた。いわゆる「青空教室」と言われるものだった。教室には避難者がまだたくさんいたようだ。

その後、だんだんと避難者が減っていく中で、4・5・6年生の教室が空いた。そこで、低学年は1～3校時と給食を食べ下校、高学年は給食を食べてから4～6校時を受けるという「二部授業」が始まった。給食といっても、パンとソーセージ、ポテトサラダ等既製品の惣菜と牛乳が出る簡易給食だった。この頃、瓶詰めだった牛乳は業者が変わり、紙パックになった。当時は「震災のため」とか言っていたが、結局中学時までこの紙パックしか見ることはなかった。聞いた話では、震災の影響で業者自体なくなったという噂である。学校には沢山の救援物資も届いた。手作りのティッシュ入れやノート、外国製の鉛筆、何故かヘルメットも送られてきた。ヘルメット配布後は当面ヘルメットをして登下校するようという指示が出た。通学路には特に危険なところはなかったが…。

しばらくして避難者も少なくなり、3階と4階教室からの避難者はいなくなった。そこで3クラスあった学級は、A組とB組に再編された。これ以降は通常授業へ戻ったが、いまだ簡易給食という状態は続いた。また、元の3クラスへは戻ることもなく、結局その後旧クラスで集まったのは3学期終業式の日だった。3年生になり3クラス編成に戻ったが、卒業式の日には体育館からの避難者撤退があったため、いまだに1階の多目的スペースや1・2階の教室には避難者がいた。新1・2年生は他校と同じく、運動場に設けられた仮設教室で授業を受けていた。ちなみにこの頃給食も復旧した。すべての学年が校舎に戻ったのは、この年の2学期始業式の日だった。8月31日に避難者の完全撤退があったためだった。

山の手小学校では市街地に近く、交通事情がまだよかったためか、新聞社が学校再開の日に取材したり、チャリティーでスポーツ選手が来校しスポーツ教室も行われたりした。

中学に入り、地震に関することといえば祈念（担任からの指導では記念ではなく祈念だった。記念では祝い事になるからだ。）の式典が行われたり、インド大地震の募金が行われたりしたぐらいであった。自分の通った中学校は現在の山の手小学校に校舎が建っていたが、震災の数年前に現在の場所に移った。そのため建物には大きな被害はなかったが地震により死亡した生徒がいたようで、中学校にも避難者が多数いたため、その年の卒業式は中庭で行われたようだ。式典では犠牲となった生徒の母による手記が朗読され、自分が在学当時の担任が震災当時にビデオカメラで撮影した映像などが放映されたりした。

中学2年のことであるが、県が実施する職場などで1週間社会体験をする「トライやる・ウィーク」が実施された。自分は地下鉄での体験をすることになっていたが、2日間のみの体験だったため残りの3日は別の職場へ行く事になった。そのうちの2日間は三宮阪神前にあった、阪神・淡路大震災復興支援館「フェニックスプラザ」へ行く事になった。フェニックスプラザは震災の被害状況などのパネル展示や企画展示、情報発信を行っていた。そこでは事務員の手伝いをしていたが、市街地で立地条件がよかったのもあるのか、その当時から日本各地よりフェニックスプラザへ見学に訪れる人は多く、予約が必要だったらしいが語り部の話を聞く団体客や、情報を求める人も沢山いた。

そして、中学3年の6月。進路説明会で環境防災科の話があった。先生が来校し、プリントでの説明

だったが、他の学校には注目せず、何故か環境防災科だけ興味を抱いた。

6. 受験番号、3 番

環境防災科は推薦入試だった。落ちたときのことを考えると担任からは再三言われていたが一。環境防災科説明会と試験発表のとき、垂水駅からバスに乗ったが、掖済会病院行だった。数年前に高校の近くに掖済会病院が移転したからだった。試験発表の日も垂水駅から掖済会病院までバスに乗った。本当は中学校から舞子からバスに乗るように案内されていたが、時間も変わらないし安かったので垂水から乗った。新しくなった掖済会病院に着き、病院を背に学校へ歩き始めた。この病院で死んだ父からぐっと後押しされるような気がした。ふと、山手小学校に通っていたとき、毎朝病院の屋上から父が手を振って見送ってくれていたのを思い出した。高校までの道のりが今よりも長く感じられた。学校に着き、合格発表がされた。合格していた。ここから新しいスタートとなった。

・あとがきにかえて

いま、家の周りの様子は不況も煽ってどんどん様変わりしてきた。阪急三宮の駅ビルはいまだに仮設のままで、ビル内に新店がオープンするくらいなので新築する気配がない。新聞会館ビルはずっと、震災後の空き地利用として典型的な駐車場だったが、最近になり閉鎖、地下の秀味街も閉鎖され、工事が始まった。ついに複合ビルとバスターミナルが入った施設が建設されるらしい。フェニックスプラザ跡には神戸マルイが建ったので、阪急の駅ビル以外は何とか、玄関口だけは元の三宮に戻るようだ。

まれに乗車するタクシーで家まで帰るときに使っていた「海洋気象台の近く、ドルマンの上」という言葉は通用しなくなった。薬剤師会館の1階にあった喫茶ドルマンはなくなり、神戸海洋気象台はHAT神戸へ移転した。フェニックスプラザは高校入学と同じくらいに閉館し、「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」という施設に機能が移転された。この施設も移転先はHAT神戸だった。その人と防災未来センターへは高校に入ってから（個人的に行ったのも含めて）4度行くことができた。今も語り部の講演は毎日定期的に行っているし、パネル展示も充実して修学旅行の定番施設となったようだ。

家の近くを走るバスは海岸線開通の飛ばちりでなくなり、父母と淡路島へ行くときに使っていたバス・フェリーもなくなり、「橋ができたら車を買って家族で通る」と父が生前言っていた明石海峡大橋も、開通してから（個人的に行ったのも含めて）3回往復した。

そして、環境防災科での学習も3年目に入った。だんだんと「震災10年」という日が近づくにつれ、祈念のムードが高まってきたように思うが、それに同じく、行政、マスコミは震災10年という区切りで消し去ろうとしているのではないか、そういう恐怖心が書き立てられる。9年目の報道などの少なさでは、どうしても「お荷物」になっているように見える。ニュースステーションの最後の日、久米宏氏は「民放は戦争を知りません」と言ったが、「災害」は幾度となく経験してきたのに……。神戸市は神戸空港に必死になるような気がする。のじぎく兵庫国体を開催する兵庫県もまた然りだ。

きょう2004年5月17日、震災から9年4か月一。

現実と真実を乗り越えまた走り出す日

小柴 剛
神戸市垂水区

1995年（平成7年）1月17日は1月14日からの3連休明けで、普通であれば、学校に行かなければならない日であった。

1995年1月17日5時46分その時、突然神戸を大きな揺れが襲った。それは一瞬にして建物を倒壊し、何千人という人の命を奪った。阪神・淡路大震災の発生である…。

当時僕は8歳、小学二年生だった。ちょうど旅行から帰った日の次の日の朝で、家族いや神戸に住んでいる誰しものがこのような事態になるなど思ってもいなかっただろう。

僕らは14日に家を出発し、兵庫県北部の竹野にある〇〇荘に親戚一同、家族全員でカニを食べに出かけていた。この3日後とんでもない事態が待ち受けているとは予想もつかないことである。真っ白な雪に囲まれた土地で、僕はカニを食べられることが嬉しくて浮かれていた。そしてあっという間に時間が過ぎた。

そして家に帰る日がやってきた。16日の午後、僕たちは帰路についた。

— 地震発生まであと約17時間 —

その日の4時ごろ、やっと家に到着した。みんな疲れていてくたくただったが、親は妹の世話で忙しかった。当時、まだ赤ん坊だった妹は確か二歳前だった。

こんな日だったので夕食は適当に済ませ、みんな早々と風呂に入り寝る準備をした。

そして今でも覚えているのが寝るときに見た月で、とても大きくて赤く、気味の悪い月だった。でも、みんな疲れていたのものでそんなことは忘れて寝入ってしまった。

そして5時46分、とうとうその時が来てしまった…。

「ど〜ん！！！！？」

— 阪神・淡路大震災発生である —

揺れる！揺れる！縦に、横に、僕はすぐに目が覚めたが寝ぼけていて、親父がベッドを揺らして、いたずらしていると即座に思った。もしくはなんらかの夢を見ていると思った。

しかし違っていた。その後も揺れは続き、激しく揺れた。そして沈黙が訪れ、音のない世界が広がった。しばらくして奥の部屋から親父がやってきた。「大丈夫か？」まだ状況をつかめていなかった僕はいつもどおり「おはよう」と言ったのを今でも覚えている。不思議に動揺することはなかった。

まあそれはそうとして、部屋の中はぐちゃぐちゃ、本棚は倒れ、台所はガラスの破片が飛び散っていた。そのため、家の中を移動するのには靴もしくはスリッパを履く必要があった。当然、電気、ガス、水道、ライフラインのすべてがやられ、電球はつかないストーブもつかなかった。

その日は1月ということもあり、朝から結構冷え込んでいたので、とても寒かった記憶がある。数時間がたち、とりあえず親に連れられ親戚の家に行った。

親父は僕らを親戚に預けたあとすぐ会社に行くと言い、自転車で兵庫区にある会社まで出かけてしまった。

親戚の家もライフラインがすべてやられていて、電球の代わりにろうそくと懐中電灯で部屋の明かりをつけていた。唯一の情報源がラジオで、何か流れていたのは覚えているが内容は忘れてしまった。

この日から少しの間、親戚の家での生活がスタートした。その日の昼には電気が回復し、ストーブや

テレビが使えるようになった。しかし、水道とガスは回復が遅く、すぐには使えなかった。水道が使えないのはとても不便だった。

それはさておき、電気が回復したので、テレビがつくようになった。すかさずNHKにチャンネルをまわした。しかし、テレビに映ったのは町が燃えている様子で、とても悲惨な光景だった。今まで見たことのない光景だったので僕はテレビに釘づけになってしまった。夜になっても、テレビは空中から燃える町を放送し続けた。そしてあっという間に時が流れた。みんないろんなことがありすぎて疲れていたからだろうか…時間の流れが早く感じた。

— 1月18日 翌日 —

親戚の家生活スタート1日目、朝食はインスタントのにゅう麺で始まった。落ち着いたとはいえ、震災発生からまだ1日と少ししかたっていないため、重苦しい空気を拭い去るには十分でなかった。

しばらくして親父が会社から帰ってきた。親父の会社は研究所だったため、建物の中は薬品だらけで、廊下には薬品が流出していたので私服では入れなかったそうだ。他にも長田区の火災や兵庫区の大開通りが陥没していて水がたまっていたなどたくさん話を聞いた。

— 1月19日 以降 —

それからというものの毎日退屈な生活が続いた。一週間くらいずっと同じカップ麺で、三食すべてがインスタント食品だった。

僕の住んでいる地域は被害が少なく死者も1名しか出ておらず、中央区や長田区などと比べてかなり安全だったので電気以外のライフラインも回復が早かった。

ガス・水道が回復してからというもの一番うれしかったのは風呂に入れることだった。あとインスタント食品から開放されるというのは本当にうれしかった。

— 震災発生から1ヶ月後～中学時代 —

神戸の復興が始まってから、まず始めに応急復旧完了したのは電気で震災から7日間ですんだ。次に応急復旧したのは、神戸市営地下鉄で2月16日に完了した。震災からちょうど1ヶ月くらいである。

そのほかの機関も徐々に回復して、JR東海道・山陽本線は4月1日、ガスは4月11日（震災から85日）、水道は4月17日（震災から91日）には応急復旧を完了した。

これら以外の交通機関は震災のダメージが大きく、これより約二ヶ月復旧に遅れ、阪急電鉄6月12日、山陽電鉄6月18日、神戸電鉄6月22日、阪神電鉄6月26日まで完全復旧まで時間がかかった。あの横倒れになった阪神高速道路三号神戸線は翌年9月30日まで復興作業が行われ、震災から1年約半年で完全に復旧した。

こんな感じで徐々に回復していくうちに僕らの地域では学校が再開された。はじめは、家にいる生活がいいと思っていたが、少しずつ考えは変わっていった。長田区や中央区などで友の死を見た人もいるだろうし親を亡くした人もいるだろう。そう思うと友達と会えるのは本当に幸せなことだと思う。

学校生活が始まってからは被災地の話や、音楽の授業では『幸せ運べるように』を歌わされた。今思えばいろいろなことがあったと思う。

そして何年か経ち、中学生になり少しずつ物の見方が変わってきた。当時は分からないことがたくさんあったと思うが、ほとんどのことがだいたい理解できるようになった。

中学三年間は本当に楽しかった。震災のことをみんな口にせず、好きなことだけをしている感じだった。それでも3年生になり受験を控えると空気がガラッと変わった。その時僕はしたいことがまだなかったので、何をすればいいのか見当もつかなかった。

しかしその時出会ったのが『防災』だった。これをきっかけに防災に興味をもち、舞子高校環境防災科に入学した。

— 現在 —

そして、あれこれしているうちに3年の時が過ぎ、神戸は完全に復興し、そして今僕は高校生になりもうすぐ大学受験が迫っている。震災のあったことは今でも覚えているし、これからも忘れないつもりだ。

でも時間がたつにつれ記憶はどんどんかすれていく。今卒研で文集を書いているが、これがなかなかはかどらない。題材は『阪神・淡路大震災 私の震災体験』なのだが、何を書けばいいのか…震災当日～二日ぐらいまでは覚えているのだが、それ以降が思い出せない。

それはさておき、環境防災科に入学したので防災について3年間勉強してきたわけだが、ここでは色々なことが学べたと思う。はっきり言って全部理解できたか？といわれるとハイ！とは答えられない所が多々ある。ただそれくらいレベルの高い勉強をしているということである。

そして環境防災科のなかで学んだ一番印象に残っているものは、やはりライフラインの重要性で、震災復興に関わった現場の人の努力には驚かされた。

震災発生直後約86万戸の都市ガスがストップしたが、特に異常はなかった。震災による大きな被害で大阪ガスは復旧するのに約三ヶ月掛かり、その中で最も復旧に時間がかかったのはガスの修理および取替えて、これに大勢の人が参加した。

またガスの被害で一番多かったのは低圧管で、ねじ方式の部分が弱くほとんどの管に亀裂が入った。またこの亀裂から泥水が入り、水を抜く作業は困難を極めた。

さらに大阪ガスの職員一人一人が各家庭を回りガス漏れの点検をするが、(点検には家の人の許可が必要)家に人がいないためなかなか捗らなかった。ガスのブロック化も交通渋滞のためなかなか捗らず1ブロックを4～5日のサイクルでやっていった。

関西電力でも震災で大きな被害を受けた。地震発生直後、約268万件が一瞬にして停電してしまったが、関西電力は電力会社の復旧作業によりわずか3日間で停電数を7万件に減らすことが出来たことや、またこの復旧作業がうまくはかどったのは日本各地から来た6000人の応援と技術者の3日間の徹夜作業のおかげであった。(関西電力の職員はもちろん技術者たちは4日に一回ぐらいしか風呂に入れなかった。)

地震後関西電力が行った対策はFネットの設置・災害情報管理・災害情報システムの設置、緊急車両の充実、水の確保(給水車)、震災インフラの強化(倉庫など)などであり、また他の電力会社への援助のための物資備蓄なども考えられている。さらに関西電力の電力量の半分以上を占めている原発の設計は震度5以上を想定されているため強固な岩盤の上に作られている。

神戸市水道局の震災による被害が一番多かったのは配水管の亀裂及び配水管の損傷で、さらに下水道トンネルの壁のはがれにより復旧作業はなかなか上手くいかなかった。

また給水作業は地震発生後当日の13:18分から始まった。垂水区の垂水センターに水をもらいに来た人は多いときで1000人を超すこともあった。この給水作業を援助してくれた市町村は3400ほどあり、使われた給水車は1万4000台を超え協力してくれた人は3万3627人にも及んだ。

次に聞いた話で印象に残ったのは、消防と自衛隊で当時の避難所の様子や救助について語ってくれた。

神戸市の消防局は(震災時)市内9区に11の消防署、17の出張所があり消防職員1329名、消防団員4000名を持っている。車両はすべて含めて194台、ヘリコプターは2機、さらに消防艇を2隻持っている。消防水利に関しては消火栓を28299基、防火水槽を1303基、装備している。また年間の災害発生状況は火災に関しては700～800件、緊急に関しては約50000件である。震災直後の火災発生状況は6時までに54件、7時では64件、8時では69件発生している。さらに17日の火災発生状況は109件で震災発生後10日間までに全部で175件火災が発生している。

- ・ 消防力を超える火災の発生、大規模化
地震発生時の消防警備体制 80小隊、292人(内ポンプ隊35隊)
この時ポンプ車が出動できない場合火災現場が拡大する。
- ・ 部隊のシフト(8;00)
災害の少ない署の部隊及び参集職員を長田、兵庫に派遣
- ・ 応援部隊の投入決定(9;45)
450消防本部、延べ6,254隊27,449人(3月31日まで)

震災後の取り組み

- ・ 火災対応を最優先
震度5弱以上の場合救助隊、救急隊などすべての部隊をポンプ車に乗り換え、消火部隊を増強する。
さらに非常勤の消防団員の体制強化をするため、すべての消防団員に消火、救助の資機材を配布する。
- ・ 情報体制の強化
ソフト面 対応マニュアルの策定
震度5弱での自動参集の徹底、管理職の職場参集の徹底、参集途上の情報収集情報発進。
- ・ ハード面
衛星利用の画像電送システム。
ヘリコプターからの映像収集。
国への電送。

どれも普段聞けない話でとても勉強になった。

この他にも災害ボランティア、当時のボランティアの方々の話を聞いた。これらの経験を活かしこれからがんばっていきたい。

過ぎ去りし日々

小西 崇文
神戸市長田区

1995年（平成7年）1月17日は1月14日からの3連休明けで、普通であったならば、学校に行かなければならない日であった。

しかし、その日はその学校に行くような“普通の日”ではなかった。なぜなら、1月17日早朝5時46分にアレが起こったからだ。

そう、6400人以上の死者を出した阪神・淡路大震災である。これから、その出来事について私が体験したことを書いていこうと思う。

— 1995年1月17日 地震発生前 —

私は地震が発生する直前、10、20分くらい前だろうか、目を覚ました。別に特に何かを感じて目が覚めたわけでもなかったし、ましてやその時にあんなことが起ころうなど全く見当がつかなかった。

— 1995年1月17日 地震発生 —

特に何も考えず、もう一度寝た。暫らくして何故か揺れている、寝ぼけているのか、もしくは誰かが起こそうとしているのか、最初はそのようにしか感じなかった。実際、私の部屋では、何か大きなものが落ちたわけでも、窓ガラスが割れたわけでもなかったのでもほとんどと断言はいい程、「怖い」「恐ろしい」などの恐怖感を感じはしなかった。

しばらくしてから、家からいったん出て近くの公園に向かった。たしか、公園では既に近所の人が集まっており、ラジオなどを聴いていたはずだ。

その後、30分位か1時間位かはよく覚えていないのだが、少し時間がたってから、その公園のすぐそばにある中学校に避難するため、家に一度戻り必要なものをつとめた後、その中学校に避難した。

中学校に避難したときにはもう多くの人がやって来ており、大量の毛布が床に敷き詰められていた。私が避難したのはその中学校の武道館だけなので、そこ以外がどうなっていたのかはよく分からないのだが、武道館と同じかそれ以上の人間が集まっていたと考えてよいだろう。なぜなら、部屋に入れない人もたくさんいて、グラウンドまでがいっぱいだったからだ。

避難所ではただただ時間が過ぎていき、そして、時間が流れるとともに幾度もの余震が起こっていた。

その間どれだけの人が震えていたのだろうか。どれだけの人が恐れていたのだろうか。その間どれだけの人間がその避難所内を行き来したのだろうか。

避難所の中では何度か食べ物の配給が行われていたようで、その度に避難所の人（おそらく中学校の先生の人であろう）が「順番に並んでください」「お年寄りや子供を先にお願ひします」というような内容の言葉を何度も何度も発していたのを覚えている。

今思ってみれば、“そんなことを言われなければわからないのか？”、“普通並ぶだろう”などといったことが思い浮かぶが。まあ、ほとんどの人間は自分のためや金のためにしか動かないので、その言葉があってもおかしくないのかもしれない。

ここで話が少し逸れるが、震災の被害について私の非常に私的な意見をいわせてもらう。

この震災では都市直下型という理由で大被害になったとされているが、もっと深く考えてみれば、都市直下型とか地震対策がされていなかったという理由じゃなくて日ごろからのつけが溜まったのではないかと思う。このような言い方をすれば、震災でなくなられた方に対して失礼かもしれないが、間違っていないと思う。死ななかつた人間はたまたま助かっただけで大差はないとも思う。地球が怒ったというような馬鹿らしい話はしないし、地球が怒るとも考えていないが、自然の力を軽視し、人々が奢りすぎたのが大被害となった最大の原因ではないだろうか。今行っている震災後の次に来る地震に対しての対策が成果を挙げているのは事実であるとしても、している対策のほとんどは自然のものを壊して新しいものを人工的につくり、その人工的に作られたものをさらに人工的（反自然的）なものによって守っているに過ぎないのではないのであろうか。

私の意見は理想像で現実にするのは不可能かもしれないが、自然を再生すること＝環境を守る＝災害

を防ぐことにならないだろうか。

長くなったがここで本題に戻る。震災当日 1 月 17 日の夜。その夜は避難所に一泊することとなる。その日は 1 月ということもあり、朝から結構冷え込んでいたのだが、夜になるといっそうその寒さが増したような記憶がある。

当然避難所でたくさんの人がいるので隣ではまったく知らないような人が寝ているわけだし、床の上に毛布こそ敷いているが、1 月の夜で電気、ガス、水道がつかえないため、暖房器具も使えないわけだ。寒いし、見知らぬ人があるし普通に考えれば眠りやすいはずがない。しかし、当時は疲れていたのだろうか、それともそんなに寒く感じなかったのだろうか、8 時ごろであったに関わらず割とぐっすり眠れた。

— 1995 年 1 月 18 日 地震翌日 —

1 月 18 日の朝、目が覚めたときはまだそんなに遅い時間ではなかった。前の晩早く寝たせいか、多くの人がいるせいかはわからないが。

この日は特に何をしたという覚えがほとんどない。実際に何もしていなかったのかは定かではないのだが。

避難所の中学校の電気が復旧したのはこの 18 日か翌日 19 日の夕方であったと思う。電気が戻ったとき（避難場所の照明がついたとき）幾人かの人々が歓声とっていいのか、なんと言っているのか分からないような声を上げた。安堵の声だったのであろうか。私は、声は上げなかったが、少し安心したような気分になった。

— 1995 年 1 月 19 日？～2 月中旬 震災から暫く経って —

電気が復旧したその日だったのか、一日経っただろうか、もしくは二日たったのだろうか。

私は父、母、妹、そして私の四人で大阪の叔母（母の妹）の家に避難することとなる。大阪へは車（普通の乗用車）で向かう。勿論、車で移動することは避難所がそうであったように道路がものすごく混雑している上に、ご存知のように阪神高速が倒壊しているし、その他にも通行禁止となっているところもあるために困難。確か避難所を昼過ぎの 2 時か 3 時くらいに出たはずなのに道中ではすっかり空が真っ暗に変わってしまっている。夜遅く（ここでは時間が定かでないので遅くとしておく）に叔母の家に着く。引越しの手伝いのために一度だけ訪れたことがあり、どのような所かは知っていたはずなのに、その時とはまったく違う場所のように思えた。最初に思ったのは、（叔母の家はマンションで五人暮らしなのだが）もの凄く狭いということだ。父は神戸のほうに残ったとはいえ、今思えば 5 人でも（実際は今 6 人らしいが）狭いと思うような所だ。さらに 3 人も増えれば狭く感じるのは当然だ。

数日間、何もせずにただただいたずらに時間だけが流れた。

その数日後、従兄弟の通っている小学校に登校することとなる。

それまで通っていた小学校では転校生がいるといつも月曜の朝の朝会で紹介していたので、ここでもそんなことがあるのかなと思っていたのだが（ものすごく嫌だったのだが）幸か不幸か月曜日だったのに関わらず、そのようなことはなかった。

しかし、確か 2 年 3 組だったはずだが、一時間目の授業から自己紹介をさせられた。地震のことについて尋ねられることは別に嫌ではなかったというよりまったく苦痛ではなかったのだが、教室の一番前に立たされ、しかも喋らされるというのがとてつもなく嫌であった。

その小学校に通い始めて、1、2 日は知っている人がいない上、それまで通っていた神戸の学校とはまったく違っていたため — 具体的には教室に入るために上履きに履き替えなければならなかったり、登下校の際には帽子を着用しなければならなかったり、マンションであったため同じ建物に住む小学生と一緒に登校しなければならなかったり — なれるのに時間がかかるような気がしたが、実際に通ってみると周りの人は気軽に話しかけてくれたし、同じクラスに従兄弟がいたため案外容易にそのクラスに馴染めた。

その学校に慣れてきた転校から 1 週間ぐらい経ったとき、従兄弟の友達（後に私の友達にもなるが）の誕生会に呼ばれた。

誕生日といえば、私の誕生日は1月15日で震災の年1995年では15日に風邪をひいていて、その翌日の16日に誕生日のお祝いをしてもらった。今思ってみれば、地震が17日に起こったことは、私にとってはまだ幸運であったように思える。このような書き方をすれば17日が誕生日であった方に失礼かもしれないけれども・・・。

少し話がずれたが、話の続きに移る。

それまでほとんど面識がなかったので、どんな奴やろう？や大丈夫かな？といった期待と不安が半分ずつ位の気持ちで行った。

しかし、呼んでくれた本人もそうであったが、ほかにもたくさん来ていた彼の友達もみんな思っていた以上に普通に接してくれたし、確か2～3時間の間であったけれど、とてもいい時間がすごせたように思う。

また、それをきっかけに仲良くなれた友人もたくさんいたし、その後学校でもそれまで以上に周りや昔から仲のよかった友人のようになれたのではないかと思っている。

— 帰宅後 —

二月の中旬ごろ、それなりに戻ってきたので、自宅に戻る事となる。

自宅に帰ったのは夜遅くだったので、その帰った日から数えて二日後に、それまで通っていた小学校にもう一度いくこととなった。そのときはまだ電気しか戻っておらず、水やガスは依然として戻らないままだったので、食べ物に困ったようだ。

— 二日後 前の小学校に戻って —

自宅に戻って、二日後に小学校に地震後に初めて登校した。

実際に小学校に通うときには、たくさんの方が家が更地になっていて、倒れかけの家、もう既に倒れてしまっている家も結構あった。極めつけは、自宅の近くなのだが、石垣の上に立っていたのだがそれが崩れて道を完全にふさいでしまっている場所もあった。

上に上げたように道をふさがれているために、学校に行くために多くの回り道を要されたり、集団＋教員と登下校を行わなければならなかったりであったために、地震の前よりも3割から5割増しくらいの時間がかかった。

学校についてみると、想像した以上に人間が沸いていた。言い方が悪いが、たくさんいるとか大勢いるではなく、沸いていた。

そのため、それまで使っていた教室は使えなかった。しかし、実際に学校に来ていた同学年の生徒はそれまでの半分かそれ以下くらいしか来ていなかったのも1つしか教室はなかったけれど、それほど窮屈ではなかった。(残りの4分の1くらいは転校、4分の3くらいは新学期の4月に戻ってきた。)

学校の授業はかなり地震の影響で抜けていて(大阪でも受けていたが教科書がすべて違うので)、2年生の教科書で勉強しなかった単元も結構あった。

そのときの学校の授業でよく覚えているのが国語でやった「片仮名のでき方」、「スーホの白い馬」である。よく覚えているというよりもほかの事をぜんぜん覚えていないだけかもしれないが・・・。

「片仮名のでき方」はどの漢字からどんな片仮名ができたか？等というような授業で、例えば、「阿」→「ア」のようにパズルのように考えていくようなもので、「スーホの白い馬」は、内容は最後に馬が死んで楽器にされるというところしか覚えていないけれど、当時の教科書内ではほかの文章に比べ、明らかに長かったのははっきり今も覚えている。

学校に戻り、しばらくすると小学校の生徒でなくなった方のお別れ会のようなものが設けられた。

私と同じ学年の人はみな無事だったようだが、学校全体で5人が亡くなっていたようだ。

その亡くなった方に送る折り紙を折ったのもよく覚えている。

日常生活では食べ物のほとんどがカップラーメンやお湯を入れるご飯などのインスタント食品ばかり

りだった。まだガス、水道が復旧していなかったため、給水車にバケツやポリタンクを持って並んだりもした。このとき、それまでで初めて心から「水は大切」と思ったような気がする。風呂にも入れなかったのが父の会社の近くの銭湯に通った。

この地震ではそれまでに私が経験できなかったことがたくさん体験できた。震災の被害を受けた人は、自分は被害を受けたなどと主観的に考えすぎであって、これで受けた損害などマイナスのことしか考えていないような気がするが、客観的に考えれば、別にその人が被害を受けたところで大した問題ではなく、今後起こるかもしれない天災に対して目をむける機会となっただろうし、今後の地震に対しての対策につながったというプラスの面も多々あるのではないだろうか？

現に阪神淡路大震災の年はボランティア元年と呼ばれているし、この震災をきっかけにボランティアに興味を示した人も多いということは事実。物事には考えようがあってその考え方が狭く、主観的であって、感情的になってしまえばたいした意見も出ないし、たいした行動も起こせない。ボランティアをしにきた人でもその場の感情だけで来たから、かえって邪魔になるような人間も多かったのではないだろうか。

やはり、広い視野で冷静に物事に対して対処できることが日常時も非日常時（災害時、緊急時）どちらにおいても必要なのではないか。

今この神戸はもう同じてつは踏まないつもりなのかは知らないが、多くのものに対して耐震補強などを行っているが、本来この阪神間で多かった災害は洪水であったはずだ。そのことを忘れて耐震補強ばかりに走るのはどうかと思う。

どちらかといえば、東海、東南海、南海地震の起こる可能性の高い地区を優先的に補助したほうがよいのではないか。

マスメディアでも、東海地震などよりも阪神・淡路大震災から〇年などと毎年毎年報道しているが、阪神・淡路大震災から何年よりも何故大災害につながったのか、どのような対策が効果的か、などを伝えたほうが今後のためにもなるだろうし、多くの震災体験者はそれを望んでいるのではないか。

— 1995 年 4 月以降 —

地震を経験して初めて進級し、前に比べ人数は減ったけれど、教室もクラスごとに分けられた。本教室は未だ避難所として使われているので、グラウンドにプレハブ校舎を建てての授業だった。

4 月に入ってたくさんの友人が学校に戻ってきた。みんな以前と同じような顔をしていた。友人の中には親戚をなくしている人もいた。

その 4 月以降は、半年以上地震のことなどすっかり忘れたかのように、過ごしていた。しかし、翌年の 1 月に地震から一年の行事が行われた。ただ私は作文を書いただけであった。内容も特に覚えていないようすっぺらな作文。

その翌年もそのまた翌年も行事は行われたが、同じことの繰り返し。

今この体験文でも、地震の内容については、内容は薄い。むしろ小学 3 年時に書いた作文の方がましかもしれない。

私自身が忘れかけているように、世間の人々も同じように忘れ、また同じことが繰り返される。いくら技術で地震を防ごうとしても人の気持ちがしっかりしていなければ、同じような被害が繰り返される。これが災害の本当の怖さなのかも知れない。

忘れられない日

小林 勇輝
神戸市西区

「阪神・淡路大震災」。1995年1月17日、5時46分発生。被害、死者超6000人、滅失住宅被害数74234棟。戦後最大の災害が僕の住んでいる神戸で突然起きた。

地震が起こる前、僕はポートアイランドのマンションに住んでいた。そして、1994年12月の中旬頃、西区の一軒家に引越しした。この家は建てたばかりの家である。この家で地震を体験した。

僕の家は山の上である。昔(震災当時)は、池は野池というのか、コンクリートで固められていない池がほとんどで、今は道や、住宅になっている場所は林だった。今は住宅開発、池の整備、道の舗装で住宅街といった感じで、山の気配すらない。唯一、山とを感じるのは、店や、公共機関に行くときはいいが、帰りに絶対坂を登る必要がある。それは今と昔は変わらない。

ポートアイランドには自然がなくすべてコンクリートで固められたところにずっとすんでいた僕には、生き物好きな僕は自然の中でザリガニを飼ったり、スポーツも好きだったのでサッカーも近く公園でやったりして遊んでいた。

家には前住んでいたマンションよりも部屋が多くて、前の家にはなかった自分の部屋があり、自分が持ってきた荷物などを自分の部屋に置いていくのが、家に帰っての楽しみだった。荷物もついたばかりで父と母がダンボール箱から荷物を出しては整理して、忙しそうであったが莫大な量の荷物は一向に減る気配がない。そして母は箱から出した荷物をどこに置こうか迷いながらおいていった。こういった時間が新居について流れていた。

母がなにやら怒っていた。そして、いやな気持ちでベッドに入った。明日は小学校、引越ししてきたばかりの僕は新しい友達を作ろうと明日に希望を膨らまして眠りについた…。

そのときであった。寝ている僕のベッドがものすごく揺れているのであった。いったいなんだ！？ああ、夢か… いや！夢ではない！母が怒ってベッドを揺らして起こそうとしているのか。当時、小学校2年生だった僕は本気でそう思った。いや、違う。いったい何が起きたのか。まさに寝耳に水ということはこのことだ。寝ているときにいきなり。

混乱を物置が倒れる音が破った。見渡すといろんなものが倒れ、壊れ、ゆれている。地震だ！！僕は小さい地震しか経験したことがなかったので地震ってこんなすごいのもあるのかと明け方の薄暗い部屋のベッドの中で唖然としていた。

ドアの向こうから「外へ行くぞ！」と声が聞こえたので、ドアを開けた。父であった。一生懸命、父のもとへ向かうのだが地面がゆれて思うように進めないのである。転倒しそうにさえなった。逃げるとき一番危険だと思ったのは、階段だ。当時、階段にすべり止めもなく、階段の1段1段もわからない状態だった。いつこけてもおかしくない状況だった。震災後、畜光式のすべり止めをつけた。やっとの思いで玄関にたどりついた。

1月の早朝の気温を想像してほしい。空は薄暗い、紫がかった空で、急いで出てきたので、コートなども着ていない。ただ、いつもの冬の早朝と違うのは、朝だというのに人が大勢、家の前にみんなでいることだ。どうやら周りの家も大丈夫だったらしい。暖を取るため、家族は車に避難した。大きな地震が終わっても、余震は続いた。車のサスペンションのせい、揺れは大きく感じられた。この時になって初めて家の心配を始めた。

1時間くらいたって、余震はまだあったけれど、少しはましになってきている。家族は家に戻り始めた。いったい神戸はどうなってしまったんだ、という思いからいつものようにテレビをつけようとした。しかし、テレビがつかない。停電であった。台所から母が「水が出ない、ガスも。」と聞こえてきた。母が一番苦に思っていたのはひっくり返った食器棚である。家を建てたと同時に新しい家具を買い揃えていた。その中に新しい食器が含まれていた。食器の4分の3は壊れていたのだろうか。母は渋々割れた

食器を片付け始めた。見渡すと家にある全部のものが所定の位置から移動していたのだ。大人2人＋子供3人でやっと動くピアノ、テレビなんかは台から落ちているのがあたりまえだった。片付けているときにも余震は容赦なく起こった。余震があるたびに身をかがめる状態であった。

ふと飼っていたザリガニのことを思い出した。ザリガニの成体ならいいのだがよりもよって、5ミリくらいの子供のザリガニが何十匹もいたのだ。意を決して上にあがると、予想通りの結果であった。小さな粒のようなザリガニは床でびくびくしていた。丁寧に拾いこんなことが何回もあってはザリガニたちに悪いと10時頃、近くの池へはなしてやった。池は当時コンクリートで固められていなかった。土が盛り上がりたり、崩れたりして舗装したアスファルトの道路がひび割れたり、最悪の場合、陥没していたのだ。朝から何も食べていない、帰って昼ご飯でも食べようと帰路についた。

家では母が火を使えないことに悩んでいた。父がなにやら思いついたのか、上へ恐る恐る上がった。上の物置によくキャンプなどで使っていた。ガスコンロがあった。ようやく火が使える、料理をすることができた。なぜか、家族みんな一階の和室のコタツを囲んで生活するようになった。寝るときも、食事のときも。みんなが集まれば怖くないという心理からか。僕にはもうひとつ理由があった。この地震で、一人で二階へ上がることができなくなったのである。一人で上がることもできなければ、もちろん自分の部屋にとどまることや、寝ることもできない。1月中、二階はシーンとしていた。

「おいしかった。」食べ終わったと思った頃、加古川、岡山に住んでいる、祖母から電話がかかってきた。どちらも、ニュースを見て連絡したとのこと。電話をかけたがなかなかつながらなかったのだ。母や父は電話だというのに状況を身振り手振り伝えていた。そして、母は電話が使えることに気づいて急いでテレビをつけた。

そこには、阪神・淡路大震災と大きく表示されたニュースがほとんどのチャンネルを占めている。そして、映像に驚いた。高速道路が倒れている！？ほとんどの家が崩壊している。そして、大火災。まるで戦争いや、怪獣が歩いた跡のようなかんじだった。これが本当の神戸？よくポートアイランドから通っていた、幼稚園のある、三ノ宮はビルが崩壊している。阪急電車が脱線しているという映像を見て、この地震は、本当はものすごい地震なのだとわかった。

自分の住んでいる地域は家が崩壊などしていなかったからだ。

学校は休みだったことは覚えている。なぜか学校を休んでいた。連絡網が回ってきて母がぼくに学校は休みと伝えたのか、この状況でいけるはずがないと判断したのかはおぼえていない。とにかく学校はやすみだった。どこの家も家事や、生活のことで精一杯であったために学校に行くような状況ではなかったのである。

まだ、不便なことはある。電気はつながったのはいいが、水道がつかない。水が一番ややこしかった。風呂も入れない。料理にこまる。トイレが流れない、これが一番困った。そして、水道の回復が一番おそかった。水道やガスの管は地中にうめられているので、復旧活動がかなり難行したために電気に比べておくれた。

水の対策はこうだった。両親はどういう手段で情報を手に入れたのか知らないが、小学校で自衛隊が水を配っているという。父は車にタンクをつんで、毎日小学校に向かった。自衛隊からもらった水は風呂の水、洗濯、食器洗い、料理に使った。

しかし風呂には大量の水が必要で週に一回などと少ないものであった。風呂に入る代わりにガスコンロで熱したお湯をタオルにつけてそのタオルで体を拭いていた。風呂にもろくに入れないものだから、友達と公園で遊んで泥だらけになって帰ってきたら母が怒った。普段は泥だらけになろうが母は、怒らなかった。自衛隊からもらった水でつくった、煮込みラーメンはとてもおいしかったことは覚えている。使い終わった水は保管し、トイレを流す水に使った。池の水を持って帰って、その水もトイレの水として使った。自衛隊の水では足りないので、加古川の祖母の家に水をもらいに行ったときもある。祖母の家にたびたび行くので毎日が楽しかったことを覚えている。このときほど、水のありがたさを知ったときはない。

学校が始まった。

学校では誰も被害にあった人はいなかったらしいが、家をなくした人が数多くいた。授業中、いきなり余震が起こってみんないっせいに運動場に避難するということが頻繁であった。登下校共に集団登校であった。登下校の途中では先生が安全を確かめていた。子供の命を預かっている学校では、気が気ではなかっただろう。授業や集会では何かと地震の関連の話が出る。集会ではこの学校では犠牲者は出な

かったが、他の学校ではたくさんの犠牲者が出て悲しんでいるという知らせを聞いた。僕はやはり同じ年代の人もなくなったのかと複雑な気持ちになっていた。そして、学校では1月17日になると全員で黙祷をしたのを覚えている。

地震後の授業では語り継がなければいけない、地震の仕組み、他の地域の被害の状況、野島断層の校外学習があった。震災の授業では悲惨な被害をその頃僕らと同じ小学生が記していた作文があったのである。作文には、母が下敷きになって助けようとしたけれど自分ではどうにもできず、迫り来る火事で母を亡くしたといった耳をふさぎたくなるような現実を刻々と記していたのであった。そう小学校のときから、震災の勉強をしていたのである。

ポートアイランドに住んでいた頃の友達から手紙がたくさん届いた。ポートアイランドは島という心配からか、みんな別の場所に引っ越してしまった。ポートアイランドは埋立地であるために液状化現象が起こっていたり、逃げる道が少なかったりしたことが住民の不安をかった。中公園の岩が取り除かれて仮設住宅がたてられた。(大きな岩があって、よくその岩に登って遊んでいた。) 友達からの報告にショックを受けた。すんでいた場所が変わっていくのはつらいことだ。

2、3日たった。ニュースで死者の名前がズラーっとながれていた。この地震でこんなに亡くなってしまったのか。いまだに火事が続いているところ、家をなくしてしまって、体育館に一時避難している人。これから神戸はどうなるのだろうと不安になっていた。しかし、つらい方がほとんどだったが、うれしい報告も耳に入った。この神戸の悲劇の知らせを聞き、各地、各県、各国からボランティアの人が来て活躍している姿がうつった。この映像には勇気付けられた。僕だけでなく、みんなそう思っただろう。このボランティア活動をきっかけに小学校でボランティアの大切さ、ボランティアの詳細などを学びボランティアの重要さを学んだ。

1日1日序々に回復に向かった。

回復はとても早いように思っていた。震災が起きた直後、どこにでもかわらが落ちないようにブルーのビニールシートをかけていたりしていたのがとても懐かしいが、すぐに、そのビニールシートも取り除かれた。

今や神戸は何事もなかったかのように平然とある。もちろんごく少数震災の爪あとを残した場所もある。そして、非震災体験者や震災当時あまりにも小さく覚えていないものたちが大きくなりつつある。しかし、震災の爪あとがあまりにも少なすぎる。ここで矛盾が生じる。早く回復してほしい、しかし後に伝えたい。震災体験者である僕たちはこの問題を乗り越えて後に伝えなければいけない。何かの本で読んだが、自分だけが理解し、自分の中だけで収めていては意味が無い。伝えなければ意味が無い。確かに今思ってみるとわかる。震災を受け、震災の知識を持ち、次に震災があり自分だけ助かってしまった方が無い。やはり、みんなに伝えて、たくさんの人が助かったほうがいいと思う。

この震災は非常に重要なものであったと今も思う。考えてみると、この震災から学んだものや、生まれたものが多い。CMでは耐震構造を駆使した家の重要性がうたわれた、CMが多い。他に震災を経て行政機関の発達も多く見られる。法律の改正、警察、消防、自衛隊の動きの発達。行政機関だけではない。主にライフラインとされるガス会社、水道局、電気会社もこの地震で大きな教訓を得た。伝えるものを耐震化するなど。民家で災害に対する策が少しながらも進歩したのではないだろうか。例えば、テレビなどで放映されていた、体育館での避難生活の様子、学校での、避難体験の学習などで避難場所は体育館というふうに染み付いているのではないか。

この進歩は体験的に得たものである。しかし、体験的に得た進歩だけでは、あまりに少なすぎる。やはり、専門家による、客観化知識が必要である。

専門家による意見とは、統計や確率などを取り、被害の多いものを明らかにしたものから、得たものである。これは非常に危機から逃れるのに重要である。データというものにはこういったものがある。

死亡者年齢別グラフからは目立ってお年よりの死亡が多い。他に死亡者場所別グラフからは一階に居た人の死亡確率が多い。このグラフから、僕たち家族は余震が続く間、一階で生活していたことは間違いであると把握できる。

こういったことから、専門家の意見は到底無視することは出来ない。しかし、その、客観視の意見も、体験者の証言などを得て作ったものであって、体験的意見と客観的意見は密接な関係であると言っても

良い。

僕は二年生の時に震災を受けた。しかしこの震災を受けたからには学び、そして伝える義務を受けたような気がしたのである。災害は何も無いところではただの自然現象に過ぎないものである。災害は害であって、天災によるものである。そして、人の営みに関わるものに害を及ぼしてはじめて災害となる。しかし、今日、人口増加が伴っている地球では無論人の営みに関わるものは増えるとされる。よって、震災は人口増加に比例して、増加する傾向にあると思われる。それと平行して防災の重要性も増加する。

確かに防災は今、普及しつつある。それが、正しい情報なのか、自分の家にあった防災なのか自分で判断しなければいけない。そのためには少なくとも防災を専門家や、本から学んでいく必要がある。

防災は地域と密接な関係を結んでいる。一見何も関係のないようなものにみえる。しかし、防災を学ぶと、家が倒壊し、家の一部の下敷きになったり、家から脱出できなかつたり、とにかく、人の手を借りなければいけないとき、人は必ず行政機関に頼る。しかし、こういった被害を受けた人は災害では数多くおり、行政の力がまわらない時がある。そういったときに助けにまわったのが、隣近所の人々であった。救助だけではない。災害が起こる前から、地域での防災会議のようなものを開いて、避難所、お年寄りの確認などをはなしあう。こういったことをして災害に常に目をおく必要がある。

日本に住む現代人は常に災害に目を凝らさなければいけない。

災害の死亡にはお年寄りの孤独死、自殺という悲しい項目がある。もう、次の災害ではこういった悲しい項目を消滅しなければいけない。こういったお年寄りのことの改善には福祉的力が必要である。福祉的なことには子供の面倒を見るなど仕事の課題はたくさんある。

環境防災科でいろんな組織から話を聞くがすべては阪神・淡路大震災に精通しており、阪神・淡路大震災から教訓を得たと聞いている。災害は地震だけでなく洪水、台風、津波、火山の噴火、土砂崩れなど奥が深い。こういった災害はすべて日本で頻繁に起こっている自然現象または災害である。環境防災科で一通りは勉強してきたが、もっと、各科目に深く勉強すべきだと思った。

勉強の面だけでなく、活動にも積極的に取り組んで行きたい。ボランティア活動、地域での話し合いのときに防災のことを持ちかけてみる、など。震災を経験したものには多くの課題が残されている。人類は何もかも改善し続けてきた。自然現象を止めることは今のところ不可能とされているが、いずれ何もかも解決した人類は災害という問題に直面するだろう。そのときは、災害に特に鋭敏なこの世代が災害について担っていかなければいけないときがくるであろう。たとえ、その道につくことがなくても、災害大国である日本に住む限り自然に関連付けられるのである。そこで、みずから、またその周りを災害から救うリーダーとして活躍してほしい。

軌跡

島本 一志
神戸市垂水区

正直、小学校2年生の記憶なんて曖昧なところがあるし、当時どうやって目が覚めたのかわからない。でも、起きた時には同じ布団で寝ていた弟が、隣ではしゃいでいて、すでに物置となった僕の真横にある二段ベッドを必死で押さえている父の顔だけははっきりと覚えている。『大丈夫か?』と言う父は寝そべっている僕と弟をまたぎ、仁王立ちになり左手でベッドを、バランスを取るようにして右手で固定されたタンスに手をおいていた。“地震なんだ。”とわかるのにはかなり時間がかかったように思う。日常では滅多に経験できない出来事に直面した8歳児は、胸の奥から込みあがる無性に昂る気持ちと、2人の子供を守ろうと必死になる父の心情を感じとっていた。まだ、ジェットコースターなんて乗ったことはないのにあの時の揺れはジェットコースターみたいだと思っていた。下から突き上げられるような感じと体がいつまでも左右に転がっていくような横揺れ。守ってくれる人がいたからだろうか、わくわくが止まらなかった。1人じゃなかったから怖くはなかった。揺れも次第に収まっていく。2階から降りる階段までの渡り廊下にはガラスの破片が沢山落ちていた。暗くても薄明かりに反射するガラス片。その上を通らなければ下にはいけないのだ。父の腹は“あなた、妊婦さんですか?”と突っ込みを入れなくなる。スイカを丸のみしたような腹を持つ父の足の裏は大概、肉厚があると思っていたが子供を背に乗せて往復した足は血だらけだ。背中に担いでもらった記憶は覚えている限り、それが最初で最後。思うより小さかった父の背中が印象的だった。そして、1階に下りると、テーブルの下に母と祖母が二人で身を寄せ合っていた。明かりがないダイニングでお互いの顔が揃ったことに一安心。ろうそくに火をつけて電気がつくのを待つ。すでに朝ご飯の支度をしていたようだ。父と祖母がご飯を食べようとしていたらしい。テーブルの周りには味噌汁、ご飯、焼いた鮭はあったかどうかはわからないがとにかく、床にはもう、色々なものが散乱していた。結局、電気が回復するのはまだ先だった。僕と弟はテーブルの下ではなくこたつの中へ避難した。小亀2匹がひとつの甲羅の中に入ったみたい。地震が来ないときは布団から顔を出して、微震が来た時にはサッと頭を引っ込める。こたつの中とはいえ、電気がついていなくても無いです。冬は寒さは耐え難い。父が貼ってくれたカイロはすごく助かった。母は毎日欠かさず父と祖母にお茶と甘いものを出す。これが島本家の1番最初の日課。だから、電気は切れていたが、すでに朝ごはんの支度は出来ていたのでお茶を沸かすポットの中のお湯は保温状態で残っていたらしい。何もすることが無かったので、3人はお酒を飲んでいたという。注文したお酒はお湯割り。こんな状態では、酔えなかった。頭の中は空っぽだったから。テーブルの下に3人はひとつになるように体を密着させて、ほんの数秒の出来事を回避する。不安の募る朝をただ、祈るだけで過ごした。何気なく暮らしていた生活もライフラインを奪い取られると、こうも身動きが取れなくなってしまうとは思わなかった。この時、誰もが初めて肌で感じ、体感・経験をしてやっと、そのことに気付いたのではないだろうか。8時頃に父と母が外の様子を見に表へ出た。庭には瓦が屋根から剥がれ落ち、壁に数箇所の亀裂が入っている。家を一通り見回すと、近所の人達の人だかりに入り各家庭の状態の情報を交換する。幸いに、ここ周辺では死者や行方不明者は出ていないらしい。これは、後に父が言っていたことだが、『ろくに話もしないご近所さんでもこういう時にはコミュニケーションが図れるのだとしみじみ思った』という。裏を返せば、こんな非日常生活にコミュニケーションが図れるのだから、普段はもっと気軽にお互いを見詰め合うことが出来るのではないかと。難しいことではない。日常生活で顔を合わせたら挨拶をする。会釈をするなどでもお互いの印象はだいぶ変わってくる。この地域は今回、たまたま、この程度の被害で終わったから情報を交換する程度で終わった。がしかし、家の下敷きになった人が近所にいたら、円滑に助けられたらだろうか?毎日のコミュニケーションが出来ないのに、その期待は十分に持つとは言いがたいと思う。最初は意識してしまうかもしれない。だけれどもこれからは、こんなときの為に近所付き合いをしてコミュニケーションを円滑に図るべきだと思う。

昨日までの家からみる外の景色は、手前から奥へ広がる大小様々な家の配置はミニチュアの模型をひとつひとつランダムに並べたような感じのありふれた景色。それがまた、綺麗だった。見渡すと日の光に照らされた屋根瓦や寒そうに身を縮めて白い息を吐きながら歩く人。その奥には船が白波を立てながら冷たい青い海を泳いでいる。霞がかかって、はっきりとは見えないがその先には淡路の山々がそびえ立っている。毎日同じ景色を見ると当たり前だと気にも留めなかった景色は震災が起きて家も、建物も、道も、人も変わっていた。もう、全く同じ景色は見られないのだと思った。崩れた家、壊れた看板、壁からむき出しになった鉄筋、昨日まではなかったアスファルトの隆起。沢山のモノが壊れ、砕けていた。

今の人々の心の中とは裏腹に澄み切った空気だった。

9時に父が会社へ行くといいが母はそれには賛成できなかった。それは、もう二度と会えないのではないかという不安に駆られたからだ。自宅は垂水区星陵台、父の会社は長田区菅原通りにある。家から出て欲しくはなかった。これだけ大きい震度の地震でわざわざ出向くのだから心配なのは当たり前だ。ガレージに駐車してある車は今、取り出せない。電動のシャッターになっているのでガレージに入れないのだ。9時半頃に電気が回復した。父はマウンテンバイクでも行くつもりだったらしいが、電気がついたので会社へは車でいったらしい。それぞれがそれぞれの仕事をした。母と祖母は台所周りに散乱した食器の破片類の処理をする。その時、どこを映し出しているのかはわからないがテレビの中継によって地震の規模と被害が画面いっぱいに広がっていた。それはまるで、地獄絵図を再現した映像だった。中継のヘリコプターが映し出したのは業火に吞まれる建物や立ち上る煙と共に人々の叫びが空へこだましそうだ。戦慄の映像はしばらく続いた。後に阪神・淡路大震災と名付けられた天災は人生を大きく変えることになる出来事だった。

父が会社へ行っていた時の話は凄かった。あの、映像の通り凄まじい。父の会社では仕事の関係上、地下タンクにガソリンを溜めてあるらしい。ボイラーを回したりもすると聞いた。父が自宅から長田に向かうまでに会社に関して思うことは、ガソリンのことだった。もし、溜めてあるガソリンのタンクに亀裂が入り引火してしまったら大惨事になると思ったからだ。ふと、須磨港の辺りで天井川の方を見ると、もんもんと黒い煙が長田の方から上がり黒筋がたっている。窓からは崩れたり傾いたりして家が見える。そして、白い車のバンパーに白いものがふわりと落ちてきた。・・・雪？しかし、落ちてきた雪はいつまでも溶けやしない。目を細めるとそれは雪ではなく、あの立ち上る煙から吐き出される灰だった。長田の煙がここまでできていたのだ。普通、片道40分くらいで着く会社への道のりは結局、2時間近くかかったらしい。須磨港を越えてからの道が大変混んでいたと聞いた。会社に着くと自分が事務を行うために所有している木造2階建ての建物と同じく隣の会社の木造2階建ての建物は潰れていた。車庫兼住まいとして使っていた1階部分は車共々、ペチャンコ。道路を挟み、その建物の向かいにある作業を行う方の建物は何とか潰れていない。無事だった。会社は潰れていないが何か違和感がある。東側を向くといつもは6階建ての建物にさえぎられて、見えなかったはずの太陽が顔を出している。北に傾いた建物は今にも音をたてて崩れそうだったという。その後、仕事も出来ない状態だったので正午には出社していた従業員を帰らせ、母方の祖母の家を訪ねようとしていた。会社から程遠くない場所にある祖母の家はとても、古い。単車で迎えに行こうとした父は消火活動で河川から水をくみ上げるためのホースに乗り上げ、痛い目を見たと言っていた。車に乗り換え、新開地まで車を走らせ、北へ向かう。ひときわ陥没が目立ったらしい。当時、トポスというダイエー系列の大型スーパーも倒れて、夢野を通り祖母の家と着いた。M字型に変形し瓦解した祖母の家の中へ靴を脱いで入ると、自宅よりひどい有り様に呆気にとられた。もしかしたら・・・。一瞬、不安が頭をかすめる。どうにかして、不安を拭き捨てて必死で探すが見つからない。『おば一ちゃん！生きてるんやったら返事せーよお！』声だけが虚しく消える。応答なし。すると、近所の人々が長田小学校へ避難していると教えてくれた。小学校へ迎えに行くと、支給された毛布を抱えて震えた祖母を確認した。父がどうやって家から出たのかと聞くと、壁と箆箆にできた隙間にいたところを見知らぬ人に助けってもらったと顔を強張らせて言っていた。そして、自宅に連れ帰った。帰りは板宿から南に走り国道を通り抜けてやっと、垂水に着いたという。母も祖母を見たときは嬉しがっていた。翌日、18日に父と母は親戚の家を訪ね、新長田まで足を運んだ。信号待ちでは建物がまだ燻っているのか、何か猛烈な臭いと、まだ冬なのにタイヤが溶けそうなくらいの暑さに見舞われたらしい。親戚は家にはおらず、長田神社に避難していて無事だった。

2日、3日が経った日、両親の中学からの親友の一家4人がうちへやってきた。これで、自宅には父、母、祖母が2人と僕、弟、親戚が2人、今回新しく来た一家で合計11人になる。こっちに来た原因は地震で家の前に通っている道路のアスファルトが陥没してガス管に異常をきたしているらしい。確認の検査のため、少しの間こっちに泊まるらしかった。相手の家族構成はおじさん、おばさん、僕より8つ年上のお兄ちゃんと6つ年上のお姉ちゃんがいた。家も近かったし、2人共いつも優しく僕ら兄弟を面倒見てくれた。当たり前のことだが長男の僕にはお兄ちゃんやお姉ちゃんはいない。いつも、遊んでくれる2人は本当のお兄ちゃんとお姉ちゃんみたいだった。今でもそう思っている。家族が増えたような気がした僕は毎日がお泊まり会みたいで楽しかった。兄妹が4人になり、遊びにも不自由はしなかった。しかし、それは子供の思うことで親はそれどころではない。まずは最大の問題である水だ。水を汲んだ場所は、家から300m先にある当時、創立間もない星陵台中学校に水を取りに行った。まず、汲みに行ったのは母だ。勇ましい。ポリタンクを自転車の荷台へ、背中にはペットボトルを2つリュックに入れ、かごにだってペットボトルを置いていた。この時、何回もこけそうになったらしい。家のすぐ裏側には星陵高校があり、そこでも水を汲ませてもらった。家族が協力し男や女関係なく、バケツやおけ、水を

溜めて置けそうなものを持ってみんなで汲みにいった。星陵高校ではおにぎりをいただいた。もちろん、美味しかったが味云々ではなくあの時のありがたみは忘れられない。父とおじさんは車で三木まで水を汲みに行ってくれたらしい。でこぼこした道をひたすら走り続け、やっと汲んできてくれた水だ。その車の中で父がおじさんにこんなことを言い出したらしい。『もし、この100m先で火事が起きていたらこの水でその火事を消そうか？それとも見捨てていこうか？』今の地震を知らない子供たちだったらきっと、火事を消すと答える子供が大半だろう。だけれども、今はそんな悠長な状況ではない。貴重な水をまた、長い道のりを越えて汲みにいかなければならないのだから。火事だって本当に起こっているのかもしれない状況下なのだ。その問いにおじさんは答えなかったらしい。というか答えられなかったのだろう。もちろん、何が正しいかなんて今、答えを出せと言われたら僕も困る。他にも問題は沢山あった。ガスに食料に人間関係。しかし、僕の中での最大の問題は人が死んでしまった事実を知ったときだった。実は、お兄ちゃんとお姉ちゃんのおばあちゃんが今回の地震で死んでしまったらしい。大人同士の会話は幼い僕でもわかったし、不安だって感じられた。襲い掛かる空虚感や、不安、虚しさ。日が経つに連れて溜まる疲れ、何をどうしたらよいのかわからない、どこに怒りをぶつければよいのか矛先が定まらないこの苛立ち。そんな環境にいたせいなのか“この人たちを助けてあげたい。どうにかして、癒してあげたい。”次第にそう思うようになった。これが今の僕があるきっかけの1つになるなんてことはこの時は思いもしなかった。

どたばたした1、2週間はあっという間に過ぎた。自宅ではお風呂に入れなかったのも、銭湯に入りに行こうともした。多少、待つことは覚悟していたが銭湯の店の中へ入るだけでも3時間待ちはいくらなんでも待てはしなかった。しかし、入らないわけにはいかない。後日、親戚のおばさんの家へお風呂を家族全員で借りに行ったことを覚えている。毎日が同じ繰り返し。何かにしがみついていなければ、不安と恐怖に駆られ、地震発生時のことを思い出してしまう。だから、あの時の大人たちは“今”を生きることに必死だったと思う。父は朝、6時に自宅を出て、晩の12時に帰宅した。仕事にはボイラーを回さなければならなくて、ボイラーを回すには水が必要だったらしい。垂水区では1ヶ月が過ぎる頃には水は回復していたが、ガスの復旧はまだだった。知人に借りたポリタンクを使い仕事をしていた。水が1tも入るポリタンクをトラックの荷台へ乗せ、母は庭の水巻き用の蛇口からホースを使い、空っぽのポリタンクの腹を満たしてやった。水が無くなったならそこで仕事は終了という毎日。水がなくなり元気のないポリタンクは父が一生懸命働いたという印でもあった。そして、1日、1度のポリタンクの食事は仕事へ情熱を注ぎ込む父のエネルギーだとも思える。自分の会社は幸いにも潰れなかった。今、同業者たちは仕事が出来ない。他の会社が下請けから頼まれた仕事を請け負う。こんな時にこそ助け合わなければならないと言う父は頼もしかった。1、2週間の中での出来事にはこんな、悲しい話も聞いた。ボランティアでおにぎりや菓子パンを配っている人達から食料を貰いそれを別の場所で売っている人もいたそうだ。本当に信じられない。窮地に追い込まれてその人の本性が表れると言うがまじまじと感じ、なんだか裏切られた気持ちになった。

2ヶ月が過ぎた。いつからか定かではないがこのぐらいから学校に通っていたと思う。僕がその時に通っていた東舞子小学校も生徒数が多かったのに、地震の被害にあって生徒数も少なからず減っていた。今まで、1組から5組のクラス編成だったのが、Aクラス、Bクラス、Cクラスと名前も変わりあたふたした学校生活になっていた。各クラスに担任がいたのかどうかかわからないが先生方みんなで生徒をみるような方針だったような気がする。学校生活が変わったのはそれだけではない。些細なことだが歯を磨くときの水道の使い方、ビンに入っていたはずの牛乳は紙パックに変わっていたし音楽では“幸せ運べるように”という地震で亡くなった方へのメッセージと地震から学んだことを歌詞にした素晴らしい曲を教わった。ある日、母が長田の町を見に行こうと言い出しその日、僕と弟は長田の町の現状を車の窓から見るようになった。テレビで見た映像とは違い静まり返った町の様子はかえって不気味に思えた。炎こそ上がっていないが、全体重を棒の突っ立てに預けた家や所々に壁が黒くなった家を沢山見た。時たま、家の原型もないほど真っ黒になった家も見た。その周りの家も焼けただれて半壊状態になっていた。その家をじっと見ながら、僕は“ここに住んでいる人は？”などと考えていると母は『消防士さんが消して助けてくれたんだね。』と僕的心情を察すように言った。どんな形であれ、人を助けられるような人間になりたい。こんなことの出来る消防士は幼い僕に安易にスーパーマンを連想させた。

震災から1年、2年と月日が経つにつれて記憶は薄くなり、嫌な出来事は少しずつ忘れていきそうだった。忘れ去っていくのは当時の記憶だけではなく教訓を活かし、次に備えようとする意思まで曲げていった。水や食料、ガスコンロ、懐中電灯を置いていたのは震災発生から2年、黙祷を行っていたのは小学校卒業まで。1月17日が来る度にしっかりしなければという思いはあるのだが、今のことを優先してしまい、ついつい先延ばしにしてしまう。しかし、それは逆につらい経験の中にも余裕があったからではないかと思う。筆筈に下敷きになったり、ご飯が1日食べられなくなってひもじい思いをしたりし

なかったから実行に移せない自分がいる。2度とは起こって欲しくないがまた、次も何とかなると心に甘えや隙が生じている。祖母のように心に傷を受けた人は今でも微震がきただけで、体の震えが止まらないらしい。今、現在、高校に入学して2年間と少し地震や災害について学んでも、まだ、しっかりと準備が出来ているとは言えない。こんな甘い心構えではいけないと思う。神戸には地震が来ないという根拠のない安心を捨てなければ、9年前の同じことの繰り返しになる。当たり前なのだがまずは、自分の意識改善から行うことが、安心して暮らしていける明日への第一歩だと思う。

震災体験

城倉 剛
神戸市垂水区

1, 知った教訓

あの地震の前日1月16日に母に叱られた事を今でも覚えている。何の偶然かはわからないけど、その日は新しい懐中電灯を買った日だった。

当然であるがあまり懐中電灯に触れる機会がなかったので、喜んで遊んでいた「いざという時使えなくなったらどうするん？」と言われた。その言葉には耳も貸さずに遊び続けていつのまにか寝てしまっていた。いざという時が数時間後に迫っているとも知らずに・・・

- 懐中電灯とスリッパは枕元に置いておく事を学んだ時耳が痛かった。この重要性はやはり足の危険の回避と安全に行動するためにある。震災後懐中電灯の設置場所は一定の場所に固定する事になった。更に環境防災科に入ってこの事を学んで親に伝えた事によって、今では家族全員の枕元に懐中電灯が置かれるようになった。
- どの市町村にも、大体避難所が定められている。一時避難場所は一時的に様子を見たり集合したりする場所で、広域避難場所は付近の被災者や住民の避難場所。避難所は、家を失った人や、二次災害の恐れのある人々が避難する宿泊ができる場所。でもどの避難場所もその住民全員が避難できる避難場所はないということを理解しておかなくてはならない。
阪神・淡路大震災でも、応急の避難所となった学校などに収容できたのは、被災者の12%でしかなく残りの88%の人たちは、電気・水道・ガス・電話が途絶えた自分の家で暮らさなければならなかった。自家用車や公園、グラウンドで不安な夜を過ごした人も大勢いた。

2, 死にたくない

1月17日何の変哲もない平凡な一日となるはずだった。全てを一瞬で変えてしまったのは一分にすら満たないほんの数秒の揺れだった。「地震や！」という母の大声があの日朝の知らせた。「こんな朝っぱらから何やねん？」というのが母の声と最初のごくわずかの間の揺れに対する感想だった。それは次第に恐怖へと変わっていった。家の壁が崩れ落ちそうなくらい揺れて、本棚の本は散乱し、ゴジラでも襲ってきたような感じだった。

父は僕と兄を一つの布団に入れ、上から自分の布団と父自らの体で上から落ちてくる物から守ってくれた。幸い寝ていて地震の存在にすら気付かなかった弟も含めて家族に怪我人はでなかった。とりあえず外に出て余震が収まるのを待つ事になった。

寒かったからなのか、恐怖からかはわからなかったが、僕の体からしばらく震えが止まることはなかった。8年間の人生で初めて「死にたくない、死ななくて良かった。」と心底感じた1日となった。

- 父の行動もどこに誰が寝ているのかをあらかじめ知っていたからできたことで、些細な事かもしれないが立派にコミュニケーションがとれていた証拠である。僕の父はわりと社交的で喋りやすい雰囲気をもたらし、家族全員とまんべんなく話すことができている。この時代家族の中にあっても関わりが少なく、会話すらも少ない家族も少なくはないので、父の家族への接し方というものこれから人生で家族というものを持ったときの手本としていきたいと思う。また父の社交的な態度は近所の人にも変わらず色々な人と接している。本人がコミュニケーションと思ってやっているのかはわからないが、防災を勉強している僕が目にはとても重要な事をしているように映っている。

3, 使えなければ意味がない

家に入った時には前日までの物の配置を思い出せないほどグチャグチャになっていた。まだ外は薄暗く、電気も止まっていて、日の光で家の中が明るくなるにはもう少し時間がかかりそうだった。

そこで前日買った懐中電灯の出番だ・・・というはずだったがどこにおいたかまったく思い出せなくて、真っ暗な家の中父と母は防寒着を探しに入っていた。その後すぐに電気は復旧した。母に「用意

してあっても使えなければまったく意味がないのよ。」と叱られ、小学2年生ながら反省しきっていた。

- どこにおいてあったのかわからなかった時もそうだし、電池が切れていたなどの使えない状態が一番怖い。あるものと思って行動するのに使えなかったら余計なパニックを招く事になる。僕の家では1ヶ月に1回くらいの割合で電池や電球のチェックをするようにしている。これまでそれが役立った事は震災以降ないが「災害は忘れたころにやってくる。」という教訓を忘れないためにも続けていきたい。

4, 高速倒壊

衝撃の映像だった。高速道路が倒れていた。テレビがついてはじめてこの地震の強さ、大きさ、激しさを知った。つい2週間ほど前に大阪の従兄弟の家に行った時に通った高速道路が倒れていた。それまで地震といっても震度1か2くらいしか体験したことのなかった僕は「同じ地震なのになんでこんなにちやうんやろか?」と感じた事を覚えている。日が昇って明るくなったところ父と母は、片付けに僕らがいると危ないと感じたのか地震の直後というのに「どっかで遊んでおいで」と言って家から出した。

僕は半泣き状態で家を出て弟と話して時間を過ごした。弟といっても双子だったので年も同じで他の子供に比べたら心強かっただろうと今になって思う。とりあえず連休明けで学校に行こうと二人で小学校に向かった。当然学校が開いているわけもなくすぐ帰ることになった。

- 高速道路の倒壊については改めて説明する必要もないので省くが、やはり耐震性といわれるものが問われたす先駆けとなったものでテレビなどのメディアを通じて大々的に報道された。昭和時代の手抜き工事なども問題になった。

5, 地球に怒り

家に帰ると大方の割れた食器や本が片付けられていた。平日の昼間に父がいるのもそうだし、やけに外が騒がしい事に違和感を覚えていた。父に「なんでこんな(地震)が起きるん??」と聞くと「地球が怒ってるんや」と答えてくれた。今考えるとアホちゃうかと思うけど、あの時の僕にはベストな答えだった。

- 子供の心は大人以上に傷付きやすくもろいものだとし心の勉強で学んだ。あの時父がそこまで考えて発言したのかどうかはわからないけど、明らかに理解しやすく原因がしれて少し安心した。
- なにかショックを受けると個人差はあるがほぼ同じ反応を起こす。一日や二日でも強いストレスがあると体に症状がでる。

PTSD(Post Traumatic Stress Disorder)とよばれる心に障害をもった人々で、その人達と接する時は次の事を注意する。

- ・ トラウマは自分の身を守るために冷凍されているものであり決して悪いものではない。
- ・ 横に誰かいると安心する。その時は上のことを説明する。
- ・ 何でもかんでも心の問題にしない。その本人が気にしていなければあまり問題として取り上げるのは良くない。むしろかえって悩ますこともなりかねないので注意する。
- ・ 励ましの言葉でも「頑張ってるね」よりも「頑張ろうな」というような感じのほうがよい。その本人は十分頑張っているのに頑張れと言われてやりにくくなるので、一緒に生きてくと言うことを強調する。
- ・ 年齢は低いほうがショックが強い。とくに幼稚園児などは周りの迷惑なども考えられないので自然な感情行動となって現れる。その時は安心させてあげるが一番に考える事。
- ・ 小学生は幼稚園児よりも意図的に行動を起こす。心のケアには安心させる事が一番大切になるので安心して甘えられる環境を作ることを周囲の大人達考える。
- ・ 震災がその人にとってどのようなショックを与えたのかわからないので相手の気持ちを理解できるように努力する。
- ・ 知識はあるのとないないのでは大きな違いがあるのであからさまに勝手な判断は良くない。
- ・ カウンセラーすることよりもその被災者にとってなにが必要かを考える。

6, 避難所へ・・・

僕がそれまで住んでいたのは古いマンションだったので、壁には無数の亀裂が入り、余震で大きいのがきたら倒れるんじゃないかと不安になり、その日の夕方から小学校の体育館での避難所生活が始まった。今考えれば避難するほどじゃなかったのかもしれないが安心したのは事実だった。僕ら以外にも数十家族が来ていたと記憶している。各家庭、車で必要な毛布や服を運んできていた。僕や弟は学校の体育館に泊まれるという事で興奮してはしゃいでいた。2つ上の兄は僕らよりは周りの空気が読めたのか静かにするときは注意してくれていた。父は知り合いの人と一緒に食料の配給の事や避難所のルールみたいな事をきめていた。二人はリーダー的存在だった。

●避難所については実際にその時にならないとどうなるかなどは言えないが、学校が避難所となる経過は以下のとおりとなる。

- ・ 避難所の開設
- ・ 衣類の配布（体育教官室の私物、備品などすべて）
- ・ 遺体の安置・搬送（教員の自家用車で体育館から区役所へ）
- ・ 重傷者の病院への搬送（教員の自家用車で）
- ・ 倒壊家屋より生存者の救出、遺体の搬出
- ・ 避難所への誘導（グラウンドから体育館へ）
- ・ 学校事務室を仮本部とし、緊急電話の設置
- ・ 学校備品の毛布・布団をすべて避難所へ配布

僕が行っていた避難所では遺体の安置などは行われなかったがほとんどが同じことになっている。

●避難所を利用せざるを得ない人

1. 火災・津波・崖崩れなどの恐れがあり、危険な住民
2. 避難命令、避難勧告が出された地区の住民
3. 家が壊れたり燃えたりして住むことができなかつたり、余震で壊れる恐れのある家の住民
4. 通過中・訪問中で居住する所がなく、一時避難する人

7, 避難所生活

避難所では普段学校の体育で使う体操用のマットを各家庭1～2枚使用してそこで過ごした。僕等は体育の授業でも一番人気のあったフカフカのやわらかいマットを使った。地震からわずか1、2日で父は仕事に行ってしまった。普段車にしか乗っていない父の原付に乗る姿は何故かおもしろかった。配給で配られた食べ物はおにぎりやパンがほとんどで、飲み物も缶の烏龍茶しかなかった。どうやって食べたとか、どんな感じだったのかはあまり思い出せないがただ晩御飯にしては物足りないと感じていた。トイレは幸いにもすでに水が復旧していたので困らなかった。ただ体育館にはトイレはついておらず校舎まで行かなくてはならなかったので夜中は怖くてたまらなかった。テレビは避難所に一つしかなく基本的に震災関係のニュースが流されていた。その合間を見計らって、当時放送されていた「キテレツ大百貨」を見たのを覚えている。子供は僕等だけでなかったので当然テレビも毎日見たいのを見られるわけもなく少し不満だった。チャンネルは大人優先だったので相撲も割合的に多かった。僕等は退屈だったが当時流行っていた「若貴兄弟」が出る時だけ熱烈に応援していた。ある時「貴乃花」コールを5人くらいの子供でしていると一人のおじさんに「うるさい！」と怒られた。僕等はたいして見たくもなかった相撲をどうにか楽しもうとしていたのに水をさされた気分になっていた。多分大人たちも、だんだんいらだってきていたのだろうと今なら思える。実際何も考えなくて良い僕等でさえ、最初はただのお泊まり会みたいで楽しかったが3日も過ぎるとだんだん不安になっていっていた。

●震災により、それまで居住していた空間を離れて避難所生活を余儀なくされるようになった人々は、まず、プライバシーの欠如に直面することになった。場所によりその現われ方は異なるが、学校の体育館などで避難所生活を送る場合、同じ空間で他の家族と生活することを求められる事になった。現代の生活では、近隣関係は若い世代を中心にあまり深くない。これは閉鎖的な核家族の形成が原因となっている。これまで家族は、外部と一定の距離を置くことで、家族内の情緒的結合を深め、「家族の愛情」を規範とすることができていた。このとき、外部の視線は忌避される。ところが、避難所の空間では外部の視線を遮断することができないため、避難所の人々は、色々な資材を活用し、外部（他の家族）との間に壁をたてようとする。それは、遮断する意味での壁であると同時に、

心理的な遮蔽幕でもある。こちらから向こうへの視線が通るということは、向こうからも視線が通るといことになり、避難所生活をする人々の姿勢はしばしば低くなっている。それは、外部の人々にとって自分が不安の視線を放つ源にならないことと同時に、自分に不安を感じさせる視線を受けつけないということでもあるのかも知れない。

- もう一つ問題としては、家族内のプライバシーの問題がある。通常、行政の対応でも、家族間のプライバシーの問題はともかく、家族内、特に夫婦間のプライバシーの問題はあまり深刻な問題として考慮されないことがほとんどである。しかし、実際、避難所の生活を経て夫婦関係が悪化し、避難所を出た後に離婚に至る事例などが報告されている。これは、避難所生活だけが直接の原因となっただけではなく、それ以前からの関係の悪化が避難所生活という逃げ場のない共同の生活空間で噴出したと考えることもできる。
- 避難場所で、公園で、路上などで、被災者を助けたのはボランティアだった。特に若い人たちの自発的個人参加が多く 1995 年はボランティア元年とまで言われている。水汲み部隊、炊き出し部隊、ドラム缶風呂、トイレ掃除隊などに分かれて活動した。また、医療や老人介護、外国語のできる人は避難者通訳など、特技を生かした個人ボランティアも頼もしい存在となった。生協や労働団体、宗教、政党、市民団体など、各種の団体も組織的にボランティアを派遣した。災害発生直後は水、食料、トイレなど、生きるための最低限のものが必要だったが、その後、行政が対応してくると、行政の手の回らない部分をボランティアが補うというかかせない存在だった。「パンク無料修理」で大忙しの外国人グループもあった。ひととき喜ばれたのは、「入れ歯をすぐ作る」歯医者さんグループや、「メガネ修理隊」「無料散髪隊」の専門家グループ。バイクや自転車の「無料運送連絡隊」はその機動力を生かして走り回った。大学生などもバイクで活躍した。

8、ささやかな楽しみ

地震が起きてからガスが止まり、温かい食べ物を全く口にしていなかった。季節は冬で体育館も寒い。配給のパンにも飽き飽きしていたら、父が知り合いからカップラーメンをもらってきた。家族分しかなかったの、電気ポットでお湯を沸かし車の中でこっそりと食べた。普段は、スープは体に悪いから全部飲んでではだめと口をすっぱくするという母もその日ばかりはなにも言わなかった。地震が起こったあとすぐに近くのスーパーに行ってみたが、店内はグチャグチャで売れるものがなにもないと言われなにも買えなかったが、3日もすると少しだが営業をやっていた。店長さんは「店の品物も早く全部元どおり仕入れたいけど、みんな食べ物がほしいやろうから先にすぐ食べられるものを中心に仕入れとんねん」と笑いながら父に話していた。

● 食料の受け入れに関して

- ① 食料・物資受入簿を作成し、受入の際には種類・数量を記入する。
・ 食料や物資を受け入れる際に、その種類別の個数を記入する受入簿を作成する。
- ② 作業を迅速に行うために、品物を大まかに分類し、その個数を記入する。また、送付元や受入担当者もあわせて記入するようにする。
- ③ 食料や物資の受入のため専用スペースを設ける。ここで、物資の大まかな個数を把握し、改めて倉庫へ保管、整理する。
- ④ 車両の乗り入れがしやすい場所で、荷下ろしのためにある程度の広さが必要。また、雨天の際にも作業することを考慮すると屋根のある場所が適当。
・ 行政などから来る食料・物資（救援物資）の受入には大量の人員が必要。
- ⑤ トラックからの荷下ろし、倉庫への搬入、物資の分別は重労働だ。ボランティアに協力を要請するなどして、できるだけ多くの人員を集める。
- ⑥ 特に発災直後は、大量の物資が突然（昼夜を問わず）届く場合もある。宿直体勢を組むなどして、物資の受入に 24 時間体制で対応する必要がある。

9、不便だな・・・

僕が住んでいた地域では地震が発生してからしばらく、電気と水が使えなかったがその日のうちに使えるようになった。問題はガスだった。電気も水も、もちろん必要だったのだが冬にガスが使えなかったのは痛かった。ガスが使えないので料理も今と比べると質素になっていた。それ以上に不便だったのは風呂のことだった。僕も世間一般の子供と同じようにお風呂はあまり好きではなかったの、最初は

親に「お風呂に入りなさい」と言われずに「楽でいいなあ」と思っていた。さすがに3日4日経つてくると気持ち悪くなってきた。実際はどうだったのかは分からないけど、僕の周りの友達の家では丁度この時にプロパンガスが増えていたように記憶している。僕は家もプロパンにしようと言ったことがあったが、母は、プロパンは外にガスを置くからまた地震がきたら危ないと猛反対されたものだった。

<電気>

- ・ 震災時は多くの場所で停電があった。復旧作業は全国各地からの応援も受けて約6,000人で行った。
- ・ その結果地震発生から約7日後には全ての家に電気が流れるようになった。
- ・ 電気が他のライフラインに比べて比較的早く復旧できたのは、電線に異常があるかどうかは外からみてもわかったからだった。

<水道>

- ・ 水道への被害は約290億円で間接被害額も加えると370億円に昇った。
- ・ 生活する上で水はトイレなどで必要なもので、全く水が出ない地域には自衛隊の協力なども受け、給水車で給水活動を行った。
- ・ 各地からの協力を得て完全復旧までは10週間かかった。
- ・ 震災後は配水管の耐震性UPや直接断層を掘ってしまうことになるので山にトンネルを通さないなどの対策をとっている。

<ガス>

ガスはライフラインの中でも最も危険なのでガス管に異常がないかを確認するために、一度全てストップされた。

↓手順↓

- ① 一度全ての家のガス配給をストップさせる。
- ② 道路の修復作業及びガス管の破損状況のチェック。
- ③ ガス管に異常がないことを確認し、異常がなければガスの配給を始める。
- ④ 再び全ての家を一軒一軒回ってガス栓に異常がないかを確認し、ガス管を開く。
 - ・ 4項目に並べると簡単に聞こえるが、非常に時間がかかってしまう。
 - ・ 各家を回る時に交通網のマヒが原因でかなり時間がかかった。
 - ・ 全国各地からの応援は総数で3000人以上が集まったが地理上の問題で動くのに少し問題があった。
 - ・ 仮設住宅にはプロパンガスが付けられた。
 - ・ 復旧のための機具は海上輸送によってスムーズに行われた。

↓被害↓

- ・ ガス管が破損していると水が入ってきたり、空気の量が増えたりしてガス以外のものが紛れ込んでいる場合があった。ガス管は道路の下に埋まっているため外からでは確認できないため一つ一つ掘り返して確認する必要がある。
- ・ また空気の量が増えたままだとコンロで火をつけた時に爆発するので細心の注意が必要だった。

ライフラインは人間には欠かせないものなんだと体験し実感し今、再認識した感じだった。

10、元の生活へ・・・

約2週間弱の避難所生活を終え僕等は家に帰った。久しぶりの家は何事もなかったように普通だった。懐かしいとも思わなかったが、地震の傷跡だけはもろに露出していた。親や近所の人達は「今度あんな大きな地震があったらこの家(マンション)はもたないだろうね。」と話していた。そんな不安を抱えながらも再び生活が始まった。すぐに元どおりとはいかなかったが電気と水はすでに使えていたのでそんなに苦労はしなかった。風呂は知り合いの家が電気で沸かす風呂を使っていたので入りにいかせてもらったり、家族で大きな銭湯(近くにもあったがあまり大きくなくて混んでいたため)にいったりした。地震で深刻な被害を出した人達にはもうしわけないが、僕は当時の事を楽しかったと記憶している。それは僕が子供で金銭面とか仕事(勉強)の事を考えなく良かったからだと思う。僕の中では震災はまだ終わっていない。だから今防災という形で学んでいる。次くる災害に何か活かせないと経験した意味がないと思うから学び続ける。

●災害とは被害と災害対応の大きさで被害の大きさが決まる。

災害対応とは社会の災害に対する取り組みのこと

そのまちの防災力を超えたものが災害となる

素因(もともと持っている物)

誘因(その素なっている物、きっかけ)

- ・ 外力の理解の深刻
- ・ 天気予報の向上によって台風などの被害は減った
- ・ 被害抑止とは被害を出さないようにする取り組み
- ・ 被害軽減とはどうしても出るものの被害を最小限に抑えるためのもの
- ・ 災害からの向上
- ・ 最近では爆弾テロの被害も災害となっている。

参考 (<http://www.bo-sai.co.jp/sub6.html>)

蘇るあの日、あの時

杉田 かなえ
宝塚市

私たちは埼玉から宝塚の母の実家へと住まいを移し母の両親とともに生活をしていた。私は5歳、弟は2歳。母は仕事に出ていたため、祖父祖母に面倒を見てもらっていたのだ。その2年後、私たちは祖父祖母の家からほんの目と鼻の先の家へと引っ越した。それでも毎日遊びに行ったり泊まりに行ったりした。しかしそんな楽しい生活は突然なくなった。

1995年1月17日早朝。

地震など知らなかった。雷かと思った。ドーンというけたたましい音がして目が覚めた途端、上からタンスが降ってきた。本や体験談などで地震直後の話を聞く。「ぐらぐらと長く感じる揺れだった。」「とにかく怖く思った。死ぬかと思った。」しかし私はこの二行に納まる一瞬のことしか覚えていない。

今思えば、直後はほとんど恐怖などなかったのだと思うのだ。地震を知らなかったのだから。

揺れがどれだけ続いたのか分からないが布団からでるとまず目に入ったのが食器棚だった。通路をふさいで倒れていた。部屋の中はタンスと食器棚以外はいつもの家の中とあまり変わらなかった。母が「地震！地震や！」と言ってやっと私はこれが地震だったのだと気づいたのだ。

しばらくすると、ドンドン!!と玄関のドアをたたく音がした。祖父だった。地震の揺れのせいでなかなか開かないドアを母が無理やり開けると祖父が大きな声で叫んでいた。何の話をしていたのか分からなかったが、推測すると来てくれ！ということ saying 言っていた。母は慌てて外に出て行った。

かなりの時間が経ってから母が祖父の家から帰ってきた。私たちに「おじいちゃんの家が壊れて、おばあちゃんがまだ中におって見つからない。」と言った。そしてその後初めて外に出た。なんともいえないガスのにおいが立ち込めていた。なぜか私は家がどうなってしまったのだろうとわくわくにも似たドキドキな気持ちでいて、ことの事態を軽く思っていた。周りの家やマンションがなんともなかったというのも原因かもしれない。母は祖父の家には危ないから近づくなと言っていたのでさらに思いは募った。少し歩けば見ることもできたし、近づくこともできたがそのときの私は母の言いつけどおりに家にいた。

そこからしばらくは覚えていないが、昼ごろだったと思う、母といっしょに祖父の家へと行った。家はいつもより小さくなっていて、1階がなくなっていたからだった。まるでおもちゃのように車も1週間前に買ったばかりの自転車も瓦礫の下でつぶれていた。弟のおもちゃがところどころ見えていて瓦礫は道路まではみ出していた。砂埃がその建物を覆い隠すように不気味に舞っていた。こんな中でどうして祖父が助かったのか不思議だったが、後に聞くと祖父は地震の揺れが始まりすぐに目が覚め、とっさに窓から逃げて助かった。危機一髪だった。

見つからない祖母を探すため、祖父と母はその家の周りで祖母の名前をずっと呼んでいた。というよりは叫んでいた。人が集まりだし、遠まきに見ている人もいる。

私は家がこんな状態になっているとは見るまで思いもせず、本気でこれは夢ではないかと思った。でも夢ではなかった。倒壊した家の瓦礫を取り除けば見つかるのではないかと大型重機がやってきた。ショベルカーが2台駆けつけ、一台は屋根が崩れないよう支え、もう一台で瓦礫をすこしずつ取り除いていった。その間も祖母の名前は呼びつけられていたが、返事はなかった。親戚の人は、祖母の生存は難しいのではとこぼしていた。しばらく搜索され、とうとう祖母が見つかった。やはり手遅れであった。二階へとあがる階段近くで発見されたらしく、あと少し地震発生が遅れていたら祖母は二階へと上がっていて助かっていたかもしれない。危機一髪で助かった人もいれば、紙一重で亡くなった人もいる。この差はなんだったのだろうか。私には分からない。とにかくこの日一日は長く感じた。

一見普通に見えたまちも道路に大きな亀裂が入り、電信柱が傾いていた。水道管が破裂して道路からは水が噴出していた。まちはボロボロになっていた。とくにコンビ二は、商品は早々になくなっており、ガラスは割れ店内はどろどろであった。それでもなにか食べものや商品を得ようと人だかりができていた。それだけみんな必死だったのだ。

その夜マンションの向かいの人がまた地震があったら危ないからと、親切に私たちを車に乗せてくれた。母はいなかったので2人で車に乗った。夜、なかなか眠れず朝とはまた違う不安まじりのドキドキに襲われた。ドラマやテレビでよくあるように、このまま寝て起きたらすべてが夢だった!というのを望んでいたのかもしれない。

こうして1月17日は過ぎ、朝になっていった。

地震発生から翌日私の記憶ではこの日はほとんど覚えていないが母の話を聞くと、テレビのスイッチをつけると長田が真っ赤に燃え、煙がもくもくと立ち込めているところや、元の原形なく倒壊した家々が目に飛び込んだ。そして阪神国道の倒壊のニュースを見たときゾッとした。そして母の顔色が変わった。それは、父方の母が阪神国道横のマンションに一人暮らししていたからだった。さらに足が不自由であるために余計に不安に駆られたのだ。しかしテレビ画面をよくみると横倒しになったコンクリートの塊の反対側に茶色いマンションが無事に建っているのを確認することができた。もし阪神国道が反対に倒れていたならばマンションに直撃であったのだ。危機一髪だ。

この日もとにかくバタバタとしていて情報も困惑状態だったのだが「〇〇町の△△でも家が倒壊していた」「〇〇で救援物資が配られている」と自転車で近所を回り、地域の被害情報や援助の情報をみんなに伝えていたおじさんがいたことによって助かった。母はおじさんの情報を聞いて自分達だけではないことを知ったという。仁川は宝塚の中でもかなり西宮寄りで我が家から西宮までは歩いていける距離であった。橋を渡れば西宮なのだが、橋から向こうの西宮はあきらかに多くの家が倒壊していたのだ。この地域でいったい何が違ったのか不思議であった。山地では地すべりがおこり、家がのまれていた。国道の柱は90度曲がり、鉄筋がまるで水あめみたいにやわらかく曲がっていたのだ。地震発生から数日後であったが、その国道の下を親戚の人の車で通ったときこのままこの柱が倒れてきたら死ぬだろうなあと子供ながらに思った。

震災時西宮の地すべり被害を受けた場所は現在、地すべり資料館（記念館）となっている。今まで行ってみたいとは思っていたが、なかなか足を運ぶことができなかった。こうした中で去年の夏その地すべり資料館に行ってきた。地滑りが起ったときの被害や状況などがパネルで展示されており、現在地滑りが起こる可能性のある危険な地域も表されていた。対策として地すべり自動観測や地震観測システム、対策工事を紹介する模型、ビデオ映像により土砂災害について学ぶことができる。また屋外では、集水井工上部や井桁擁壁などの対策工法、伸縮計などの観測計器を実際に目にすることができる。もちろんこの対策は実際に西宮で行われているのだ。

祖父の家が倒壊したため、祖父や母の兄は私たちの家で寝泊りすることになった。この冬はとても寒く、救援物資でもらった毛布や偶然にも16日に購入していたカーペットなどで暖をとっていた。早々に電気はついて水も出た。ご飯はカップラーメンやカンパン、缶詰であった。かんぱんは初めビスケットみたいとおいしく食べていたのだが、今はもう震災以来食べていない。味も忘れた。悪いことに、家で保存食としてカンパンはおろか水さえ保管していないのが現状だ。こう振り返らない限り、時間の経過とともに震災体験や地震での出来事は忘れられてゆくのだと深々と実感する。

ガスは水、電気ほど復旧されておらず、全く出なかったためもちろんお風呂に入れなかった。ガスが出ていた親戚の家でお風呂に入らせてもらったり、武庫川の河川敷の銭湯に出かけたりした。母は弟を前のカゴに私を後ろに乗せて武庫川の銭湯まで自転車を走らせた。銭湯には多くの人が駆けつけ行列であった。私たちの並んでいる所の前に1～2歳の小さな子供を抱いたお母さんがいた。その人もここでお風呂が入れると聞いて車で来たらしく自転車で来た私たちを車で送ってあげると提案してくれたのだ。銭湯に入った後、小さな子供を抱えた奥さんが出口で私たちを待っていた。母は自転車もどろどろで車を汚してはいけないのでと断ったが、本当にありがたかったと母は言った。

また、知人数人が大阪から歩いて私たちの家まで水や食料など大量に持って来てくれた。来るのに数日かかったらしいが家に食料品を置く休憩もせず早々に大阪へ帰ってしまった。これらの事はありがたくとても助かり、不安や心配もやわらんだという。震災によって失ったものの方が多いが、物ではない「思いやり」というやさしい心を得ることができたのではないかなと思う。

数ヵ月後、祖父は仮設住宅に入ることになり、私たちの家からそちらに移った。私たちは祖父の様子を見に行くためよく仮設住宅へと行った。そこは異様な雰囲気や物音ひとつしていなかった。祖父が話してくれたのだが、震災からの苛立ちや不安から仮設住宅では喧嘩やトラブルが多かったという。なかでもペットは大きな問題であって隣近所で口論になっていた。犬は仮設住宅が密集している場所から遠く離れたところで寂しく柵につながれていた。私たちが仮設住宅に行ったときにも騒ぐなよとよく母や祖父に注意されたのを覚えている。これらの問題は解決されるのかどうかまだ分からない。

それから1、2年後仮設住宅から復興住宅へと祖父は引っ越した。毎年1月17日に祖父宅には市から花束が届けられている。「これも10年ふしめになくなるんちゃうか」とぼそっと祖父はこぼした。

たしかに年々震災の事は忘れられてきているように思える。もし、今また阪神・淡路大震災のような地震がきた時、国・県・市の体制がしっかりしていても1人1人の意識が薄れているならば9年前と変わらない大きな被害をこうむってしまうのではないかなと思うのだ。体験した人が地震を体験していない人や子供、地域に教訓を伝えていくことでこの問題は解決されるように思える。私はこの自分の震災体験をたくさんの人に伝えていく為に毎年1月17日に学校で開かれるメモリアル行事で震災体験を語

った。個人から身近な人へ。そして家族へ。職場へ。地域へ。市、国、日本へ。どんどん広がっていくのではないと思う。意識を高める事は誰でも出来る事である。

1つの地震によって多くの人の命が奪われ、長い間離れ離れになった。地震によって私たちは大切なものをたくさん失った。このことは私にとっても忘れられない事である。決して忘れてはならないことである。

地震が起こってから来年で十年という月日が経とうとしている。日本ではいろいろなところで「防災」ということが考えられ進められてきた。しかし世界ではイラン地震のように多大な被害をこうむった国もある。阪神・淡路大震災の何十倍の被災者を出しているのである。私はそのような国々の防災力を高め、少しでも被害を減らしたい。防災知識や防災力さえ整っていれば死ななくて済んだ人は大勢いたはずである。これ以上日本ももちろんだが、世界で起こる災害で亡くなる尊い命を増やしたくない。世界の防災力を高め、教訓を十二分にいかせるよう将来は貢献したいと思っている。

最後に、繰り返される災害に立ち向かうため私たちが地震に備えるべきことは思っている以上に多いのである。1人1人の意識で災害の被害は変わる。このことを忘れて欲しくない。私はその思いを胸にこの震災体験を伝えている。ありがとうございました。

J I S H I N

住友 健太
尼崎市

●阪神・淡路大震災の概要

発生時刻 1995年1月17日午前5時46分52秒
震源 明石海峡 北緯34度36分、東経135度03分、深さ14km
マグニチュード 7.2
被害 死者 6433人
* 約90%が家屋の倒壊による圧死、窒息死

- ・ けが人 約35000人
- ・ 全壊家屋 約10万棟
- ・ 半壊家屋 約10万棟
- ・ 火災の発生 182件
- ・ 避難者数 最大(1月23日)、32万人
- ・ 多くの人が小中学校の避難所で生活
- ・ 地盤の液状化 大阪湾にそった埋立地、海岸平野部で多数発生
- ・ 建物以外の大きな被害
- ・ 新幹線橋脚の落下 8箇所
- ・ JR、私鉄などの高架の落下 12箇所
- ・ 高速道路の倒壊・落下 5箇所
- ・ 水道 地震直後の断水戸数 95万4000戸
- ・ ガス 地震直後の供給停止 86万戸
- ・ 電気 地震直後に停電になった戸数260万戸、2時間後100万戸

参考「兵庫県南部地震データ集」

<http://www.kobe-c.ed.jp/shizen/strata/quake/whatis/index.html#0105>

1、震災まで

震災当時は兵庫県と大阪府の県境にある尼崎市の武庫之荘というところの最寄りの駅から徒歩でそう時間もかからないところにあるマンションの3階に住んでいた。尼崎というと工場が立ち並んでいていかにも空気の悪そうな場所という想像をするかもしれないが、当時住んでいた武庫之荘は海岸沿いにある工場地帯からかなり離れた住宅地で、神戸とはあまり変わらない町並みで、違うところといえば急な坂がほとんどない平野で、自転車で移動しやすいといったところだろうか。

このマンションは築30年以上のかなり古いものだったが外壁は綺麗にペンキが塗られ、とてもそんな昔から建っていたとは思えないほどだった。家族構成は、今は二世帯住宅で祖母と一緒に暮らしているが、当時は両親と兄妹3人の5人で住んでいた。住居であるマンションもそんなに広いわけでもなく家族5人がいるとやっぱりもっと広い家に住みたいと思えるほどで、もし今もあのまま住んでいたら今はどうやって寝起きしていただろうと思う。

そのときの僕は通いだした小学校の雰囲気にもなれ、毎日のように学校が終わってはできたばかりの友達の家に入り浸りテレビゲームにかじりついていてという、ただその時その一瞬を楽しむそんな生活を送っていた。このときはまだ今のように進路に悩まされることもなく、人生設計なんてものもまったく眼中にはない状態で、毎日が同じように繰り返されるものだと思っていた。

もちろんこの後起きる大震災やその後のごたごたがあるなんて考えもしなかった。

2、震災前日から

震災前日、まだ成人の日が1月15日に固定されていて日曜日だった成人の日の振替休日で、この日は冬らしく外の空気も身を切るような冷たさで、天気は晴れ、なのに外に出て元気に遊びまわるわけでもなく家にこもっていた。テレビのニュースではどこかの成人式の映像が流れ、新社会人が暴れている

わけでもなく、これといって興味をひく番組もやっていなかった。正月特番もほぼ終わり世間では年が明けたばかりとは思えないほどにいつもの生活に戻っていた。

まだ3学期が始まってそう日にちもたっておらず、いまだ正月ボケも直っていないので連休の最後の日になると次の日からまた学校へ行かなければならないのが惜しい気がしてならない。そんなことを思いながら、一日中ファミコンに勤しんでいた。

これは余談で関係は多分無いと思うが、おぼろげながら覚えているのは夜ごろ関東あたりで震度3ぐらいの地震が起こっていたことである。

いつもなら東側の部屋で家族5人が川の字になって寝ているのだがその日はなぜだったかは覚えていないが、別の、洋服ダンスや兄弟などが置いてある狭い部屋に弟と2人で、いつも寝ている部屋に父が、そしてもう1つの部屋に母と妹が寝ていた。

起こるわけがないといわれていた関西地方で、戦後最大の被害という未曾有の大惨事として歴史にその名を刻み、後に阪神・淡路大震災と呼ばれた大災害が起こったのはそれから1日後のことである。

3、震災当日地震発生直後

1995年（平成7年）1月17日（火）午前5時46分、それは突然だった。ドーンという音とともに突き上げるような激しい揺れと、その後しばらく続く揺れが起こった。これはこの高校に来てから学んだことだが、最初の揺れが初期微動と呼ばれる縦波で次に起こったしばらく続く揺れが主要動と呼ばれる横波で地震はこの二つの波によって引き起こされるものだという事を知った。

地震が発生した直後、最初はマンションの上の階の人が暴れているせいで起こった揺れだと思った。しかしその揺れはあまりにも大きく部屋の中にあるもののほとんどが動く音、近くでは食器棚が倒れ掛かり中の食器類がことごとく割れていく音もしだし、上の階の住民が起こしているのではないことが瞬時にわかった。そのとき地震が起こったという発想には至らなかったが、これは今まで生きてきた中で体験したこともない壮絶なものでこの揺れは体験したことのない人では想像することは難しいだろう。

本当はそれほど長く揺れていたわけではないが、揺れは1分や2分ではなくかなりの時間続いていたように思う。揺れている間は思うように体を動かさず、どうしていいかわからずとにかく目を必死に閉じ揺れがおさまるのを待つしかなかった。揺れがおさまったときあたりは、いつもなら車のとる音がひっきりなしに聞こえていたがそのときばかりは何の音もせず、完全に静まり返っていた。やはりこれはただ事ではない。僕は今まで感じたことのない恐怖を一瞬感じた。

恐る恐る目を開けて寝た状態のままあたりを見渡してみた。寝る前にダンスの上にあったはずの洋服なんかが入ったプラスチック製のかなり大きな箱や掃除機が見当たらない。よく見渡してみると見事に自分の上に落っこちていた。揺れている間には気づかなかったのによく見てみると体の上にはいろいろなものが落ちてきていた。さらに不思議なことに一緒に寝ていた弟が隣にいない。名前を呼んでも返事はない。隣にいたのは落ちてきた掃除機だけ。まさかと思いその掃除機をどけてみると見事に掃除機が弟に直撃していた。どうなってしまったのだろうと思い体をゆすってみたがまだ返事はない。さすがにここまでやって返事をしないときはいくら小学2年生でも最悪の事態のことを考えてしまう。しばらくの間、といってもその時間は10秒にも満たないわずかな時間であったが、考えているとそのうち弟の寝息が聞こえてきた。よく見てみると弟はこのとてつもなく大きな揺れと飛び交う食器類の爆音にも動じることなく眠り続けていた。

弟に何事もなく安心したのもつかのま、今度はほかのことが気になりだした。揺れがおさまって以降何の音も聞こえないし家の中にいる誰からも何の応答もない。そのうち世界にいるのが自分と隣にいる弟の二人だけになってしまったのではないかと、なんていう不安が襲ってきた。しかし離れたところで寝ていた母から名前を呼ぶ声が聞こえた。眠っていた弟をたたき起こし二人で母と妹が寝ていた布団に転がり込んだ。

そのうち父が散乱した部屋の中、火のついたろうそくを持ってやって来た。近くにあった机の上にあるものを払いのけるとろうそくをそこに置いた。父はろうそくを探す間に何かで切ったらしく指からは血が出ていた。

このときばかりはいつも休みの日には一日中家でごろごろしていて別にどこかへ連れて行ってくれることもなかった、何でこの人はこんなにぐうたらしているのだろうとばかり思っていた父のことがここまですくましく頼りになるのかと、初めて思った。

家の中を散策していた父によると、どの部屋もひどい有様でとても移動できる状態ではなくろうそくを取ってくるので精一杯だったらしい。キッチンのある部屋では食器棚は近くにあった冷蔵庫に引っかかっていてかろうじて倒れずに残ってはいるが、その冷蔵庫もいつ倒れるかわからない状態で、肝心の

中身の食器やコップは完全に床に落ち少し高級でめったに使わなかった皿も無残にもわれ、残っていたのは安いプラスチック製の皿やコップだけだそう。

あたりは電気もつかず真っ暗で水も止まったままで、玄関は靴棚から靴も大量に散乱し同じように傘も玄関一面に散らばっていた。そのとき飼っていた魚の入った水槽もそこには無く靴や傘同様床に落ちどうなっているのかまったくわからなかった。

もう家の中のすべてのものがもとあった場所から移動していてもとの形のまま残っているものもほとんど無かったらしい。父曰くもしかしたらこのマンションももう長いこと持たないかもしれないといってこれから起こるかもしれない余震に十分気をつけていざとなったら瓦礫の中を進んででも逃げるというような話をしていた。

どれほど時間がたったかわからないが外からおそらく付近に住んでいる人だろう、うちの安否を確かめるためか声が聞こえた。父はその声に反応して大声で家族が無事であることを伝えたが、それ以降誰かから声をかけられることは無かった。

そのころには余震も何回かあったが地震の揺れ自体に恐怖を感じることはなくなっていた。不思議とゆれるごとに冷静に周りを見つめるようになっていった。

しかし逆に今度はさっき父が言ったこのマンションがいつまで地震に耐えうることができるかということがどうにも気にかかり大きな余震のときは今いる部屋の床がいきなり抜けたりして、下手をすればそのまま傾いて倒れてしまうのではないかという不安が急に高まって、やたらと周りの音に敏感に反応するようになっていた。そのときには目も暗闇に慣れ回りの様子がじかに自分の目でも確認できるようになった。やはり自分で見た限りでもまるでこの世の終わりのようで、あたりはありとあらゆるものがいつもと違っていった。

当時はまだ今のように極度の近眼ではなくメガネもかけていなかった。もしあの時今のように目が悪くメガネもなくしてしまっていたとしたら、そのとき中ずっと辺りがピンボケ状態で大変だっただろう。もしかしたらもっとパニックに陥っていたかもしれない。

しかしまだ余震のときの音以外はあまり聞こえることも無く窓から入ってくる隙間風の音だけがずっと聞こえていた。そうすると真冬の夜、しかも電気はつかず当然暖房も使えないとなってくると徐々に家の中の気温は下がっていき、やがて部屋にいるにもかかわらず真冬の冷たい風の中に独りぼっちになってしまったような激しい寒さに襲われた。

僕は不安のせいだろうか、自分のいた布団にいてもちっとも暖かいとは思わず、母の布団にもぐりこみ寒さをしのいだ。中にはすでに先客が眠っていたがそこに無理やり割って入って暖をとった。するといつの間にか自分も一緒になって眠ってしまった。そのころ外はおそらく大パニックになっていただろう。しかしそんなこととはつゆ知らず、朝になるまで何事もなかったかのように眠りこけていた。

4、震災当日（1月17日）朝

いつものように朝は来た。目を覚ますとまず周りを見渡した。「さっき起こったことはすべて夢であったのではないか。」そう思った。しかし目の前にあった光景はさっき見たまま何一つ変わってはいなかった。家の中は散々たる状態、床にはあらゆるものが散乱し、家具という家具はすべて倒れ、変わっていたことは回りがより鮮明に映り悲惨な状態があらわになったことと、机のうえにあったものが移動し物が少しばかり置けるようになっていただけだった。

早速倒れていたテレビを起し、いったい何が起こったのか確かめるべくテレビをつけた。もちろん新聞は来なかったし家にラジオもなく情報を手にいれることのできるのはテレビだけだった。そのころはもう電気は復旧してガスも出るようになり電話もつながるようだったが、まだ水はいくら蛇口を上げたり下げたりしても出てはこなかった。

テレビをつけるとやっているのは地震情報ばかり、震源は明石海峡で深さは14km、各地の震度はいくらかというふうに詳しく言っていたが、そのときは何を言っているのかまったくわからなかった。いつもならニュースなんか絶対に見るもんかとすぐにゲームやらに走っていたが、そのときばかりは何か知っている単語を言わないかと食い入るようにテレビを見ていた。そこでわかったことはほとんどなかったが、ただとんでもないことが起こっているということだけはテレビの中の様子から読み取ることはできた。

崩れた家の前に立ってマイクを持ち現場の状態を事細かに説明しているレポーター、瓦礫の前で必死に救助活動をしている映像や各地の避難所の様子なんかをひたすら放送していた。

外ではどんな状況なのだろうと理解しようと努力したが所詮は小学2年生で社会のことなどまったくわかっていなかった。自分にとっては無駄な努力で数十分と持たずテレビに飽きてしまった。

テレビに飽き手持ち無沙汰になってしまった自分が向かった先は台所。そこでは母が木っ端微塵に粉碎された食器の破片採集、そして家の機能を復旧させるため必死の作業が行われていた。

それを尻目に僕は玄関へ向かった、地震のゆれのときに床に落ちて割れてしまった水槽と中で飼っていたフナの事が急に気になって様子を見に行った。すると玄関に落ちているかさや靴の間で何かが動いている。何かと思い見てみるとまだフナには息があり玄関のタイルの上で絶えず跳ね回っていた。僕は風呂場から洗面器とわずかにたまっていた風呂の水をもってきてそれを入れた。するとまさに水を得た魚という言葉に当てはまるように元気に泳ぎ回りだした。そして僕は妹と一緒に大急ぎで裸足のままマンションの近くを流れている川に放してやった。

そのとき見た外の光景は想像していたよりずっと穏やかなもので地震の起きる前とあまり変わっておらず、まるで地震がおきていたのはあのマンションだけだったのではないかと思わせるほどだったが、しかし実際は自分が目にしたことよりもっとひどいことが起こっていたと後から知った。

時間はちょうど12時を回ったころだろうか、昼食を済ませいつもは夕方ごろに翌日のための食品の買出しに行くのだが、その買出しとをもって周りの状況をよく見る事かねて父と一緒にコンビニに買い出しに行った。

川へ行ったときとは違ってコンビニに行くまでの道では倒壊している家はなかったがブロック塀が崩れていたり、屋根のかわらがはがれて道に落ちていたり和小規模ではあるが見た家のほとんどが何かしらの被害を受けていた。自分が見た中で一番ひどかったのは家から阪急の線路を越えた北側にあったマンションの1階のガレージ部分が完全につぶれ地面の上に2階があるというのがあった。

そのマンションは前々から思っていたとおりもし地震が来たらガレージの部分はつぶれてしまうのではないかと不思議に思っていたが、やっぱり思ったとおりになっていた。

後から聞くとあのような構造をしているマンションは地震にとっても弱くほとんどのマンションのガレージ部分がつぶれ2階部分が地面のすぐ上のところまで来ているというものが多かったらしい。

コンビニにはすでに長蛇の列ができ、中身はほとんどからで陳列棚にも品物はほとんどなく、中も人でごった返していた。どうやら品物を搬入してくるはずのトラックが来ず新しい品物がまったく入ってこない状況だった。僕と父は残ったわずかなものをほぼ買い占める感じで、必要であろうがなかろうがとにかくあるものをどんどんかごの中に詰めた。今考えると周りの客も同じような心理状態で見た目には落ち着いているように見えても実際はパニックが起こっていたのだろうか。

外で見たものは小学校2年生の自分から見てもひどい有様だったが家にかえってしまうとそんなことはおかまいなし、テレビをつければ相変わらずニュースばかりでやることもすっかりなくなり再び手持ち無沙汰に。そこで考えたことは日課とも呼べるスーパーファミコンをやることだった。これは我が家にやってきてから1日たりとも怠ることはなくやり続け、しかも1時間や2時間どころではない、風邪で学校を休んだ日ですらやっていたことで、それが地震で電気が止められたことによってすることができなかった。がしかし電気も今ではしっかりと供給され家の中の片付けもほとんど終わっている。そうなるとうとうどうしてもやりたくなってしまう。家にテレビは1台しかなかったが親に頼み込んでやらせてもらった。

5、震災のその後

地震発生から数日、学校の点検も終わりやっと学校が再開された。再会されるまでの間は完全に普段の連休になり、来る日も来る日もゲームに打ち込む毎日だった。友達の家はさすがに後片付けなどいろいろ大変だろうから行かないほうが良いという親の忠告に従っていた。

個人的には学校再開の知らせを聞いたときは休みが無理やり打ち切られたようでいやな気分になったが学校に行ったときは久しぶりに友達にあえて素直にうれしかった。学校ではやはり地震の起きた瞬間の話でもちきりで自分もそんな話ばかりしていた。再開された日の全校集会で校長や多くの先生から震災体験を聞いた。それを聞くと人によっていろいろな体験があつて恐怖を感じたのは自分だけではないと思った。

幸いにも自分の通っている小学校で亡くなった人や家族をなくした人はいなかった。軽い怪我や中には親族やペットが亡くなってしまった人がいたが目立った被害はなかった。尼崎は市全体で見ても被害は神戸と比べるとそれほど多くはなく、家屋の倒壊や施設の破損もわずかで済んだし、死者も1人だけだった。

震災が起こって学校から去っていった人も何人かいたが逆に戻ってきた人もいた。僕の回りでも友達が何人か去っていった。そして僕は震災の翌年地震で傾いたマンションから祖母が住むこの神戸へとやってきた。

神戸へとやってきたときは神戸といえば震災の中心地、被害も尼崎よりはるかに多いと聞いていたが、僕が移り住んだ垂水は震源にかなり近いのに被害は神戸市街に比べると少なく、引っ越したときにはほとんどもとの町並みに戻っていたらしい。

震災からもう少しで10年がたとうとしている。もし地震がおきなければ垂水へと引っ越してくることもなかったし、この舞子高校へ来ることもなかっただろう。地震で僕の人生は大きく変わったといってもよい。もしかしたら今後この兵庫県南部地震クラスの地震にあうかもしれない。そのときこの記憶とともに地震で培った経験とそれによって得た知識を役立てることができればと思っている。

あの日 の 出来事

中井 篤
西宮市

●阪神・淡路大震災の概要

- 発生時刻 1995 年 1 月 17 日 午前 5 時 46 分 52 秒
- 震源 明石海峡 北緯 34 度 36 分、東経 135 度 03 分、深さ 14km
- マグニチュード 7. 2
- 被害
 - ・ 死者 6433 人
 - * 約90%が家屋の倒壊による圧死、窒息死
 - ・ けが人 約 35000 人
 - ・ 全壊家屋 約10万棟
 - ・ 半壊家屋 約10万棟
 - ・ 火災の発生 182件
 - ・ 避難者数
 - ・ 最大（1月23日）32万人
 - ・ 多くの人が小中学校の避難所で生活
 - ・ 地盤の液化化 大阪湾にそった埋立地、海岸平野部で多数発生
 - ・ 建物以外の大きな被害
 - ・ 新幹線橋脚の落下 8箇所
 - ・ JR、私鉄などの高架の落下 12箇所
 - ・ 高速道路の倒壊・落下 5箇所
 - ・ 水道 地震直後の断水戸数 95万4000戸
 - ・ ガス 地震直後の供給停止 86万戸
 - ・ 電気 地震直後に停電になった戸数260万戸、2時間後100万戸

参考「兵庫県南部地震データ集」

<http://www.kobe-c.ed.jp/shizen/strata/equake/whatis/index.html#0105>

●自分と震災

1. 当時の状況

当時小学校2年生だった私は、西宮市の西波止町という場所に住んでいた。父と母と妹の4人で暮していた。父が高校の教員（当時は川西明峰高校に勤めていた）だったので教職員住宅に住んでいた。そこはかなり古い建物で狭かったので少し不満はあったが、一ヶ月の家賃が1万円台という驚異的な安さだったので文句も言わずに住んでいた。家の目の前には御前浜公園というドブのように臭い大阪湾を臨む公園があり、公園と家の間には堤防が高くそびえ立っていた。その堤防を越えると重要文化財の西宮砲台がたっていた。よくその砲台まわりで遊んでいた。遊び終わると友達と一緒に砲台に落書きをしたりしていたので今も西宮砲台には私の字が刻まれている思い出の場所だ。

学校は西宮市立浜脇小学校という所に通っていた。校舎は築70年を越える建物で、出入り口の周辺には第2次世界大戦での米軍による機銃攻撃のあとがあったり、屋上には高射砲のあとがあったり、校庭には『建石の碑』とかいう戦没者の慰霊碑がある歴史の深い学校だった。各学年のクラス数は4クラスで全校生徒は800人を超えていた。学校の校区は大変広くて北は国道2号線、南は西宮浜までであった。戎神社の総本山の西宮戎神社があることからわかるように古い町だったので、古い家や商店街があった。だから職人や自営業の家の子が多かった。実際僕の友達にも大工や洋服屋、呉服屋、飲食店などいろいろだった。

2. あの日 の 前日

その日は当時まで成人の日が15日で、ちょうど日曜日だったので振替休日となり、三連休の最後の

日だった。いつもと同じ生活を送っていた。ただ唯一いつもと違うのは父が修学旅行の引率で3日ぐらい前から家にいなかったことだ。でも私はべつに気にすることもなくいつものように同じ教職員住宅に住む友達と一緒に西宮砲台の周りで鬼ごっこやドロケなどをして朝からずっと遊んでいた。やがて日が暮れるころになると母親が迎えに来た。ちょうどその時普段見たことがないくらい明るく綺麗な夕焼けが西の空に広がっていた。あまりにも明るすぎてある意味不気味だった。

その夜、夕食を食べ、親に叱られながらも宿題をなんとか終わらせいつも通りに9時ごろに床へ就いた。その時はあんな事が起こるなんて誰も思っていなかった。

3. あの時

私はあの日、5時46分に母親に起こされた。兵庫県南部地震の発生時刻と同じ時間だ。当時私は一回も地震を体験したことがなかったので親に「地震があったら教えて」とわけのわからない約束をしており、それを覚えていた母親がふざけて私を起こしたのだ。最初は小さな揺れだったのでそんなおふざけをしようと思ったのだろう。しかし、私を起こしたときに事態は急変した。突然地鳴りのような音とともに物凄く大きな揺れが起こった。まるで遊園地にあるビックリハウスの中にいるみたいだった。もうわけがわからなかった。家がつぶれるのではないかと思った。遠くのほうで「ドーン」と何か大きな物が倒れる音もした。あれは今から考えるとあの音は阪神高速神戸線が倒れたときの音だったのかもしれない。

しばらくして揺れが治まった。ちょうどその時私はトイレに行きたかった。トイレに行くには寝室から台所をぬけて行かなければいけなかった。地震の後なので何が落ちているかわからない状況だったが、何も履かず裸足で普段どおりにトイレへ行った。トイレに着くと便器から水がこぼれていた。和式便所で様式に比べてだいぶん溝が浅いとは言え、普通なら中の水がこぼれることはまずないだろう。その時この地震のすごさを感じた。その後、用を済ますと、急いでまた床へ就いた。

4. 朝

朝、目を覚ますと部屋の中はぐちゃぐちゃだった。台所ではテレビや電子レンジなどが棚から転落していた。不思議なことに食器だけは2～3枚皿が割れる程度（しかもその皿は確か忘年会か何かでもらった安物の皿だったと思う）の被害しかなかった。今から考えるとなぜ私はトイレに行った時にこの状況に気づけなかったのだろうか。よくそんな所を裸足で歩いたものだ。あほとしか思えない。台所の隣にある父の部屋はもっと悲惨だった。父は音楽が好きなので部屋に防音室を作っていた。3畳半しかない部屋に3畳の防音室を作ったのでたいへん狭かった。その中には楽器と録音機材が置いてあった。地震でオープンリールデッキという馬鹿でかい機材が人が中にいたらちょうど足を置く場所に棚から転げ落ちていた。当時父は、朝早くおきて防音室で楽器を弾いたり、夙川のトアロードを散歩したりしていた。夙川周辺も後で聞いた話によると大変被害が大きかったらしい。父が震災に立ち会わなかったのは、あの時はいてくれたほうがよかったと思ったが、後から考えると幸いだったのかもしれない。

家にあった食パンを食べて朝食を済ませると外に出てみた。大人がせっせと買出しや後始末に追われて忙しそうだった。まず、家の前から水が吹き出ているのが目にとまった。私はあほなので湧き水が湧いたとか言って友達とあほみたいに騒いでいたら、近くにいた大人に水道管が破裂したと言われ何かがっかりした。住宅内にいたら誰かに怒られると思ったので、とりあえず住宅から出てみた。するとガスの臭いがした。どこかでガス管が破裂したのだろう。住宅の前に建っていた大きな木造の屋敷がぺしゃんこに潰れていたのでおそらくそのガス管だろうと思った。

友人が家に帰ったので私も家に帰った。家に帰ると母親が後始末をしていた。さっき述べたように食器類が無傷だったので、すぐに片付けが終わった。まだ水が出たので母は浴槽いっぱい水をためた。

私は暇だったのでテレビの電源をいれた。テレビはどのチャンネルも今朝の地震のニュースを報じていた。だが、NHK教育テレビのみは通常通りに放送していた。たしか学校で道德の時間に見るようなわけのわからない動物の人形が動くような番組をやっていた。放送する電気代がもったいないと思ってしまうくらいぜんぜん面白くなかったけど他に見るものがなかったので仕方なく見て時間を潰した。

5. 昼から晩

昼飯は鏡餅を切って焼いたものと、缶詰だった。近所の人は近くの店の商品が全部売れてしまう前にパンを買い占めていたが、私の家はまったく何も考えていなかったので買いにいかねばいけないこ

とをすっかり忘れていた。だから家にあった鏡開きをしておいた餅とカップ麺、缶詰ぐらいしか食べるものがなかった。

食事を済ませてから家の前にあった西波止会館というところに行った。そこには同じ建物の上のほうの階に住む人たちが避難していた（この西波止会館は本来避難所ではなくこの周辺の人みんな兵庫県立西宮西高校（定時制：現在は兵庫県立西宮香風高校という単位制の学校になった）という学校に避難しなければいけなかったのだが、地震直後に西波止会館だけ非常灯が点いていたのでみんな避難したようだった）。私は避難していた友人たちとトランプで遊んでいたら見知らぬ老人に「うるさい。外で遊べ！外で遊んでも死なへんやろ！早よ外行け！ボケ！」と怒鳴られた。その老人は同じ住宅の住民でなかったが行く場所なかったのか知らないが避難してきていた。怒こられたときは納得いかなかった。「見ず知らずのおっさんになんで怒鳴られなあかねん」と思っていた。でも、今考えてみると自分たちが悪いことをしていたと思う。その時あんなふうにしか思えなかった自分が恥ずかしい。

老人に怒られて腹が立ったので家に帰ってTVを見た。民放はいまだに地震情報を流している。しかたがないのでまた妹とともにNHK教育テレビを見た。その時は確か『ハッチポッチステーション』をやっていた。その後『お母さんといっしょ』までNHK教育を見た。TVを見終わってから夕食を食べた。夕食は鏡餅とカップ麺だった。夕食を食べてから何もすることがなかったので、その日はすぐに寝た。

6. 地震後2日目

2日目からは西波止会館に寝泊りすることになった。近所の人たちが「一階は危ないから避難したほうがいい」といって心配してくれたからだ。別に家は大丈夫で避難所だったら気をつかうから家にいたかったのだが、せつかなので泊まることにした。西波止会館は昨日よりも人が増えていた。

その日の夕食はパンだった。同じ住宅に住み以前から家族ぐるみで仲のよかったKさんが地震当日に買い占めたパンの一部をわけてくれたのだ。

その後、西波止会館に戻り就寝の準備をしていた。一階のフローリングは人でいっぱいだったが他に寝るところがなかったので仕方なかった。ほとんどの家庭が折りたたみ式の机で敷居を作って、その中で寝ようとしていた。私たちは一番奥の窓側にスペースがあったのでそこで寝ることにした。壁に備え付けてあった『ぶら下がり健康機』のようなものが足に当たって邪魔だった。

7. 地震後3日目の朝

次の日の朝は「ババババババ！」という大きな音で目が覚めた。何かわからなかったのでエントランス行ったら中年の男性が朝のニュースを見ていた。その人にこの音は何か聞いたら「ヘリコプターの音や」と説明してくれた。「どっかのチャンネルで映ってるかもしれへんなあ」と言ってチャンネルをいじっていたら本当に映っていた。西宮という街は甲子園球場と西宮戎神社以外めったにテレビに映らなく、家の周辺も阪神高速湾岸線が開通したときにかすかに移ったくらいなのではじめてブラウン管を通して住み慣れた街をはっきりと見る事ができた。すごく不思議な感じだった。ちなみにその日の朝食はおにぎりだった。

8. 出西宮 大阪への脱出

その日の午後から大阪市浪速区の新世界にある母の実家に避難することになった。その日の午前9時半に西波止会館を出て阪神甲子園駅をめざした。最寄り駅の香櫨園駅、夙川駅、西宮駅はともに復旧していなかったの少し離れた甲子園まで自転車で行くことになったのだ。行く途中に臨港線という道を通ってあるものを見てびっくりした。酒ミュージアム（白鹿記念酒造博物館）が見るも無残な姿をさらしていたのだ。酒ミュージアムは清酒・黒松白鹿の辰馬本家酒造が創業320年を記念して設立した博物館で、なかでも明治期に建てられた酒造館という大変美しい建物があつた。その酒造館が倒壊してしまったのである。あれは本当に残念だった。幼いときからしょっちゅう行っていたし、その美しい外観が大変気に入っていたし、甲子園とともに西宮の文化を象徴するような建物だったからだ。今はその場所に『UNIQLO』が建っているのだが、今でもあの美しい外観の建物の印象が強すぎてあの前面が五角形の建物があるのが不自然に感じる。甲子園に向かって北に行くにつれて道路が凸凹になっていった。国道43号線のあたりまで行くともうめっちゃくちゃだった。歩道のブロックがばらばらになっていて何回も自転車のタイヤが挟まった。阪神パークまでよく自転車で行っていて平地ということもあってあんま

りしんどいと感じたともなかったが、さすがにこのときはいつもの倍ぐらいの時間がかかっていたので疲れた。甲子園駅に着いたとき混んでいるだろうと思ったのだが、ホームにはほとんど客はいなくてびっくりした。電車は各駅停車しか運行していなかった。いつも阪神電車に乗るときは西宮駅から乗っていたので特急・快速特急・急行といった赤い車両ばかり乗っていたので、各駅停車の青い車両に乗るのは初めてだった。列車に乗り込んだのはいいのだが、なかなか発車しなかった。震災後なので厳戒態勢だったのだろうか、発車しても淀川を越えるまではやたら遅かった。「尼崎センタープール前駅」では普段では信じられないくらい待たされたうえに誰も乗ってなかったのだからいらした。ただ当時僕は電車というものが好きだったので、「出屋敷」や「杭瀬」「千船」「姫島」といった普段聞いたことない駅に止まったりしていたのでちょっとうれしかった。梅田について阪神百貨店の名物イカ焼きを食べて、地下鉄谷町線に乗り「南森町駅」で堺筋線に乗り換えて「恵比須町駅」で下車して新世界の母の実家についたときはもうくたくただった。母の実家は当時質屋を営んでいた。家に着いたら祖母と質屋で長年働いている従業員の人が笑顔で出迎えてくれた。その日の晩飯が何とあの巨大な河豚のちょうちんでおなじみのづぼら屋のお寿司だった。夕食後普段どおりバラエティー番組を見て笑い、風呂に入り、あったかい蒲団に入って寝た。ようやく人間の生活に戻ることができたと思った。

9. 病気発覚

大阪に来てから二日目に体に変化が現れた。唇が異常に腫れ上がったのだ。まるでおばけのQ太郎のようだった。その日の晩、夕食後に通天閣通りの奥にある病院に行った。診断結果は「口唇ヘルペス」だった。口唇ヘルペスとは唇の周りに赤い水ぶくれができる病気で、口唇ヘルペスの症状は、はじめ口唇や口の周りなどの一部が赤くなり、しばらくするとその上に小さな水ぶくれができる。患部には軽いかゆみやほてり、痛みなどを感じ、普通は、水ぶくれがやがてかさぶたとなって、10日～2週間くらいでおさまる。私の場合は症状がひどく、完治するのに、一ヶ月以上かかった。唇の外用薬をもらって、家に帰ってつけてみると唇が青紫色になり、まるで妖怪のようだった。頭には大きな青紫色の疣ができ、頭の頂点が割れて絶えず組織液が流れ出して髪がパリパリになっていた。

10. 転入

大阪に来てから5日目に地元の小学校に転入する事が決まった。その小学校は『恵美小学校』という学校だった。そこは落語家の桂ざこばの母校で創立が明治初期という歴史が深い小学校だった（この後また西宮にもどり、3年後に神戸に引越し転入した『名谷小学校』も創立125年の学校だったので私が通っていた小学校は3つもあるのに全て創立120年を超える古い学校だった）。公立の小学校なのに制服があった。どうも大阪市の小学校はみんな制服があるみたいだった。初めての制服だったので新鮮だった。恵美小学校は阪堺電鉄の「恵比寿町駅」と南海電鉄の「今宮戎駅」の間にあったので、授業を受けていたら常に電車の音が聞こえた。グラウンドに出ても東西どちらかを見たらたいがい電車が通っていた。校区には商店街や市場が数多くあったので職人の子が多かったし、ミナミや新地に近いことからホステスの子も多くあの時代ですでにクラスに3人以上茶髪がいた。今までいた学校もたいがいガラは悪い方だったが恵美小学校はあまりにもすごすぎた。担任の先生もガラが悪かったし、隣の席の子は金髪だった。最初はそんな人たちを見ていたらビビったし、馴染めるかどうか不安だったが隣の金髪の子などが率先して話し掛けてくれたのですぐに馴染めた。家が近かった友人は毎朝迎えに来てくれて、その子とは一番仲良くなれた。一度家にも遊びに行ったがたいへん気をつかってくれた。本当にいい奴だった。あと給食のメニューが西宮に比べてやたら豪華だった。給食のメニューといったら筑前煮やおでん（関東煮）といった地味なメニューが主だったのに、大阪の給食はカレーうどんやてんぷらといった華やかなメニューだった。それが何よりも嬉しかった。転入して少したったある日、地元のライオンズクラブから大量の文房具をもらった。それも全てに名前が彫ってあったりして大変豪華なものだった。祖父もライオンズクラブに入っていたので訊いたのだが、所属している団体と違うのでわからないと言われた。どうも我が家が震災で多大な被害を受けたと勘違いしたらしく援助してくれたようだ。何か得をして嬉しいと思う反面、悪いことをしたような気分になった。大阪で楽しい日々を過ごしていた時に浜脇小学校のクラスメートから手紙が来て、西宮にもどりたいと思った。

11. 帰郷

私の誕生日である2月3日は大阪で迎える事になった。祖母が巻き寿司とづぼら屋の寿司を買ってき

てくれた。誕生日プレゼントで父がゲームボーイとそのソフトをウメチカで買ってきてくれた。12月にスーパーファミコンをようやく買ってもらったのに、震災で家を離れる事になりテレビゲームがなかったのが大変嬉しかった。それから2日たった2月5日、ついに西宮にもどる事になった。その日4時間目の途中に母が学校に迎えに来てそのまま家に帰ることになった。急なことだったので、友人とかにも挨拶ができなかった。西宮へは阪神電車で帰った。もうすでに西宮駅は復旧していたので特急に乗って西宮へ直接行った。家はすでにガス・電気・上下水道ともに回復していた。隣の棟は下水道が回復していなくて住宅の棟の間にある駐車場の端に共同のトイレがあった。私はよく晩にトイレへ行くので下水道が回復していて本当に安心した。西宮での生活は今までと殆ど変わりなく過ぎていった。ただいくつか異なる点はあった。クラスの人数が少なくなっている事と、給食が簡易のメニューになっていることだった。友人で亡くなった人はいなかったが、家族が亡くなったり家が全壊したりして何人が引っ越していた。何か教室がいつもより広く感じた。あと市の給食センターが壊れたので、給食が簡易給食になった。メニューはコンビニで売っているようなパックに入ったチーズケーキなどがでてそれなりに美味しかった。むしろ普段食べないようなものが多かったのがいつもの給食より嬉しかった。そのような状態が3学期一杯続き、春が来て三年生へ進級した。もうすっかり地震の「じ」の字すら出てこなくなった。

12. その後

高校に入学する前に頭にあった悪性の疣を除去した。その疣は震災のときにできたあの青紫色をした気色悪い疣だ。それをとったことにより我が家が震災にあった証拠はなくなった。

あの震災から学んだこと

長尾 美幸
神戸市長田区

～阪神・淡路大震災当日～避難所～

私は、阪神・淡路大震災以前から長田区に父、母、兄2人、私の5人で住んでいた。その当時通っていた長田小学校は、2年生は3クラスあった。震災以前、父は土木関係の仕事をしていて、朝早く家を出て夜は必ず仕事仲間を連れて家でお酒を飲んでいて。家族のことには全くと言っていい程干渉せず、母に任せっきりの典型的な亭主関白な父だった。休みの日は家にはおらず、“自分のやりたい事をやる”そんな父だった。そんな父を見て、母はいつも愚痴をこぼしていた。私は幼い頃からお父さん子で、母が入院していたときも父の仕事現場によく付いて行った。8歳年上の長男とはとても仲がよく、小さい頃はよく近所の子供たちとおにごっこなどをして一緒に遊んでいた。5歳年上の次男とは会話をするたびに喧嘩していた。その都度母に怒られていたのをよく覚えている。私の母は阪神・淡路大震災の数日前から神戸市立西市民病院に入院していた。1月16日の夜、母と電話で「明日家に帰るから、それまで我慢してね。」と会話した。私は“明日やっと母に会える”と会えるのを楽しみにしながらその日は眠りについた。

そして、1月17日午前5時46分にM7.2の兵庫県南部地震が発生した。その地震は、6400名以上もの死者を出し、家屋被害は24800棟以上の被害を出した。この震災で亡くなった方々の死因の約90%は家屋や建物などによる圧迫死となっており、その他は焼死などである。大都市を直撃した地震のため、電気・ガス・水道など被害が広範囲に広がり、新幹線や高速道路、地下鉄などが損壊し、ライフラインに壊滅的な打撃を与えた。古い木造住宅の密集した地域においては、地震による大規模な倒壊や火災が発生し、特に長田区などでは大火災が多発した。神戸・阪神地域という人口密集地で地震が発生したため、多数の住民が避難所での生活を余儀なくされた。避難者の中には、学校や区役所といった公的な避難場所に避難することが出来ずに、公園にテントを張ったり、車内での生活を強いられた人々もいる。神戸には50年ほど大きな地震が発生していなかったために、神戸には地震が起こらないと誰もが思っていた。そのため、地震に対しての備えが十分にできておらず、未曾有の大震災となった。

私は地震が発生したとき、最初は何が起きているのか全く理解できず、とにかく父の指示に従い、兄弟3人でライターと服を手を持ち、空いていた押入れの中に入りライターを点けた。家の中ではタンスやテレビ、棚の上のものが倒れ、食器棚のものがたくさん落下していた。父は兄のお弁当や私たちの朝食を作るために5時に起床していたため、私の寝ている上にタンスが倒れ掛かってきた時、父がタンスを支えてくれたおかげで私はタンスの下敷きにならずに済んだ。その後、家から脱出するためにドアをあけようとしても、家全体が傾き、窓ガラスが割れていてドアが全く動かなかった。父がドアを蹴破り外に出ることが出来た。そこで私が見た長田の街の光景は、黒い煙と赤い炎で染まり周囲には泣き叫ぶ人や、頭から血を流している人達でいっぱいだった。

その後、近くの高取台中学校の体育館に避難する事になった。中学校の正門が空く前に、もう人だかりが出来ていた。中学校には1000人以上の人が廊下やグラウンドにごった返していた。避難した当日は救援物資も何もなく、食事もなかった。私達は無事に避難する事が出来たのだが、そのとき情報を入手する手段が無く、母の安否は分からなかった。地震当日の夜、父は次男を連れ、母が寒いだろうと思って着替えをもって病院へ母を捜しに向かった。病院に到着し、医師と看護師に「まだ奥さん一人、見つかっていません。」といわれたそう。私はそのとき、長男と避難所の体育館でトランプをして父の帰りを待っていた。体育館の放送で、たくさんの人の名前が呼ばれていた。それは震災でなくなった方々の名前だった。そして父が病院から帰ってくると、兄だけを手招きして呼んだ。すると、父は兄に向かって「あかんかった。」と伝えた。兄は分かっているが「あかんかったって、どういう意味？」と聞きただした。父は無言だったそう。病院から聞いた話では、母が亡くなったのは、入院していた5階の廊下を歩いていたところだったそう。その頃、長男の進路決定が近づいており、母は就職の三者面談に出てくるために、いつもより早く点滴を済ませて病室に戻る途中に天井の下敷きになったそう。父と兄2人がすぐに頭に浮かんだことは、幼い私に母親の死をどのように伝えるかということだったそう。兄が父にどのように伝えるか相談すると、「今は言われへん。」と言い、私にはずっと「行方不明やから捜しとる。」とずっと言い続けていたそう。数日後、私の記憶には無いのだが、荷物を整理しに倒れ掛かった家に帰ったとき、私が突然「お母さん死んだんやろ。」と言ったそう。父も兄2

人も無言のままだったそうだ。父がひざまずいて私の肩を持ち、「お母さんはもう帰ってこうへんのや。」と言い私を力強く抱きしめた。私は父の手を払い、「どうして？どうして？」と何度も聞き、泣き崩れたそうだ。父が「これからは、家族4人で力をあわせてがんばっていこうね。」と言ったが、私の耳にそんな言葉は入るわけが無く、私は父の手を振り払い、何度も何度も聞きたかったそうだ。その後、倒れ掛かった家の中に入り母が亡くなったいきさつを聞いた。皮肉にも母が入院していた5階だけが崩れ、母はその病院でのただ一人の犠牲者となった。病院の方からその報告を受け、父と次男と私で病院まで歩いていった。病院にはもう母の姿はなく、遺体安置所となっている村野工業高校に病院の人に連れて行かれ、「長尾さんですよ。」と言って指をさす。その先には母の変わり果てた姿があった。両手足は切断され、身体を圧迫された母の顔は紫色に変色し、ぱんぱんに腫れていて怒っているような顔をしていた。その母の顔を父がなで、「痛かっただろうに、かわいそうに・・・」と涙をこぼした。そして私たちに向かって、「お母さんにお別れを言おうね。」と言ったが、私は母の変わり果てた様相に近づくことが出来なかった。その後どうやって避難所まで帰ったのかは全く記憶に残っていない。その数日後に母の遺体を高砂市で火葬した。火葬を終えた後、親類達が集まり、潰れかけた家の中でお酒を飲んでいた。私たち子供は避難所に戻った。

その後私たちは一端、田舎に帰ることになり、神戸港までタクシーで行った。神戸港までの道のりはすごい車が渋滞しており、神戸港に着くと港はガタガタに崩れていた。フェリーで田舎の親戚の家に向かうことになった。私と次男がその親戚の家に約1ヵ月半残ることになり、父と長男は身の回りの片付けに神戸に戻った。

1ヵ月半が経ち、また地元の高取台中学校の避難所に戻った。震災当時とは違い、その時は被服室に避難し、毎日運ばれてくるパンを朝食とし、夜も運ばれてくるお弁当を夕食としていた。そこには、無料でかけられる電話が設置されていたのを覚えている。私たちは避難所が無くなる最終日に避難所をあとにし、平成7年7月20日に市民球場があった場所に建てられた、お年寄りや体の不自由な方が多く住む、西代仮設住宅に引っ越すことになった。

小学校は、3年生になり、避難していた中学校から通い始めた。小学校は3クラスから2クラスに減っており、30人ほど転校していた。小学校ではビンに入っていた牛乳が紙パックの牛乳に変わっていた。学校が始まって小学校に避難している人達がたくさんおり、ボランティアの方々が炊き出しや、救援物資をたくさん送ってくれ、筆箱や鉛筆といった筆記用具をたくさん頂いたのを覚えている。

～仮設住宅での生活～

私は仮設住宅から小学校まで徒歩30分以上かかっていたので、毎日父に車で送りむかえしてもらっていた。西代仮設住宅にはピーク時で258世帯、558人が住んでいた。仮設住宅に入居したのは真夏だった。仮設住宅という特殊な建物は、クーラーをつけていても外の気温とあまり変わらず、冬は容赦なく隙間風が通りすぎていった。台風が近づくとロープを張るのだが、それでも家が揺れているのが分かるほど簡単な造りだった。仮設住宅に入って間もないころ、祖母がああ震災でタンスの下敷きになったのが原因で高血圧になり、それが原因で倒れた。父と私は病院に、数週間寝泊りしたが意識は戻る事無く亡くなってしまった。私たちは大切な肉親を2人も失い、精神的にも限界だった。その祖母の死や母の死がきっかけとなり、父は「長寿友の会」というものを作り、毎日お年寄りの方の健康チェックを行うようになった。父は球場の中の広場に“あおぞらひろば”というものを作った。父は“生きて仮設を出よう”を合言葉にボランティア活動を始めた。そのあおぞらひろばで食事会を開いたりもした。私には父しか頼る人がおらず、父がどこへ行くのも付いていった。幼かった私にはボランティアをやっているという意識は無く、ただ父のそばを離れたくないという思いで、父の後ろを追っていただけだった。父は巡回をするたびに、お年寄りの方の名前と健康状態をノートに書いてチェックをつけていった。毎日巡回するたびに、父のノートは○や△や□などでいっぱいになっていった。

その頃の私には笑顔はなく、何を話しかけても「うん。」としか返事をしなかったそうだ。そんな私の様子を長男が見て、「美幸が笑わんようになったんは俺のせいや。自分が母親を殺したんや。」と自分を責めるようになり、父との衝突も増えていった。長男は父に頼まれ、お年寄りの家を訪問するようになった。その頃の私は父が隣に居なければ寝る事が出来ず、私が眠りに入ったあとも、私は無意識に隣に父がいるか手探りしていたそうだ。

その年の7月、大阪のコリアボランティア協会というボランティア団体の方が仮設住宅に訪問にやってきました。そこから、コリアボランティア協会との付き合いが始まった。その他にもたくさんのボランティア団体の方や高校生の方々が来て下さった。その後も父のボランティア活動を支援しようと、毎週神戸までやってきてくれるようになった。父と一緒に入院しているお年寄りの方の所への訪問や、復興住

宅に移った身体の不自由な方々にはお昼ご飯を作りに行ったりもした。父は仮設住宅に移ってから、震災当時の話しをしにたくさんの場所に行った。それがきっかけで、夏休みには大阪の中学校のボランティアクラブの学生も参加してくれるようになり、身体の不自由なお年よりの方の家の掃除などを手伝ってくれた。その方たちとは今に至るまで一緒にボランティア活動を行っている。その他にも、お年寄りの方や小さな子供が家にこもらないように、春はお花見へ、夏は七夕祭り、秋は子供に向けた運動会、冬はクリスマス会など色々な催しごとを行った。毎年1月17日になると、「阪神・淡路大震災 合同慰霊祭」を行った。その他には芸人のコロケさんにモノマネショーをして頂いたりもした。

ボランティア活動は順調に進んだが、その頃問題となっていた孤独死があとを絶たなかった。私たちが仲良くしていたおばあさんと何日も連絡が取れなくなり、父がドアのガラスを蹴破り中に入ってみると「これから先、生きていても何も良い事が無い。」という理由から自らの命を絶っていた。おばあさんの変わり果てた姿をみて私はとてもショックを受けた。その他にも、「新聞がたくさん溜まっているし、なんか様子がおかしいから見てほしい。」と言われ、見に行くと中で亡くなっていた。自らの命を絶つお年寄りの方は少なくなかった。私はこの現状を生む今の社会にも責任があると思った。

父はその当時、ボランティアだけでなく自治会の副会長もやっていた。私は寂しかったせいかその当時の作文に「早くボランティアをやめてほしいです。」と書いていた事もあった。それほど父はボランティア活動に没頭していた。

～復興住宅での生活～

長かった仮設住宅から復興住宅へ、自立と言う大きな目標を持ち、4年と3ヶ月という長く、苦しかった仮設住宅からやっとの思いで平成11年11月末に西代仮設住宅を後にし、新しい生活の待つ長田区の復興住宅に引っ越す事になった。復興住宅は仮設住宅と違い、見慣れない人ばかりだった。私たち家族は今日から新しい生活が始まるという事もあり、ある意味では夢も希望も少しはあった。しかし実際に生活が始まると私の思いとは大きく異なり、身体の不自由な高齢者の方や、一人では生きていく事の出来ない障害者の方、また、人々の考え方の違いがあり、なかなかうまくコミュニケーションを取ることが出来ない。父は口癖のように、「自立とは『1に健康・2にお金・3にコミュニケーション』」と言っている。この3本の柱が一本でも折れてしまうと、自立はとてもじゃないが出来ない。震災からもはや10年という月日が流れようとしているが、どれだけの人が出来ているのだろうか。街、ビル、道路、鉄道など、外見적으로는復興は進んだが、復興本来の人間復興、生活復興は本当に出来ているのだろうか。仮設では外に出ると誰かが必ず居たが、復興住宅では鉄の扉に閉ざされており、会話をすることもめったになく、ふれあいの場を持つ事も少なく、一人暮らしの高齢者の方は復興住宅でも孤独死は後を絶たない。私の住む復興住宅でも4年間で12人の尊い命が亡くなった。そのうちの2人は25歳の女性と29歳の男性の飛び降り自殺だった。震災で奇跡的に助かった命をなぜ自らの手で絶たなければいけないのだろうか。そういう人々を一人でも無くそうということで、父は仮設住宅に居たときと同様に毎週火曜日と木曜日は高齢者の方の病院への送り迎えをし、毎週日曜日は食事会を開き、4月はお花見、7月は七夕・夕涼み会、9月は敬老の日、12月はクリスマス会、お餅つきと忙しく毎日ボランティア活動が続けている。

～環境防災科に入って～

私は最初、高校に進学する気は全くなく、自分の夢であるホームヘルパーの資格を取り、仕事に就くつもりだった。けれど、中学3年生の冬に担任の先生から環境防災科の事を聞き、福祉の事を勉強できると知り、見学に行った。そして、今よりもボランティアや福祉についての知識を増やし、学んで、身につけたいと思い環境防災科に入った。1年生の前半で阪神・淡路大震災の勉強をしているときは正直辛い部分もあり、震災当時の映像が流れているのを直視出来なかった。講師の中に、震災当時母が入院していた病院でレスキューをしていたという方が来られ、「その病院で残念ながら1の方が亡くなりました。」と聞いたときは辛いという思いと悔しいという思いで前を向くことができず、ずっと下を向いていた。その他にも講師の方々に震災当時のライフラインについてのお話をしていただき、初めて知る事がたくさんあった。震災当時、私たちはライフラインが復旧するのをただ待っているだけだったが、ライフラインに関わっておられる方はとても努力して、震災以前と同様に皆がライフラインを使えるように、そして、震災での経験を教訓にふまえ、耐震性に優れたよりよいものにするために努めてくれたことも初めて知った。震災以前は、テレビを見ることができ、水が出て、ご飯が食べることができ、お風呂に入る事ができるのは当然の事だと思っていた。けれど、震災当時のライフラインの状況や復旧

過程を勉強して、今こうやって自然に生活できている事がすごいと思うようになった。消防学校での体験では、人の命を助ける消防士の方の努力や、命を守ることの重要さ、命の重みを知った。その後もたくさん講師の方にお話して頂いた中で、一番大事だなあと実感させられたのは“日常的にやっていないことは、非日常では絶対にできない”という事や、“防災”というものは1度やっただけでは身につかず、継続的にやっていくことが大切だと思った。あの震災のような事を繰り返さないために、防災をもっと広範囲に広げるのは私たちの役目だと思った。これからは、家具の固定や非常食を備えるといった地道な努力が必要であり、それが災害時に生きてくると思う。私たちが自然と共生していく上で心得ていなければならないのは、自然災害をなくすことは出来ないが、被害を最小限に抑えることは出来るという事だ。災害に備えるために、私たちにも出来る事は、自分の住んでいる地域の避難場所や避難経路の確認、事前に危険な場所の確認をする事だ。災害に強い街にするためには、災害弱者となる高齢者や障害者の方、外国人の方などを基準に考え、皆が家や建物の耐震性を考え、一人一人が自立した生活を送り、自分の住んでいる地域をよく知る事だと思う。そうする事により災害が発生した時に建物の倒壊が無く、救急車が通れるようになり、自分の命や家族だけでなく、地域の人も守れるようになる。そのためには、自然を取り巻く自然環境や、社会を取り巻く社会環境を知る事も大切な事だと思う。あの震災で失われた命や、得た教訓を無駄にせず、今後の災害に対応できるように生かしたいと思う。そして、この阪神・淡路大震災を経験し覚えている最後の世代として、この震災体験を今後も語り継ぎ、風化させないようにしたいと思う。私たちの世代でも記憶が途切れ途切れになっている。この震災体験を伝える事が出来るのは私達しかいないし、私たちにしか伝えられないものがあると思う。世界各地で様々な災害が発生しているが、その被害を出来るだけ少なくするためにも、たくさんの人に防災の大切さや防災を行う意味を理解してもらい、広めていかなければならないと思う。防災を広範囲に広げるには、自分の住んでいる地域で行われている自治会や他の茶話会などに参加し、そこで少しずつ広めていく事が大事だと思う。環境防災科に入って、阪神・淡路大震災のことだけでなく、その他の災害についても色んな知識が身に付いた。ボランティア活動にも種類がある事も知ったし、ボランティアをやりたいと思って災害が発生した現地に向かい、何をすればいいかわからないままいくのは迷惑をかけることだという事も知った。そんな人たちを取りまとめるコーディネーターが必要な事も知った。そしてこの学科では、命の大切さ、助け合い、思いやりを学び、災害から命や家族、自分にとって大事なものを守るために、地球規模で考え地域単位で活動する事を学んだ。

～いま振り返って～

阪神・淡路大震災から早や10年が経とうとしている。私はあの地震で母を亡くした事は一生忘れられず、心に出来た大きな穴は埋める事は決して出来ない。私は何度も“お母さんがいればなあ”と思ったことがある。けれど、それは私だけではなく家族の皆が思うことだと思う。だからそんな言葉は一度も口にしない事はない。

私たち家族は阪神・淡路大震災で母を亡くしたことで変わった。兄達はいつも私の事を1番に考えてくれ、震災以前は家族のことには全く干渉しなかった父が、今では人が変わったように私たちのために、一生懸命にやってくれ、お年寄りの方のためにもボランティア活動をやっている。自分がしんどいときでも他人の事を考え、自分の事よりも他人を優先し、気を配れる。私はそんな父を尊敬している。私はそんな家族を誇りに思う。母を亡くし、心に出来た大きな傷は決して消える事はないが、私には大好きな家族がいる。だから母の分まで私が生きようと思う。阪神・淡路大震災で大切な人を失った人々にとってあの震災は忘れる事が出来ないものであり、決して二度と起こってほしくない悪夢だと思う。大切な人だけでなく、家や財産やその他にも失ったものはたくさんあると思う。あの地震が起こったときから全てが崩れたような気さえる。けれど、あの震災で失った分、学んだものもたくさんあると思う。避難所にいるときは食糧の大切さを知った。毎日普通に食べていた食糧がなく、食べ物があることのありがたさに気づいた。仮設住宅では、コミュニティの大切さや人の優しさを知った。たくさんのお年寄りの方々と知り合ったことで父や自分自身が変わったように思う。あの震災で、人と人とのつながりの大切さや、今普通に生活が出来ていることが凄いという事、家族が素晴らしく温かいという事、そして何より命は尊く大切なものだという事を学んだ。阪神・淡路大震災が起こった年が“ボランティア元年”と言われるように、あのときからボランティアが盛んに行われるようになったと思う。後は、そのボランティア活動をいかに長期的に続けていくかが肝心の点だと思う。私はあの震災で“ボランティア”というものを初めて知り、容易な事ではなく、継続するのが困難だということを知った。けれどボランティアというのは、いざ災害が発生したときに“助けたい”“手を差し伸べてあげたい”と思う気持ちさえあれば誰にでも出来る事で、特別な人がやる事ではないと思う。私の場合は仮設住宅でたくさんのお

年寄りの方と知り合ったことで父と一緒にボランティア活動を始めた。父や私がボランティアをやろうと思えるのは、おばあちゃん達がニコニコ笑って「ありがとう。また来てね。」と言ってくれるのが嬉しいからだ。

私はボランティアをやり始めたのがきっかけとなり、将来は福祉方面に進み、これからも父とボランティア活動を継続していきたいと思っている。そんなきっかけを作ってくれた父に“ありがとう”と言いたい。そして、父のような人間になりたいと思う。

母の死が無ければ、父も兄もボランティア活動を始める事は無く、私も一緒にやってはいなかった。母の死からは色んなものをもらった。母との思い出は記憶の中にほんの少ししか残っておらず、アルバムをみてもあまり覚えていない事が多いが、毎日保育園に送り迎えをしてもらっていた事や、毎年田舎に帰っていた事だけははっきりと覚えている。母と過ごした時間はたった8年程しかないが、母にはそれに物や時間に変えられないようなものをもらった。だから私は母に“産んでくれてありがとう”と言いたい。そしてあの震災で助かった自分の命を大切にし、この震災から学んだ事を忘れずに伝え、環境防災科で学んだ知識を将来に生かし人の役に立ちたいと思った。そして、あの阪神・淡路大震災から何年経っても、本当の意味での復興はこれからも続くが、この出来事を後世に伝えるためにも一歩ずつ前進していきたいと思う。

震災体験

中谷 悠司
神戸市須磨区

1995年1月16日の夕方、僕は月見山に住んでいる祖母の家に行った。祖母と祖母の友達と話をしているとすぐに日が暮れていた。そして自分の家に帰ろうとしていたとき、大きな地震が起こった。家族のみんなが「今の地震大きかったなあ」とか喋っただけで、その時はただの話の一部に終わった。あの地震がこの後おこる大地震の前ぶれだとはそのときは全く知りもしなかった。その後祖母の家から自分の家に帰った。僕はその日、祖母の家で起きた地震のことなんか全く思い出しもせず布団に入った。

1月17日午前5時46分、今まで体験した地震とは比較にならないぐらいの激しい地震が起こった。その地震はほんの数十秒の間でこれまで人間たちが何十年もかけてつくってきた様々なものや何千万もの人の命を奪っていった。

揺れがおさまって部屋の中を見渡すと、特にかわった変化もなく、たいしたことなかったんだと思った。

でもそれは大間違いだった。隣の部屋に行ってみると、タンスの上に置いていた荷物やテレビが床にころがっていた。次に台所に行ってみた。そこにはあたり一面に食器棚から落ちた食器が割れて広がっていた。あやうくそのかけらを踏みそうになった。

その後家には何も分からないからと、外に出ることになった。地震によってドアの形が変わっていたりして、開けなかったりしたらどうしようとすごく不安だった。

しかしその心配もなく無事にドアは開いた。まだ一月の中ごろだったのでとりあえず服をいっぱい着て外に出た。それでも外の気温はとても低く厚着をしてもまだまだ着るものがほしいぐらいだった。外には人影がなくさっきまでの地震が嘘のようにととても静かだった。少し時間がたってから人が見えはじめた。

しかし外にいても何も分からないままだったのでとりあえず家に戻ることにした。

その頃には家の中に太陽の光がはいってきて、家の中がどれほどひどいことになっているかがわかった。何も変わったところがないと思っていた部屋もよく見るとタンスが移動していたり、本棚に入れてあった本が何冊も落ちていたり、僕の家はまるで嵐が通り過ぎた後ようになっていた。幸い壁の一部が崩れたり、窓ガラスが割れたり、家の中が壊れたりしていなかったのが良かった。まず台所に落ちている食器を片付けることにした。床に落ちている食器はほとんど全部割れていてどれも使い物にならない状態だった。

台所の片付けが終わったころにはもう部屋の中が明るくなっていた。

水も電気もガスも通っていなかった。のどが乾いたので自動販売機にジュースを買いに行くことにした。僕はそこで信じられないものを目にした。僕の家のあるただの自動販売機に行列ができていた。まだスーパー等が開いていなかったのもみんな飲み物を買っておいたほうがいいと思ったのだろうか。たぶんこの先も自動販売機にあれほどの人がならんでいることは見ないと思う。何分か待った後にやっと飲み物を買えるときがきた。しかしそこにはほとんどのボタンのところに「売れ切れ」と書いた文字が書いてあった。

その後昨日の夕方まで楽しく喋っていた月見山に住んでいる祖母のことが心配になったので、公衆電話から祖母の家に電話をした。でも公衆電話がつぶれていたのか、祖母の家がつぶれて電話も壊れてしまったのか、もう電話線自体が機能しないようになっていたのかは分からないが、公衆電話はコールすることはなかった。

水は前日のお風呂の水が残っていたので当分は苦労しないだろうと思っていた。しかし次の日に白川の上のほうで水の配給をしているからもらいに行こうと母が言った。僕の家から白川で水を配給しているところまでは歩いて15分ぐらいだったと思う。

いきしは三重にしたゴミ袋を持っていっただけだったけど、帰りしはそのゴミ袋いっぱい水をいれたのでとても重くて、家までの道のりがすごく長く感じた。

地震が起こってからは水が無駄にはできないので何か食べる時はお皿にサランラップを巻いて食べ、終わったら、そのサランラップだけをはがして捨てるようにしていた。なのでお風呂に入っている水はトイレ流し用にして、苦労してもらいに行った水を飲み水用にと分けて使っていた。

この日の夜は祖父の車に乗って、小学校のグラウンドで寝ることになった。グラウンドにはもう何台も車が止まっていて、体育館の中にも人がたくさんいるようだった。僕は車の中で次の日の朝まで一回も

起きることなく寝られたが、祖父と母はあまり寝られなかったようだった。

その日家に帰ると新聞がきていた。こんな時にでも新聞がくるんだなぁとビックリした。新聞の内容はほとんど全部と言っていいほど二日前に起きた大地震の記事ばかりだった。一面には高速道路が崩れ、その切れ目から車体の半分ぐらいが落ちて止まっているバスの写真が掲載されていた。その新聞には死者は約4000人でまだまだ増えるような内容のことが書いてあったような気がする。あの大地震は兵庫県南部地震という名前がついたらしく、兵庫県南部地震によって起こされた被害には阪神・淡路大震災という名前がつけられた。

詳しくは覚えていないけど、多分この日から水が出だしたと思う。僕の家はまだお風呂の水があったり、配給の水をもらえたりしたけど、それでも十分に水に気を配りながら生活してきた。今まで何も気にせず使っていた水を、この二日間でその水がどれほど僕たち人間に大切なものかが分かった。

水が出るだけでもだいぶ普通の生活に戻れた気がした。洗い物ができるからわざわざお皿にサランラップを巻いたりしなくてもよくなったし、トイレも普通にレバーをひけば流れるようになった。

その次の日ぐらいにテレビのニュースで僕の住んでいる地域はもうガスと電気が通っていると聞いてすぐ電気とガスをつけてみると、久しぶりに部屋が明るくなった。地震の前までは蛇口をひねれば水が出て、壁のスイッチを押せば電気がついて、コンロのボタンを押せば火がつくのは当たり前だったけど、この数日間はその当たり前のことが当たり前ではなかったの、電気がついたり、コンロに火がついたりしているのを見るとすごく嬉しくなった。その日に祖母の友達が祖母を車に乗せて僕の家まで連れてきてくれた。

それまで祖母の安否が分からなくてずっと心配だったので急に祖母が来て、僕は本当にびっくりして、とても嬉しかった。祖母はその友達の家にちょっとの間泊まらせてもらうことになった。そしてその日の夕方、祖母を連れてきてくれた友達とはまた違う祖母の友達の家族が家に来て、しばらく僕の家泊まることになった。それまでは母と僕の二人でずっと家にいたが、その日からいっしょに人が四人も増えてとてもにぎやかになった。

晩御飯を食べているときやみんなで話をしているときは家族が増えたみたいで楽しかったけど夜寝るときになったら大変だった。それまでは母と二人で広々と寝ていたが、そこに四人も増えるとなると部屋が狭く感じてとても窮屈だった。そしてその何日か後に小学校が始まった。ひさしぶりにみんなと会えてすごく嬉しかった。

僕のいっていた東落合小学校では幸いにも先生・生徒を含めて亡くなった人は一人もいなかった。みんなと話をするのがとても楽しかった。地震が起こった日はこれで学校ちょっと間休みになるんじゃないかとか思って喜んでいただけ、日がたつにつれて仲の良い友達はまだ生きているんだろうか？、元気にしているんだろうか？とか考えたら心配になって早く学校に行ってみんなと会いたいと思うようになっていた。その願いがやっとかなった。

それから何年かがたって僕は中学三年生になっていた。

この時はもうみんなが受験受験と言い始めている時期だった。その時に担任だった先生に舞子高校に環境防災科っていう新しい科ができるらしいみたいやけど受けてみーひんかと言われた。そのときはまだその科で何をするかとかは全然知らなかったの、先生に環境防災科のパンフレットや資料をもらいそれを何回も何回も読んだ。そして前からみんなと一緒に普通の高校はおもしろくないなと思っていたのでとりあえず舞子高校の環境防災科を受けてみようと思った。そして僕は環境防災科に入っていた。

そしてあの時に起こった大地震のことについて勉強を始めた。

あの地震は平成7年1月17日、5時46分、兵庫県南部に震度6、場所によっては震度7の揺れをもたらした強い地震で震源地は淡路島北部、震源地の深さは16kmでマグニチュード7.3の大地震だった。この地震の特徴は人口350万人あまりが密集し日本の経済活動の中核を担う淡路北部から神戸市および阪神地域の直下で発生した内陸・都市直下型地震であった。

深さ16kmと比較的浅い部分で発生し、断層が横にずれることによって起こったもので、大きなエネルギーが一挙に解放されるタイプの地震であった。

大都市を直撃した大規模地震のため、電気、水道、ガスなど被害が広範囲となるとともに、鉄道、新幹線、高速道路、新交通システム、都市間交通・地下鉄が損壊し、生活必需基盤（ライフライン）に壊滅的な打撃を与えた。

古い木造住宅の密集した地域において、地震による大規模な倒壊、火災が発生し、特に、神戸市兵庫区、長田区などでは大火災が多発した。

神戸・阪神地域という人口密集地で発生したため、多数の住民が避難所での生活を余儀なくされた。これらが阪神・淡路大震災の特徴だ。

これから先には南海大地震や東南海地震といった阪神・淡路大震災を上回る地震が起こるかもしれな

いということを僕はこの学科にきて知った。

これらの地震は阪神・淡路大震災と違って津波が起こる可能性も十分にある。そんな地震に前と一緒に
のような対応をしても前よりさらに被害が増えるだろうし、前以上の備えをしても被害が十分にでるか
もしれない。

だから何年か後に南海地震などが起こったときにみんなに指示を出したり指示をだしたり出来るよ
うな人になりたい。

あの時から考えたこと

那須 裕美
神戸市垂水区

I 地震が起きるまで

9年前のことは正直あんまり覚えていない。地震の前で印象に残っていることと言えば連休の次の日で正直学校に行くのがだるいなあと思っていたぐらいだった。学校は家から約40分も歩かないといけな場所にあったことと、連休にサイクリングセンターに行っていた気がするそれが連休疲れと重なってさらに学校へ行きたくないという思いを増幅させていたのだと思う。その当時の自分の考えなどはやっぱりほとんど覚えていない。ただやりたいこととか楽しいことを何も考えずにしていたということぐらいしかないと思う。もちろんこれから起こることや将来のことなんかまったく考えていなかった。

またお父さんやお母さんを含めた大人の人たちや近所の人たち…また神戸市民の多くは、まさか神戸で地震が起きるとは思ってもみなかっただろう。だから災害に対する備えといっても、風水害のための備えで瓦を重くしたり…という対策ぐらいしかしていなかったのだと思う。もちろん私の家の瓦も重いものを使っていたと思う。今になってから考えるとその甘い考え自体がいけなかったのかもしれないと思う。

II 地震発生～

当時私は小学校2年生で家にはお父さんとお母さん・小学4年生の兄・保育園に通っていた妹と一緒に暮らしていた。そして、1月17日の午前5時46分に地震が起きた。地震が起こったときは2階の畳の部屋で、家族5人で布団を敷いて寝ていた。ぐっすり寝ていたら急に大きい縦揺れが起こったので私は驚いて目を覚ました。何も置いてないような部屋で寝ていたので、地震の揺れで何かが倒れてくるということはなかった。地震が起きてからすぐに私は懐中電灯の位置を知っていたので、1回目の大きな揺れのあとに隣の部屋に懐中電灯をとりに行こうと立ち上がろうとした。しかし、まだ地震は続いていたみたいで次にまた大きな揺れが来て、結局私は立つことすらできなかった。お父さんが私に「じっとしとき。お父さんが外の様子見てくるから。」と言い1階に下りていった。布団の中でしばらくじっとして様子をうかがっていると、外から近所の人たちの話し声などが聞こえてきた。「～さん家は大丈夫でしたか?!」と近所の人やお父さんたちが確認しあっているのが聞こえてきたので、少し安心した。でもその次に布団の中で考えることといえば・・・“今日学校どうなるんやろう・・・”ということだった。そしてお母さんに「今日学校あるのかなあ??」と聞いた。するとお母さんが、「多分・・・いや絶対ない・・・」と言ったので、そのときは、“学校休みや～やったあ。今日も遊べるやん”みたいな楽観的なことしか考えていなかった。まったく自分自身のことや家族以外のことには考えていなかったもので、その瞬間はすごくうれしく感じていたけど、そのときはまだついさっき起こった「地震のおそろしさ・こわさ」というもののなんかは頭に浮かぶことすらなかった。

III 地震って・・・。

その後私を含めた家族5人は1階のリビングと一緒に降りた。リビングで最初に見たものは、蛇口から出る1滴の水だった。食卓の机や棚からいろんなものが床に落ちていた。お父さんとお母さんはそれをさっとなおし、私たちの通る道などを危なくないようにしてくれた。お父さんたちは情報を得ようにも電気はつかないし、ガスも使えないし、水も出ないしどうしよう・・・と困っていた。使っていなかったラジオを取り出して情報を聞こうとし、とりあえずごはんを食べないといけなという結論になったのか、私たち家族は朝食の支度を始めた。私の家では毎朝ごはんが5時30分に炊けるようにセットしてあったので、炊飯器の中のご飯はほぼ完璧にご飯が炊けていた。その炊けているごはんを家族みんなで分け、そして冷蔵庫の残り物を食べた。あとさらに運がよかったことに、私の家では1枚もお皿やコップなどの食器類が割れなかった。食器棚は2つあって、その1つは前に開けるタイプのものだったけどすごく扉が固く・・・小学校当時の私にはとても開けられないほど固かったような気がする。そしてもう1つの食器棚のほうは、横にスライドして開けるタイプの食器棚で、これも横にスライドさせるのにはすごく力がいるというぐらい固かったのと、これはすごくあとから知ったことで、地震の揺れ方

が縦揺れだったということ。おそらく開きにくかったことと地震のゆれ方が縦揺れだったということもあって私の家の食器棚は開かなかったのだと思う。もちろんその2つの食器棚は今も健在である。しかし水が出なかったためにその頑張ってくれた?食器棚のお皿は使わず、家にたまたま置いてあった紙のお皿と紙コップでごはんを食べた。

しばらくしてからお父さんが必要なものをローソンに買に行って来ると言ってお父さんを出た。そして、しばらくして帰ってきてお父さんがまず言ったことは、「すごい人が多かった」ということだった。人が多くすごく並んでいたらしいので食料品は全く買えずビニール袋やサランラップなどの日用雑貨ぐらいいしかなかったそうだ。やっぱりみんな緊急時に考えることはおんなじなんだなと私は思った。そしてしばらくは家でおじいちゃんたち大丈夫かなあとか学校のことや色々なことを考えながら、壊れたものなどを整理していた。すると、何時間後かに電気が回復した。そして電気が回復してからテレビをつけた。つけた瞬間に私はすごく驚いた。見たことのある地名がテレビに映っていた。それは上空からヘリで映し出されていて、その場所が真っ赤に燃えていた。何度も目を疑った。そこが、おばあちゃんたちが住んでいる長田区という地名だったからほんとに信じられなかった。おばあちゃんたちのことがすごく心配になった。まさか・・・ということは何度も考えた。そしてテレビには色々な神戸の知っている場所の壊れた様子が映し出されていった。高速道路の橋が壊れてバスが間一髪落ちなくて止まっている様子や、商店街が壊れているところ、駅の1階部分がペしゃんこになっているところ・・・家が跡形もなく崩れているところや傾きかけた家々・・・。本当に色々なものがテレビに映った。見ていて1番変に思ったのは、ヘリで上空から火事で炎が燃え盛っているところを撮影している人たちはなんで消火作業を手伝わないんだろう・・・ということだった。そしてなんでそう言っている自分でさえも行動を起こそうとしないんだろうと思った。なんか見ているだけで「自分にはなんにもできないんだなあ」と思うとなぜかはわからないけど、すごく嫌な気分になって、気がついたら自分からはあんまりテレビを見ないようにになっていた。

その日の夕方頃にはお父さんは電気ポットを買いに行っていた。まだガスや水が回復していなかったため満足になにも作れなかったからだそうだ。でもまだ電気が回復してただけマシだったのではないかと思う。そしてその地震のときに買ったポットは多少ボケが始まっているっぽいけど、いまでも元気が我が家で毎日お湯を沸かし続けている。

何日後にお母さんは、おばあちゃんたちの家がある長田区まで、歩いていっていた。おばあちゃんの家のある周辺の家々はさほど被害を受けずにおばあちゃんたちも無事だということがわかった。私は、おじいちゃんやおばあちゃんがとても好きなのでとても安心した。

私たちとお父さんと近くにあった星陵台中学校のプールにトイレの水を汲みに行った。釣りのときに使っていた魚を入れるためのバケツにひもをつけて水を汲むということをした。バケツをプールに投げこむ・・・軽かったバケツが重くなって引っ張るときには実際の魚釣りに似た感覚がありおもしろかったので好きだった。家と学校を何回も往復して水を汲んでいたような覚えがある。でもしんどいとか嫌だなあというような思いは全然なかったと思う。お父さんは元町に住んでいるお兄さんが無事かどうかを確かめるために自転車で元町まで行った日があった。丸1日かけてお父さんが元町から家に帰ってきた。元町までの様子などを聞いてみると「道がぼこぼこだった」ことや道路が全く整備されていなくて渋滞がほぼすべての場所で起こっているといった。そしてガスボンベで火がつけられるようなセットも買った。

地震から数日経つとさすがに知恵が働いたのか、お皿にサランラップなどをかけるなどをして工夫をするようにもなった。またサランラップが足りないときにはアルミホイルなどを代用するようにもなった。そしてそのときよく食べていたのがインスタントラーメンなどのレトルト食品だった。ガスコンロの上にインスタントのつゆがついている鍋焼きうどんのようなものを置いて、みんなで食べていたような覚えがある。何日か経つと九州のお父さんの田舎のほうからたくさんの食料品や日用雑貨が入った大きな箱が届けられた。それは私たちの生活に大きく役立った。また私の家は近くに、星陵高校・神戸商業高校・星陵台中学校と学校が3つもあったのでそのおかげで我が家はずいぶん助かった面が多々あると思う。星陵高校では配給のようなものがあつたらしいが、私の家は県商（神戸商業高校）から水が出たという話を聞いていたのでその水をもらいに行ったり、私が後に行くことになる星陵台中学校のプールでトイレを流すための水を汲んだりした。そういえば、私は地震が起こるまでトイレの水は水道の水と同じように蛇口を回したら出るという水道みたいなものだと思っていた。もちろんトイレを流れる水もひねったら水が流れるものだと思っていた。地震が起きてはじめてトイレの水は大きい箱?のようなものの中に水が溜めてあって、それから水を出しているのだということに気がついた。だからトイレは「人工の水を貯蓄しては必要なときに吐き出す象さん」のようなものだと思っていた。もしトイレが水道のようにひねらないと水が出ない・貯蓄して使うタイプではなかったとしたら・・・9年前はその当

時よりもっとトイレのことで頭を悩ませなければならなかっただろう。

しばらくして学校が始まった。久しぶりに行く学校はやっぱり古かったこともあり結構壊れていた。私たちが地震の前まで使っていた教室がある校舎には入れなかった。そして給食室の上にある校舎に入った。その当時は、クラスは5組までであったけど教室の数が足りなかったので生徒を3つに分けてA・B・Cというクラスわけにしていた。学校のことで思い浮かぶことといえば、専ら給食とか食べ物のことについてぐらいではないかと思う。例えば、地震が起こるまでの給食は牛乳ビンだったのが紙パックになったりした。当時牛乳ビンのキャップを使ってする行事があったのでみんなは牛乳ビンのキャップを集めたりしていたが、それも地震で中止になった。また小さいおかず・大きいおかず・パンまたはごはんが毎日の学校の給食の内容だったが地震後はパンとソーセージをはさんで食べるホットドッグのようなものが主流になっていたような気がする。私はデザートとかが好きだったのですごく残念だった。

数日後に雨が降った。そしてしばらくすると家の中が雨漏りをしだした。それでかなり困っていたようなことを覚えている。壁にじわじわと水がしみこんでいき壁の色が変わりおぼけのようで怖かった。何故かその雨漏りの様子や地震での家の壊れ具合をお父さんが写真に撮っていた。私が「なんで壊れた家の写真なんか撮るの？」と質問したら、お父さんは「この写真を送って壊れている度合いが認められたらお金がもらえるんだよ」と言っていた。そのあとにわかったことだったが、私の家は半壊だった。

テレビで傾いている家の話を見た。それで私の家でも大丈夫かなあ・・・ということになりビー玉を転がして家が傾いていないかを実験した。すると床に置いたビー玉はみるみるうちに床の端から端までをころころ勢いよく転がった。まるでビー玉に心があるようだった。これはあかんなあと思った両親は家の補修工事をすることを決めた。補修工事では床を全部取り去っていたので、家の中はたくさんの木材の平均台の床みたいなかんじになっていた。時々木材が足に刺さって痛かったこともよく覚えている。でも小さいときというのは不思議なものでほぼ楽しかったことしか記憶に残っていない。

ガスがまだ復旧していなかったので、お風呂には入れなかった。私たち家族はほぼ毎日健康ランドのようなお風呂屋さんに通っていた。おばあちゃんたちと一緒に健康ランドに通う日もあれば、また違う日にはもう既にガスが回復していた明石市にいるお父さんの友達の家にお風呂などを貸してもらった。友達関係というのは大切なんだなあとそのときよく実感した。

しばらくすると、私の家の近くにも仮設住宅が建った。お母さんが仮設についての調査をしていたので私もたまに仮設の様子を見に行ってみたりした。仮設では私と同年代やそれより小さい子から大きい子までが一緒になって遊んでいた。楽しそうに見えた。あと仮設について感じたことといえば、壁が薄くてとても寒そう・・・だなあと感じるぐらいだった。

そしてなぜか当時コマなしの自転車に乗れなかった私は、夜に家の前で妹やお母さんと一緒に練習を始めた。もちろん妹もお母さんも自転車に乗れなかった。そして3人で練習を始めて2日後ぐらいに私は自転車に乗れるようになった。そしてお母さんが自転車に乗ろうと練習していた・・・が、近所の家から「水が出たぞ!!」という声を盗み聞き？というかたまたま聞いてしまったので、自転車に乗るための練習というのはそこで中止になってしまった。そして家に帰り久しぶりに蛇口をひねると・・・ちょろちょろと水が流れた。家族はすごく喜んだけど、またいつ水が止まってしまうかもわからなかった。のでとりあえずお風呂に水を貯めておいた。

地震から何ヶ月かたった頃には私に家はほぼ地震前と同じような感じになった。変わったことといえば補修工事をしたことと屋根瓦が重いものから軽いものへと変わったことぐらいではないかと思う。でも地震に対する意識や備えの面に関してはだいぶ変わったことだろう。その面はいまでも家の物置みたいなところにペットボトルの水を置くなどという形で現れている。

Ⅲ 地震のあと考えたこと

地震が起こってから本当に色々なことを考えたと思う。特に考えたのは自分の身の回りにある「環境」についてのことだと思う。私たちがどれだけ水道・電気・ガスなどのライフラインやその他のたくさんのものに依存して生活してきたということが顕著に現れたのがあの「阪神淡路大震災」だと思う。日常の生活では困らないようなことが地震などの災害時には混乱の元ともなりえるのだということを私たちは身をもって体験したのだ。いつかの高校の防災の授業で聞いた「災害は神によって起こされている」という考えはある意味正しい部分があるのではないかと思う部分がある。私たちが普段の便利さに慣れてしまい、本当に大切なものは一体何なのかということを経験は気づかせてくれたのではないと思う。また阪神淡路大震災から1年以内に地震に関する本がたくさん出版された。そして私たちの手元に届けられたのが「しあわせはこべるように」という1冊の冊子だった。その本を読んで私は、自分の考えの甘さに気がついた。私と同年代のような子がお母さんや兄弟を失ったりしていたからだった。それ

がもし自分の身に起こっていたら・・・と考えるとどうすればいいかまったくわからなかった。また小学生でも誰かの役に立てるんだということもその冊子から知った。そして自分がボランティアに行かなかったことを悔やんだ。私にもできることがあったのなら、少しでも人の役に立ちたかった。そう思った思いが、私がこの学科に入ろうと思った理由の1つでもある。そしてこの学科でものすごく色々なことが学べたのではないと思う。9年前の地震に関しても冊子などでは知りえなかった色々な体験を知ることはもちろん、震災時に色々な仕事に従事していた人たちの活動などは当時子供だった私には知りえないことだった。ライフライン関係についても誰かが頑張っていて直しているということはある程度考えていなかったからだ。それに私が驚かされた話ではペットは災害時どうしていたのかということもあった。そんなことは話を聞くまでは全く知ることすらなかった。ペットより先に人間のことを考えていたからだ。確かにペットが震災時に放されていたら色々な事故などが起こっていただろう。また震災時に孤独死というものが仮設や復興住宅で起こっていたということもつい最近知った。高校に入るまであんまり知らなかった介護士さんという仕事も社会から切り離せない仕事だなあと実感した。そう考えるとほんとに社会というのはハード面である建物などだけではなく・・・ソフト面であるものが大切で、ソフト面というのは・・・例えば近所づきあいなどの交友関係もそうだと思うけど、私は仕事をしている人たちの頑張りがソフト面に入るだろうと思った。今までの私の仕事に関する知識として、良い仕事やイマイチかなあと思う仕事などという区別が私の中で自然となされていたが、そういうものは一切なくなった。どの仕事に関しても欠けてしまったらどこかで誰かがその分苦労するとかしないかと日本はだめになるのではないと思う。また私はこの学科に入るとき「環境問題」についておおまかに学びたいと思っていた。しかしその環境を構成するのは自然とかだけではなく人々の力、つまり「社会の力」が大事なのだということをこの学科の勉強から学んだ。そして色々な場所に自分から積極的にいったりすることで、色々な分野の話が聞け、視野が広がり、考え方が広がっていくことも知った。私がこの学科の勉強から学んだことの多くは、私たちが住む環境のうち社会環境・自然環境を構成する要素として切り離せないものばかりだと思った。地球という生きている星に住んでいる限りこのようなことから避けられないし、後世によりよい社会を残していくためにも切り離してはいけない。私は将来少しでも人の役に立てるような仕事がしたい。学校の授業の1つで福祉というものを学び、私たちが住んでいるまちにはたくさん不便な点があることに気がついた。1回、目をつぶってまちを歩いてみたことがある。怖くて10歩ぐらいで目を開けてしまった。そのような体験もあったことからかはわからないけれど、私は今「犬の訓練士」という仕事に将来携われたらいいなあと考えている。誰もが楽しく生活しやすく、人と人との絆が強いまちを作っていくことが今後の日本や地球全体での課題であり、地震で生き残った私たちには、今よりもっとよりよいまちを作っていくことが使命のようなものなのではないかと思った。

小学二年生と高校三年生

野内 沙紀
神戸市西区

一月の終わりごろ、私はマーチングの発表会で演奏する予定になっていた楽譜をもらって嬉々としていた。次の練習日にはもうひとつ渡すから、といわれて楽しみにしていたのを覚えている。

当時、私は小学二年生。神戸市に引っ越してきてからまだ一年も経っていなかったが、自分の住所をはっきり言える程度にはなっていた。

短い冬休みが終わり、渋々片道十分程度の学校へと足を進めていた。

突然、慌しい足音が聞こえてふと目が覚めた。音からして父だというのはすぐにわかった。

部屋はまだ暗く、寝ぼけていたのもあってよく覚えていなかったのだが、開けっ放しだったドアから父が私の部屋に飛び込んできた。

「○○ちゃん大丈夫か?!」と私の眠っている二段ベッドの前に駆け寄ってきたので、何事かと私が訊ねると、父は「地震だ!」と言った。

私は「地震」という単語にあまりにも聞き覚えがなく、その出来事を理解するまで妙に時間がかかった気がする。地震というとあれか、いきなり家が揺れるもの。当時小学二年生の私には、その程度の知識しかなかった。

そして、何よりも私がそれを理解するのに困ったこと。それは、一番大きかったはずの、阪神・淡路大震災(兵庫県南部地震とも言う)と呼ばれた地震の間、気づかずに眠っていたことなのだ。今思えば、どうしてあんなに大きなものに気づけなかったのかが信じられないぐらいなのだが、幼いころの自分はよっぽど鈍感だったのだろうか…。この環境防災科で地震など災害や防災を学ぶようになってから、初めてその恐ろしさを知ったのかもしれない。

地震という事実を理解した直後、私が最初に心配したものは「どつぼ」だった(梅干とかを入れておく焼き物の入れ物である。以前親戚があれの手乗りサイズぐらいのものを私にくれて、えらく気に入っていた)。慌ててベッドから降り、棚の上に置いてあった「どつぼ」を見たが、幸運にも私の部屋のものは何一つ割れたりはしていなかった。ただ、片付けをしていなかった漫画類が散乱していたのは言うまでもない。

夜中に叩き起こされ、挙句の果てにアニメのひとつもしていないつまらないテレビの前に、家族三人で座っている時間が当時の私にとってどれだけ退屈だったか。青や緑ばかりの画面に赤い字で地震の震度やマグニチュードの説明がずらりと並び、リポーターが炎の燃え上がっている街の様子を必死に実況している。今の自分から見れば凄まじい光景なのだが、あのころの私にはつまらないニュースの一環でしかなかったのだった。

話は変わるが、当時のことについて、母から興味深い話を聞いた。大きな地震があると、空にひび割れのような一本線や、区切られた壁のように雲が割れるという話をご存知だろうか。母は、地震のあった直後にベランダから父と一緒にそれを見たのだそうだ。写真のひとつでも撮っていてくれればよかったのに、などと思ったのはつい最近の話。

それから、母は祖母と母の妹の住む家へと電話をかけた。幸いにも家の家具が倒れたりもしなかったが二人とも無事であった。しかしマンションが住める状況ではなかったらしく、うちに一時的に住むことになった。当時の遊び相手でもあった二人が家にくることに、危機感のかけらも抱いていなかった私はとても喜んでいたのでしっかりと覚えている。

しかし、地震が起きてしばらくしたころ、私にとっての最初の悲劇がやってきた。水が止まっていたのだ。迷惑な話なのだが、ただでさえ水を大量に使う私にとっては信じられない出来事だ。何が驚いたってトイレのことだ。毎回トイレに行くたびに、タンクや風呂場の水をトイレに流し込んでから使うのだ。「トイレに行く<面倒」なんて不等号が組み立てられていたのは、私があまり残尿感を覚えないという子供らしからぬ感覚だったからだろう。

だがあの時、私はある豆知識を覚えた。皆さんは当たり前と思うかもしれないが、歯磨きは水である。何を変なことを言うんだこの人は、と思った人は一度水のあまり使えない生活をしてみるといい。最近の日本では、「蛇口をひねればいくらでも水が出てくる」というのが当たり前だ。しかも、日本ではジュースや酒よりも水のほうが安い。一度海外に旅行したことのある人ならわかるかもしれないが(特に硬水の出る地方)、ジュースの10ペットボトルよりも水の500mlのほうがはるかに高いのだ。

私もあれを初めて見たときは驚いたが、日本のように軟水の出ている国のほうが少ないことをよくあらわしている。

これを言ってしまうばかりやすいことだが、私たちはその高価な水を滝のように流しだして、風呂に入ったり歯磨きをしたり、食器を洗ったりしていたのだ。

少々脱線してしまったが、私が震災当時歯磨きに使っていたのは「ウーロン茶」である。逆に虫歯になるのではないか、なんて思っている人もいるだろう。ところが、実はこれは結構歯にも良いらしく、お勧めらしい。しかし、それも最近母から教えてもらった話だったのだが、当時の私には嬉しくない健康法だったわけだ。洗面所に、うがいをするコップの横に 2ℓ ペットボトルでお茶がどんと置かれている姿は、外観的にもあまり歓迎できたものではない。

そんな体験の中には、当たり前のようにあまり知られていないこともいくつか存在していた。皿にサララップを置いて洗い物やごみの量を減らすこと、割れやすい食器などはあまり高い位置に置かないこと。意外にも学校などの建造物が、普通の家々よりも頑丈だということ。結構当たり前なことなのだが、これも体験しないとわからないことなのである。

当時、我が家は幸いにも被害はまだ少なくガスも電気も通っている状態であった。(すぐにテレビを見ることができた、ということがいい証明だ)しかし、水が止まっていたことにより私たちは日本がどれだけ豊かな国だったかということを感じ知った。毎日のように何度も来る給水車に、マンション中の人たちが様々な入れ物を担いで集まってきた。そのときの話をしよう。

私が住んでいるのは、当時と変わらぬマンションの 5 階だ。丁度家を出ればすぐそこにエレベーターがあるという、結構便利なところに住んでいた。震災が起きてエレベーターの使用が禁止されていた頃も、まだ歩いて登り降りのできる距離であった。

エレベーターがある程度使えるようになった頃、マンションでは水のタンクなど荷物だけをエレベーターを使って運んでもいいということになった。私のいた棟にはエレベーターが三つあり、その中でも使わせてもらえたのは右端のものだけだった。右端のエレベーターは 17 階までであったが、全部の階には止まるわけではなかった。マンションが微妙に変なつくりになっているせいでもあったのだが、私の場合は 4 階まで水を運んでもらい、そこから 5 階まで運んでいくという形になった。

このシステムが出来上がるまで、友人など 10 階らへんに住む住民は何度あの高い自分の住居まで階段を登り降りしたのだろうか。水のタンクは数リットルあるし、それ以上にペットボトルなども担いでいだろう。高いマンションというのも、こういうことを考えると不便なつくりだと思う。急な階段というのも、あくまで歩くものとして階段が手段にされている限りは考えものだろう。避難経路という前に、階段は日常では使われるものなのだから。

そういえば、我が家の食器棚は妙に大きくて、天井との幅があまり無かったことから、棚自体が倒れることは無かった。割れた食器の数も少なく、数枚の皿やグラス、カップなどが割れた程度であった。しかし、家族三人色違いで買ったクマのカップがなぜか母のものだけ割れたのが、私にとっては怖かったのを良く覚えている(あれは母の代わりに割れて、彼女の不幸を持っていつてくれたのではないかと私は思っている)。他の棟の上のほうに住んでいた友人の母が、大量の割れた食器類をダンボールに詰めていた姿は今も鮮明に覚えている。

それから数日がたった頃、祖母たちの家に荷物をとりに行った。車に揺られ、震災後初めて記憶に残っている近所以外の風景は壮絶なものであった。崩れ壊れ果てた家々や、斜めになった電信柱。消火されて焼け焦げている無残な家々。そして、見事なまでに折れて倒れていた高速道路の姿であった。

よくテレビで「〇〇県××市の…」なんていうニュースを目にしてきたが、こうやって目の前に映るものとは段違いの迫力であった。もう九年が経った私の頭の中では、震災のころの記憶は本当に断片的にしか残っていないが、まるで子供が遊んで壊したおもちゃのレールみたいに割れて倒れた高速道路は今でもしっかりと思い出せる。

祖母たちの家は小さな商店街の一角にあるマンションである。当時車でそこに向かったときの周りの様子は詳しくは覚えていないが、マンションなどに人々が入り出して配給を配ったりしていた。そのときなぜか、配給を配っていた人が、私にイチゴのチョコレートくれたのを覚えている。最低限の荷物を車に運び出し、炊き出しが行なわれているというのを教えてもらったので、私は父や祖母たちと小さな空き地へと足を運んだ。発泡スチロールの入れ物に、煮込みラーメンを一杯よりやや少な目程度に入れてくれ、そこで立ったまま食べた。どうやら当時の私は食べ物を中心に記憶が残っているようである。はっきり言って、食べ物や面白かったこと以外は私の思い出せることはほとんど曖昧だ。

祖母と母の妹が我が家に一緒に住みだしてから、しばらく水がない生活を送っていた。毎日何度かやってくる給水車に、タンクやペットボトルを抱えて水をもらいにいつていたとき、いつだったかは覚えていないが、その日は大雨に暴風というなんとも悪天候だった。500m1 だったか、小さなペット

ボトルを2つ抱えて母たちの手伝いをしていたときのことだ。暴風の中で、傘をさすこともできずに給水車から水をもらっていたとき、抱えていたペットボトルのうちの片方が、暴風で転がってってしまったのだ。フタが転がったりペットボトルが転がったりと大騒ぎをして給水の人たちを困らせた記憶がある。こう聞けば微笑ましい思い出なのだが、私の記憶の中では恥ずかしく悔しいものであった。ほかに色々なところへと水を運ばないといけないし、悪天候の中で後ろに人がたくさん待っている中であんなことをしていた自分は、手伝いのはずが逆に困らせてしまったのではないかと今も思い出すと恥ずかしい。

仮設住宅というものを、最近では目にする人はもうほとんどいないのではないだろうか。大部分は撤収工事が行なわれ、災害のひどい被災国などへと送り出されているのだそうだ。

大きなマンションが二つに住宅地帯が立ち並ぶニュータウンにある大きな公園は、大きな遊戯場に広場、テニスコートもあるなんとも豪華な場所であった。近くの中学校の運動部が、練習にくる姿を何度も目にしていた。遊び盛りであった私は、ジャングルジムや滑り台に毎日のように遊びに行っていた。

震災後、テレビもろくに面白いものも無かったからと公園に遊びにいった私は、公園の広場に立ち入り禁止とロープが張られているのを見た。最初は何なのだろうと思っていたのだが、家に帰って母にそれを言うと、当分は公園が使えなくなるということであった。仮設住宅が建つのだそうだ。

それから私は暇で何度も公園を訪れた。地面の土がきれいに整えられ、木で柱が立てられ、板が何枚も運ばれてきた。箱みtainな家が何件も出来上がり、気づくと公園は箱で埋め尽くされていた。そして、いつの間にかたくさんの人がそこで暮らしていた。事はほんの一瞬のここのように進んでいった。学校が再開して少し経ったころには、仮設の周りに自動販売機や集会所が設置されていた。

母が以前「〇〇ちゃんが小学校卒業するまでには仮設なくなるといいね」と言ってきた。それから数年が経ち、少しずつ、少しずつ住民は減り、冬には焼き芋をくれたりしたおじいさんもおばあさんも、ある日くるといなくなっていた。皆親戚や復興支援住宅へと移り住んだのだと聞いた。いつごろ仮設がなくなったのかは忘れたが、結局私は一番遊び盛りである時期を逃してしまったのだ。遊びたい年頃を、ほとんど家で過ごしたのである。あの日、震災が起きていなかったら。あの時あそこに仮設住宅が建っていなかったら……。などと頭をよぎったことも、少なくともなかった。今自分が目指して頑張っていることも、この学科にいることも、すべて震災があってこそそのものだったのかもしれない。だから私はこの震災に対しては憎しみと同時に感謝すら抱いている。震災で大切な人や家を無くした人たちには怒られるかもしれないが、私にとって震災は大きな分岐点となる出来事だったのである。

そういえば、私は引っ越してきて1年も経たないうちにこの震災に直面したのだが、その前まで住んでいた西宮市のことを母から聞いた。山道の多い奥のほうにあったということもあってか、私が以前住んでいた場所では、水も電気も止まることなく普通に生活していたのだそうだ。何かあったのではないかと心配していた私が拍子抜けしたのは言うまでもない。こんな時期に引越したことに、不可抗力ながら、私は少しばかり不満を持った。

しあわせ運べるように、という歌を皆さんはご存知だろうか。阪神淡路大震災を元に作られたものなのだが、私は震災復興後にマーチングの舞台などでもよく歌った記憶がある。この神戸に住み続けているということもあり、あの歌はどこを探してもどこかで耳に入ってくる。震災と入力すればホームページの音楽として流れるところも少なくはない。小学校のころは何かことあるごとにあの歌を歌った。中学では原爆やテロについてのことを勉強し、最後に文化祭の発表で歌った。なぜかすごく涙が溢れてうまく歌えなかった。なぜだろう、震災についての記憶は当時幼かった私には大して残っていなかったはずなのに、それでもなぜか涙は止まらなかった。震災で誰かをなくしたわけではない、家も崩れはしなかった。私の中で、いったい何がこんなに震災のことを記憶させているのだろうか。これは今も私自身わかっていない。

それから何年経っただろうか、今の私は環境防災科の中でこうやって文を打っている。思い出せることはそう多くはないが、他の思い出よりは多くしっかしり刻み込まれているはずだ。

もうすぐ十年という月日が経つわけだが、皆さんはどういった形で震災のことを覚えているだろうか。あの日揺れた、でもいい。ニュースで震災という言葉聞いた、だけでもいい。どうか些細なことでもいいからあの日のことを覚えていてほしい。あの多くの人を変えた出来事が、何もなかったかのように歴史にすら残らないという未来だけは、私はないと祈りたい。

ひび割れに接着剤の流し込まれたマンションの壁の痕。軽く上からペンキで塗り重ねただけで今も外から見れば一目瞭然の震災の形跡。家のタンスの後ろの壁紙の破れた痕。私の寝ているベッドの目の上にある角の壁紙のずれ。仮設住宅のあった公園に設置されたままの自動販売機。どれも震災当時の残り香だった。しかし、今私の住んでいるマンションの外壁は工事によって修繕されて傷もほとんど見えない状態になっていっている。当たり前なことなのに、喜ばしいことのはずなのに、私はその姿が妙に悔

しかった。

ある日、父は気まぐれにこんなことを言った。「次の震災が来る前に引越ししよう」と。父は、このマンションはもう一度大きな震災に直面すれば崩れてしまうと見たのだ。震災で潰れて困る家を持たないようにと賃貸にしたいと言ってきた。このマンションにいられないのは金銭面的にもわかっていたが、丁度震災前から引っ越してきて、今日まで過ごしてきてもうすぐ10年目を迎えるここから私は離れたくなかった。当時の形跡である家具を捨て、小さな家に移り住み、何事もなかったかのように暮らせというのか。私にはそう思えてならなかった。

話は半分戻るが、以前祖母か母かからこんな話を聞いた。このとき私は何が震災の記憶を残しているのかと思い知った。

地震が起きたとき、祖母の頭の少し上ぐらいにタンスが倒れたのだそうだ。彼女の寝相が悪くなく枕の上に眠っていたら、今私は祖母の顔を見ることができなかつただろう。話を聞いたとき、その様子が頭の中で想像され、すごく怖い思いをした。なんともまあシャレにならない話だ。もしも～が・・・だったら、などと最悪の状況を想像するのはもうごめんだ。今思い出しても寿命が縮みそうな気分になる。

私が震災について覚えていることは以上である。こうやって書き上げてみると、結構覚えているものだあと自分でも感心するぐらいだ。いつか自分でこの文章を見て、当時のことを思い出せたらと思っている。この神戸に引っ越してきて、震災にあって、環境防災科に入って、今これを書いている。将来私が防災にかかわる仕事についているかはわからないが、今後の進路として専門学校への進学も決定した。

私が将来そのことに少しでも関れたら、また誰かに少しでも話ができれば。

それが阪神淡路大震災に関ったという証明だと、私は思っている。

忘れられない思い出

八田原 納苗
神戸市垂水区

私たち神戸の人間は「10年前は…」とは言わず「震災前ここは…」とか「あれは地震が起こってから…」とか。

今、日常生活で阪神・淡路大震災はこのようなひとつの歴史上の出来事として、ただ人々の会話の中の“境目”として使われることが多くなってきている。

私の震災体験といわれても今となっては震災に関して覚えていることは少ない。私に残っている少しの記憶を頼りにしてもこの紙すら埋め尽くすことはできないだろう。それほどあの阪神・淡路大震災は私にとって、もう薄い過去の話となってしまうことは事実である。私は10年前という遠い昔に震災を体験した一市民にすぎない。

1995年 1月 17日 にあったこと

その前の日まで連休だったとか、祝日どこへ行ったとか何もわからない。でも1月17日、自分がどこにいて何をしたかは覚えている。阪神・淡路大震災が起こったからである。

まだ家中が、町中が静かだった早朝。大地震が起こった。すごい揺れだった。

「今でもそのゆれは覚えています」とか「すごいタテ揺れで…」とかは言えないけれど（わからないし、覚えていない）、とにかくすごい揺れだったことはわかる。その揺れは、遊園地のアトラクションとはまた違う自然が引き起こした揺れ。人工的に作り出した揺れではないから、あれだけの被害をも引き起こしたのだろう…。

しかし、実際大振動が発生しているとき私はこれが「地震」であることがわからなかった。「地震」って何??という無知の女の子だったからだ。あれは私にとって初めての地震だった（記憶上）。

地震が発生してからしばらくの間、私は怖くて、怖くて、怖くて、怖くて、もう本当に怖くて、…。ずっと泣いたままで、布団の中で母にしがみ付いていた。これが私の地震発生時の行動。とりあえず怖くて布団から出ることすらできなかった。

みんなはどうだったのだろう…。いま教室で共に同じ高校生活を送っている、この環境防災科のみんなは地震が起こったときどうしていたのだろう。私のように怖くておびえていた？外に出た？寝ていた？…どのようなシチュエーションにしよう私たちは貴重な体験をしたことに変わりはない。またこの阪神・淡路大震災が私たちを引き合わせてくれたという事実も否定できない。この地震が発生してから私たちの高校生活はスタートしていたのではないだろうか…。

阪神・淡路大震災についての記憶が薄い私でも今でもよく覚えていることがある。地震発生からどれだけ経っただろう…。当時6軒先の家に住んでいた高木のおっちゃんが「地震やあ〜!!!心配せんでええ〜!!!」と近所中に響く声で叫んでくれて、その声のおかげで自分が恐怖感から少し救われたということだ。

高木のおっちゃんは普段からすごくやさしくて、頼りになるおじさんだった。もっと私が幼かった頃はなぜかよく近所の子と一緒にあって高木のおっちゃんに牛乳をもらって飲んでいたりもした（牧場ではない）。

先日、その高木のおっちゃんが亡くなったことを母から聞いた。一番にあの日のことが頭によぎった。震災のことを専門的に学んでいる今、思う。あの時高木のおっちゃんがいなかったら私たち舞子台一丁目はバラバラだっただろうと。災害の専門家でも、地震研究者でも高木のおっちゃんには勝てない。兵庫県立健康センター所長の河村剛史先生もおっしゃっていた「まず、声だ」と。私は高木のおっちゃんから一番大切なことを小学2年生にしてもうすでに知っていたように思う。頼れる近所のおばちゃんになる方法を…。それを教えてくれたのは先生でもなく高木のおっちゃんだ。…間違いない。

母が懐中電灯をごちゃごちゃになってしまった寝室から探し出して台所まで降りて行ったのは地震発生からかなり後のことだったように思う。当時、私と姉そして母が寝ていた部屋はお琴や本、さらには植木鉢までもが降ってきていた。しかもその植木鉢はもう少しで姉の頭を直撃するところだった。家中を嵐が通っていったのか、空き巣でもに入られたのか…。とりあえず歩けるような隙間すらなかった。台所はというと、食器棚がおじぎをして中のものをすべて吐き出していた。もったいないからとずっと使わずにおいていた姉のお気に入りの茶碗ももちろん割れていて、今でも姉はこのことを根に持ってい

る。「…ダメ。スリッパはかなあかん」母が言った。そんなこと今考えたら常識だ。そもそもなぜ懐中電灯も探さなければ出てこないようなところに置いていたのだろうか。全く「防災」のない家だった。

その後、「ガス臭い…」ということで高木のおっちゃんを先頭に母も近所のガス漏れ点検に出て行ってしまった。取り残された3姉妹。その時何をしゃべったかとかは覚えていないが、かつてここまで恐怖感や不安でいっぱいになったことはなかった。

テレビを見て驚いた。同じ神戸が燃えている。火がとても大きくて、煙がとても大きくて…。リアルタイムで今、神戸でなにが起こっているのかをずっと見ていた。「火が、ここまで来たらどうしよう。」そればかり心配で嘆いていた。どんどん増える死者。どんどん増える行方不明者の数をただ“見る”ことしかできなかった。今でもそうだけど、私は身近な人（家族とか友達）の死を体験したことがない。だから余計に同じ神戸の人間が一度のインパクトによって無差別的に命を落とされたことが本当に悲しくて、怖かった。

そういえば世界中で起こるどのような災害でも数字は必ず残っている。たとえば日本の歴史上の災害史を読んでも必ず被害者数や被害総額などが出てくる。やはり後世に災害の記憶を残すには何らかの数字による被害規模を残さなければならないのだろうか。しかし私は思う。最も重要なのは数字ではなく、教訓ではないのだろうか。本当に次の世代に残すべきものは数字ではなく教訓。そしてそれを生かした防災力だ。

数字という、ある限られた大きさ（規模）によって、その災害を知る、学ぶ、発信するのも、防災を風化させないひとつの手ではあるが、数字を出してしまうと、必ずといっていいほど人間は本能的に災害の大小を頭に描いてしまう。このような災害の大きさ、という輪郭だけにこだわってはい前には進めないだろう。重要なのは、ある自然現象から人間が受けた被害を繰り返さないよう、当然残すべきである教訓だ。日本において災害を無視して暮らせるところは少ない。どうしても災害とは共存しなくてはいけない私たちに必要なのは数字ではなく、教訓というメッセージであると思う。

数日が経って、水の配給というのが現れた。家中総出でタンクをもち並びに行った。…私以外は。前にも述べたようには家の外に出るのが本当に怖かった。だから配給には一度も行っていない。余震の続く家で一人ずっと留守番をしていた。皆の帰りを待っている間もずっと同じ報道、同じコマーシャルを繰り返すテレビばかり見ていた。

今年の「1. 17メモリアル行事」で同じクラスの前田緑がステージで「私の震災体験」という発表で自らの震災体験を話していた。

「外でうろうろしていた私は父に『瓦が落ちてきたらどうする！』と怒られ家に帰ったのを覚えています。」

と。当時外に出ることすらできなかった私を思うと、この緑の「外でうろうろ」という行動はすごいと思う。同じ小学2年生なのに一方は家の中で怖がり、一方は外に出て状況を目で確かめようとしていた。緑らしいな、とも思う。でもそんな私たちを引き合わせてくれたのもやはり他ならぬ阪神・淡路大震災だった。

地震発生から数日後、淡路で自営業（お菓子屋さん）を営んでいた祖父母の元を訪れた。明石まで電車が走っていなかったのでタクシーを使おうとしたら、「そんなに長距離は走れない」と断られた。そのため私たちは舞子から明石のフェリー乗り場まで歩いて移動した。その後、やっとのことでフェリーに乗り込むと、海が荒れていて異常なほど船は揺れ淡路島に到着した。本当にあの時の船は怖かった。

祖父母の家について、もうどうしようもないほどの荒れ具合に驚いた。棚に並べてあったお菓子の箱は床に落ちたり、みんなで前にせり出したりしていた。

一番つらかったのが、祖父母の飼っていた猫のよっちゃん地震がおきてから一度も戻ってきていないということ。よっちゃんは以前からよく夜遊びをする猫だったのだが必ず朝になると帰ってきていたのに、今回は戻ってきていないらしい。…しかし、その後1、2ヶ月位してからよっちゃんはひょっこり帰ってきた。

ペットといえど今もなお我が家に居候している「トーマス」（カナリア・年齢不詳・オス）も実は震災がらみだ。トーマスが我が家に来たのは震災から3ヶ月以上もたってからだった。ある一人暮らしのおばあさんが震災前から飼っていた鳥が出産したのだが、震災を機におばあさんは老人ホームへ移ることになったらしい。だから鳥を飼うことができずトーマスと、その嫁、そして小鳥たちはずっと市役所で新しい飼い主を待っていたのだ。母はその小鳥をもらうために市役所に行ったのだが、そこにいたの

は年老いたトーマスとその嫁だけだったそうだ。仕方なくトーマスとその嫁を我が家で飼うことになった。(その後「その嫁」は正式な名前がつく前に亡くなり、トーマス自身もこの「トーマス」という名がついたのは震災から2年ほど経ってからの、私が小学4年生のときだった。) トーマスは我が家に来たときから誰にもなつこうとせずに、今でも手を近づけただけで逃げてしまう。しかし思えば、我が家で地震の風化を食い止めているのは他にもない生きた震災の記憶という「トーマス」の存在なのだ。現に母は今年やっと家具の固定を決意した。

小学校のころはやたらと作文というものを書かされたのは私だけではないだろう。1年生のころから何回も書いたという記憶は残っているが、何を書いたかまでは覚えていないのが普通だ。でも私はひとつだけ自分の書いた作文を覚えている。それは震災1周年のちょうど小学校3年生のときの作文で、震災から1年たった日の朝、学校中で「阪神・淡路大震災から1年」というような式があった。震災時のビデオを見たり、先生から当時の話を聞いたり…。その会の後私たちは作文を書いた。私はその作文にこう書いていた。

『あの地震が起こっていいことはひとつもないけれど、地震が起こってよかったことは神戸のみんなが家族のように助け合ったことだと思う』

…と。小学校3年生でも実感できるくらい神戸の町は助け合いに満ちていたのだなあと思う。

震災から数週間がたったのにまだ学校が始まらなかった。今までこれほどの長期休暇が突然過ぎせることなんてあっただろうか。いや、ない。私も他の子と同じようにはじめのうちは学校がなくなつてうれしいとしか思っていなかったが、それが何週間も続くとやはり友達に会いたくなつた。またそのころ私はまったく食欲がない日が続いていた。

その頃の食事といえばやつのことで電気釜で炊けるようになったご飯や、カップラーメン、パンなどが延々と続いていたような気がする。精神的に弱っていたのか、それともただ食欲がなかっただけなのか、とりあえずほとんど食べない日何日かあったようだ。PTSDとまではいかないが私だけではなく、もっとたくさんの人が震災によって目に見えない苦しみと戦ったはずだ。そんな人の支えになるような、理解してあげられるような人に私はなりたいと思う。

ようやく学校がはじまって驚いたのが今まで1・2・3・4組だったのがA・B・C組になったということだ。またこれはかなりポピュラーな思い出なのだが給食の牛乳がビンからパックに変わったこと。そして毎年この季節に小学2年生が主催する学校郵便と明石への遠足が中止になったこと。だけだ。

また小学校で印象に残っていることは4年生のときの担任、平湯先生の話だ。震災当時私の通う東舞子小学校は絵本の部屋を避難所として一時開放していた。利用者は少なかったものの数少ない避難者のために地方から救援物資がたくさん届いていたそうだ。避難者数2、3人に対して多すぎる救援物資のなかにあったセーターをたまたま避難所当番だった平湯先生が避難されていたおばあさんから受け取ったそうだ。

それはこれでもかあ！！と言わんばかりにさまざまな色が使用されたすごい派手なセーターだった。明らかに平湯先生の好みではないが、阪神・淡路大震災を忘れないように先生は毎年1月17日にそのセーターを着ている。私は平湯先生の顔よりなぜかそのセーターの派手なデザインの方をよく覚えている。…先生ごめん↓

言い方は悪いかもしれないが、私の中で阪神・淡路大震災といえばただの「教材」でしかないのだろうか…、と最近ふと思う。毎日環境防災科で阪神・淡路大震災にまつわることを中心に勉強し、阪神・淡路大震災にまつわる記念館に足を運び、阪神・淡路大震災の記憶を風化させないために「メモリアル行事」まで開催している。これだけ阪神・淡路大震災に密着していると、いざ原点に戻ってみて「あなたにとって阪神・淡路大震災とは？」と聞かれるとかなり返答に困ってしまう。確かに地震が起こってからこの環境防災科に入るまでの何年間かは阪神・淡路大震災についてこれほどDeepに考えたことはなかった。この空白の何年かが今の私の記憶を消してしまったのだと思うとすごく悔しい。なぜなら阪神・淡路大震災の記憶や教訓を発信できるのは、発信しなければならないのは、これも他ならぬ私のからだ。私にとって阪神・淡路大震災とは…。答えは一生かかっても出ないだろう。どんな学問よりも難しく、答えがないから。それほど私にとって阪神・淡路大震災は深く、遠いようで近い存在。

今回、先生から「私の震災体験」という課題が出されたとき私は「絶対無理だ。何も思い出せない」と思った。しかし、乏しいながらもかすかな記憶を文字として出してみれば結構、意外とページは進んだ。私たち環境防災科に課せられた課題は1人レポート用紙5枚程度。これが40人分集まると、レポ

ート用紙200枚分の震災体験が集まるという計算になる。

ひとりひとりの体験や教訓、想いが詰まったこの200枚は私の、世界の人々の一生涯の教科書となって防災文化を発信していきましょう。そう、願いたい。

恐怖の震災体験

平井 美紗
神戸市須磨区

阪神・淡路大震災からもう9年が過ぎた。9年過ぎた今となっては、震災のことをはっきりと覚えている人と、そうでない人の差は歴然としていると思う。阪神・淡路大震災より前に生まれた私は、震災のことを覚えているけど、阪神・淡路大震災よりも後に生まれた人は全く覚えてないと言ってもいいと思う。私だって覚えていると言っても全部覚えているわけではない。高校に行って、震災のことを勉強して「ああ～そういえばそうやったなあ～」ということもたくさんあったし、実際高校で勉強してから知ったことも結構ある。でも、私は、9年経った今、この震災のことは絶対に忘れてはいけないことだと思う。だんだん風化してきているけど風化させないように私たちのような若い人たちが次の世代へと伝えていくことが大切だと感じる。

1. 阪神・淡路大震災の前の日

1995年1月16日、私は私の家族とお父さんの友達の家族と休日を楽しんでいた。行った場所は、ハーバーランド。まだ小学2年生だった私は、まさか次の日にあんなことが起こるなんてこれっぽっちも思っていなかった。

小学2年の私と幼稚園の年長だった私の弟、お父さんの友達の子供（幼稚園年長の女の子と幼稚園年少の男の子）は、ハーバーランドにある阪急の屋上の橋で高いところから景色を見ていた。その時、私のお母さんが、

「もし、今、地震が起きたらこの橋も落ちるやろうなあ。」

などと笑いながら話していた。そのころの私は、まず、地震というものが何なのか？ということもはっきりとは分からなかったし、お母さんたちの会話の中で分かったのは、地震が来たらこの橋が落ちるのか～ということだけだった。その日、楽しい休日を過ごして家に帰った私は、家に帰って部屋の片付けをしていた。すごく汚かった机の上をきれいに片付けて本棚も整えた。それ以外は、いつもと変わらない生活で、次の日が学校だったから、学校の用意をして寝た。その頃の私は、「ああ、明日から学校、嫌やなあ～」という感じだった。

2. 阪神・淡路大震災

1995年1月17日午前5時46分、阪神・淡路大震災は何の前触れもなくやってきた。突然、激しい揺れと、大きな音に見舞われ、パッと目が覚めた私は、「えっ？？なにになに？？」と思いながら、反射的になぜか寝ていた布団を頭から覆いかぶさっていた。約50秒、まばたきもせずに震えていた。激しい揺れと、大きな音がやんだ。私がホッと一息つくと、同じ部屋で寝ていた、お父さんが、

「大丈夫か??」

と私と弟に聞いた。私と弟は、

「うん。大丈夫～」

と答えた。横を見てみると、弟がびっくりしたのか布団の上で立っていた。

地震が一段落着いたら、お父さんとお母さんが慌てて起き出した。私もそれに続くように慌てて起きて、お母さんの後について行った。あの時、家の中がぐちゃぐちゃになっているなんて思わなかったし、興味半分で野次馬のようについて行った。でも次の瞬間、私はあることに気がついた。電気がつかない。スイッチを押しても反応がなかった。お父さんが懐中電灯を出してきて、つけてみると・・・台所の食器棚からたくさんの食器が飛び出して、割れていた。足元はガラスの破片だらけだった。それを知らなかった私は、自分の部屋に行こうと思ったら、お母さんが、

「ここから動いたらあかんよ!!」

といったので、私はそのままじっとしていた。食器の現場を見て、思わず、

「うわ～、すごいなあ。」

の一言だった。今まで使っていた食器はほとんど割れていたし、残っていた食器も使うのが怖かった。なぜなら、食器棚の中もちょっと危なかったからだ。食器棚の扉を飛び出して食器が割れていたのは本当にびっくりした。そのすごかった食器棚を後にして、次に本棚を見た。本棚もひどい状況になってい

た。本棚からも本がたくさん飛び出していた。その本棚を見て、お父さんが、
「うわ～～、何これ～～。」

といったので、「何かな？」と試みてみると、お父さんが趣味で作ったプラモデルが全滅だった。お父さんは作り終わったプラモデルをほとんど本棚に飾っていた。飾ってあったプラモデルの上から、本棚の本が落ちていた。本棚を見終わった後は、もしかしたらまた地震が来るかもしれないから、いつでも逃げられるようにパジャマから服に着替えた。そして、お母さんに危ないからと言われて、私は布団に戻って寝ていた。お母さんたちはその後も、親戚に電話をしたり、光になりそうなものを探したりしていた。私の家からかける電話はつながらなかったが、おばあちゃんが心配してかけてきてくれた電話は受けることができて、おばあちゃんは大丈夫だということが分かった。電気もつかなかったのも、家中の懐中電灯を探して、電気が回復するまでは、その懐中電灯で過ごしていた。

地震から5時間が過ぎた10時頃、私は目が覚めて起きた。そのとき、5時間前に地震が来たことをすっかり忘れていた。夢の中の世界だと思っていた。でも、起きたときに服を着ていたのも、地震は夢ではなく実際に起こったことだと実感した。私が起きると、もうテレビがついていた。そのテレビには震災の状況が映っていた。どのチャンネルに変えても震災の事だけだった。そのテレビを見たとき、すごくびっくりした。なぜなら、今までとは違う神戸だったからだ。私が1番最初に見たのは、長田だった。あちこちから煙が上がってまるで空襲みたいだった。そのときの私は、ただただすごいとしか言えなかったが、今、もう1度あの場面を見ると感じ方は違うと思う。次に見たのは、阪神高速道路が倒れているところだった。それを見たとき、長田を見たときよりももっともびっくりした。今までよく通っていた道が割れていた。その時、地震はすごいと思った。三宮の方もぐちゃぐちゃだったし、須磨の離宮のところもすごかった。私には、灘にひいおばあちゃんがいる。灘の方も被害がひどかったのを聞いて、お母さんがおばあちゃんに連絡して、ひいおばあちゃんは大丈夫だということが分かった。でも灘のほうは水も出ないし、ガスもつかないし、電気もつかなくて、ライフラインは全滅だったそうだ。

私はひいおばあちゃんが無事だと聞いて、安心した。そしてふっと自分の部屋のことが心配になって、部屋に行ってみた。すると、机の上は机の本棚においてあった本でぐちゃぐちゃになっていた。でも、机の被害はそれだけでせせと机の上を片付けていた。そして、ピアノを置いてある部屋に行ってみるとなんとピアノが少しだったけど動いていた。あんなに重たいものが動くんでは信じられなかった。そして、ピアノが置いてある部屋にはタンスもあった。同じようにタンスも少しだけ動いていた。そして、お母さんたちも少しづつ食器棚や本棚を片付け始めた。そんな風に震災のあった日は過ぎていった。

3. 震災後

震災後、お父さんとお母さんが灘のひいおばあちゃんの家に行くことになった。当然、車で行くことはできないので、自転車で行くことになった。私はこの時点で絶対に無理だと思っていたけど、お母さんたちは行った。灘のおばあちゃんの家は、インスタントラーメンや缶詰、飲み物などを持っていった。親がどっちも行ってしまうので、私と弟は、おばあちゃんに預けられた。おばあちゃんの家に行くのは車でいった。私と弟は20日に預けられて、22日までおばあちゃんの家で過ごした。おばあちゃんの家で過ごしている時に、私は、8歳の誕生日を迎えた。1月21日は私の誕生日だった。今までの誕生日なら、家族と一緒にいたけど、その時はおばあちゃんたちと過ごした。ケーキを食べて、おいしいご飯を食べて、いつもと変わらない誕生日だったけど、家族といえるほうがいいと思った。その時、家族がけがとかななくて本当によかったなと思った。22日になって、おばあちゃんに車で送ってもらって、私と弟は家に帰った。お父さんとお母さんも帰ってきていた。灘のひいおばあちゃんのことを聞くと、とにかくすごかったらしい。お母さんから聞いた話によると、おばあちゃんの家以外は半壊か全壊だったそうだ。半壊といってももうほとんど全壊に近かったそうだ。そして、道も瓦礫でいっぱい、近くにある灘小学校にはたくさんの方が避難していたそうだ。ひいおばあちゃんも避難したそうだ。私は、その時、一緒に行けなかったのも、電車が通るようになったらお母さんと一緒に灘に行くことにした。

23日から学校が始まった。学校も目立った被害はなかったけど、渡り廊下とかひびが入っていた。私の行っていた小学校の体育館も避難所になっていて、学校が始まって少し人がいた。その中で学校が始まった。最初の日に、グラウンドで全員が集って先生の話を聞いているとき、フジテレビの取材が入っていた。学校の友達もけがとかなくて、安心した。その日はそれで終わって、次の日から、通常授業になった。その日、テレビで私たちの様子が写って、見ていた。その後で、今度は近くにある高倉中学校の様子が写った。中学校の体育館にも避難している人がまだまだたくさんいて、びっくりした。私が見たときは、体育館はほぼいっぱい人がいた。私たち家族は避難することがなかったのに、同じ地域内で避難している人がいるのは、信じられなかったけど、現実には、避難をしなければならなかった人

がたくさんいたというのが今なら分かる。

震災から、少し経って、電車が動くようになり私とお母さんは灘に行くことができた。おばあちゃんの家近くまで来たとき、私は、すごくびっくりした。普通の道に、倒壊した家屋の瓦礫がたくさんあって、道によっては、道幅全体に瓦礫が広がっていたので、瓦礫を踏まないといけないところもあった。おばあちゃんの家遊びに行き何回か行っていた駄菓子屋さんもつぶれていた。そして、おばあちゃんの家筋に行くと、おばあちゃんの家以外、周りの家がほぼ全部壊れてなかった。おばあちゃんの家は典型的な木造住宅ばかりだったので、全壊に近い家がほとんどだった。幸いおばあちゃんの家は震災の何年か前に建て替えたばかりだったので、耐震構造がされていたと思う。でも、おばあちゃんの家近くの家は建て替えている家は少なく、昔からあるような感じの家だったので、ちゃんとした耐震構造がされていなかったというのが震災の時に全壊になるぐらい壊れてしまった原因だろう。数軒は半壊でおさまった家もあったけど、中には、もう跡形もない家も何軒もあった。家があったところには瓦礫が残っただけという人は結構いたと思う。

ひいおばあちゃんの家近くには灘小学校がある。私はいつも見るだけで入ったことはなかった。でも、震災で灘小学校はすごいことになっていた。今までに見たことのない光景で私はびっくりしてしまった。もちろん灘小学校もたくさんの被害を受けていた。窓ガラスの割れている教室もあったし、校舎も壊れているところがたくさんあった。そんな灘小学校は、避難場所になっていた。グラウンドには救援物資のお弁当やタオルなど、日常で欠かせないものがたくさん支給されていた。そして、テントのお風呂もあった。まさか自分で見ることができるとは思っていなかった。私が入ることはなかったけど、常に誰かが入っていた。そして、体育館だけじゃ避難者が避難できないので、一般の教室も開放したそうだった。そんな時、おばあちゃんと一緒に住んでいるおばさんが救援物資をもらいに行くことになったので、私もついて行った。いつもならあまり人が通らない道もその時は人であふれ返っていた。団体に救援物資を分けている人や道端で座っている人などたくさんの人がいた。その道を通って、私とおばさんは灘小学校へ行った。まず1番にお弁当をもらいに行った。救援物資を配っていたのは地域の自治会のような人でお弁当のところは男の人でも女の人もいた。おばあちゃんとおばさんの分、2つもらって次に進んだ。次は、日用品だった。日用品といっても、満足できるほど、種類はなかった。私が行った時はちょうどタオルを配っていて、2人ももらいに行った。するといきなりタオルを配っていた人にたくさんのタオルを渡された。私は「これだけ全部もらえるのかな～」と思ってただぼう然立っていたら、私にタオルを渡した人が、

「あっ！！そのタオル配ってくれる？」

と言ったので、私は、配ることになった。タオルをもらいに来る人は大人から子供までたくさんいた。お年寄りもいたし、まだ幼稚園ぐらいの子供もいた。私はその1人1人にタオルを渡していった。最初、私は、ここの住民じゃないし、知らない人ばかりなので、「ちょっとやだな～」とか思っていたけど、慣れたら、だんだん楽しくなってきた。私に渡されたタオルがなくなってもタオルを渡すところにあるタオルを取ってきて少しの間渡していた。このとき、私はただタオルを渡していただけだったけど、中学生になってボランティアの勉強をして、震災の時に私がしたタオル配りは1つのボランティアということを知った。最初、渡されたタオルを配ったときはあまり気が進まなかったけど、最後の方になると、だんだん楽しくなってきたので、やらされているのではなく、自分からしたのでこれはボランティアになるそうだ。震災の時に少しでも人の役に立てた事が本当によかったと思った。

この日ぐらいから、私の家では近くのスーパーが少しずつ物を売り始めて、お母さんは1日に何回も往復して食料を買いに行っていた。お父さんも出勤し始めて、私たち家族は少しずつ今までの生活に戻っていった。

小学校も、通常授業に戻った。でも、震災から大きく変わったことが1つだけあった。それは、給食で出る牛乳が瓶からパックに変わったことだ。最初はみんな、瓶の方がおいしかったって言っていたけど、私は特に味の変化はなかったように思う。それよりもそれまで、私の行っていた小学校では牛乳瓶の紙のふたを使って「子供郵便」というのをしていた。これは、学校の授業で郵便の勉強をしてから始まったことで牛乳瓶の紙のふた1枚ではがき1枚と交換できて、学校のいろいろな人に手紙が出せるという仕組みだった。昼休みにのはがきを買いに行き、はがきを書いてポストに出すのが私の日課だったのに、震災でパックの牛乳になってから、それがなくなってしまった。はがきを書くのはがきを配るのも楽しかったのに、なくなってしまったのは私の中ですごく大事件だった！！！！

3. お風呂

震災からだいぶ月日は流れた。私の住んでいるところにあるお店も続々と開店しだして、まちは活気

を取り戻していた。そんな時、私のお父さんの友達の家族がまだ水もガスも出ないからと言って、私の家のお風呂に入りに来た。この友達の家族は、震災の前の日に一緒に遊んだ家族だ。兵庫に住んでいて、震災の被害はすごかったそうだ。2月の最初の方に入りに来るようになって、何日かはずっと私の家まで毎晩通っていた。その時の私は「どうして私の家では普通に水もガスも出るのに、兵庫は、水もガスも出ないのかなあ〜？」と思っていた。でも、須磨から兵庫まではそんなに離れてないのに、被害が格別に違った。そんな理由で、私の家にお風呂に入りに来ていて、入るたびに「いつもありがとう」と言っていた。その頃の、お父さんの友達の家族にとって、“お風呂に入ることができる”ということがどんなに嬉しいことなのかよく分かった。困っているのを手助けできてよかったと思う！

4. 今、私が考える阪神・淡路大震災

阪神・淡路大震災は私たちに多くの被害をもたらした。私たちから見るとあの震災は来てほしくない災害だけど、研究者の人たちはこの震災が起こったことによって新たな発見ができたというケースも多かったと思う。私自身は、この学科で勉強するまで、地震なんか来なければ・・・と思うことが多かったけど、研究者の人のことを聞いてそういう考え方もあるのかと思った。今は、震災からだんだん復興してきていて、外見が変わっただけで、人の心の中まで変えることはできたのかと思う。震災で大切な人を亡くしてしまった人は多い。私は、大切な人を亡くしたということはなかったけど、もし、私も震災で大切な人を亡くしていたら、今頃、どのような生活を送っていたらだろうか。毎年、1月17日になったら震災を思い出すと思うけど、その他にもいろいろな事を思い出さうと思う。

私は、この環境防災科に入るまでの6年間、1月17日だからと言って特に何も思うことなく過ごしてきた。テレビもそんなに気にならなかったし、新聞は読むことがなかったし気にならなかった。お父さんやお母さんも特に何も言わなかった。でも、私がこの学科に入ってから私は私も家族も震災に対する思いが変わったと思う。舞子高校では毎年1月17日に“震災メモリアル行事”を行っているが、2年間参加していろいろなことが分かったと思う。震災の時にたくさんの人がボランティアや復興のために力を注いでくれたこと、あまり人目には出ないけど影で一生懸命努力をしてくれた人がたくさんいたという事も分かったことの1つだ。そして、私の家族も震災のことに興味を持ってくれている。テレビで震災のこととかをしているのを見るようになったし、お母さんは震災のことが新聞に載っていたらスクラップしてくれている。こんな風にいろいろな人に震災のことが広がっていくのはすごくいいことだし、これから、必要になってくると思う。

今、阪神・淡路大震災のことを知らない人は本当に多いと思う。もちろん阪神・淡路大震災よりも後に生まれてきた子供たちは知らないだろうし、阪神・淡路大震災を経験した大人の人でもどんどん自分の中で風化して来ている人が多くなっていると思う。実際は分からないけど、風化していないというのは、はっきりと言い切れないと思う。6年前の私がそうだったように、震災で大きな被害を受けていない人は、きっと忘れかけている人のほうが多いような、そんな気がする。逆に、震災で大きな被害を受けた人は、いつまでもこの震災の事は頭から離れないだろう。私は、阪神・淡路大震災のことを風化させるのは絶対にだめだと思う。理由は、神戸にとっても大きな「傷」をもたらした災害だし、この震災でいろいろなことが変わったと思うからだ。震災から、ボランティアを続けている人が多くなったと思うし、建物も耐震構造が高くなったと思う。そして、次このような地震が起こっても被害が少なくなるように、頑張ってくれている人も増えたと思う。私は、もし今度地震が来たら今まで勉強してきたことを十分に発揮して、たくさんの人を助けたい。大人になって、幼稚園の先生になれば、地震がきたとき、園児を守りたいと思う。

これからの私たちの役目は、阪神・淡路大震災のことを知らない子供たちにどんどん発信していくことなのだと、今、強く思う！！

1995 年からの僕

福井 良太
神戸市長田区

1995（平成7）年当時、僕たち一家は長田区ある市営住宅に住んでいた。

- 1月16日(月曜日) -

1995年1月16日に僕は8歳の誕生日を迎えた。
次の日の1月17日に阪神淡路大震災が発生した。

- 1月17日(火曜日) -

前日まで3連休であって、1月17日の5時半ごろに目が覚めて学校に行くのが憂鬱になっているところに地震がおきた。

5時46分に地震が発生した。僕はまだベッドの中で横になっていた。地震が発生して最初にドドドという音が聞こえてきて誰かが暴れているのかなと思っていたら、強い揺れが発生して、僕の頭上に置いていた玩具や漫画が落ちてきた。落ちてきた玩具や漫画は僕の頭に当たり、僕は「いたい、いたい」と言った。

揺れがおさまり、父が僕の寝ていた部屋にきた。僕と同じ部屋で寝ていた母はタンスの下敷きになっていた。母は「助けて」と言った。父はタンスを起こして母を助けた。僕は父に「もういやや。引っ越そう」と言った。停電していて真っ暗だったので父は玄関においていた懐中電灯を出した。両隣で寝ていた兄2人と祖母が部屋にきた。兄は「こわい」と言った。父は兄たちに「小学校か公民館に行け」と言った。僕は母に服と靴を渡されて布団の中で着替えた。着替えを終えて部屋を出ると割れたガラスが散らばっていた。

玄関のドアが開かなかったので、父がベランダのガラスを割った。僕はそこから脱出し、2件先の部屋の玄関のドアが開いていたのでそこから外に出た。

地震の被害を受けた僕が住んでいた市営住宅は、部屋の壁が崩れて、エレベーターが動かなくなり、郵便受けも落ちていた。

僕たちは当時通っていた室内小学校に避難した。小学校に行く途中、いつも本を買っていた本屋が崩れて歩道をふさいでいた。他にも瓦礫が道路をふさいでいるところが数箇所あって遠回りして小学校に行った。

小学校に着いたら、図書室が開いていたので図書室に避難した。

小学校も地震の被害を受けていた。グラウンドに亀裂があって、5階と4階の渡り廊下が崩れていた。避難生活は、同じ小学校に通っていた友達がいたので、退屈しなかった。

避難生活の間は授業がなかったので、友達や兄達とひび割れたグラウンドでサッカーをしたり、玩具で遊んだりしていた。

10時ごろに電気が1回ついたけど、すぐ消えた。その後近所で火事が相次いで発生した。

僕が小学校にいる間、父が陥没した神戸高速鉄道の大開駅の上を通過して兵庫駅の方まで行って食糧を買いに行った。祖母は火事の中、親戚に電話をしにいて、大汗をかいて帰ってきた。

避難生活をしている間僕は体調をくずして風邪をひいた。布団の中で寝たきりになった。布団は、図書室の床に新聞紙を敷いた上に敷いた。

避難生活の中で困ったことは、食べるものがなかったり、トイレや風呂がなかったりしたことに困った。僕たちが腹をすかして困っていると、母が家から持ってきていたパンを出してくれた。僕はそれを食べた。母はほかの避難者にもパンをわけた。

トイレは水が出なかったので、用を足すときは道端だった。

他にも他の避難者がいるために自由に遊べなかったことだった。僕たちが図書室で遊んでいたら、お婆さんが杖で机をたたき、怒鳴った。僕は、びっくりした。

- 1月18日(水曜日) -

避難生活2日目にボランティアの人が来た。ボランティアの人がお粥をつくってくれたけど、正直に

いって、うまくなかったので、のどに通らなかった。母が家から震災の前の日につくっていたハンバーグなどのおかずを食べた。

2日目は何をしたかあまり覚えていないけど、友達と遊んだり、体調があまり良くなかったので、布団の中で寝ていたりした。

夜になると電気がつかなくて暗かった。何もできなかったのも夜は早く寝ることぐらいしかやることはなかった。

- 1月19日(木曜日) -

僕達一家の小学校での避難生活は3日で終わった。

3日目の朝、小学校を離れて、引越しをする前に、神戸村野工業高校に行った。ここは被災者の遺体安置所になっていた。当時、近所に親戚が住んでいて、祖母の姉が家の下敷きになって亡くなった。ここで亡くなった祖母の姉と対面した。祖母の姉の顔は安らかな寝顔だった。

その後、姫路の親戚の家に行くことになった。姫路には車でいった。車のトランクには、荷物がいっぱいだった。

第二神明道路は通行止めだったので、山麓バイパスを経由して姫路に行った。姫路に行く途中、道路に亀裂があったり、段差ができていたりしているところがあった。

姫路の親戚の家に着くと、親はすぐに神戸に戻った。親戚の家で最初にしたのは、風呂に入ったことだった。風呂からあがると叔母がラーメンをつくってくれていた。

姫路では被害が少なかったのも、ライフラインはほとんど使うことができた。

テレビ番組はほとんど震災についてのニュースばかりだった。ニュースを見て初めて震災の被害について知った。

夕方になっていところが帰ってきたので一緒に遊んだりした。

夜になってテレビの子供向けの番組を観ることができた。

- 1月20日(金曜日) -

次の日、親が神戸から戻ってきた。車は運転席と助手席以外は荷物で埋まっていた。その日もテレビは、震災についてのニュース番組ばかりだった。夜のテレビ放送は通常通り放送していて、アニメ放送を観ることができた。その後はいとこと一緒に遊んだ。

- 1月21日(土曜日) -

この日、僕たち一家は、親戚の家を離れ、親戚の家から1キロほど離れた親戚のおじいさんが昔住んでいた家を借りて、住むことになった。ライフラインは使えて、ストーブとこたつがあって寒くはなかったけど、困ったことは、テレビがなくて退屈だったことと、トイレが汲み取り式のトイレで臭かったことだった。

- 1月22日(日曜日) -

この日は何をしたかあまり覚えていない。

家にゴルフクラブがあったので、友達とパターをして遊んだ。当時僕が好きだったゴルフ漫画のキャラクターのスイングを真似していたら、兄の頭にゴルフクラブが当たってしまった。幸い兄には怪我はなかった。

夜は親戚の家に行ってお飯を食べさせてもらって、テレビを見た。

- 1月23日(月曜日) -

この日、いところが当時通っていた姫路市立御国野小学校に行ってお話を聞かせてもらった。

しかし、教科書がなくて不便だった。休み時間になると、クラスみんなが「遊ぼう」と誘ってくれた。僕はうれしかったけど、体調が良くなかったのも、外で遊ぶことができず、教室で絵を描いて遊ぶことしかできなかった。この日の授業が終わって、授業を受けさせてもらったのが1日だけだったのでせっかく仲良くなった友達とお別れになった。

学校が終わって、帰り道がわからないので、いとこと一緒に帰宅した。いとこの家は小学校から結構遠くてしんどかった。

- 1月24日(火曜日) -

この日は、借りていた家において兄達とゲームボーイをして遊んでいた。
昼になると祖母と兄達と一緒に親戚の家に行って昼食を食べさせてもらった。
夕方までいて、遊ばせてもらった。

- 1月25日(水曜日) -

この日引越しをした。姫路市の北西部にある書写という町に引っ越した。この町の県営書写住宅に住むことになった。

この日から再び小学校に通うことになった。住んでいた県住の近くにある姫路市立曾左小学校に転校した。神戸に引っ越すまでの約1年間この小学校に通った。使っている教科書が神戸と同じだったので安心した。当時インフルエンザが流行していたので、給食が終わったら下校した。

家に帰ると、親が神戸から持ってきた荷物があつた。

僕は宿題がたくさん出っていたので宿題をした。神戸に住んでいた時の小学校に通っていたときよりも宿題が多かった。

夕方になって兄が帰ってきたので、親戚の家に行き預けていた荷物を取りに行った。

帰りが遅くなったので、ラーメン屋にいてラーメンを食べて帰った。

夜遅くに家に着いたので帰ってすぐ寝た。

- 1月26日(木曜日) -

この日もインフルエンザが流行っていたので、授業が午前中で終わった。

下校すると、父が神戸から自転車をとりに行き戻ってきていた。

僕は自転車に乗って家に帰った。

それ以降、約半年ほどかけて被災地から荷物を取りに戻ったりした。

- 1月26日以降 -

2月にマラソン大会がありそのための練習があつたが、しばらくは体調不良のため見学した。体調が良くなって練習に参加したが、体操服がなくてジャージで走った。体操服がなかったことが原因で、クラスメイトからのいじめを受けた。事情を先生に話し、先生がクラスみんなに話をしてくれた。クラスみんなは先生の話聞いて事情を理解してくれた。ほかにも震災が原因でいじめを受けた。

当時、僕以外にも被災地からの転校生がいた。ほとんどの転校生は半年から1年ぐらいの間に神戸に戻っていった。

1995年の7月に西区の玉津に家を建てることになり、地鎮祭をした。

1996年の3月に現在住んでいる家が完成した。そして同年同月27日に姫路の書写から西区玉津町に引っ越した。震災から9年経ち、玉津に引っ越して8年経ち、現在に至る。

現在祖母とは別居中で祖母は、震災後1995年の夏に神戸市立西野幼稚園に建てられた仮設住宅に住み、1998年の3月に長田区の四番町三丁目の市営住宅に移り、現在も住んでいる。この市営住宅は、震災後建て直され、僕が住んでいたときよりも住みやすくなっている。

最後に

震災がなければよかったなと時々思うけど、過去を振り返っても戻ってこないのだから、前を向いて進んで生きたいと思う。

震災から 10 年

藤浪 梓
神戸市長田区

震災体験といっても、9年も前のことではっきり覚えていない。あいまいな部分もいっぱいあるが、かすかに覚えている記憶を確かに、震災体験を書いていこうと思う。

震災体験

1995年1月17日、私は当時小学校2年生で、3学期を迎え、3年生への準備をしている時だった。母と姉と私の3人暮らしで、姉は高校に通っていた。長田の住宅が密集しているところに住んでいた。もちろんこのとき、こんな大きな地震が起こり、あんなにも大きな被害がでて、神戸のまちが悲惨な状態になるとは思ってもみなかった。

地震が起きた1月17日、あの日は、夕方の空の色がいつもと全然違う色に染まっていた。

明日の学校の準備を済ませた私は母の隣に寝て、姉は自分の部屋で寝ていた。あの日は珍しく寝ている途中で目が覚めた。オレンジ色に光る家の電球が少し恐くて、私はすぐに寝ようとした。すると、その時…“ぐらっ”…と仰向けになった私の背中に振動を感じた。初めは、何が起こったのか分からず、ただ呆然とするばかりだった。そうしているうちに、さらに揺れが激しくなっていく。

すると、母が私の上に覆いかぶさってきた。私と母が寝ていたところのちょうど真正面に、大きなタンスがあった。そのタンスの上にあった家具が私の方へ落ちてきそうで、それを防ぐために母は私の上に覆いかぶさってきた。揺れは全くおさまる様子もなく、食器の割れる音と母が姉を呼ぶ声が家中に響いていた。揺れがおさまると、恐怖とともに部屋で寝ている姉は無事かどうかさがすごく心配になった。

真っ暗な中、母は近くにあったスリッパを履き、姉の部屋へ…。ドアを開けると姉が寝ている上にテレビがのっていた。最悪な状況を一瞬考えてしまったが、母が大きな声で呼ぶと、姉は何事もなくあったかのように起きた。笑えるが、あの地震でも姉は起きなかった。しかもテレビが自分の上にのっているのに爆睡だった。母はとても安心して様子で、私も幼いながらにほっと安心した。

余震がまだあるにも関わらず母は自分の母、つまり私のおばあちゃんのことを心配で私たちに家に居るようにと言って家を出て行った。おばあちゃんは近くに住んでいたが、その住宅がとても古くて、あの震災で壊れてもおかしくないぐらいの建物だった。私もおばあちゃんのことをとても心配だったが、地震への恐怖で立ち上がることもできなかった。姉が部屋から私のところへ来てくれて、安心したのを今でもはっきり覚えている。

そうしているうちに、母がおばあちゃんを連れて家に戻ってきた。ドアが開いた灯りを頼りに私と姉はスリッパを履き、ガラスの破片をよけながらドアに向かった。まだ1月だったので、外は凍えるような気温で、パジャマ1枚では長時間外にいらなかった。

すると、お隣に住んでいたおばさんが上着を貸してくれた。パジャマ姿の私がとても寒そうだったので貸してくれたのだろう。その上着はとっても温かくて、あの時はありがたみとか全然分からなかったが、今、思うとあのおばさんの行動は本当に感謝するべきものだなと思う。“ありがとう”の気持ちをもっと表していけばよかったと思った。

私たち家族はいったん近くにある公民館に避難した。そこには、大勢の避難者の人たちがいてびっくりにした。ストーブに群がる人、新聞を読む人、毛布にくるまっている人など…。何時間たったか、時間の感覚がなくなろうとしていた時、炊き出しが運ばれてきた。大量の湯気が立ち込めていた。私は凍える寒さの中、その炊き出しを口にした時、冷え切っていた体が、芯から温まっていくのを感じた。味ははっきりとは覚えていないが、とりあえず“温かい”というのだけは覚えている。炊き出しをつくってくれた人たちに感謝。

温かくなったところで、おばさん（母の姉）とおじさんといとこが車で迎えに来てくれた。私たち家族は、岡山にある福山というところへ行くことになり、そこまで車で移動することになった。

車で移動している途中、周りは火の海で消防車と救急車のサイレンの音が響いていた。長い道路の向こうでは、赤い光というか様子が私の目に入ってきて、不安の気持ちもある反面、ドキドキの気持ちもあった。いけないことだと分かりながら興奮に似た感情を覚えた。岡山までは遠いので私はそのまま寝てしまった。

気がつくと、岡山に到着しており、初めての場所にとってもワクワクしていた。私たちは岡山で、部屋を借りることになった。

その部屋で、テレビをつけると必ずと言っていいほど、地震のニュースが流れていた。そのニュースを見て私は複雑な気持ちになってしまった。友達や知り合いはまだ地震の被害を受けているかもしれないのに、私だけ岡山に来ているのはなんか悪いような、みんなは大丈夫かという気持ちになった。

しかし、やっぱりまだ小学生だった私は、テレビが見られなかったあの何日間、とてもつらかった。だから、岡山でテレビがついた時は、まるでテレビを初めて見る子のように驚き、テレビに釘付けになった。

ご飯も物資のような、レトルト物ではなく、温かいご飯で、今では当たり前だと思っていることが、ご飯一杯にも感動してしまうほどだった。

震災の影響で学校も行けず、友達にも会えず、寂しい思いもした。夜中、ベッドで暴れたりもしたらしい…。あの震災は、貴重な体験をさせてくれたとともに、改めて普段の生活の大切さや物の大事さを分らせてくれるものだったのだと思う。

どのぐらいの日数がたったのか分からないが、私たちは岡山を離れて、神戸に戻るようになった。久しぶりに見る神戸のまちは、地震が起こる前と全く違っており、その光景にゾッとしてしまうほど…。道路は、車が通れるかどうかというぐらい、大きなひびがあり、そのひびは何週間、何ヶ月たっても、修復されることはなかった。何よりも、ショックだった。私の住んでいるところは、被害はあまりなかったそうだが、山の方や上の方では、建物倒壊や道路がものすごい規模で割れていたりしたそうだ。

そして、私は久々に学校へ行った。私の小学校は5階建てで、結構古い学校だったので、心配していたが、外見は地震が起こる前と、全然変わっておらず、学校の周りの建物もほとんど無事で安心してた。それはたぶん、小学校が被害の少ない下の方に位置していたからだと思う。

久しぶりに友達と会い、地震のすごさと、どこに避難していたかなどのお話で盛り上がった。私は友達と一緒に、校舎の中へ入ることにした。中も意外と普通だなと思っていたら、校舎にはヒビが…。一番上の階はとても高いので、そこにもヒビがあり、下が見えて、落ちるのではないかなと思うぐらい、すごい大きなヒビがいたところにあった。少しでも暴れて、ふざけると落ちるぐらい大きなヒビというより穴だった。私が行った時は少しだけ補修がされていて少しのヒビだったらしいが、震災が起こった直後は、5階から下の階が見えるぐらい、ヒビが広がっていたそうだ…。

さすがにそんなヒビまみれの校舎では勉強できないということで、学校のグラウンドに大きな仮設が建てられた。初めての建物に私たちは興奮して、走り回るほどだった。縦長の仮設で3年か4年生ぐらいまでが仮設にいたような…。あんまり思い出せない。

しかし、楽しかったのも最初のうちで、3年生に上がり、夏の時期まで私たちは仮設で授業を受けなければならなかった。仮設は予想していた以上に暑い。グラウンドに出て、日陰に入っているほうがまだマシなぐらいの暑さだった。教室にクーラーがあるといっても、全然きかないので授業にも集中できず、ボーっとなってしまふほどだった。しかも学校の周りでは工事をする音と煙というか煙たさでもものすごくかった。

しかも、冬近くになると逆にすごく寒い。窓やドアを完全に締め切ってもすきま風が入ってきて、とっても寒かったのも覚えている。仮設で住んでいる人はすごくつらい生活をしているんだなと小学生の時思った。

しばらくして、いつの時期だったかは忘れたが、校舎に戻れることになりなぜかとても嬉しかった。そんなに長くの間、校舎を離れていないのに、懐かしい感じにとらわれた。少しの間、仮設はグラウンドに置き去りにされていたが、いつの間にか、仮設は姿を消していた。校舎に戻れたのは嬉しいが、仮設がなくなると少しだけ寂しい感じがした。

話は変わるが、母のおばちゃんの家は、とっても古い建物で、見た目からして木造がまる分かりの2階建てだった。それが地震でつぶれ、2階建てという跡形もなくなるほどグチャグチャですごいつぶれ方をしていた。そこから、私の母は危険をかえりみず家から大事なものを取り出したそうだ。おばあちゃんはつぶれた家を見ながら、とても悲しんでいたのを覚えている。

そして、その家跡には被災者の人たちが住めるように、仮設住宅が建てられた。もちろんおばあちゃんもそこに住んでいた。私はたまにおばあちゃんの元へ行って、励ますというか、一緒におしゃべりしたり、犬と遊んだりして、震災での傷を少しでも早く忘れられるように小さいながらに、そう思った。おばあちゃんは少しずつ、元気を取り戻していき、私も震災のことをだんだんと忘れるようになっていった。

今、仮設が建っていた場所は、新しい住宅が建ち、たくさんの家族や人が住んでいる。私のおばあちゃんもそこに住んで、一人で暮らしている。

ちなみに、私が通っていた中学校はあの地震で、校舎の一部ががけのようなところから落ち、下の道路に転落した。信じられないが、本当に落ちたと中学の担任の先生が言っていた。幸い、下の民家や住

宅には被害はなかったそうだ。たぶん道路に校舎の一部が倒れたので、住民への被害はなかったのだと思う。

私が中学校に通うころには、新しくきれいな校舎が建っていて、前のようにがけから落ちないように、その場所には建物はなく、グラウンドになっている。

私の一つ上の先輩は中学校が地震後つぶれてから、新しく建てかえられていなかったもので、近くの小学校を借りて、入学式をしたそうだ。私が入学する時には、きれいで新しい校舎が建っていて、幸い私はその校舎で入学式を行うことができた。

地震であれだけの被害を受けたにも関わらず、あまり地震に対する意識がなかったような気がする。もしかしたら私の中学校だけだったかもしれないが、地震の授業はほとんどと言っていいほど受けた記憶がない。地震のメカニズムは知っていても、それが起こった時、どう対処するかという一番大切な部分が抜けていては、被害をおさえることは難しいと思う。

阪神・淡路大震災を経験したことは次の世代、次の世代へと伝えていこうと思う。地震の恐さ、普段の生活のありがたさなど、一生忘れない記憶を、大事な子供たちに教えて、自分の子供たちがもし、大地震にあっても冷静に判断できるような知識をもった人になれるように知識を植えつけていこうと思った。

震災を振り返って今思うこと

約10年前、神戸では絶対地震は起こらないと言われていて、みんな安心しすぎて、「地震」という災害に対しての意識が全くなかったことが反省するべき点だったと思う。小学校でも避難訓練とかは1年に1回だったし、地震に対する授業とかもほとんどなかった。家に帰っても、地震対策などは避難訓練が行われたその日にだけする。地震が起こってから、避難訓練や地震に関する授業を取り入れるなど、少し遅すぎたのではないかなと思う部分もあった。

だから、みんな地震に対する知識が乏しかったのと、意識していなかったことがあんなにも大きな被害をもたらしたのだと思う。もし、地震が起こる前に、防災のことや地震のことについて聞かれても、ほとんどの人が何も答えられない状態だったと思う。私自身も小学校・中学校を卒業するにつれて、地震のことをだんだんと自分の中で風化させてしまっていた。

なので、環境防災科で学ぶようになって、私に地震のことを思い出させ、さらに豊富な知識を与えてくれる場で、とてもためになった。

環境防災科に入って、地震のことを学んでいくにつれて、あの震災体験は辛い経験でもある反面、貴重なものだったと考えるようになった。日本のなかで、しかも神戸あたりでしか住んでいない私たちだけが体験できた貴重な体験だった。何十年という短い人生の中で大地震を体験したのはすごいことだと思う。そのおかげで、環境防災科もできて今地震のことも勉強できている。すごい確率だと思ったこともある。

中には、震災で嫌な思いをした人もたくさんいる。私も知り合いの人が亡くなったりして、良い体験の反面、思い出したくもないぐらいの体験でもあるかもしれない…。

だからこそ、もっと地震への知識・対策、私たちが防災に関する知識をもっと得て、たくさんの人々に地震の恐さ、防災の大切さを教えていき、死者を出さないように精一杯のことをしていくべきと考えた。

最近では、テレビや新聞などで、南海地震・東海地震について報道しているのをよく見かける。今、日本全国が阪神・淡路大震災のような被害を出さないようにと、必死で防災を呼びかけている。阪神・淡路大震災が起こる前に比べると、防災に対する意識は、すごく高いものになっているのが分かる。私の家族も南海地震・東海地震に対する注目の意識があるのが目に見えて分かってきた。そういう姿勢こそが大事だとみんな分かってきていると思う。

しかし、その反面、さっきも書いたように小・中学校での防災学習があまり成り立っていないような気がする。神戸の学校でこの状況なのだから、もしかしたら全国の他の地域では全くと言っていいほど、地震に関することをやっていないのではないかな。もしかしたら地震に対してすごい取り組みをやっている地域も全国探せばどこかにあるかもしれない。言えることは、小さいながらも、私たちが防災を知らない人たちに教えて、それを伝えていってもらうことで、広がっていき、強化されるのではないかなと考えた。

今、環境防災科で地震・防災について学んでいるが、もし実際に大地震をまた経験することになったら私はどうすればいいのか。自分の子供や孫にどういう指示を出せばいいのか、はっきり言って難しいところだ。もしかしたら、勉強したことを忘れて焦っているかもしれない。やっぱりその時になってみ

なければ分からないと思う。でも、焦って命を落としたり、けがを負ったりしないように、自分の大切な人を守れるように、もっともっと勉強して、備えていこうと思った。

もうすぐで、地震が起こってから10年になる。ほとんどの人が地震のことを忘れていていると思う。地震を体験した人、地震のことを知らない人。たくさんいる。そういう人たちがお互いに協力し合って、強いまちをつくっていくべきである。もちろん私も体験した人の一人として、貢献していきたいと思った。

10 年

藤本 諭
神戸市東灘区

僕が震災にあった家は神戸市の東灘区、本山南町という町にある海からは3キロほど、阪神高速からは数百メートルに位置する関西電力の社宅の築30年はあるかという木造一軒家だった。地震当日、暗かったからかあまりよくわからなかったが、僕は地震の起こるちょっと前に目が覚めていた。起きるわけでもなく、トイレに行くわけでもない。とにかく目が覚めていた。なんとなく「もう一回寝ようか」とか考えていたときに地震は起こった。どんどん大きくなる雷のような怒号とわずかな揺れでうつらうつらしていた目がさえた。「地震かな？」と思った直後、ドカン！という音と共になにか大きな力に下から突き上げられ、地面は大きく揺れた。その感覚は揺れているというものではなく、スカイダイビングのようにバサバサと真下からの風をうけながら地面に落ちていくようだった。揺れが大きくなったときに反射的に布団にもぐった。怖いとか、早くおさまってとか、そういうのではない。なにも考えられないのだ。頭の中が真っ白になったというのだろうか、揺れはずいぶん長かったような気もするし、すぐおさまった気もする。でも、覚えているのは落ちていくような感覚と、カサカサに荒れた母の手の感触だけだった。

地震がおさまってから、子供たちは社宅に住んでいる住民の車に昼過ぎくらいまで缶詰状態で避難。大人たちはあたりの様子を見に回っていた。車の中に約6時間。ずっとつきっぱなしのラジオとエアコン。六時間、社宅の友達とえんえんとしゃべっていたはずだが、会話の内容はまったく覚えていない。本人は自覚していないだけで、案外精神的に疲労していたのかもしれない。車から出た後、母がすぐ近くにあったローソンで買ってきた食料をくれた。ポテトチップスやアメなどのお菓子ばかりだった。母曰く、母がローソンについた時点で店の前には多くの人が並んでおり、これだけ買うのがやっとだったそうだ。

夕方、屋根から落ちた瓦を掃除していると、父が遠く西の方角を見つめてから一言。「火事や」とぼつりとつぶやいた。僕もその言葉につられて西の方角を見てみると確かに煙が上がっていた。いても立ってもいられなくなった僕は、大急ぎで現場へと走っていった。このとき、僕も当然自転車はもっていたのだが、乗らなかった。子供なりに地震直後の都市で自転車に乗って移動することの危険性を感じていたのかもしれない。時計などの時間を知るための道具を何一つもっていなかったため、どれくらいの時間走ったかわからなかったが、なんとか空の赤いうちに現場にたどり着いた。現場は神戸市でも有名な商店街だった（地震後に有名になったのかもしれないが）。大きな商店街のアーケードは真っ赤に燃え上がり、周りの民家も覆いつくして、どんどん燃え広がって、僕はただただ圧倒されるばかりだった。周りには何千人とも思えるヤジウマの人ばかりと、ぼつんぼつんと泣いている人たち。きっとこの家に住んでいた人なんだろうなと幼いながらに感じた。大量の消防車が来てはいたが、そのうちのほんの数台しか放水していなかった。理由は簡単。水がなかったのだ。消防もかなり遠い小学校のプールから水をくみ上げたり、東灘区の川は基本的にすごく浅いのだが、その川に布団を投げ込み、川をせきとめ、即席のダムを作ってなんとか水を供給しようとしていたりしていた。

そのとき消防の人が言った「もう海から水ひっぱってくるしかないやろ！！」という言葉だけ覚えている。その後家に帰ったときに、辺りはだいぶ薄暗くなっていた。「どこ行ってたん」という父に「火事見にいった」と答えたら、ふうんといった感じで流された。

その日の夜の街は真っ暗だった。見えているのは自分たちだけだった。

二日目の朝、早くに目の覚めた僕は父と一緒に散歩に出かけた。普段は二人とも散歩なんかしないのだが、自分たちの町がどうなったのかが知りたかった。いざ、歩いてみるとそこは、見るも無残な光景だった。折れ曲がった無数の電信柱、ピサの斜塔のように大きく傾いた住宅。そこらじゅうの家という家にヒビが入り、マンションには一階がつぶれて存在してなかった。

二人とも殺伐とした風景にちょっと暗くなってしまった。

その日のうちに、すぐ向かいにある商船大学学生寮に避難しにいった。そこは、まさに戦場の難民キャンプといった感じで恐ろしいまでの人、人、人だった。その中でぼくらの家族は布団二枚分くらいのスペースを、離れ離れだったがとるができた。環境防災科に入って知ったのだが、この避難所は付近の老人に積極的に声をかけて避難所に誘ったり、避難所の人数を数えて、県に報告し、その数だけのおにぎりや、毛布をもらっていたりしていて、最終的には自分たちで独自のマニュアルを製作し、県から表彰を受けていた避難所だったらしい。そんな避難所だったせいか、雰囲気はよく、広くて遊び場もあつ

たし、あそびつかれても、学生のひとが貸し出していた雑誌を読んだりできて、退屈ではなかった。二日目から、給水車がきだし、三日目には電気が復旧した。そんな日々が六日ほど過ぎた頃・・・加古川の親戚のうちに、僕と姉二人の子供三人だけ行くことになった。行くときはとにかく時間がかかった。昼前にでたのに三宮に着いたころにはもう六時に近かった。僕はひどい乗り物酔いで、なんとか飴をなめることでもっていた。長田あたりの記憶はないのだが、三宮あたりはひどいありさまだった。暗闇の中で道路に倒壊したビルを照らす消防のライトがまるで映画のようだった。そんなこんなでひたすら二号線を通して加古川の親戚の家についたころにはもう十時をまわっていた。親戚の家族は夜遅かったのにもかかわらず、ぼくたちに久方ぶりの温かい夕食をご馳走してくれた。

その日の夜は今までの深夜でも少しがやがやしていた避難所に慣れてたせいとか、みょうに寝付けなかった。二日目の朝、ものすごい衝撃をうけた。親戚のおじちゃんが出勤し、親戚の兄弟が登校したのだ。「だからどうした」といわれそうだが小学二年の頭脳には衝撃だった。「加古川は同じ兵庫県なんだし、それなりの被害はうけているだろう」と思っていた。が、「え？地震なんかなかったよ？」といわれたら思わず信じてしまいそうなくらい被害がなかった。水道や電気などのライフラインなどはもちろん、地震があったせいで閉まっているような店もなかった。まさかこんな近いのに「温度差」があるとは思ってもよらなかった。

テレビを見ていてもなんだかちょっと「カヤの外」のように感じた。

そんなほのぼのした生活が始まってから一週間。加古川の親戚の家から東灘に戻った。

帰りは行きよりは早かった。壊滅的なダメージを負った町にもどるなんて僕らくらいのものなのだろう、と思った。

帰ってきていきなり母が「あんた、明日から学校に行きよ」と一言。どうやら僕が加古川に避難している間に青空教室で、しかもほとんど勉強無しで学校が始まっていたらしい。

ひさしぶりの学校はものものしい集団登校で始まった。集団登校なんか見たことも聞いたこともなかったのでもちろん戸惑ったが、すぐにまだ安全じゃないんだ、と自覚し登校した。学校では半数以上人数が足りない状態ではあるがみんなの懐かしい顔を見て素直によるこんでいた。しばらくしたら、学校にプレハブの教室をつくるために、二週間くらいのあいだ六甲アイランドの小学校に神戸市が用意した観光バスで通うこととなった。

そこはとても綺麗で最近できた学校というのがすぐにわかった。

そして学校ができあがって一ヶ月、僕は大阪に行くことになった。

「大阪府寝屋川市」。ひらかたパークのある枚方市の隣に位置し、電車はJRではなく京阪電鉄を主としている。さほど繁華的な要素は少ないが、商店街はおおく神戸の深江とさほどかわらなかった。違う点といえば、田畑が多いことくらいだろう。四月の六日、僕は生まれて初めて梅田より東に来た。僕のなかで繁華街といったら三宮のそごうが限界だったので電車乗り換えのためにおりた京橋のごちゃごちゃっぷりにすごく驚いたのをおぼえている。JRから京阪にのりかえ三十分ほどしたら「かやしま」という駅についた。

そこから十五分ほど歩いたところに父曰く「神戸の社宅が壊れたから会社が新しく用意してくれたアパート」らしいが、実際はアパートというよりはハイツという感じでとても綺麗なところだった。引越してから二日で始業式、早速学校がはじまった。学校は前の家と違いとても近かった。どれくらいかというと、夜に校舎を懐中電灯で照らして遊べるくらい近かった。そしてクラスで「1月に震災のあった神戸からきた藤本君です」と紹介されてクラスメイトの反応を見て、あることに気づいた。

このあたりの人たちは「震災」にあっていないのである。

たしかに兵庫南部地震の影響で震度4位の地震はあった。しかし被害というものは無いに等しかった。このあたりだけではない。京橋だってあんなごちゃごちゃしていながら、震災の爪あとのようなものは何一つ感じられなかった。加古川ではほとんど家から出なかったし、親戚にしか会っていないから気づかなかったが、大阪では「震災にあった」といえば「かわいそう」と返ってくる。あくまで震災は自分たちにとっては「カヤの外」の出来事であり他人事なのだ。当然それは悪いことではないし、逆に「みんなそうだ。みんなつらいんだ」とか震災にあっていない人に言われたら逆に腹が立つだろう。クラスメイトには「地震があったのを朝のニュースで知った」という人なども少なくなく、改めて被災地と被災地周辺の温度差を（温度差とかそんな難しいことは、当時は考えなかったが）感じた。とにかく、しばらくのあいだ僕は「被災者」という扱いうけることになる。

「神戸で地震にあった」というレッテルはこんなこと言ったら怒られそうだが、案外べんりなもので、

学校から何かは忘れたが粗品もらったし、地域の公民館でのお祭りでも粗品をもらえたりしたが、なによりよかったのがみんなにチャホヤされることだった。小学校三年生くらいになると、神戸の避難所とかの話なんかはくいつきが良く、僕の話すこと話すことに「うそや」「うそや」と言い立ててきていた。もともと「場に馴染む」ことは得意だったのでそういうのはすぐにちやほやはなくなったが、必要なかったといえれば必要なかったのてたいして気にもならなかった。そうしてだんだんと自らも震災の「カヤの外」に出て行くのだ。

だいたい神戸市内の電車が完全復旧したのと、仮設住宅の抽選の話くらい以外は、サンテレビ（神戸のローカルテレビ局）以外で地震や震災に関する報道は僕の記憶の中ではあまり無かったと思う。自分でも気づかないうちどんどん神戸という町からはなれていった。

そんなある日にちょっとした転機のようなものが訪れた。

大阪に引っ越してきて一年と9ヶ月。震災がおこってからは二年が過ぎようとしていたとき神戸に引っ越すという話が家にまいこんできた。もともと父が会社から借りていた家だったのでいつかは神戸に戻ってくるとわかっていたが、とうとうやってきたのである。

できる限り地震にあった東灘の町にもどりたかったが、そうそう希望の物件はなく、なかなかみつからなかった。復興住宅でもぼくはよかったのだが父は一軒家を熱望しており無理だった。

そうして、まわりまわって「たるみ」という神戸市と明石市のちょうど境目くらいの町にやってきた。

この町に引っ越す際、ぼくは少し泣いてしまった。2年ほどしかいなかったが、大阪は住みやすくていい町だったし、友達ともすごい仲がよかった。正直、大阪から離れるのがいやだったのだ。

大阪にいったころは、ただただ神戸に帰りたかったのに、いざ引っ越したときは、さびしくて、不安で、涙が流れてしまった。しかし、2日後に後に親友といえるくらいの友人と出会い、不安はきえていった。

そして小学校にいて、すごく感じたのが「帰ってきた」という安堵感である。

この小学校で震災にあっていない子はほとんどいない。つまり「カヤの外」からかえってきたのだ。

震災にあったからといって優遇されるわけでもなければ、かわいそうとかいわれることもなく、居心地がよかった。こんな風に感じるのはぼくだけかもしれないが、「やっぱり神戸からははなれられないなあ」とおもってうれしかった。

そんなこんなで地震から7年。中学3年生になって高校の進路を考えだしたころ、姉からとある話をきいて僕はおおきな衝撃を受けた。

東南アジアでの少女売春問題である。

15歳にも満たない女の子たちが、日本円にして一晚ジュース一本分、だいたい150円くらいで体を売り、生計を立てている。さまざまな人間と性行為をかわしているの、エイズのようなとても重い性病にかかって死にいたることもあるそうだ。しかし彼女たちは売春をやめることはできない。なぜならその売春で得たお金があつて初めて彼女たちの生活はなりたっているのであつて、売春で得たお金なしでは生きていけないのだ。それによって東南アジアでの性病の感染者数は年々増加しているという問題も引き起こしているのだ。

ぼくはこの話で、世界にはこれほどの「温度差」があるのかと、悲しくなってしまった。

ぼくたちが部活の終わったあと、友達とたわいもない話をしながら飲んでいたコカコーラと、彼女たちが明日を生きるために見ず知らずの男たちと一夜を過ごしてやっと思得ることのできる生活費がほとんど同じなのだ。確かに日本と東南アジアでは物価が違うので必ずしも同じとはいえないかもしれないが、ぼくには十分衝撃的だった。

そしてもうひとつ、ちょっとだけ希望のようなものが見えた気がした。

「彼女たちはジュース一本分のお金で生活ができる。それくらいのお金なら何とかできるのではないか」という希望である。

その希望をきっかけにぼくは環境防災科の試験を受けることとなった。

正直に言ってしまうとぼくの環境防災科をうけた理由のなかに、「震災の被害にあったから」というものはほとんどなかった。しかし、地震にあったことで得るこのできた経験は、なにごとにもかえがたく、すばらしいものであることに間違いはない。これは震災で家族や友人を亡くしていない子供の戯言かもしれないが、これはぼくの中でおおくを占める「柱」なのだ。

Best Friend

前川 直
神戸市垂水区

震災の前日1月16日、それは、とても幸せな日である。なぜならその日は1年に一度自分が生まれた日を祝う日だからである。その通り、10年前の1995年1月16日も変わりはなくとても家族の優しさは暖かく、食べ物も飲み物も変わりなく出てくる。まさか翌日の午前5時46分に恐怖の「阪神・淡路大震災」が僕ら家族を襲うとは誰が予想できようか。

1月17日午前5時20分ごろ、我が家に一本の電話が入った。「トゥルルルルルル」母が出るとそれは兵庫に住んでいる祖母からの電話だった。「さっきから近所の人と話してるねんけどな、日も出てへんのに西の空が真っ赤やねん」と祖母は言うのだ。母はそれを「気のせいだ」と言いまた眠りについて。そこで「気のせいにしなければ多くの人を助けられていたかもしれないのに」と後に母は言った。

1月17日午前5時46分「ゴゴゴゴゴゴゴッ」すごい地響きとともにそいつはやってきた。父と母は「地震や、これは少し大きいぞ」とすぐさま起き上がり何が起きているのかを確認しあった。肝心の僕は前日の誕生日会の疲れからか、ぐっすり夢の中にいた。僕の住んでいる垂水区は、比較的に地震は大きくなく震度5ぐらいで済んだので被害は大きくなかった。

午前6時半ごろ父はすぐさま家を飛び出し板宿にある当時通っていた「五位の池小学校」に向かった。父は後に語るが「あの時車で板宿まで行ったがそのときの光景は一生忘れない。地面が割れ、建物は東に行くほど壊滅率が大きくなっていき、そこらへんから立ち込める火事発生による煙。はたして自分の勤めている小学校はあるのだろうか？」と。そう考える内に小学校に到着した父は学校の周りに集まっている人だかりの多さに驚いたそう。その後学校を開放し、同僚の自転車を借り長田に住んでいる父の妹家族と兵庫に住んでいる母の親の安否を確認しに行った。

それから少し時間が経ち、午前9時ごろ僕は急いで起きた。間抜けなことに、僕は学校に遅刻してしまう時間まで寝ていたことに驚き「お母さん、なんで起こさんかったん？」と怒りながらリビングに出ると、テーブルの上のものは全部落ちており、食器棚の皿はすべて割れ、キッチンに置いてあったぜんざいが散乱している。水道も電気もガスも止まっており、そして泣いている母が一人。どうやら結婚記念のときに買った思い出の皿が割れてしまったらしい。僕はその状況を飲み込めずにいた。なぜなら僕にとって地震は初めての体験でまず地震というものの存在を知らなかったのだ。

午前10時、部屋に散らかっているものを片付け軽い朝ごはんを済ませた。その日の朝ごはんは今でも覚えている。なべの中にあった残り少ない冷えきったぜんざいを弟と二人で震えながら食べていた。母が携帯ラジオを納戸から見つけてき、ラジオをつけた瞬間アナウンサーはとても恐ろしいことを僕たちに伝えた「…兵庫区は壊滅的な状況です…死者は大多数の模様…」母は自分を育ててくれた父や母、そして兄家族らが亡くなったかもしれない・・・そう考えると一瞬気が遠くなった。そして母は車で兵庫の祖母の家に向かったのである。

午前11時ごろ身支度を済ませ、車に乗り込んだ。国道2号線は陥没したりして通行止めになっているので学園都市周りのコースで行くことにした。出発して20分もう少して学園都市というところで車が勢いを無くした。前を見るとおびただしい数の車たち、やはりみんな考えることは同じなのだろう。母は根気よくその渋滞を待った。1時間後何やら車の中から異臭が立ち込めてきた。後ろを振り返ると弟が座っているチャイルドシートからのようだ。嫌な予感・・・僕は弟がしているオムツのテープを恐る恐る引っぺがしてみた、するとうんこが・・・嫌な予感が的中してしまった。こんなときにあたらないのに。母は急いでいたせいか、祖母の安否を気にしすぎていたのかわからないが弟の替えのオムツを忘れてきたのだ。車中に響き渡る弟のわめき声、母はしかたがなく車を家へと引き返した。「悔しい。こんな時に何もできへんなんて…」と母は涙を流していた。

家へ帰ると午後の1時をまわっており、3人ともお腹がすいたので近くのコンビニへ買い物に行った。コンビニの客はみんなおおきな荷物を持っており、なぜ大きな荷物を持つ必要があるのだろうか？と最初疑問に思うがそれはすぐ恐れへと変わった。出かけている間に地震で家が潰れたら貴重品や着るものなどが全てだめになってしまうのだ・・・地震などの災害について無知なのは怖いことだとその時思い始めた。

コンビニから帰ると、電気が通っており家の中に暖かみが戻った気がした。家に明かりが灯ると何かが違うものだ。母にも安堵の表情が戻ったが、その表情は長くは続かなかった。テレビをつけると長田

区の全壊地域の中継がされていた。その光景は小学校2年生だったときの僕でもはっきりと覚えている。「これがあの活気あふれていた長田の町か？兵庫はどうなっている？早く映してくれ！」と願った。10分後その願いは叶ったが残酷なことに長田と同じような光景だった。母はそれを見るとがっくり肩を落とし、何かを諦めたような感じがした。その時電話が鳴った、「トゥルルル、トゥルルル、トゥルルル」出てみるとなんと元気な祖母の声であった。公衆電話の回線がギリギリ残っておりずっと電話の順番を待っていたのだ。そこには板宿から自転車で駆けつけた父もあり、全員が無事だというのが分かった。母は涙を流しながら電話の受け答えをしていた。その電話があった後から母は急に元気になった。あの時の笑顔は一生忘れることはないと思う。

その晩、父が五位の池小学校から持ち帰ったインスタントラーメンと水とガスコンロで晩御飯を済ませた。テレビではけが人や死者数を流しており父の生徒の安否が心配だった。晩御飯を食べた後に水が無くなったので、水の調達に行くことにした。西区は比較的被害が少なかったもので、水が出ていた。それを狙って父の先生仲間の家へ水を貰いに行った。帰り際、その日1日長かったせいか僕は車の中で寝てしまった。僕の長い一日は終わった。

1月18日の朝、というか昼に起きた。前日の疲れからか、起きた後もとても眠たかったのを覚えている。小学校2年生の僕からもこの地震は憎みたいものだった。なぜなら、毎週楽しみにしていたテレビが見られず、フラストレーションが溜まっていたのだ。「それぐらいのことかよ…」とバカにするかもしれないが小学校2年生からしたらそれは十分重要であり、外は危ないということで友達とも遊べないし面白くなかった。毎日、パンやラーメン、炭水化物ばかりで味に飽きるのは必然であった。僕は「もうこんな飽きたわあ。美味しくない」と言ったのを覚えている。だが、避難所生活をしている人たちはろくに満足な食事でもできず、慣れない他人との共同生活、そこから来る不安や焦り、自分の家族や親族の心配。そんな人達がたくさんいたのに、そんなワガママを言っていた僕がいる。今考えるととても恥ずかしい話だ。

その日は近くの神社から湧き水が出るということでお昼からバケツやペットボトルを持って水を汲みに行った。外に出ると、元から人通りは少ない道だが、さらに人がおらず、「みんな昨日の地震で死んでしまったのかな？」と思い不安になった。学校の友達は大丈夫かな？学校の先生は大丈夫かな？小学2年生の僕はその当時、垂水区でも震度7の地震があったと勘違いしていたのだ。まったく笑ってしまう話だ。

不安で落ち込んでいたが、近くの神社に行ってみると近所のおばちゃんや学校の友達が来ていてみんな生きている喜びを分かち合った。僕も学校の友達などが怪我も無く元気であることにとてもうれしかった。

その日、家に帰ると父が帰宅していた。父は自分の勤めている小学校が避難所になっているので、その世話で疲れ果てていた。避難所の人には不安や焦りでとても気が立っており、対応に難しいらしいのだ。さらに、その時はボランティアの人たちは到着しておらず、その学校の職員たちですべてのことをしなければいけないし、避難所の対応など初めての人も多いで困っている状態らしいのだ。そんな父に追い討ちをかけるように長田区の死者がテレビで発表されていた。その中に父の生徒の名が何個かあった。父はがっくりと肩を落とし自分の部屋に行ってしまった。その時父は自分の生徒が死んでしまったのに何もできないのでとても悔しかったのだろう。その夜は家族全員4人で夕食をとった。「食事は暖かいのになぜこんな冷えた気持ちになるのだろうか？」と思った。

1月20日の朝、父はまた朝早くから自分の小学校のほうへ車を走らせた。残った僕たちは軽い朝ごはんを済まして、身支度をし始めた。なぜなら今日は兵庫の祖母のところへ行くからであった。午前10時ごろに母の運転で垂水にある自宅を出発。二号線は途中までしか使えないので学園都市回りで行くことにした。17日とは違い、道路はめちゃくちゃすいていた。きっとみんな家でじっとしているのだろう。30分もしないうちに兵庫の祖母の家に着いた。だがそこは壊滅的な状況であった。今考えるとあの全壊ばかりの地区でよく半壊ですんだものだ。やはり昔木工所で働いていて自分で家を建てたことだけはあ

る。祖母は家の中におり、「おばあちゃ〜ん来たでえ!!」と言うと祖母は相変わらず元気な笑顔で迎えてくれた。僕は祖母や祖父が普段どおり迎えてくれることを神様に「ありがとう」を言った。だが、あの暖か味のあった祖母の家は半壊状態で、瓦が剥がれ落ち、壁には亀裂が入り、床も抜けていたり、2階に行くと柱の軋む音が聞こえたりして不気味な感じがした。普通の小学2年生なら本物のお化け屋敷を思わせるその建物にワクワク感を覚えないわけがない。僕は早速家中を探検した。

1階のキッチンはずっとおんぼろな感じがしていたが電気がつかないのでさらに暗く懐中電灯がな

いと歩けないのでインディー・ジョーンズになったみたいだ。二階に行く階段はさらに困難が待ち受けていた。普段から急な階段だったが、地震により傾いてしまっていたのでまるで崖のぼりをしているかのよう。2階に上がりまず目に飛び込んだのは宴会とかに使っていた広い部屋の真ん中にぽつんと縄飛びの縄が置いてあった。すかさず僕はその部屋に飛び込み、何を考えたか知らないが縄飛びをしだした。もちろん、半壊がそんなに危ないとまだ知らなかったときである。5分ぐらいすると親が悲鳴を上げながら近づいてきた「なにしてるのあんた!!!」あの時怒られた理由が土足で家に入ったからだと思っていたが、なるほど今考えると危ない。

お昼を過ぎ、去年の夏の残り物のそうめんを食べさせてもらい、探検に出かけた。不謹慎なことを言うのだが、見慣れている町並みが瓦礫の山や、道がひび割れていたり、水が溢れ出したりしてきている。まるで、映画の「ゴジラ」の世界に入り込み主人公になったようで、楽しいという感情で心がいっぱいになっていた。祖母の家から20メートルぐらい進むと、付近の家から出されたあらごみの中に漫画が200冊以上積んであった。漫画好きの僕にはそれがたまらないほどの発見物で、隠れるつもりはなかったが、そのあらごみの山に埋もれるように漫画を読み続けた。これが後にとてつもなく恐ろしいことになるうとは誰も予想しなかった。

同時刻、僕が探検に行っている間、親は祖母の家の片付けを手伝っていた。割れた皿から、大きい家具類までを全部外に出し、使えるものは祖母の家の裏にある従兄弟の家に運んだ。その作業が終わるともう夕方になっており、僕が祖母の家にも従兄弟の家にも戻っていないことに気がついた。僕の親や祖母、従兄弟、そこにいた人全員で一生懸命僕を探したそうだ。しかし、当時小学2年生で体が小さい僕が大きいあらごみの山に埋もれているのだ。見つかるはずがない。

夕方もおわり、ほぼ何も見られない状態になってしまったので仕方なく帰った。祖母の家に帰ると、怒った母が待ち受けていた。それもそのはず、いつ崩れるかわからない建物ばかりなのに子供一人で歩いておりいつまでも帰ってこない。どこかで埋まっているのではないかと考えるのは常識だ。そんな親や親戚の人の心配も露知らず、僕は漫画を読みきったことに満足感を覚え幸せ感に浸っていた。親不孝な息子だ。

震災から10日ぐらいたった日、僕の通っていた小学校は通常授業に戻った。久しぶりに出会う友達は相変わらずみんな元気で怪我をしている人は少なかった。その日から、長田に住んでいる同い年の従兄弟が編入してきた。なぜか、従兄弟が急に学校に来てしかも、同じクラスにきて同じ授業を受けている。どことなく照れくさかったりする。それまで、お互い話さなかった。好きな娘の話や今ハマっているもの、好きなスポーツなど震災で従兄弟と仲良くなれた気がする。従兄弟は、1ヶ月もしないうちに帰ってしまったが、あの日々は結構楽しくて思い出に残る。

半年後の夏休み、僕はこの震災を僕の手で何か形に残したいと考えた。そこで考えたのが、霞ヶ丘小学校で大流行だった、「統計グラフコンクール」への投稿であった。

まず、夏休みが始まると神戸市垂水区五色山1丁目付近の家一軒一軒、合計100軒に夕方インターホンを押して聞きまわった。聞く内容とは、①自分の家の被害 ②震災にあつて何に困ったか? などであった。さすがに小学3年生であり、アンケートなので聞く範囲には限度があり、少ししか聞けなかった。

夏休みの中盤に差し掛かると、兵庫の祖母の家の隣にある、避難所の公民館にアンケートをとりに行った。そこでは、同じ質問をしたが、ぜんぜん違う答えが返ってきた。家の被害はほとんどの人が全壊で、「震災にあつて何に困ったか?」は垂水では「水、ガス、お風呂」などに対して兵庫では「着るもの、家族と連絡が取れない、食料」など涙なしでは語れない内容だった。

どちらもアンケートをとった後、僕はまとめの作業に入った。ポスター1枚に莫大な量の情報をグラフにするのはとてもおもしろかった。しかし、ポスターを書き始めたのが31日のお昼ごろ、作業は父に手伝ってもらいながら急ピッチで進められた。深夜1時ごろ、小学3年生にはつらい時間だが作業は終わらない。深夜2時にポスター1枚分が終わった。

1ヵ月後、驚くべき結果がやってきた。僕が出したグラフが神戸市で1位の特選に選ばれたのだ。

この地震は僕を大きく成長させたのだと思う。

震災を振り返って

前田 緑
神戸市西区

時の流れというものは早いもので、震災から約10年の月日が経った。私は当時小学二年生の8歳で、両親・祖父母・妹二人の7人家族だ。あの年の記憶といえば、2年1組で担任の先生の名前が私と同じ『緑』だったこと。冬の持久走が苦手だったこと。あとは、あの兵庫県南部地震。私は地震というものの恐ろしさを知らなかった。幼い時期だったからかもしれないが、神戸に住んでいて地震を体験したことがなかったからだと思う。『怖い』と思っていたものは、せいぜい台風くらいだった。

当時から西区の木造住宅に住んでいる。今年で築20年くらいだ。西区を流れる櫛谷川は、私の家の東側を流れている。今となっては工事がなされ、コンクリートで整備されたが、昔は自然に近い川だった。川魚や鴨、自然に生えてくる草花、河岸は土だけでスコップで深く掘ると、河川水が染み出してくる。そんな川だったので、一年のうち梅雨の時期は少し不安を持っていた。特に台風が訪れたときには、「もし川の水が溢れて、堤防を越えて家まで押し寄せてきたらどうしよう…」と思った。当時、一番怖かった水害と同じくらいの恐怖を覚えたのは、阪神・淡路大震災からだ。

1. 震災前夜

地震発生前夜の1月16日。私たちに何かを伝えたかったのだろうか。家で飼っている犬が、ずっと鳴いていた。怖がりな犬であったが、こんなに鳴くことは今までになかった。父は、「何であんなに鳴くんや？」と言い、何度か外に出て周囲の様子を見に行った。私は表の部屋の窓から犬を触ろうと思い家の外を見た。普段と違う一月の気温と、空の明るさだった。「何か気味悪いな。」と家に帰ってきた父は、母と話していた。私は、ほぼ9時頃には就寝していた。

2. 震災発生

1月17日の早朝。私はいつも7時前に目を覚ますので、深い眠りについていた。祖父母は一階で、父、母、妹二人と私は二階で寝ていた。しかし、午前5時46分。夢の中で凄い音が聞こえた。最初は、家の南側にある第二神明道路で交通事故が発生した音だと思った。でも、次第にその音は近づいてくる。地鳴りだった。地鳴りと共に、今までに体験したことのない揺れが始まった。私は驚き目を覚ました。とっさに布団の中にもぐった。地震の揺れに驚いた母は、「お父さん!!」と隣の部屋で寝ていた父に叫んでいた。「布団からでるなよ!」と父は叫び続ける母に、落ち着かせるように返事をした。次女の梓は家族で唯一、あの揺れで目を覚まさなかった。でも、うっすら気づいていたらしい。

その頃、一階で寝ていた祖父母はとっても驚いていた。なぜなら、いつも早起きの祖母は当時も、朝食の支度や洗濯物をしようと起きていた。畳の上に敷いた布団の上で、着替えていた。その時に揺れが始まったらしい。揺れで足元に置いてあったタンスが祖父母の布団の上に落ちてきた。布団の上に座っていた祖母が、もし布団の中で寝ていたらタンスの下敷きになっていたに違いない。隣で寝ていた祖父は、隣に倒れてきた家具に驚き布団から出ることができなかったそうだ。

揺れがおさまってから、やっと母の叫び声が消えた。「みんな大丈夫?」。確か母はそのような言葉で私たち子供の安否を確認した。布団に入ったままの状態と同じ部屋にいた四人で話していた。私と妹二人は、二段ベッドで寝ていた。母はその隣で畳の上に、布団を敷いて寝ていた。私達が寝ていた部屋には、私の学習机とベッドが置いてあった。幸いなことに、何も倒れてこなかった。

揺れがおさまっても、父はすぐ来ることがでなかった。なぜなら、父の部屋には2～3個、母が嫁入りするときに持ってきていた、大きなタンスがおいてあった。そのタンスが、父の体の上に倒れ掛かっていた。父は何一つ怪我もせず無事だった。普段から口癖のように「お父さんは運動神経抜群やからなあ!!」と言っていたのは本当だったのだろうか。第一に、父は大きな揺れが始まる前に目が覚めたので身を守ることができたと言っていた。もし、目が覚めていなければタンスの下敷きになっていただろう。

二階で寝ていた私たちは非常時のときのために置いてあった、一本の懐中電灯の光を頼りに一階へ降りていった。階段の上は壁土がたくさんかかっていた為、足の裏は真っ黒になった。階段を下りると台所に行くまでに大黒柱がある。その大黒柱が割れていた。降りると祖母がきて、「大丈夫やったか?!よかったあ…」と私たちの姿をみた後、心配そうな顔がほっとした顔になった。そして、冬はコタツを置いて家族でみかんを食べながらテレビを見ていた6畳の部屋に行った。神棚からお供えしていた果物や、花瓶が落ちていた。その時、微かにさっきと同じような地鳴りが聞こえだした。「三人はコタツの中に入って!!」と言われコタツに頭から入れた。その後に父母、祖母も身を守った。余震はすぐにおさまった。「また余震は来る。ひとまず夜が明けるまで家の中でいよう。布団を台所に持っていけ。」と父が言ったので布団を持って食卓机の下に、私たち子供は布団に包まっていた。それから約一時間、私たちはその状態でいた。「すごい揺れやったなあ…。この家壊れへんかなあ？」と三人で話していた。

3. 震災当日の朝

両親はまず、ガスの元栓を閉じた。なぜなら、私の家はプロパンガスだからだ。台所はいろんな物が落ちていて、破片があると危ないのでスリッパを履いて、家中を見回った。どの部屋も壁が壊れ落ちていた。ドアが閉まらなくなったり、床が斜めになったり…部分的な被害がたくさんあった。一番被害が見られたのは、玄関の屋根を支える大事な柱のひとつが、土台の玉石からあと1cmで落ちそうになっていたのを見つけた。父が、「智美!!」と母を呼んだ。父はあわててジャッキをとりに行った。それを使って柱を持ち上げ、玉石の真ん中に乗せたそうだった。もし、それを見つけてなかったら屋根が落ち、玄関がふさがれてしまっていただろう。

水道と電気は止まっていた。しかし、私たち家族は井戸に救われた。私の家には昔から井戸がある。昔から友達に「私の家に井戸あるねん。」といったら、誰もがとなりのトトロなどで出てくる、バケツなどで水を救い上げる光景を想像するが、そんな井戸ではない。普通に蛇口をひねったら水が出てくる。それと、父が浄水場勤務だったため、そこまで軽トラックでいって水を得ることができた。長いようで短かった、台所での一時間が過ぎて夜が明けてきた。

私たちも服に着替えて外に出た。足元を気にしながら三人でゆっくり玄関を出た。今までに見たことのない地震の力を家の破損や、周囲の家の被害を見たときに知った。いつもと違う朝。家の端の土手を犬の散歩をする人もいない。出勤する車も通っていない。7時30分に家を出て集団登校で学校に行く時間が近づいているのに何も用意をしていない自分がいた。「学校に行かないの?」と、ふと母に話すと、「学校に行くまでの道は危ないし、皆の家も大変なの。だから今日は学校休みよ。」といわれて、「そうか…。」と思った。私は、『学校が好きでたまらない!』というほどではなかった。なぜなら、私が通っていた小学校は、家から徒歩30分だったからだ。

今思えば、集団登校で歩いていく道は危険がたくさんあった。細い路地の両端に立ち並ぶ日本家屋。農家が多く、農機具をしまっていた納屋も結構古びていた。一番安心できたのは田んぼ道だけ…。学校帰りに蓮華を摘んだりしながら帰った記憶がある。

私がただ呆然と立っていた頃、両親たち大人はあれもこれもと忙しそうにしていた。私は門の外に出て、門の前にある菜園や隣の新宅の家の前を通って、次女の幼馴染の家の前まで行っていた。幼馴染の部屋の窓が、道からとても近い。「知佳ちゃん、知佳ちゃん?」と窓の外から私は呼んでいた。周りの家の静けさに、安否を確認したかったのだろうか。今でもなぜ呼びにいったのだろうか?と思う。いつもと違う雰囲気を感じていなかったのか…。

「緑ちゃんの家大丈夫やった? 梓ちゃんと泉ちゃん、お家にいる?」と知佳ちゃんと、お父さんが窓から顔を出して答えてくれた。「うん。みんな大丈夫やで! 凄く揺れたなあ。」と話していると、父が来て「瓦が落ちてきたらどうする! 家の近くは危険や!」と怒られ家に帰った事を今も覚えている。そして、父同士が同級生で幼馴染でもあったので、私を迎えに来たときに「どうや? 大丈夫やったか?」と少しの間、話をしていた。

4. 生活場所の確保

朝日も上がりきった頃から、家族みんなで離れの部屋へいった。父が、「離れ部屋は被害が少なく、平屋構造だから、しばらくはこの部屋で過ごそう。」という判断だった。私の家の門には、離れの部屋

二つと納屋と車庫がある。部屋の荷物を片付ける前に、その隣の納屋から出せるものは出して、ござを敷き、部屋として使えるようにした。今となっては、その納屋の中は私たちの古い教科書などを沢山しまっているが、当時は、荷物は少なかったそうだ。

荷物を出し終えて、掃除をしたあと、家の中から使える必要なものを運び込んだ。二階にあった布団と、ベッドを分解して運んだ。

わざわざ台所まで料理しに行かなくても、納屋でできるように、カセットボンベやオーブントースター、使える食器も運んできた。普段使っているガスコンロもプロパンガスだったので使えたが、母はガス漏れしたときのことを恐れて、火を使うときは全てカセットボンベを使っていた。カセットボンベは、冬の季節、よく鍋料理で使うため以前から買い置きをしていた。

私は納屋で寝泊りする時がくるなど思ってもなかったのも、いつもと違った生活が新鮮に思えたこともあった。水道は、二日ほど使えなくなった為、トイレは外にあったボットン便所を使って、水道がつかえるようになると、家の中のトイレを使うようになった。

水道が使えるようになるまで、何日かかかったそうだが、井戸水があったので食器は井戸水で洗っていた。

やはり、冬に欠かせないのが暖房。ストーブは以前から灯油を買い置きしていたため使うことができた。しかし、昔から使っていたストーブだったので、もし又地震が来たら危ないので、地震の揺れを感じたら火が消えるストーブを買いに行った。だから、寒かったという記憶はあまりなかった。

震災当時、祖母と叔父の息子の学兄ちゃんと同じ仕事場で、震災当日祖母は仕事場に行かなかった。それで、岩岡に住む叔父叔母が私達を心配して、ダンボールにレトルト食品や餅などをたくさん詰めて持ってきてくれた。家にも買い置きしていた缶詰やレトルト食品があったが、あの時は本当に助かったとは母は言っていた。震災時の朝食はパンや餅だった記憶がある。

今から忙しくなるという頃に、祖父の異変に気づき父は明石に住む叔母（父の姉）を呼んだ。祖父は昔から、よくお酒を飲んでいて肝臓が悪かったのと、地震の恐怖から体調不良になったのだと思う。父は家のことをするので大変だった。祖父は西明石付近の病院に入院した。

5. 震災翌日

震災の翌日、被害の少なかった加古郡稲美町に住んでいる叔母家族と祖父を呼んで、二階に置いていた重い家具を一階に下ろすのを手伝ってもらった。なぜなら、『通し柱がひび割れていた為、そのままにしていると一階が潰れるかもしれないと思ったから』と父は言っていた。二階から、重たいタンスなどを一階にもって下りてきた。私は、二階に置いてあった学習机から、教科書や机の引き出しを持って降りた。

私たち姉妹は、祖父たちが帰るときに加古郡稲美町の祖父母の家まで、車で乗せて行ってもらった。その日から祖母の家に子供三人は泊まりに行った。祖父母の家でも揺れはあったものの被害は少なく、そっちのほうで安全だということで私たちはお世話になった。祖父母の家から歩いて 10 分くらいのところに叔母家族の家があった。私達は祖父母の家に泊まっていたが、昼間はほぼ友代姉ちゃん（従姉妹）達の家で遊び、ご飯を食べた。私達姉妹の他に、大久保に住んでいた親戚も来ていた。私はそこでの記憶は全くと言っていいほど覚えていない。

私は小学校が一週間休みだったため、学校再開の前日に私だけ先に家に帰った。梓と泉は、保育園の再開が遅かったのか、あと何日か滞在していた。

家に着くと、家が危険な状態とわかっていたが、やはり安心感があった。帰宅した日の夜、久しぶりの家での夕食。その時に、長田区の様子が写ったテレビをみながら夕食を食べた記憶がある。そのとき見た映像は今までに見たことのない神戸のまちだった。赤い炎が上がり、沢山の人が学校に避難して暮らしている。今、自分の家があるありがたさ、帰る家がある安心感はその時に知ったのかもしれない。

地震発生後、初めての学校。学校の所々に『危険』や『立ち入り禁止』などの張り紙があった。大きな被害はなかったが、壁にはひびが入っていた。私の通っていた玉津第一小学校は一時、避難所となっていたそうだ。幸い、私の友達でなくなった人はいなかった。里に帰ったままの人は何人かいた。

6. 震災を振り返って・・・

そして、幼かった私は自然災害の恐ろしさを知った。私は現実から目を背けたりはしなかった。ただ、時の流れが幼い時の記憶を風化させていた。

この震災から、私たちは沢山の教訓を与えられた。

まず、あの地震から修理した家も、未だに傷んでいる部分やずれているところがある。今も見るたび、当時の事をふと思い出す時がある。「もし、又あのような大地震が起こったら、私の命は助かるだろうか？」と考える。今の家の状態が悪いという事は、両親も私達子供も知っている。この震災体験を両親と振り返っているとき、「私の家は、耐震診断したことがある？」ときいた。耐震診断を受けることは大事だと、高校生になって知った。特に老朽化している私の家のような建物は。しかし、未だに出来ないのが現実である。父の上に家具が落ちてきて下敷きになりかけたのにもかかわらず、家具の固定もしていない。私の家はとても危険な場所である。私が勉強してきたことを、まず自分の家でしなければ何にも変わらない。私は、今度の長期休暇の時に親にしてほしいと頼んでみようと思う。

非常時につかえる道具の日頃からの準備の大切さを知った。私の父は何でもできる人だ。大工道具などは、最低限そろっていると思う。だから、実際に阪神・淡路大震災のときでも、ジャッキを使って柱を元に戻すことができた。あと、普段普通につかっているライフラインがつかえない不便さ、水の大切さをこの地震で実感した。私の家は、水を得る手段があったし、電気もすぐ回復したし、ガスも使えることができた。だから、それ程不便ではなかったが、やはりいつもと同じように暮らせない不便を感じていた。いつもなら、当たり前のように流れているトイレの水がなくて、外から汲んできた井戸水で流した。当たり前のことが当たり前でなくなったときこそ、普段の生活の豊かさ、幸せさを知る機会だ。私は今の当たり前を『幸せなこと』と、改めて思わなければいけないと思った。

私の家族は女が多い家族で、男は祖父と父だけ。祖父は年もとっているし、普段から家のことをする人ではなかった。家をいつもまとめたりする父のコーディネートの存在は、今思うと家族のすごく心強い黒柱だと思う。あの当時、父はまだヘルニアになっていなかったから、重い荷物も運ぶことができたのかもしれない。母が、缶詰など買い置きできる食料をいつも買い置きしていた。何かあった時のために備蓄していた母と、私たちを心配してダンボール一杯の食料を持ってきてくれた親戚がいたから、食料で困ることはなかった。あと、年中家の前の菜園で野菜を育てている祖母もいた。今振り返ってみても、私の家族の存在はとても大きかった。誰もケガすることなく一緒に今も暮らせている幸せ。私は、家族の大切さ、人と人のつながりの大切さをこの震災から学んだ。

震災体験で、近所づきあいがよかったから人の命を助けることができたという話も聞いたことがある。

私の住んでいる、西区の人口が震災以前と比べて増加した。私の家の周りは田んぼだらけで、地域に住んでいる人皆を大体知っていた。道ですれ違ったらいつも笑顔で挨拶を交わしてくれる、温かい地域の人が好きだ。今となっては、住宅地となり知らない人がほとんどだ。もし、この状態で災害が発生したら地域で助け合うことはできるのだろうか。災害時は、知らない人とでも力を合わせることができると思うが、やはり常に生活基盤の中で近所付き合い、地域でのネットワークをしっかりとしておく事が大切だと思う。

私がこの環境防災科に入った理由は、自然と人が共生できる社会をつくりたいと思ったからだ。今もその気持ちは変わらない。入学以前は『防災』についての知識や興味はあまりなかった。しかし、私はこの環境防災科に入って様々なことを知ることができた。入ってなかったら、普段から何も考えず、ただ毎日を楽しんで暮らし、災害が起こった時にはとてもパニック状態になっていたと思う。今の私も、災害時はパニックになるだろう。

非日常に備えることの大切さ。それは、今の神戸のまちから思い出させる面影はほぼなくなった。しかし、あの震災は忘れてはいけないものだ。あの災害は私たちに、今まで安全だと考えていた現代都市機能や社会基盤施設がもろかったことを教えた。「あの時は辛かった。」それだけを語り継ぐのではなく、あの時与えられた教訓をこれからどのように見直していくかを、私たちは考えていかなければいけないと思う。

これから先、どのように語り継いでいくのか。私は、将来まちづくりに携わった仕事をしたい。この学科に入って防災をするのは地域、市民からだと知った。地域の人のつながりが大切だ。私は、いろんなまちを自分の足で歩いて、たくさんの人とネットワークを広げていきたい。その中で、私の震災体験を伝えていけたらいいと思う。私は、幼い頃から戦争の話を祖母から聞いていた。私もその祖母のようにになりたい。そして、これから先もこの震災を風化させないように生涯学習をしていきたいと思う。

震災から

松井 仁志
神戸市垂水区

1. 震災

地震が起こる前日、自分は家族と出かけていて、家に帰ってきたのは日付が変わったところだった。

その当時、家には父、自分、妹、祖母が家にいた。自分の家は、高台にある団地の4階、一番端にある。

その日は寒かったからか、ベッドで寝ないで、台所にあるコタツで寝ていた。コタツで寝るのは、その日たまたまで、普段はコタツで寝ることというのはほとんど無かった。また、ストーブもつけっぱなしにしていた。

コタツで寝ていたのは、祖母以外で、祖母は隣の部屋にて布団で寝ていた。隣の部屋といっても戸も開いていたので、ほとんど同じ部屋で寝ているようなものだった。

その日は遅い帰りで疲れていたのもあってか、帰ってきてすぐ寝た。

そして、地震が起こった。

まず自分の視界に入ったのは冷蔵庫だったのだが、その当時の自分では、どうあがいてもびくともしないような冷蔵庫が、まるで生きているかのようにじたばたと暴れまわっていた。そして次に食器が次々に落ちてきた。その後の記憶はあまり無いが、とても長い時間のように思えた。

しばらくの沈黙の後、父が台所、祖母の寝ている部屋の蛍光灯をつけようとした。でも、電気は使えなかった。仕方が無いので窓のカーテンを開けた。すると、外から少しだけ光が入り、今まで暗かったせいでわからなかったことが見えてきた。

祖母の布団の隣にテレビが落ちていたこと。テレビはそれなりに大きいもので、また地面から1メートル前後の高さにあったと思うが、このテレビが、もし祖母の上に落ちてきていたら一大事だったことは間違いなかったと思う。

そして、自分が寝ていたあたりにガラスの破片が散らばっていたこと。仮に食器が体に当たっていても大事にはならないと思うが、そのときに割れた破片もうまくそれていたようで、けがはほとんど無かった。

結局、全員無事で少し余裕ができたのか、今度は外に注意がいった。するとベランダに何かが舞い落ちていることに気づいた。それは、紙が燃えた後の灰だったのだけれど、そのときに近くのスーパーが火事になっていることに気づいた。

その灰も、そのスーパーのものだったのだと思うが、そのことがあったことからもう少し広域の状態を知ろうということでラジオを持ってきて、全員台所に集まって聴いていた。そのころ、すでに外は明るくて、一応この騒ぎは終わったと思っていた。

かなり大きい余震があったのはそのときだったと思う。座っていた自分が一瞬浮いたのを覚えている。地震というものについて詳しく知っているわけが無かったので、一度大きな地震がきたらもう来ないと思っていたのだと思う。その後も小さな余震がずっと続いていた。

2. 震災直後

当日か次の日に電気は来たと思う。しばらくはテレビで状態を見ていて、垂水区は被害が比較的少なかったことや、それよりも長田などでは悲惨なことになっていることを知った。このとき、テレビから「震源」、「マグニチュード」、「震度」、「直下型」など、わけのわからない言葉がよく聞こえてきたけれど、なにかは分からないけれどとりあえず、大変なことになっているのだという風に理解していた気がする。

父が知り合いとかの状態を知るために一度兵庫区のあたりに仕事のときに使っていたトラックで行くことになった。そのときに自分もついていったのだけれど、まず、信号が機能してなかった。これが原因で、車は交差点で完全に詰まったきり動かなくなっていた。その道路は道も広がったのにもかかわらず車がびっしり並んで10メートル進むのに何十分もかかったような気がする。外はクラクション、怒声ばかりが鳴り響いていたのが印象に残っている。信号ひとつだけをとってもこの道路の治安の悪さ

がこれほどになるということを知った。

また、緊急車両が来ても、そんな状態だから救急車も消防車もその中につかまって動けなくなっていた。

そして、何とか用も済んで、帰ろうとしたときに板宿のあたりを走っていると、地面が広範囲にわたって陥没したところがあった。また、長田のあたりで広範囲の火災なども見た。

このときに、こういった災害のときに車は、徒歩よりも遅くなり、かつ、より危険が伴うということ、身をもって知った。

3－1．生活の変化

この次の日くらいから、父はボランティアに参加し、朝からいないことが多かった。震災の影響で、仕事もしばらく無くなったからだったと思う。そして、このときから自分に新しい日課ができた。水の供給である。4リットル入る容器を1回に2本持って、4階から1階へ降り、そこから100メートルほど歩いたところまで行き、そして合計8リットルを持って、また100メートル歩いて1階から4階へ上る。これをしていたが、この当時の自分ではかなりの重労働だった。

また、この日から風呂は近くの銭湯に行っていた。いつもなら、がらがらなその銭湯も行列ができていた。銭湯の値段もいつもは200円くらいだったのに、このときばかりは子供、大人問わず一律50円だった。

3－2．学校内の変化

学校は、一日だけ休みになったが、そのあとはある程度は普通にいつもどおりに行われた。この地域では軽傷なら若干いたかもしれないが、それ以上の人はいなかったのも、たいして大事にはならなかったからだ。ただ、家が少し古かった、また、一部の団地マンションでは、家屋に少し影響が出たので体育館に数日避難している人は少しいた。ある団地では、すむのにはさして影響は無かったようだけれど、壁に縦向きに一直線の亀裂が入っていたところがあった。一階から五階までを完全に渡りきった亀裂だったので、そのときの自分たちの話題になった。

ただ、この日から覚えている限りで学校生活の中で変わったのは4つあった。

ひとつは、転校生が極端に増えたこと。そして極端に転校していった人がいたこと。ひどいときは、週に10人近くが転校してきたこともあった。ただ、その中で、今もその場所にいる人っていうのは少ない。ほとんどの人は落ち着き次第もとの学校へ戻っていったり、親戚の家へ引っ越ししたりしていった。また、もともとこの地域にいた人が転校していったというのもあったので、学校内での人数の増加は無かった。むしろ、卒業するころには減っていたと思う。

そして、もうひとつは救援物資というものが頻繁にくるようになったということ。

そのときはなぜこういったものがくるのかわからなかったが、とりあえず、救援物資が届くごとに喜んでいた気がする。時にはカバンがきたり、時には鉛筆がきたり、あるいはノートがきたりしていたと思う。

3つ目は、体育館がしばらく使えなくなったこと。

それは、避難者がいたから。しかし避難者といっても、任意の避難だったので、そんなに長くはならなかった。せいぜい、1～2週間以内だったと思う。

最後に、学校の中で変わったというのは授業内容。授業の中での「どうとく」という時間がしばらく震災を体験した人たちの作文や、地震についてのことになったことであった。自分の学校内ではなかった友達の死を体験した生徒の作文、学校内でボランティアの活動を体験した先生の話などがあった。また、他校からきた生徒が前の学校の状態を教えてくれたりした。

3－3．自分の周りの変化

また、学校が終わって外を歩いていて、よく思ったことが道路に凹凸がかなりできていたということ。自転車で走っているとそれは、よくわかった。その当時自分は、揺れているからブロック塀が倒れてい

ることなどは理解できたが、なぜ、道路が割れたり、また凹凸ができたりするのかわからなかった。

そのことも、簡単にだけれど学校で聞いた。地震がどのように起きるのか、また、山が何故出来るのかなど。しかし、そのときの自分では、理解できることが少なかったので、根本的な疑問の解決にはならなかった。

それでも水をわざわざもらいに行かなければならなくなったこと、道路に凹凸が出来た、学校での授業が若干変わった、救援物資が来るようになった、学校内部の生徒の面子が変化したこと、道路工事が増えたような気がしたこと、垂水駅の近くの石碑がなくなったこと、近くの銭湯が安くなったこと、新聞に震災による総被災者・死者・行方不明者・全半壊家屋・ライフラインの復旧状況・交通関係の復旧状況などの表が出来たこと、これくらいが生活のうえで少し変わった程度で、それも自分自身にはほとんど影響が無かった。影響があったのは水を取りに行かなければならなくなったことと道路の凹凸くらいで、道路に関してはむしろ自転車での移動での楽しみにさえなったほどだった。

その後も、余震はたびたびあったが、途中から「またか。」という風に慣れてさえきた。少々大きな地震でも大して気にならなくなった。それは被害をあまり受けなかったからこそ思えることなのだろうけれど。もし、実際に家が倒れた、身近な人が死んだ、あるいは怪我をしたなど、ということを経験していればこういうことはなかなか思えないのではないかと、思う。

4. 震災の被害が大きかったところへ行って

震災からしばらく後、一度学校内の遠足で長田区の小学校に行くということがあった。たしか、その最寄り駅がまだ復旧できておらず、電車が通っていなかったもので、かなりの距離を長時間歩いた気がする。

その学校は、その当時自分のクラスにいた子が震災前まで通っていた学校だったというのがかなり印象に残っている。今、その学校はその震災以前から児童数が年々減少し、震災のころに児童数200人を切り、その後一昨年ついに閉校となってしまったようだ(正確にはもうひとつの学校と統合し、新しい校舎を造ったとのこと)。

この遠足、自分たちは震災地巡り、ひとつ下の学年は、船に乗ってどこかへ自分は知らないけれど行くという遠足だった。当然、自分たちは震災地めぐりよりも、そっちのほうがよくだったのでギャーギャーと騒いでいた記憶があるが、今思うと、船でぶらぶらなんてものはいつでも出来るが、震災地巡りはそのときでないと出来なかったのよかったと思う。

この学校に行く途中でまずは、倒壊した家々の中を歩いていった。この時点で結構すごいことになっているとは大体分かっていた。そして、その学校に着いて、屋上まで上り、景色が見える。それは、かなり衝撃的なものだった。その景色と同じ所を震災前に撮った写真を見せてもらったのだけれど、ぜんぜん違っていた。とてもじゃないけれど同じところとは思えなかった。昔は、学校の前には、4、5階の建物がばらばらと建っていて、その建物の周りを囲むように民家があって、緑が点々とあったみたいだったが、震災後は、単純に赤茶色と灰色がメインの景色で、家の一部に使われていたような木材などが無造作に転がっていたり、鉄筋が地面から生えていたり悲惨な状態になっていた。

みんな、帰りはテンションが結構低かったような気がする。

5. その後

それから、数年。当時ではぜんぜん分からなかった事などが徐々に解るようになり、昔と違った震災の視点について様々なことが視えてきた。

この、震災の時、全国からきたボランティアについてのこと。

それとは反対で、震災時にきていたマスメディアや社会のあり方についてのこと。

震災以前の、神戸での建築の甘さについてのこと。また、この建築基準と死者の関係についてのこと。など。すべて、知ったのは中学に入ってからだった。

震災のとき、全国から駆けつけたたくさんのボランティアの人々がこの震災で被害を受けた人々の大きな支えとなり、ボランティアが活躍したということからこの年を「ボランティア元年」と、呼ぶようになったこと。

震災時に、必死で救助活動をしている人たちの掛け声を、生き埋めになった人の必死の叫びを、その上から遠慮なしにヘリコプターの音でかき消したマスメディアという存在。確かに、報道することは大切だと思うけれど、もう少し仕方を変えることは出来なかったのかということ。

行政や政府の対応の遅れについてのこと。緊急時を緊急時とみていなかったような対応の原因。緊急時にすぐに出るべき自衛隊が遅れて出動、ぜんぜん役に立ってなかったこと。いちいち、出動命令を待って出るという変な仕組み。

建築の甘さが被害を拡大させたのではないかということ。死因のトップは圧死、窒息死だったことから、建築の時点で耐久、耐震性のあるものを造っていれば、死者の数は減っていたと思う。また、高速道路の倒壊も雑な建築が原因ではないのかという意見もあったという。

それ以外にも、被災者を傷つけたのは、震災だけではないこと。先のマスメディアもそうだけれど、人間自身が被災者を傷つけていることも事実だと思う。震災で家を失ったばかりの人のところへ、土地の買収に来た人間がいたということも事実だし、救援物資にガラクタや廃品のようなものを贈った人間がいることも事実。

こういうことを知ることによって、また違った阪神・淡路大震災を見ることが出来るようになったと思う。

6. この作文を書いて

今回この作文を書いて思ったことは、思い出して書くことによってわすれていたものを思い出すことができてよかったと思う。

いまでは、テレビの特集や書籍、漫画などで震災のさまざまなところを知ることが出来るが、実際に経験できた人にしかわからないことがあると思う。それを、忘れずにやっていきたい。

いつまでも

丸山 修平
明石市

1995年（H7年）1月17日、ほとんどみんなが寝静まっている時に地震が起こった。それは阪神・淡路大震災、戦後最大の地震と言われ死者約6300人以上、負傷者約35000人以上にまでなった。兵庫県の被害総額は9兆9286億円になった。これは兵庫県のH15年の総合予算の3倍にもなる。そんな事、当時の私が知るよしもなかったのだ。当時の私が思ったこと感じたことは、ただ「この揺れは何だ。何が起きているんだ。もしかしてマンションが古いから壊れたのでは」そんな馬鹿な事を考えていた。

地震当日（1日目）の行動を振り返ってみたいと思う。私が小学2年生だったため、あまり鮮明に覚えていないため深くに突っ込んではいけないけど話を進めていきたい。

当時、ここのマンションに引っ越ししてきて2年になろうとしていた。冬休みも終わり、3学期が始まろうとしていた矢先に、あの阪神・淡路大震災がおこった。生まれてはじめてこんな大きな地震に出くわした。かなり驚いた。住んでいた所が明石だったためあまり大きな被害は・・・大きな被害と言っても本当に大きな被害にあった人達に悪いのだけれども、水槽に飼っていた鯉が地震のせいで水槽が下に落ちてガラスだったため割れてしまい、床がガラスの破片だらけになり、鯉は飛び跳ね、水浸しになった。水槽は2つあり、2つの内の1つが割れたのだが大きな方が割れたので被害はそれなりに大きかった。その他にもお皿が食器棚から飛び出しこなごなになったり、テレビ、タンス、本棚が倒れたりした。そして布団の中で地震がおさまるのを待ち、その後に起きようとしたら父さんが『出てくるな。危ないから。水槽のガラスの破片や食器の破片などが在るからスリッパが無いと危険だから駄目だ』と大きな声で叫んだ。その声に驚いてすぐにあたりにスリッパが無いか探したが、そんなもの置のところだったので、あるはずがない。だけどすぐに父さんはスリッパを違う部屋に取りに行った。父さんだけが違う部屋で寝ていたのであるから取りにいけたのだ。実は元気そうに歩いている裏には一歩間違えればテレビの下敷きになっていたという悲劇があったかもしれないのだった。ある意味恐ろしい出来事だった。その父さんがスリッパを1組見つけてき母さんが履き寝室から出ていった。寝室に残ったのは妹と私だけだったのだが、妹は眠っていたので起こさずにいた。この時実は妹は一回起きていたのだが怖がらせてはいけなかったのか母さんがもう一度寝かせた。当時の私はかなり変で変な事ばかり考えていた。『今日は学校に行かんでもいいんやろうか？』と、言うように当時は馬鹿馬鹿しい事ばかりで神戸で大惨事がおきているなんて知るわけが無かったのだが、家の中が一段落つき普通に歩けるようになった。

どのくらいの時間が過ぎたのかわからないがかなり酷かった。その時の写真が今でも残っている。今でもその時の写真を見ると当時のお気に入りのコップが割れた事を思い出す。そして元通りとまでは行かないがまだましになった。トイレに行こうとした時『水出ないからね』といわれた。そうだ。水道が止まったのだ。水道の他に電気、ガスがストップした。しかし水問題はすぐに解消された。それは、マンションの下にある公園の水道が生きていたからだ。それは、マンションの引いている水道と公園の引いている水道が違うことからこの偶然が生まれた。すぐさま空の容器を持って外に出た。電気が止まっていたのでエレベーターはストップしていた。五階に住んでいたため当時の私ではかなりきつい道りだった。行きは容器も空な為すいすい行くことができたけど、帰りはもう一杯一杯で階段を上った。今じっくり考えてみると誰が初めに公園の水が出る事に気がついたのだろうか。そこはとても気になる問題だが、今になっては、調べても詳しい情報はでてこないと思うけど最初に見つけた人はすごいと思った。たとえそれが偶然だったとしても良かったと思った。それと、マンションの水はどこから引き、公園の水はどこから引いたのか気になるので少し調べたいと思った。これでいろいろな水問題は解消されたのだ。

水運びが終わり家に戻ると妹が起きていてテレビをつけようとしていたので『今までつかんかったのにつくわけ無いやろー』と自分の中で思っていた。ところが私の予想とは逆の結果になりなんとテレビがついたのだ。それはビックリした。私だけでなく父さんや母さんも同様に少しビックリしていた。当時の私はただテレビがついた事に驚いていたが、今の私の驚く対象はテレビではなく地震が起きて5、6時間で電気を復活させた人達だ。そのテレビをつけてみると、まるで特撮の映画を観ているみたいだった。その時のニュースで流した映像はあまりにも衝撃的なものだった。どのチャンネルでも同じような映像が流れていた。だけどすべて違う場所での映像だった。そのニュースを見ながらお昼を食べた。

この時にはガスはまだ通っていなかった。こういう時に冷凍食品という物はありがたい物だ。お昼を食べた後自分の家以外では外はどうなっているのだろうか気になり父さんと一緒に明石まで行くことにした。

家を出て初めに気がついた事は道路がひび割れ凸凹になっていたことだ。また少し歩くと自動販売機が倒れていた。『どうしてこんなに重い物が倒れたりしたのだろうか？この揺れはここら辺でもそんなにもひどいものだったのかなー？』と考えさせられる風景だった。その後明石公園に行きその公園のシンボルの明石城が壊れていた。そのまま中に入り進むといくつかのテントがあった。何ともいえない気持ちになりそのまま歩いていった。そして家に帰りそのまま普通の生活をした。この時お爺ちゃん、お婆ちゃんが生き埋めになっている事など知る由もなかった。その事を知ったのは数日経ってからだった。

翌日（2日目）、自分の家はあまりひどくはならなかったが食器類がほとんど割れていたため少し困ったがたいしたことは無かった。ライフラインもほぼ完璧に治っていたためこまりはしなかった。さかなも違う水槽で泳いでいるし良かったと思う。学校の方は依然として休みのままだし、ちょっとした避難所になっていると聞いた。この日は一日中テレビの特番を見ていた。この時にお爺ちゃん、お婆ちゃんはどのようにしているのだろうと気にするようになった。だけど連絡が取れなかったのでどうしようもなかった。とても心配になった。そして一日が過ぎていった。余震はおさまらず数十分、数時間後ごとにおこった。

3日目、この日は父さんが会社に行った。とてもいやそうに行った。学校の方は依然として休みだった。テレビでも被害が小さくなっていると報道してかなり少なくなった。余震の数もほとんど無くなった。

4日目、この日から学校がスタートした。学校にはまだ数人だが人が避難していた。久しぶりに会う友達と楽しく話げできた。誰一人欠かす事無く再開できて良かったと思った。この日ぐらいだろうか、お爺ちゃん、お婆ちゃんの居場所がわかったのは・・・。

数日後（何日か忘れたが）、ポートアイランドの仮設住宅に入る事になり休みの日を利用して顔出しに行った。二人とも元気そうにしていた。とてもその時は安心したのを覚えている。久しぶりに話げできて良かった。その後もちょくちょく泊まりに行ったりした。その時こんな話を聞きいた。

お爺ちゃん、お婆ちゃんの家は灘区にあり木造のアパートだった。その家には休みの日になるとちょくちょく遊びに行っていた。その為、近くの家（お隣さん、お向かいさんのおじちゃん、おばちゃん）の人にとっても良くしてもらっていた。お菓子をもったり果物をもったりした。とても大好きだった。だけどこの阪神・淡路大地震でアパートは全壊してしまいお爺ちゃん、お婆ちゃんを含めみんなが生き埋めになってしまった。その事を知ったのは地震がおきてかなりしてからだった。そして、生き埋めになっていたなんて知らなくてショックを受けた。その時同時にうれしくなった。なぜならお爺ちゃん、お婆ちゃんは生きていたのだから、うれしくならない事は無い。だがその時に近くの人はずべて亡くなったのだそうだ。そしてお婆ちゃんも石油をかぶってしまい入院してしまった。

たくさんの教訓と出会い

溝渕 法子
神戸市長田区

地震が起こる前、私はふと目が覚めた。眠気はあったがなかなか眠れないので、ベッドを降りた。その日私は朝の会でクイズをする係だったので、何のクイズをしようかボーっと考えていた。考えながら、学校があるから早く寝ないといけないと思い、ベッドに上がり電気を消した。布団に入った直後、突然家が揺れた。何が起きているのかわからなかった。普段、妹は2段ベッドの1階に寝ているのだが、その日は2階で一緒に寝ていた。私達の頭のすぐ上にぶら下がっている電気が左右に揺れ、笠が天井にガンガンと当たっていた。私は電球が割れて飛んできたら危ないと思い、寝ぼけている妹に「布団かぶりっ!!」と言って、2人で頭から布団に潜り込んだ。母は揺れに飛び起き、座った状態で身動きがとれずにいたが、台所に懐中電灯を置いていたのを思い出し、少し揺れが治まったときに立ち上がろうとしていた。しかし、すぐにまた揺れだしたので急いで柱に掴まりながら、私達に「大丈夫?! 2人共どこにおるん?」と叫んだ。私は「2人共2階におる!」と大声で返した。必死に柱に掴まりながら、身動きがとれずにパニック状態で「何これ! ?」と連呼していた。

やっと揺れが治まり、妹と一緒にベッドから降りた。母は懐中電灯を取った。部屋はぐちゃぐちゃで母の寝ていた所には和ダンスの扉が90度開いた状態で、角で止まっていた。まともに和ダンスが倒れていたなら、扉が全開に開いていたなら、母は下敷きになっていただろう。テレビは前に置いていたテーブルに落ちて、画面がテーブルの端で止まっていた。花瓶は水だけが飛んで、母の布団にかかっていた。花瓶は置いていた所の真下に落ちていた。

外に出るために、服を着て貴重品など必要な物を準備して台所へ行こうとした。でも台所のガラス戸は、懐中電灯を取った時に開けた幅しか開かなかった。母が「少し離れとき!!」と言い、火事場の馬鹿力で一気に戸を引き開けた。ガラス戸は勢いで割れていた。台所はすごい状態だった。食器棚はテーブルを挟んで、八の字に倒れていた。中の食器はほとんど下に落ちて割れていて、裸足では絶対に怪我をするような足の踏み場のない状態だった。母は食器棚の背の高い方を元の状態に戻るように、投げるように押し上げた。もう一つの方は後ろに物が挟まって、立ち上がらなかった。

家の外で下に住んでいる伯父家族が「大丈夫かー!」「早く出て来い!」と叫んでいた。母は「ちょっと手伝ってー!」と返した。家族の中で一番背の低い妹に玄関の鍵を開けさせて、入れ替わりに伯父に来てもらった。倒れている食器棚は重たく、母1人の手で支えるのは大変だった。力の強い伯父に手伝ってもらいながら母と一緒になんとか外に出ることができた。家の階段は根元からコンクリートが割れていて、鉄筋がむき出しになっていた。落ちそうで恐々しつつもなんとか無事に道に降りた。近所の家も凄い状態で、近くのアパートは2階の階段の1つが壊れて使えなくなっていて、もう片方の階段で2階の人は降りていた。ずいぶん前に建てられて古いアパートだったので、被害は大きかった。もう一度余震が来ると絶対に壊れてしまうだろうという位にひどかった。私の家の周辺は家が密集していて、木造の古い家も多かったので、ほとんどの家が全壊していた。私たちは歩いてすぐ近くにある伯父の店に行った。大人は皆店の状態を確認したり、祖父の様子を見に行ったりしていた。祖父は店の隣に住んでいた。祖父は1人でその家に住んでいたため心配だったが、無事で家も半壊で済んでいたので安心した。うちの親戚は皆歩いて3分くらいの近距離に住んでいたのも、すぐに皆の様子を知ることができた。いとこのお姉ちゃんはベッドの上に土壁が落ちてきて、大変だったが命に別状はなかった。お兄ちゃんはずいぶんその頃柔道部の合宿で高砂に行っていたので、大きな被害を受けずに済んだ。皆が無事で本当によかった。

店の上にあるガレージで近所の人達や親戚と一緒に一時避難していた。早朝でしかも1月だったので震える程の寒さだった。私は家を出る時に近くにあった母の夏用サンダルを素足で履いてきたので、余計に寒かった。妹は足がすっぽり入るふわふわのうさぎのスリッパを履いていて暖かそうだった。近所の人には毛布を貸してくれたり、「大丈夫?」と声を掛けてくれたりした。皆優しく親切にしてくれて嬉しかった。人の温かさに触れた気がした。私が寒がっていると、ガレージに車を置いていた伯父が、車にエンジンをかけて乗せてくれた。車の中は暖かかった。

お昼近くになり、近所の人には家に帰っていった。その後親戚で店に集まり、残り物のご飯でおにぎりを作ったりして少しずつ分けてあって食べた。水が出なかったのも手も洗えず、そのまま食べたことを覚えている。店で避難しつつ、家の周辺の様子を見ていた。どこも壊れて瓦礫になっていた。たくさんの人が荷物を持って、店の前を通って行った。小学校の友達も親戚の家に行ったり、避難したりするするために通って行った。

外を見ると空がとても暗かった。もう夜なのかと思うと、新長田の方で火災が起こっていた。消防車の到着が遅く、あちこちから黒煙が上がっていた。黒煙に交じり、火の粉が飛んで来た。家からすぐ近くのところで赤い炎が見えていた。今まで見たことのない光景に恐さと不安が入り交じっていた。絶望のような悲しい気持ちでいっぱいだった。呆然とその光景を見ていた。

しばらくして電気が少し復旧し、テレビを見ることができた。各地の地震情報や火事の現場を、画面を通して見た。長田区の下の方の上空の映像は真っ黒な中に赤い炎があちこちで上がっていた。未だ火事は消し止められていなかった。夜になっても火災は治まっていなかった。東灘区や灘区の方も建物がたくさん倒壊し、どこもすごく大きな被害を受けていた。

皆で近くの板宿小学校に避難しに行った。小学校はたくさんの人がいた。板宿の下の方にある千歳小学校に火の手が上がってきていて危険だったため、その避難者が大黒小学校や板宿小学校に移動して来て、避難者が増えたのだった。人が溢れかえっていた。教室に入りきれず、廊下で寝ている人もいた。私達は校舎の1階にある家庭科室で寝泊りすることになった。冷たいコンクリートのような床に毛布を敷き、家族でごろ寝をするという状態だった。配給は一家にパンが2個くらいだった。母は私と妹に優先的に食べさせてくれた。少量の食料に文句を言う人もいてもめていたこともあったけれど、たくさんの被災者がいるなかでは仕方がなかったと思う。今思えば、食料をもらえただけでもありがたいことだったなあとと思った。板宿小学校は大きな被害を受けていて水が出なかったのも、トイレは凄惨な状態だった。お風呂もなかなか入れなかった。祖父と伯父家族は家の様子を見て、大阪の親戚のところに行くために1泊で帰った。私の家は全壊だったので、家に帰れなかった。私は環境の変化からか、熱を出した。妹も同じように体調を崩した。母は自分もショックやストレスでしんどいのに、一生懸命に私達の看病をしてくれた。

しばらくして小学校に仮設シャワーができた。ブルーのシートで囲まれて男性用・女性用に分けてランドに設置された。シャワーの前には行列ができていた。私も皆と一緒に並んでシャワーを浴びた。ボランティアの人はよく炊き出しを作ってくれた。大きな鍋に豚汁など温かいものを出してくれた。他にも配給を配ってくれ、救援物資もたくさんもらった。私は外国から服の救援物資をもらい、鉛筆や消しゴムなどの文房具もたくさんもらった。

私と妹は通っている五位の池小学校にはない遊具を見つけ、毎日そこで遊んでいた。板宿小学校の生徒や避難していた子、五位の池小学校の上級生と仲良くなり、一緒に遊んでいた。ボランティアの人は私達子供と一緒に遊んでくれたり、紙芝居をしてくれたりした。

私が遊具で遊んでいる時よく取材を受けた。新聞社やテレビ局の人にインタビューを受けて、何もわからず、地震を受けたときの事を答えていた。

2月中旬くらいになり落ち着いた頃、家庭科室のある校舎を使って板宿小学校の生徒の授業が始まった。そのため、私たちは図工室に引っ越しをしなければ行けなかった。一緒に部屋の人は皆が仲良くなったところだったし、短期間で部屋を移動しないといけなかったのも不満もあったそうだ。部屋が変わって、また姉妹で体調を崩してしまった。母はまた優しく看病してくれた。母は看病疲れやストレスなどで爪がボコボコになり手が荒れていた。私が点滴を受けた時、母も一緒に保健室で休ませてもらった。母は精神的にも肉体的にも大きなダメージを受けていた。

板宿小学校は五位の池小学校より授業が始まるのが早かったのも、私は同じ2年生の授業に参加させてもらった。全然知らない子達の前で挨拶をして一緒に授業を受けるのは少し緊張した。その後、体調を崩してしまったので板宿小学校の授業にはその1日しか参加できなかった。私が通っていた五位の池小学校も授業が始まり、妹と一緒に毎日板宿小学校から五位の池小学校へ通った。五位の池小学校は外の水道が盛りあがっていたり、飼育小屋も壊れたりして大きな被害を受けていた。授業には学校に来られる子が集まってAクラスとBクラスに分かれて勉強した。しばらく会えなかった友達に会えて嬉しかった。プレハブの仮校舎を校庭に建てて、授業をしていた。授業は1～2週間続いた。

3月末に西区学園東町にある仮設住宅が当たった。家を建て直す間、2～3年仮設住宅に住むことになり、私たちは東町小学校に通うことになった。東町の授業が始まった時にはまだ引越しをしていなかったのも、板宿小学校から東町小学校まで電車に乗って通学した。最初は母に学校まで連れて行ってもらっていたが、だんだんと自分達で学校に行けるようになった。朝のラッシュでぎゅうぎゅうになりながら通っていたのを覚えている。図工室は私達姉妹以外に小さい子供がいなかったのも、皆家族のように優しくしてくれた。一つのテレビを部屋の人全員で見たり、毎朝学校に行く前には「行ってらっしゃい」と声をかけてくれたり、配給をわけてくれたり、とても暖かい人ばかりだった。家族が増えたようでとても嬉しかった。

東町はとてもきれいで地震の被害はほとんどなかった。地震などなかったかのように、道も駅前も小学校の校舎もみんなきれいだった。東町小学校は私達のように震災で引っ越してきた子が多く、初日に

はたくさんの子が挨拶をしていた。しばらくの間、小学校から小学校への通学をして仮設住宅に引っ越した。私たちの仮設住宅は小学校のすぐ裏にあった。緑が多くて家の前には大きな公園があったので私は嬉しくて毎日のように妹と公園で遊んでいた。友達もたくさんできて毎日が楽しかった。

私は音楽の授業が好きで、音楽係になって朝歌を歌う時に皆に呼びかけ、音楽会も一生懸命に取り組んだ。図書室にいろんな本を借りに行ったり、国語で習った「ちいちゃんのかげおくり」の真似をして、皆で渡り廊下で「かげおくり」をしたりした。一番仲の良かった子とは毎週体育の授業の後、放課後残ってサッカーの練習をしたり、クラスの女子のほとんどが集まってタイヤおにをしたり、他のクラスの子と遊んだりたくさん友達ができた。

しかし、1・2回、クラスの1人の男子にいやがらせをされたことがあった。「仮設住宅住んでいるから貧乏だ」とかいろんなことを言われてすごく悔しくて腹が立った。東町はきれいな一戸建てやマンションが立ち並ぶ住宅街だったし、皆地震の被害をほとんど受けていないので、そう思ったのかもしれない。私はとても悔しかったので一生懸命に抵抗していた。その子からの嫌がらせは少しで終わった。

新しい家を建てるには2～3年かかる予定だったけれど、傾いていた家をクレーンでまっすぐにしてきれいに直しただけだったので1年で済み、1年後元の家に帰ることができた。東町には1年しかいなかったけど、クラスの子とはとても仲良くなったし楽しかった。転校する時にはクラスでお別れ会を開いてくれて、私への手紙も書いてくれた。いやがらせを受けた子もその手紙で謝ってくれた。皆からの手紙はとても嬉しく何回も読み返した。その手紙は今も大切に残している。友達の中でもお別れパーティーを開いてくれてすごく嬉しかった。1年間という短い間だったけど、皆との思い出がたくさんあったので、別れるのは悲しかった。その時一番仲のよかった子とは今でもずっと連絡を取りあっている。その後元々住んでいた長田区の家に戻り、4年生からまた五位の池小学校に通った。4年生になって五位の池小学校に戻ると、震災前までいたのに他の学校に転校していない子もいて少し悲しかった。でも仲のよかった友達が私のことを覚えていてくれて嬉しかった。

今思い出してみると、細かい所までなかなか思い出せなかったけれど、地震と避難所生活と仮設住宅生活と普通では体験できないことが体験できたし、いい経験になったと思う。地震が起こっていなかったら、出会っていない人やできなかった事もたくさんあるのでよかったと思う。

アースクエーク 1995

道上 昂平
神戸市垂水区

プロローグ、—1995年1月16日—

覚えていることは前日、普段は子供部屋の二段ベッドの下の段で寝ているはずの姉が、その日に限って熱を出し、当時はタンスが置いてありそのあと六年間寝室として使っていた部屋で、母の布団で寝ていたことだ。

俺はその夜は機嫌が良かった。なぜなら二段ベッドを占領できるからである。理由は簡単、ベッドが好きだったからだ。しかし、二段ベッドの下段では寝ておらず、二段目でいつも寝ていたのも、その日は下の段に挑戦した。姉の熱などどうでもいい。

まるで一つの家をもらったかのような気分だ。一人で人形劇をするのが楽しかった時期だったので、よく寝る前には人形劇をしながら寝ていた。上のベッドだとよく落とし、失くして悲しいこともある。

そんなベッド好きな俺はその夜、二段目から毛布を垂らして寝ていた。そのことはよく覚えている。ベッドに一人で立て籠もっていた。一人で楽しめる出来が良い子供だったのだ。そりゃもう楽しかった。

I. 翌日の朝

(これは・・・？俺か。)

夢の中で、自分を見ていた。彼は寝ていた、パジャマなど着ていたわけでもないのにぼんやりと、正面から見ていた。浮かんでいるはずだが、感覚はない。それは夢だったからだ。

「……………」

突然だった。

……………パアアアアアアッ！！

ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴ

(…………とうとう起こったか。)

ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴ

直感だった。「ピッコロ大魔王だね」と当時“はっさい”だった出来のよい小学生はそう察する。

窓から外を見る。何もない。だが、部屋は散らかっていた。子供部屋は書斎兼姉の勉強部屋兼ベッドだったため、非常に狭い状態であった。俺はよくわからなかった。

親が名前を叫んでいる。

「コウヘイッコウヘイ！」

安否を確認している。

「ダイジョーブカイ！？」

軽く答える「なんかあったん？」と。

わかっていなかった俺は部屋の父親の棚の本が分厚い資料が落ち、散らばっているその床いっぱいの障害物をどけ、ドアの隙間を広げる、ひろげる、広げた。痛くはない。どちらかという腕を引っ張られるほうが意外に痛い。皿が割れていた。主に食器が錯乱だ。もちろん大事に使っていたキタキツネのmy茶碗はマップタツに割れてしまっていた。お気に入りだったと同時に、大事にしようと思っていた茶碗だったため悲しいものだった。悲しみに暮れた。それでも時間は過ぎてゆく。一瞬の時間より……………

II. そして……………

親はロウソクを探す。親はラジオを探す。姉は……………そうだった熱だった。俺は動かなかった。動かない約束をしたのだ。動けば危険なのだろうか？

また親は叫ぶ。

「ウゴクーナ」

その頃住んでいた住宅は震源地から近い、垂水区に住んでいた。被害が少なかったのかは自分が住んでいた場所にもよるが、死者は一人とか。

自分がどうだったかもわからないのだ。わからんような自分が、どこがどうだとかわかるわけもないが俺は助かった。あえて助かったと言うのか、それとも被害は受けなかったと言うのが正しいのか。とにかく俺は生きているが、地震がもたらした影響ちゅうもんは考えることによればイロイロある。仮に、仮に地震がなかったならどうなっていた？地震は必然だったのか？防ぐ、防がない、抑える、抑えないは考えないが、もしもの話なかったのなら俺は本当にどうなっていた？もちろん答えはない。

よく思い出されるのは、神戸は地震が起きたとき戦場のようなだったとテレビでか本でか先生の話で聞いたことがある。戦場を知らん俺は聞き流していたが、しっかり今ここで思い出されている。やりわりと。

地震が戦場をイメージさせたのなら。人はどう思うのか？政府、政治家はどう対応するのか？日本国民に影響は与えたのか？今、地震体験は生かされているのか？

とにかく俺は、いつもと変わらない朝は迎えられなくなるのだとは、考えていない。

Ⅲ. 学校

当然学校に行かなければならない。行きはするものの学校の講堂は天井が落ちていたらしいから、避難してきた人間は教室に移っていた。授業ができそうにない状態だ。学校自体の被害は、先にも言ったように講堂(つまり体育館となる場所)の天井の内装が落ちており使えないという状態。あとプールが裂けておったような。学校名は、東舞子小学校という。子供は学校へ行かなければならないから、みんな登校しておった。が、最終的に5クラスあった学年だったのが4クラスに減っていたので少なくなったものだった。疎開したのだろう。実は俺も疎開していたので学校へは行っちゃいなかった。嘘だが。

学校へはしっかり行っていた。健康なので。疎開はしていた。明石市の魚住、おばあちゃんち、祖父母宅である。そこから、JRを使い何日か通っていた。駅は数えて5駅西にあるのんびりしたところだ。俺はそこで生まれ、3歳くらいまで住んでいた。今でもそこへはよくいくものだ。そこから登校するにはとにかく朝は早かった。1月は暗いもんだ。今から日が昇り何事もなく一日を過ごしていくのだと感じた。

学校で何したかなんて覚えちゃいない。覚えているのは音楽室で授業していたこと、日能研から鞆が支給されたこと、A、B、Cの3クラスに特別編成されたこと。それくらいだ。

音楽室は暗かった。俺は中学に入るまで音楽は嫌いだったからそう感じていたのかもしれない。モーツァルトとかベートーベンとかの肖像画はないが、壁に穴があいていた。防音でよくみるあれだ。音楽室ちゅうもんはその穴があいていることくらいしか利点がない。つまりせまい、つまりせまい。そんなに40×5÷3のちょい削った程度の小学生がワンサカ入れば、うもれてしまうのは今考えてもしんどいことだ。それが6学年あったのだ。俺はそこに確かにいた。けっこう戯れていた。

Ⅳ. 何をしていた？

地震があった1月17日あたりからその後の数日間、何をしていたのか。やっぱり覚えてない。

おばあちゃん達といっしょに須磨だか長田に見物に行った。見物かどうかは知らない。電車に乗って駅を降りた。ミスドを見た憶えがある。だから須磨だろう。

街を歩く。そりゃもう悲惨な風景が広がり、俺は口をあけ、ただぼーっと突っ立っていたわけである。さらに歩く。店という店は崩れ、明らかに新築ではないと言い切ることができる建物ばかりだ。その記憶だって何度も、何度も何度も何度も何度も、何度も見せつけられた映像のためにやけに鮮明に憶えている。

あまりにも情報の量に呆然としてしていると、子供はじきにはぐれる。そうしていると犬に出会う。目が合う。追い掛け回される。逃げる。追われる。人ごみの中をすり抜けるがそれでも追ってくる。やっとならに助けてもら。教訓は、犬からは逃げないことだ。そのあと喫茶店で飲んだミルクセーキは、その記憶を固める味だった。

Ⅴ. 2年生だった

俺は昭和61年生まれで、最強の寅年と呼ばれている。1995年の1月、小学2年生だった。

東舞子小学校では2年生の3学期、「小さな旅」というものを実施している。舞子から明石公園までグループだけで行動する遠足のことだ。当然地震の影響でパーになった。だがその代わりに俺はばあちゃんちから朝はよから出てきていたので、問題はなかった。

あとは持久走大会くらいがイベントだった。それは毎学年が毎年していた。その年だけチョコレートを走ったあとにもらった。食べた。支援物資だったらしい。ラッキーだ。

東舞子小学校には、学童保育コーナーがある。俺はそこへ通っていた。なぜ通っていたか。鍵っ子だからだ。

刺激になったのはチョコ同様に支給された、当時ではまだ新しかったGB(初期のゲームボーイ)だ。

「ガクドー」には同じ団地の奴等も通っていた。境遇が似ていたのか。学校へ登校するときも同じ班の奴ばかりだ。結局、神戸市営の公団に住むものたちは鍵っ子になるんだと、振り返って強く思う。

「ガクドー」にきていた連中は、俺以外みんなサボり倒していた。3年生までは通うはずなのだが、途中で皆やめていったのだ。地震が理由だったのか?「公団組」は気づけば自分独りだけだった。

まあ実際どうだったかは記憶が足りていない。そんなことよりも3年に上がり仲間入りしてきたやつにいじめをくらったので、憶えているわけもない。GBのセーブデータを消されたときの怒りは、うまく表現できない。

それと、「ガクドー」へは行かなければよかったと思う。「ガクドー」のシステムは、終業時刻から5時半ごろまで、強制じゃないがそこから一つの部屋へ行く。そして二時間ほど特定の人間と過ごすわけだ。4時とかにお菓子を食べる時間があって、とルールが多々ある。別にルールがどうというわけではなく、問題は「ガクドー」外の人間との違いだ。外界の人間はその3年間でかなり地域と触れているが、5時半ごろから帰宅した小学生がそれからどこか行くわけでもない。たいがいの門限が6時と決まっている時代何が出来るのか。これは親が両働き、片親という条件からくるわけだから、このことがわかってくると、若いころはいやな気分だった。単に友達作りが下手だったんだろうか。

エピローグ.

自分はちがう。と思ってきたから、今この場所に俺がいる。環境防災科に入ることがどうこうと問題にする次元ではない。こんな通過点でしかない場所は、早く過ぎ去るべきだ。人のためというのは、結局は自己満足だし、目の前にあるものを避けるのは俺次第である。これまで書いたことが俺の今の地震のすべてだ。今日は、それ以上はないし、今日という日もいつか過去になって、人は成長して、考えがかわっちまう。もうすぐ俺は成人する。つまらない過去を話すことが生きがいになる。そうならんうちに「何かほかのもの」になりたい。

平和を歌う必要はない。

あのときの経験から

山口 恭平
明石市

1995年1月17日、早朝、その地震は起こった。震災のあったときは道路を挟んだ向こう側が神戸市という、明石市の団地の4階に住んでいた。家では母と姉、僕と一緒にひとつの部屋で、父は隣の部屋で寝ていた。

小学2年生だった僕は、
「恭平、恭平。」

と、僕の名前を呼ぶ母の緊張した声と、揺り動かされて目が覚めた。

僕は母に抱えられるように横に座らされ、反対側には姉が母にしがみついていた。とにかく揺れが激しくて立つことが出来なかったからだ。

寝ぼけまなこの僕は何が起きているのかわからず、真っ暗な中、母に必死でしがみついていた。声も出なかった。

しばらくして、揺れが少し落ち着くと隣の部屋で寝ていた父が、
「大丈夫か。」

と部屋に入ってきた。父もやっと歩くことができたので、僕たち3人を心配して来たのだ。

家全体は電気がついておらず、僕にはなぜついていないかわからなかった。暗闇に浮かぶ家の中の様子がいつもと違い、何があったのかはわからずとも大変な事が今おき、危険であることはわかった。

とにかく懐中電灯を探したが、いままであまり使うことがなかったので、あいにく電池切れだった。そのため真っ暗で着替えを探すことができなかったのも、パジャマの上にガウンを着て父のダウンジャケットを着た。

そうしているうちに外がざわざわしている音が聞こえてきたので、住んでいた団地の4階の窓から外をのぞくと、大勢の人が外に避難しているのがわかった。

父や母に、
「とりあえず家の外に避難や」

と言われ、懐中電灯のない中、暗闇の室内を、用心深く移動し、玄関に行き外に出た。

真っ暗な階段を踏み外さないように一段ずつ降り始めると、上から懐中電灯を持った人が降りてきたので一緒に1階まで降りていった。

階段などは特に降りられないほど破損をしておらず、いつも通りに1階まで降りられた。

前の広場では近所の人達が集まっており、懐中電灯の光があちこちで見え、近所の人や友達の顔を見つけたので、ちょっと安心した。

そこで地震の話をしており、僕はそこで始めて今地震があったことを知った。

その後も、何度も大きな揺れがあり、そのたびに皆が、
「キャー、怖ッ。」

と、言っていた。

近所の人達の中に大きなけがをした人は見当たらず、頭にこぶをつくった人がいたり、おばあさんが一人、割れて落ちてきたガラス片で頭を怪我していたので、すぐ近くの病院に運ばれていった。

1月の真冬だったので、パジャマの上にダウンジャケット一枚という格好だといくら近所の人達と固まっても寒かった。

一階の人が、揺れの少ないときに家の中から石油ストーブをだしてくれたので、僕たち子供が前の方へ周りを大人が囲むようにして温まった。昔のストーブだったので灯油だけで使うことができたので、外でも火をつけることが出来た。使い捨てカイロを持ってきて配ってくれた人もいた。

暗い中ストーブの炎は、寒くて気持ちまで沈んでいた人達を温かくしてくれたと今考えれば思う。

また3階の人がお餅を持ってきてくれてそのストーブで焼いて、僕たち子供を優先して食べさせてくれた。あまりにも地震のことでビックリしていて、お腹が空いているのに気づかなかったけど、お餅を食べたり、お菓子をもらったりしたら、とてもおいしかった。

ほとんどの人が外に出てきて近所の人達が無事であることがわかり、皆でほっとした。

僕は東の神戸方面の濃い灰色の空の下の方がオレンジ色になっていたのが、それがまさか長田の町が焼けている炎とは思わず、ボーと眺めていた。

大人たちの話し合いの結果、揺れと揺れとの間隔が長くなり、揺れも小さくなったので一度家に戻り、家の中の片付けなどをしようかということになり、それぞれの家に帰っていった。

その頃になると辺りも明るくなり、電気が付かなくても家の中は十分見えた。家の中は誰かが暴れたようにめちゃくちゃになり、大きいたんすはもとあった場所からだいぶ動いて上の段が外れて倒れていた。

その倒れていた場所というのは母と姉、僕が寝ている布団の上で、母に起こされ壁際で座っていなかったら下敷きになっていたという、危険な状況であった。おそらく最初の横揺れで両親が気づき、その後の縦揺れでたんすの留め具がはずれ、倒れたのだと思う。父の勤務が大阪だったので、その時間両親がちょうど起きた所だったのも、幸いした。

父の寝ていた部屋の状況は足元にあるテレビの台からテレビ本体が父親の頭のほうまで飛ばされていた。重たいテレビが横に流れるように飛んできたのである。この部屋も大変危険な状況であった。

台所では電子レンジが台から落ち、食器棚の扉が全開になっており、中の食器が全部床に割れて散乱していたので足の踏む場もなく、スリッパで歩かないと足の裏を破片でけがするほどであった。

そのほかの部屋でも机や荷物がもとあったところからかなり動いており、部屋の中がぐちゃぐちゃになっていた。各部屋の蛍光灯は天井から垂れ下がっているものだったので揺れにより、天井にぶつかり、中の電球が飛び散っていた。

家族皆でそれらの散乱した荷物や家具を片付け始めていて、たんすの倒れ方、家の中の状況を見てみて地震がどれほどの力で起きたのかがわかった。

家の片付けはとても大変だった。重たい和ダンスが倒れており、とうてい家族だけではどうすることもできず、同じ階段に住む大人の男の人に手伝ってもらい、父をいれて三人がかりで起こし、元の位置に戻した。

そのあと、それぞれの家のたんすを男の人三人でまわり元に戻した。

家の片付けででたごみは団地のごみ集積場に出すことになったので、出しに行くとたくさんの壊れたもので山になっていた。

片付けがだいたい終り、家の電気も復旧していたので、テレビをつけると、地震の被害の様子が流れていた。

見てみると、長田のほうの火事のことをやっていた。それを見てはじめて朝に東の神戸方面の空がオレンジ色になっていたのが火事によるものだと知り、とてもびっくりし、明石からあの煙と炎の色が見えることに驚いた。テレビのニュースの映像により、火事が大規模なことにも驚いた。そのほかにもテレビから今日起きた地震の規模がわかり、状況もわかった。

電気はついたが、水道、ガスはまだ復旧せず、水が出ないことにより困ったことはトイレで用を足してもそれを流すことができないことであった。

そのため、お風呂場の湯船に残っていた水を使い、流すことにし、手もその水で洗った。

祖父母の安否がまだわからず、不安であり、電気が復旧したので電話をかけたが繋がらず、どうしようかと悩んでいると、母親が近所の人から聞いた口コミの噂により、公衆電話なら通じると聞いてきた。

早速近くにある公衆電話に行くと既にかかなりの人が並び、列ができていた。その列に並び、ようやく自分の番になり、祖父母の家に電話を掛けたが結局は通じなかったと帰ってきて言っていた。

その日の夕方に近くの店に行き、買いに行ったが、ほとんど何もなく、やっと懐中電灯と食料を少し買うことができた。

もし、また停電になってもあの真っ暗は避けることが出来る。

真冬の1月だったけど、家での暖房は石油ファンヒーターだったので、寒さを感じず暖かく過ごすことができた。

また電気が復旧していたおかげで、冷蔵庫と電子レンジが使い、冷凍していたご飯や冷凍食品を解凍して食事をすることができた。水、ガスが使えないという制限された中であっても、簡単な食事がとれ空腹を満たされ、電気のありがたさをしみじみと感じた。

その日の夜はパジャマには着替えず、何かあったらいつでも出て行けるように準備していた。家族全員で、居間で蛍光灯、テレビをつけたままホットカーペットの上で寝た。

しかし、余震で少し揺れるたびに起き上がっていたので寝たというよりは、横になって休んでいた感じだ。

翌日になってやっと電話が通じ、祖父母の安全がわかり、ひとまず安心した。

しかし、交通機関が壊滅していたので、行き来することは出来なかった。

また、小学校の僕の担任の先生が心配してそれぞれの家を家庭訪問してくれていた。先生は手に包帯を巻いておられ、しんどそうだったけど、先生の家族も皆さん無事だったとおっしゃっておられた。

学校もかなり壊れているのでしばらく、お休みになるという話だった。勉強しなくてもいいということで単純に僕は嬉しかった。

市の広報車がマイクで給水車がくるということを言っていたが、はっきり聞こえず近所の人に聞いて僕の通っていた小学校へくるらしいと分かった。

しかし、家にはポリタンクなど水をもらってくるのに便利な容器がなかったので、大きなタッパーや鍋、水筒などをキャリーに積んで父と姉と三人で水をもらいに行った。

すでにたくさんの人が並んでいて、僕たちも並んだが真冬の外でじっと立っているのはとても寒かったことを覚えている。

どれくらい待ったか忘れてしまったけど、足踏みをしながら、ずいぶん待ってやつともらえた水をこぼさないように坂道をもって帰るのはしんどかった。

飲み水ができたということでご飯が炊けるようになったり、野菜などを洗うことが出来、カセットコンロを使ってちょっとした料理をつくったり、熱いお茶を飲むことが出来た。

しかし、食器を洗うだけの水がなかったのでお皿にラップをひいて食べ物で汚れても洗わなくていいようにした。

外の道路が壊れている所があったり、それぞれの団地にひびがいたりして危ないので外で遊ぶことが出来ず、テレビでは震災の悲惨なニュースばかりが流れていたのも、僕は退屈していた。

3日目、明石の西の方に住んでいる祖父母が自動車でご飯とおでんをいっぱい炊いて持ってきてくれた。

そして、水を入れる為の石油タンクも買ってきてくれた。水が止まっており洗濯ができなかったのも、僕たちが着替えをした洗濯物を持って帰ってくれた。

父の会社の姫路に住んでいる人がバイクでカップラーメンや水を持ってきてくれた。近くのスーパーや商店街で買い物をすることが出来なかったけど、食事に困ることはなかった。

明石市役所で水がたくさんもらえるという情報が入ったので、近所の人や車に乗せてもらい、父ともう一人男の人と3人で近所のポリタンクを集めて、もらいに行った。

これで水も少したくわえることが出来た。

しかし、水とガスがまだ復旧していないので、この日もお風呂に入ることができなかった。幸い、冬だったので汗もかかず、何とか我慢することができた。

5日目、近所の人たちの中で、お風呂屋や健康風呂へ行ったという人が何人かいた。我が家でも、祖父母の家のお風呂に入りに行った。

久しぶりのお風呂でゆっくりと暖まり、冬の寒さを忘れ、さっぱりとしてとても気持ちがよかった。

何日目かはっきりしないが、ついに水が復旧した。

手や顔が自由に洗え、普段何気なく使っている水のありがたさがわかった。

しかし、夜中になって1階の人が、激しい水の流れる音がどこからかしてきて、怖いということだったので、近所の人2人で市役所へ行き、水栓を止める道具を借りてきて、水を止めることになった。棟全体、二つの階段十軒とも水が出なくなることになり、隣の階段の二階の人が、「せっかく出た水なのに、使えない。止めなくてもいいじゃないか。」

と文句を言った。

震災の朝、皆で避難して助け合っていたのに、時間が経つと自分勝手な意見が出てきたみたいだ。

やはり一階の床下の水道管が壊れて、水が流れだしていたのだった。

その後、工事にきてもらい、直り、蛇口をひねって水が出た時は、見守っていた近所の人々から歓声と拍手がでた。

またも一階で問題が起きた。

配水管が壊れ各階から出たトイレの汚水、汚物が一階の窓の下であふれ出した。トイレを我慢することも出来ず、だからといって一階の人の衛生面も心配だったし、まだ学校も始まっていなかったのも、祖父母の家に行くことにした。

祖父母の家では電気、ガス、水道すべてが使えたので、何不自由なく生活することができた。

近所の本屋に行き、漫画の本を買ったり、散髪に行ったりと今まで家でじっとして退屈だったので、うれしかった。テレビでは避難所の大変な様子が流れていたのも、僕は自由な生活ができて、幸せだと思った。

父は大阪に勤務していて、JR が途中寸断されていたので、船で大阪に行ったり、寸断されている区

間はバスが運行されていると聞き、JR とバスを乗り継いでいったりもしていた。

船で行ったときは朝早く出て行ったのに、会社についたのは3時頃だったそうだ。またバスは、住吉でずいぶん人が並んでいて待っていたそうだ。

祖父母の家で2、3日過ごした後近所の人に電話して配水管が直ってトイレが使えるようになったと聞き、自宅に帰った。

学校へ行けるようになり、近所の子と一緒にいき、クラスの中でけがをした人がおらず、安心した。親戚の家に行っている子がいたりして、全員はそろっていなかった。学校の中でもひびがはいって、渡り廊下がとおれなかったり、壁が崩れていたりしていた。教室の中は先生が前もって、片付けていてくれた。

じつは僕は、およそ3週間ぶりの学校であった。

元旦の日からおたふく風邪にかかり、耳下腺が6つもはれていたもので10日間ほど登校禁止になっていた。医者からは17日から学校へ行っていいと許可が出ていて、17日に学校に行けるのを楽しみにしていたのに、地震が起こり学校に行けなくなってしまったからだ。

はじめの内は給食もなかったのも、午前中しか行っていなかったのもあまり勉強したようには思わなかった。

最後にガスが復旧し、やっと自宅のお風呂に入ることができた。

メーターボックスのスイッチをひねるだけだったけど、僕らの見ていない所でガス管などの工事をしていて大変だったと思う。簡単にガスが復旧したというイメージだったが。

徐々に以前の生活が出来るようになってきたが、外に出るとまだ立ち入り禁止のマンションがあったり、壊れた階段があったりして地震の跡が残っていた。

テレビでも地震の被害の様子や避難所の様子が映し出されていた。

次々と増えていく被災者の数に驚いた。

しかし、親戚の中にも大きなけがをした人がおらず、安心し、無事であることに感謝した。

今考えてみれば、あの当時は全然地震に対して備えをしていなく、地震に対する防災の意識はなかったと思う。学校でも家庭内でも住んでいるこの場所で地震が起き、被害が起きるから気をつけようなどの注意は聞いたかどうかははっきりと覚えていない。そのため、いざ起きるとあわててしまう。

まず、防災に対する意識を持つことが大切である。意識をもつことにより、災害に対する対策をどうすればいいかを考え出すと思うからである。

地域、学校、家庭で地震に対する意識の向上をしていかななくてはいけないと思う。

災害に対する対策、備えのたとえば家での非常持ち出し袋である。僕の場合は地震が起き、電気が止まり、家の中を暗闇の中、玄関まで行かなくてはならなかった。枕もとや、各部屋に懐中電灯を置くことにしておればよかったと思う。

今では各部屋とそれぞれが寝る枕もとには、懐中電灯をおくようにしていて、電気が止まっても暗闇を移動するといった危険なことはしなくてもいいようになった。

また、震災にあつてすぐにおなかが空いた時、お餅を焼いてもらって食べ、空腹感をやわらげることができた。そのため、少量でも簡単に食べられる食料などをいれておいたほうがいい。

そのほかにも何か買う為にすこしのお金でも持ち出せるように置いているのもいい。

僕が寝ていた部屋にたんすが置いていて、地震のときにそのたんすが動き、倒れてきていて危険だった。また、食器棚の扉は大きく開き、しまつてあつたすべての食器が床に落ちて割れ散乱しており、逃げる時に足をけがするところだった。

そのようにならないためには、たんすの上に留め具をつけ、揺れで動かないようにしたり、壊れやすいものや、重たいものを上に置かないようにしたり、食器棚の扉は揺れで全開にならないように工夫することも大切だと思う。

地震が起こった時や逃げる時に危なくないように予防しなければいけないと思う。

電気は天井からつるしてあるようなものはやめ、天井にくっついてあり、揺れないものに変えた。それは、地震が起こったときの揺れで、当時はつるしてある電気だったので天井に当たるなどし、中の電球が割れ、床に落ちるなどしたためである。今は、直接天井にあるのでその心配はなくなった。

今回の地震はたまたま家族が全員そろっている時間帯でよかったが、今度はいつに起こるかわからず、僕は学校に行く途中かもしれない、全員がバラバラかもしれない。

携帯電話があるが、その緊急時につながるかどうかはわからないので、家族の中で地震が起きたときはどこで集まるか、避難所はどこにするか、家族間での連絡の取り方はどうするかなど、緊急時にどうす

るかを決めなくてはいけないと思う。それらの取り決めは今起きるかも知れないので、早めにしておかなくてはいけないと感じた。

ほかには、地震が起きるという認識がなく、地震に対する意識がなかったためか、団地の自治会などの動きがなかった。

大事には至らなかったが一人暮らしの老人を把握していなくて声をかけることが出来なかった。

自治会などは一人暮らしの老人を把握し、災害が起きたときは無事であるかを確認して回るなど、その地域に住むすべての人が安心して暮らせるように活動していかななくてはいけないと思う。

忘れたくない思い出

山口 貴之
神戸市東灘区

1995年1月16日僕の家族はみんなで行ったスキー旅行から帰ってきた次の日の夜でみんな疲れも残っていたのでみんなすぐに寝た。僕は兄と一緒に部屋の2段ベッドで僕は1階、兄は2階で寝て、父と母は僕らと違う一番遠い部屋で寝ていた。

そして1月17日午前5時46分『ドン!』という音とともに激しい揺れが起きた。その一瞬でたくさんさんの家が崩壊したくさんの人が亡くなったなんてその時の僕には全く分からなかった。阪神・淡路大震災の発生だった。僕は激しい揺れを感じたが、地震が起こるなんて考えた事がなかったので兄がベッドで寝返りをうって揺れているのかと思った。何となく横の本棚もみたら本棚に立てかけてある本がほとんど僕の方へ向かってきた。それでも僕は地震だとは気づかず毛布をかぶってとにかく本が当たっても痛くないようにしていた。ほんの数秒の揺れなのに凄く長い気がしていると父が「拓也、貴之、大丈夫か!」と僕の部屋のドアを勢いよく開けて大声で叫んだ。僕は何があったのかもわからないまま父に背負われて兄と一緒に父と母が寝ていた部屋に連れて行かれた。その時僕は真っ暗なのに家具の位置がかわっているのと異様な雰囲気を感じた。部屋に行くと母がいた。部屋の隅で母が小さくなっているのを見て何かがおかしいと思った時にまた家が揺れた。父が母と兄と僕の3人をかばうようにして揺れがおさまるまで守ってくれてその時に僕は初めて地震だと気がついた。僕たち家族は着替えてしばらく家の中にいた。

少し時間がたつと父は隣のおじいちゃんとおばあちゃんが生きているか確かめに行った。父はその時落ち着いている様だったが、隣のおじいちゃんとおばあちゃんの家に行く時違う種類の靴を履いて行った。その時の僕はただ父が靴を間違えた事に笑っていたが今思えば父自身非常に焦っていたのだと思う。もし自分が焦って何もできなかったら家族が不安になると思い必死で冷静になろうとしていたのだろう。午前6時30分ぐらいに隣のおじいちゃんとおばあちゃん、母、兄、僕の5人は家の車の中に入り、暖房をつけ体を暖めながらラジオを聞いていた。どのラジオを聞いても緊急速報で地震の事ばかり言っていた。だんだん時間がたつにつれて団地の人達が駐車場に集まってきて僕の父と知り合いのひとと2人で団地の中の1件1件を確認し下敷きになった人を1人1人助けに行った。幸い亡くなった人はいなかったがけが人はたくさんいて手当てをうけている人がいた。

午前7時過ぎ、家族みんなで近くの渦が森小学校まで避難しに行ったが僕たちが行ったところにはグラウンドにたくさんの方がいて、しかも避難所のはずの小学校のグラウンドにヒビが入っており、僕はショックを受けた。一番丈夫で強いはずの小学校がほんの数分でボロボロになってしまうなんて。

でもそのグラウンドには地震でケガをした人たちがたくさん集まっていて僕が見た中でも友達のお父さんが頭から血を流して治療をうけており、タンスか何かが倒れてきたらしく腕を打撲している様子の人もいた。

その日の昼過ぎぐらいに少しはなれた所で水が出るという情報が入り、家族みんなでその場所に車でむかった。お父さんとお兄ちゃんは僕とお母さんを車の中で留守番をさせて、水をくみに行った。帰って来るとたくさんさんのポリタンクを持っていた。これで2日か3日はもつだろう。

また、同じ時間帯に家の近くの公衆電話がつながると聞いたお母さんはそこに行き、親戚中に家族全員が無事だとう事を伝えた。そして小学校に戻り、教室で避難をしているとお父さんがいない事に気づき、その理由はたくさんさんの家族やお年寄りが小学校に避難しているので、ケガなどをしていない大人の男性は僕のいる部屋には長時間入ってはいけなかったみたいだったのだ。その人たちは水をくみに行ったり自分の家を確認めに行ったり、近所の人を助けに行っていたのだ。

何時間かすると、僕たちは1回家に帰り、家の中の片付けをした。家の中はこの部屋にあるはずのないものが飛んできていたり、これだけ物が落ちてきてよく死ななかったな、というような状況だった。部屋を片付けている時に家には電気がとおる電話ができるようになって、お父さんは会社の友人に電話をして安否の確認をしていた。話を聞いていると僕たちの周りの方で亡くなった方はいなかったみたいだった。部屋の片付けが終わりに近づいてきた時、ベランダから外を見るといつも綺麗に見えるはずの景色が煙だけで覆われていた。

僕の家は山の上だったので下の街が一望できるのだ。

その煙にショックを受けていると隣にある山が崩れて見たこともない状態で、その山の近くにあるお寺みたいな建物も地震のせいで傾いていた。地震の力は凄いな、としか思えなかった。

夜になるとまた学校へ行き、そこで寝泊りする事にした。避難所生活の始まりだ。ほとんど何もない

状態で寝る場所も狭い。本当は我慢をしないとイケないのに小学2年生の僕は嫌で嫌でしょうがなかった。夜トイレに行くのも怖くて大声で親を起してついて来てもらったり、お腹が空いてずっと叫んでいたりしていた。あまり覚えていないが親や周りの人にかかなりの迷惑をかけたと思う。

避難所生活2日目。昨日とは違い、少し、ましになっていた。お父さんの友人が大阪から歩いて家まで来てくれて、水や食料などを持って来てくれたのだ。その人の話によると大阪はそんなに被害はなくて神戸に住んでいる僕たち家族の事が心配で来てくれたのだ。その人は用件が終わるとすぐに帰って行った。とてもいい人だと心から感じた。たった1日で食べ物が入ったり支えあう力ができたりするなんて凄い事だと思う。普段全然喋らない人ともお互い助け合って力を借りたり、コミュニケーションがとれるようにできるのだから。2日目はあまり困った記憶もないのでそこまで凄い事はなかったのだろう。

1月19日、僕は大阪に住むおじさんの家に行って少しだけ暮らした。そのおじさんはとても面白い人で僕たちを楽しませてくれた。その日の夜、僕はお父さんから「明日関空から飛行機に乗って鹿児島のおじいちゃんの所に行きなさい。」と言われた。疎開である。小学2年生の僕は旅行気分ですごく嬉しかったのを覚えている。そして1月20日、お母さんと、お兄ちゃんと、僕の3人で飛行機に乗って鹿児島にむかった。お父さんは家の片付けや仕事、会社の友達の安否など色々あるので神戸に残った。

鹿児島に着くとおじいちゃんが空港まで迎えに来てくれて、「お疲れ様。」と言って家まで送ってくれた。車の中で震災の事を聞いてきて真剣に聞いてくれて鹿児島に住む親戚みんなは神戸の家に電話がつながらないし神戸からも連絡が中々来ないので凄く心配していたと言っていた。家に着くと、おばあちゃんが出迎えてくれて、近所の人も「大変だったねえ。」など声をかけてくれた。家の中で話をしているとテレビのどのチャンネルも今回の阪神・淡路大震災の事ばかりでコマーシャルもなく24時間ずっと流れていたらしい。僕が鹿児島に行ってもテレビでは地震のことばかり言っていて毎日のように「今日の段階で何人亡くなった。」とか本当に暗いニュースばかりでその中で家族全員生きていた僕たちは本当にラッキーだったと思うしかなかった。

次の日ぐらいに僕は鹿児島の松元小学校に一時転校した。その学校は1・2年生が1クラス、3年生以上になるとそこから2クラスに分けているというとても田舎の小学校で、そこに僕は2ヶ月ほど通っていた。転校初日は朝の朝礼で全校生徒に挨拶をしてその後2年生のクラスに入り自己紹介をした。最初は小学2年生とはいっても違う環境になると自分を閉ざしてしまい、誰とも話せなかった。一番後ろの席に座られ、みんな制服の中、自分1人だけ私服。とてもなじめる環境ではなく誰とも話す事さえできなかった。そんな事を知ってか知らずか僕の前に座っていた「ゆうすけ」君が突然話しかけてきた。

「神戸に住んでるの？」と聞かれ「うん」しか答えられなかったがなぜかとても嬉しかった。それからゆうすけ君と話していると周りからたくさんの方が来て話しかけてきた。休み時間も一緒にドッジボールをしたり、遊具で遊んだりした。学校に行くには毎朝5・6人の友達が迎えに来てくれていつも一緒に学校まで行った。そんな楽しい日が続く中、突然おじいちゃんが「新聞に載るぞ」と言いお兄ちゃんは震災の時の事を詩に書いていた。学校にも新聞記者の方が来て、軽くインタビューをしたような気がする。その後に僕とお兄ちゃんは校門の前で写真を取りそれが次の日の新聞に載りそれを見た近所の方が救援物資をくれた。その日ぐらから近所のおもちゃ屋さんに行くとかだでおもちゃをもらったり文房具をもらったりした。その後も色々な物をもらったり、話を聞いてもらったりした。友達もたくさん増え、たくさん遊んだり一緒に勉強したりした。マラソン大会やサッカー大会、縄跳び大会などの色々な行事もやってとても楽しい日が続いたが、やっぱり別れの時が来てしまった。別れの朝、全校生徒に別れの挨拶をして僕はクラスみんなからお別れ会を開いてもらってたくさんの手紙や絵、折鶴、お菓子などをもらって最後に先生とクラスみんなで記念写真を撮り僕は松元小学校を後にした。

家に帰ると神戸に帰る支度をした。次の日の朝近所の人にお別れの挨拶をして駄菓子屋さんにもお別れの挨拶をするとお菓子をたくさんもらった。そして鹿児島空港に向かい飛行機に乗って関空に着いた。久しぶりの神戸。とても懐かしかった。家に着くと地震が起きた時とは全然違うくらい家が綺麗になっていたが外の景色はなんとも言えないものだった。綺麗なはずの神戸の街がボロボロになっていてどこを見ても工事現場で1つも綺麗なところがなかったのを覚えている。何日かたって久しぶりに地元の渦が森小学校へ行くと外でみんな遊んでいた。しかし、楽しみにしていたお昼の給食はというと長いソーセージみたいなものとおほんの少しのおかずと牛乳ビンに入った牛乳だけだった。外だけ変わっていても本当の苦しみはこれからだとその時に感じた記憶がある。その後も近くのコープは外で販売をして、レジがないので電卓で計算していた。少し街が落ち着いてくるとそのコープが近くの公園のグラウンドに建てられ約2年間そのグラウンドにあった。

僕の住んでいた団地は周りの団地の中でも被害は少ない方で隣の団地はほぼ全壊状態だった。その団地は後々取り壊され、『ニュースステーション』にも報道された事もあった。そして新しく造りなおさ

れ、綺麗な団地として生まれ変わった。

3年生になった時も春の運動会でグラウンドが傾いているからリレーなど走る競技はできないと言われ、またみんなでガッカリし、また道路の形がおかしくなりバスが通れなくてバス道が変わって凄く交通機関が使いにくかったのを覚えている。その後も三ノ宮などの町でもとても長い期間にわたって工事をし、半年位かかって元の街になっていた。

これが僕の震災体験です。

震災を振り返って・・・

僕は今回このレポートを書きながら『阪神・淡路大震災』の振り返ると、震災当時は小学2年生というのもあってか凄い事が起きたんだという事しか感じなかった。それは身近な人が亡くなったり、大ケガをしたり凄く残酷なものを見ていないからだと思う。簡単に言えば大阪ぐらいの人がテレビで阪神・淡路大震災の映像を見て「ああ、大変な事だ」と思うのと一緒に気持ちくらいだと思う。確かに大変な事もあって辛かったが僕自身そこまで不自由な事はなかったからだ。何の被害もない鹿児島へすぐに行って今までどおり普通の生活をして、たまに救援物資をいただいたりしたが、本当に普通に生活ができたのだ。そして神戸へ帰ったらチョット不自由な事もあったがそれほど苦しい事ではなくて地震をなめていた。

しかし、この舞子高校環境防災科に入って地震の事をメインに勉強していると地震の事がよく分かり、その時に初めて地震の本当の怖さを知った。そして阪神・淡路大震災は世界的にも大きなショックを与え、本当に凄い地震だったと改めて感じた。そして僕がこの阪神・淡路大震災を学んで思った事は、約10年も前のことなんかみんなの記憶からなくなっていつているが僕はこの地震を絶対に忘れてはいけないと思う。『ボランティア元年』と呼ばれたあの時から約10年。少なくとも今20歳以上の当時神戸に住んでいた人はあの地震を覚えていると思うが、その人たちは自分の子供や孫にあの地震の怖さ、辛さ、残酷さを伝えてほしい。そうする事によって何年たっても地震の怖さは忘れられることはないと思う。それは今僕たちのおじいちゃんやおばあちゃんが僕たちに戦争体験を伝えるのと一緒に僕たちが戦争はやってはいけないと思うのと同じ気持ちになるだろう。

後、僕が今伝えたい事は東京の人は1995年1月17日が何の日か知らない人が多い。それは阪神・淡路大震災の凄さや恐ろしさを知らないからだ。僕はそんなバカみたいな事があると聞いた時は何か変な気持ちになった。歌手の平松愛理さんが講演で「毎年1月17日に神戸のライブハウスでライブをするんですけど東京の人に『1月17日は神戸に帰らないといけないんです』と言うと東京の人は『親戚でも亡くなったの?』と言うのです。」と言っていたのをとても覚えている。確かに僕たちは北海道で起きた大地震の日などを覚えていないところもあり大きな態度で言えないけど『ボランティア元年』と名づけられた日なのだから全国の人に覚えておいてほしい気持ちがある。だから今のうちにあの大地震の記憶がある僕たちが色々なところへ行って色々な人に伝えていかなければいけないと思う。

最後に僕が一番伝えたい事があってそれは今、30年以内におきる確率が凄く高いと言われている「東南海地震」。それは僕たちがこの環境防災科に入った事によって知り、興味を持っていてそれに関わる資料などを集めてもし地震が起きたらどこに避難し、何を持って行き、津波が来たらどこへ逃げた方がいいのか、などを調べてそれに備えている。最近ではテレビなどでよく東南海地震について放送していて僕たちはそのテレビを見て学ぶ。地震に興味があって真剣に考ええいる人にとってはその放送もとても役に立つ。

しかしそれは僕たちのような特別なところで学んでいるからで、僕自身この学科に入っていなければ、地震の事も考えないだろうし、緊急の避難袋も用意しない。またテレビで東南海地震の事を放送していても僕たちの年代ならそんなあんまり面白くない番組よりもっと面白いバラエティー番組を見ている。僕たちの年代で見ているのはほんの数パーセントの人だけだと思う。あと30年たって地震が起きた場合、中心になって周りの人を助けるのは僕たちの世代だ。このままではまたあの阪神・淡路大震災と同じような被害がでて死者もたくさんでるだろう。政府の人や専門家の人たちは避難の仕方などを知っていて助かるかも知れない。もし助かった時は必ず「私は〇〇年前に危ないですよ。と忠告したにもかかわらず誰も聞く耳を持たなかったじゃないですか。」と言うだろう。それを言われた国民は何も言えなくなってしまうだろう。でもよく考えてみると確かに何年前かに忠告したかもしれない。しかしそれは上辺だけの行動で、もし本気で人の命を助けたいならば誰が見ているか分からないテレビや専門家の偉い人だけでだした難しい言葉だらけの結論や本、簡単に言えば上の位の人たちだけで解決し、自己満足をしているだけでそれでは一般市民は助からないだろう。やる気があるのならば専門家などが自ら足を運び、まずは近所の公民館や学校の体育館で講演会をすればいい。僕たち環境防災科はそれをしている。

最初はほんの狭い地域だけから始まるがそれを続ける事によって話を聞いた人が近所の人にその話を伝える、そしてまた伝えるという風になりみんなの防災意識が高まると思う。勝手に防災マニュアルを作って自分だけ持つというせこい考え方はしてはいけない。本当に人の命を助けたいならば、一軒一軒の家に配るなどの努力をしてほしいし僕たちも限界までそのような行動をしていきたい。そうすれば何年後かに東南海地震が起きても阪神・淡路大震災よりは被害が少なく、死者も大分減るだろう。

これが、今僕が一番伝えたい事です。

1月17日という日から

山口 友子
神戸市垂水区

兵庫県南部地震の概要

- ・発生日時 1995年1月17日05時46分51.9秒
- ・震源地 淡路島北部 北緯34度36分 東経135度02分
- ・震源の深さ 16km
- ・マグニチュード 7.2
- ・死者 6,394人

※災害救助法指定市町

神戸市・尼崎市・明石市・西宮市・洲本市・芦屋市・伊丹市・宝塚市・三木市・川西市・津名町・淡路町・北淡町・一宮町・五色町・東浦町・緑町・西淡町・三原町・南淡町

1. 震災前夜の出来事（1995年1月16日）

震災が発生する前日の夜、確か3連休の最終日で私と両親は遅くまでテレビを見ていた。お母さんに「そろそろ寝なあかんで。」と言われて、私が寝る用意をしていた時お父さんが「風がぬるくて、なんか嫌な感じやな。明日ぐらいなんかあるで。」とつぶやいているのが聞こえた。お母さんは、「雨でも降るんちゃう？」と会話を交わしているのを聞いた。私は明日からまた学校が始まるので、そんなことを気にせずにすぐに寝てしまった。あの時は、お父さんの言葉に深い意味があったとは思わなかった・・・。

2. 震災当日の出来事

午前5時30分頃、私はふと目が覚めた。枕元の時計を見ると、起きるはずの7時までに1時間以上もあったのですぐに寝てしまった。

そして、1995年1月17日5時46分。兵庫県南部地震が発生した。

なんか変な音がするなと思って目覚めたその瞬間、地面の奥底から響くようなゴーという音、直後にドドーンという音と同時に家全体というか自分も含めたすべてが大きく揺れた。ガシャーンという何かが割れる音、ギンギンと家がきしむ音、棚にあるものが落ちる音が家中に響いた。しかし、当時小学校2年生だった私は地震が起こったと分からずにただ布団にもぐりこんで震えていた。何があったのか分からなくて、のんきな事に近くで大きな穴を開ける工事でもしていて、さっきの大きな揺れは夢だろうと思った。そしてそのまま寝てしまった。今考えるとかなり鈍感な子供だと思う。

そして、寝てから数分後、私はお父さんの「友子、大丈夫か！！」という叫び声とお母さんの「大丈夫みたいやで。よう寝てとう。それより、ご仏壇のお位牌が全部落ちてしもてる。」と言う声で目が覚めた。お母さんとお父さんが奥の寝室からあわてて出てきて私の部屋にたどり着いたようだった。寝ていたのにといいながら、私は「・・・どうしたん？こんな朝早くに。」と聞くと、お父さんは安心したように「よかった。無事か？」と言った。寝ぼけていた私にお父さんが冷静に言った。「友子、地震が起きたんや。これはかなり大きな地震やで。よう寝とったなー。」と言った。『地震』という言葉聴いて、私はやっと目が覚めた。「うそ・・・。今のが地震やったん？」と。

それから、両親は家の出口が開くのか確認して、ガスの元栓を締めてガス漏れがしていないか確かめていた。落ちたお位牌を拾い集めたり、ガラスが割れたのを片付けたり、玄関から靴を取ってきたりしていた。いつでも外出できる格好に着替えて、家族で家の居間に集まっていた。お父さんがガラスで足を切ったのでお母さんが手当てをされていて、私はとても心配したが、血が止まったので一安心した。日がなかなか昇らなくて、私は暗い家の中で余震に怯えていた。本震の時以上に敏感になって、日が昇るまでずっと余震を数えていた。不安そうな私を見て、両親はそれぞれ地震発生時に何をしていたかを話してくれた。

お母さんは、地震が起きる前も、起きた時も、起きた直後も熟睡していて何も気づいていなかった。そして、お父さんの「地震や。はよ起きい！！」と言う叫びであわてて飛び起きた。地震が収まりきっていないうちに、二人は急いで寝室から出て私の部屋に来たらしい。しかし、心配している当の娘はよく寝ていて、お母さんが驚いたのは私の部屋に置いてある仏壇の中の先祖代々のお位牌が一つを除いて

全部吹っ飛んでいたことだった。普段はかなりのんきなお父さんが一番冷静に動いていて驚いたとも言っていた。その話を聞いて、私の鈍感さ（神経の図太さ）は確実にお母さんからの遺伝やなど、思った。

お父さんは、16日の夜からずっとなかなか寝つけずにいた。冬なのになんか蒸し暑い感じがして、眠れなかったらしい。1～2時間ぐらいかかり、やっと寝た。だが、結局4時～5時頃にまた目覚めて眠れずにいた。5時を過ぎたぐらいから布団の中でそわそわしていたらしい。なぜそうなったのか、分からなかった。そして、5時46分地震が発生した。お父さんは地震が起きた時、自分の体が上に一瞬浮き上がり、家がきしんでいるのを聞いて、地震がおさまるとあわてて「地震や。はよ起きい！」と言って、横に寝ているお母さんを起こして部屋を飛び出してきて「友子、大丈夫か!。」と叫んでいた。

普段はお母さんの方が年上で何かとしっかりしていて（お父さんを尻に敷いていて）お父さんはかなりのん気な人だけど、地震が起きた時にお父さんが一番冷静に物事を判断していて、さすがお父さんやなあと思った。

日が昇ってきたので、みんなで家を出て自分の家の被害状況を見て、近所の状況を見てまわった。近所の家での倒壊は無かったが、自分の家も含めて屋根瓦が落ちていたり、壁に大きな亀裂が走ったり、道路の一部が隆起したり亀裂がはいったりしていて、地震の力の大きさを感じた。ひとまず、家の安全を確かめてから庭に生えている大きな松の木の根元で家族は集まって、今日は1日どうするかを考えた。だいぶ日が昇ってきた頃、おなかが減ってきたので、貴重品とお位牌（ご仏壇が荷物に埋もれて置けないので）をリュックに入れて買い物に出発した。

通りなれた道がいつもと全然違っていた。まず、私が通っていた千代ヶ丘小学校の裏門の横や周りにあったブロックのへいがほとんど倒壊していた。学校への避難はできないなあと家族で話しながら別の道を通った。いつも通っていた所だったので、もし学校に行く時間に地震があったらと考えるととても怖かった。その後、小学校の隣にある垂水中学校の敷地を通して中学校のテニスコートの横を通る道に出た（垂水中学校には運動場とは別の所に、テニスコートがある）。そこで、私達はすごい光景を目にした。テニスコートを横切る大きな割れ目（その時は分からなかったが後に、断層だと分かった）が走り、コートが大きく2つに割れずれていた。これを見た時、とんでもないことが起きたのだとしっかり認識した。家から20分ぐらいの所にあるコンビニへ行くことにして、その道中で多くの家のかわらやガラスの破片が落ちていて、歩くたびにジャリッ、ジャリッと音がした。また、壁に亀裂が走った家やゆがんで隣の家に寄りかかっている様な家もあった。道路には蛇のような隆起や割れ目が多く発生していてつまずきそうになった。そして何とかコンビニに到着した。コンビニに入ると商品がたくさん床に散らばっていて、パンなどのすぐに食べられるものが販売されていた。そこで、その日1日分の食糧を買い込んで帰った。そして、家に帰って夜に電気が通じたけど、テレビの具合が悪くてつかなくなったのでお父さんは修理をしていたが、私はほとんど何もしないで寝てしまった。両親はいつ大きな余震が来るのか分からないので交代で寝る事にした。

3. 1月18日から

翌日、いつもより早く起きて朝食をすませた後、両親はどこで食料や水を手に入れようかと話をしていて、お父さんは配給をもらってくる事にして、お母さんと私は近所のマーケットやコープに行って食料を買出しに行く事になった。全員が家にいなくなるのが怖かった（その当時はいつ地震が来ても逃げられるように戸締りをしていなかった）ので、先にお母さんと私でマーケット巡りをした。いつも行く近所のマーケットはほとんど閉まっていたので、少し遠くまで足を延ばして何とか買い物をして帰ってきた。

昼食を食べた後、お父さんが配給をもらいに行く事にした。しかし、どこで配給をしているかなどの情報が無いので困っていると、近所の仲のいいおじさんやおばさんが中学校で毛布を配っていることやプールの水がもらえるらしいという情報を教えてくれた。また、普段はそんなに交流のないおじさんから「垂中で水が出とうで!」と教えてもらい、お父さんはすぐにもらいに行った。配給をしている所に行くと、毛布の取り合いが起こっていたけど、誰かが「子供や女性のおところが先や!」と叫んで、やっと取り合いはおさまった。水のほうは大きな揉め事も無かった。しかし、プールの水は学校に避難している人がいるのでもらえないと聞いたが、お父さんはねばって中学校の先生にお母さんが垂水中学校の卒業生である事を言うとその先生は快く分けてくれた。

この日は自分達の事で忙しかつたので、私はくたくたになって夕食後にすぐに寝てしまった。真夜中に目が覚めると、両親が起きて何か話をしていて、それを見て、私は安心して寝た。（地震後2～3ヶ月、両親はまともに寝られた事が無かったというのをずいぶん後になって聞いた。）

4. 1月19日～（このあたりからの記憶が曖昧で日付を覚えていない。）

私の家から徒歩10分ぐらいの所にあるおばあちゃんの家にも行った。おばあちゃんは地震発生時間に薬を飲んで熟睡していたので、地震には気づかなかっただろう。おばあちゃんは足が少し悪いので、水汲みなどに困っていた。そこで、水汲みに行った。水汲みをした事で、近所の仲のいいおじいさんやおばあさんのために何かしたいと思うようになった。そして、私も親を手伝って近所の足の弱いおじいさんやおばあさんのために水汲みを手伝うようになった。寒いので給水車に並ぶのがとても辛かった。でも、汲み終わってそのおじいさんやおばあさんの家に水を届けに行くと、とても喜んでおられてとてもうれしい気持ちになった。

何とか家の片付けも済んだので、家族でテレビを見る時間が増えるようになった。少しでも地震に関する情報を得ようと思ったからだ。しかし私にとって、初めて見た被災地（高速道路が倒れているシーン・長田区の大規模火災のシーンなど）は衝撃的なものだった。小さい頃に行ったことのある街、テレビで見慣れた場所がほとんど跡形も無く破壊されていた。壊れるなんて思ったことの無いものが、壊れていた。何よりショックだったのが、テレビの画面に数え切れないほど、死者や行方不明者の名前が載っていたことだった。自分と同じように被災したのに、何千人もの人々が死んでしまった事が信じられなかった。また、近所に買い物に行く時よく通っていた道に盛り土で崖のようになっていた所があった。その家の土台部分が地震で土砂崩れを起こして、その道が通行止めになっていた。テレビで見たような映像がそっくりそのままそこにあった。土台の上にあった家は、下に落下していて原形を留めていなかった。そこで垂水区で唯一の死者が出ていたというのを数ヶ月後に聞いた。信じられなかった。あまりにも身近で人が死んだという事に、かなりの衝撃を受けた。その頃から、ちょっとした余震でも怖くてふとんから出られなくなり、学校に行くのが嫌になって約1ヶ月学校を休んでしまった。その頃の私を見て、両親はかなり情緒不安定な状態だったといっていた。その後、なんとか学校には行くようになったけれど、地震前と様子が大きく変わっていたらしい。落ち着きがなくなって、友達ともよく喧嘩をするようになっていた。なぜか、日々イライラして何をしても楽しいと思えなくなっていた。

そんな頃、地震に関するドキュメントをよくテレビでしていた。しかし、内容は大人向けのもので意味がよく分からなかった。そこで、いろんな本（子供向けの本）で地震の事などを書いたのが無いかと探すようになった。そんな時、お母さんが地震に関する漫画の本を買ってきてくれた。分かりやすい内容で、地震のメカニズムを書いてあった。この本をきっかけにいろんな災害のメカニズムに興味を持つようになった。また、学校で神戸市の教育委員会が発行している地震を体験した市内の小学生が書いた作文集の販売があって、すぐに買って読んだ。そこには自分と同じぐらいの年齢の人が多く作文を載せていた。自分なんかよりもっと怖い思いをした人、悲しい思いをした人、そして人と人が助け合うことでうれしいと感じた人がいたのだと分かった。自分は全然大した事が無いのに、こんなに動揺してはいけなそうと考えるようになった。そして、少しずつ元の自分に戻っていった。

5. 小学生高学年～中学生

いろんな災害に興味を持つようになって、いろんな本やドキュメントを見た。内容はなかなか難しいので、親に聞いたり、辞書で調べたり、図書館に行って調べたりしながら、何とか解説していった。そうこうするうちに、中学生になった。中学生になると勉強や部活でへろへろになって、今までしてきた災害に関する勉強は出来なくなってきた。中3になると、高校などの進路の話も出てきた。受験勉強に追われるようになり、災害のこととかを勉強するのはもう無理だなと諦めていた。

しかし、進路指導の資料をもらったときにこの舞子高校環境防災科を発見した。高校に行っても災害や防災、そして環境問題のことも出来るんだと思うと、ぜひとも受験しようと思った。だが、県下で40人だけ募集なので落ちてともとで受けることにした。

6. 今、環境防災科にはいつて思うこと

環境防災科にはいつて最近考えるのは、防災だけとか、環境問題だけとかではとても解決が出来ない大きな問題（環境防災）なのだという事が分かってきた。この学科に来て、今まで知らなかった事、普通は体験できない事、自分の考えを人に伝えることの難しさなど多くを学ぶことができた。

あと残り少ない高校生活の中で、今の自分にできる事を自覚して、そして将来の自分が何をできるのか、自分自身に挑戦していこうと思う。

記憶をたどって・・・

山之内 優子
神戸市垂水区

来るべき1月17日の前日、1月16日という日私は普通に家族と過ごしていた。そして普通に「おやすみなさい」と言いタンスのたくさんある寝室へ姉（朋子）と2人で寝る。両親（隆司・和子）と小さな妹（理子）は隣りの和室で。家族全員、いや阪神地域の大半の人が明日あんな大きな地震がやってくるなんて思ってもいなかっただろう。

1月17日、地震がやってきたと幼かった小学2年生の私が理解するのは難しかった。というのも“地震”というものを知らなかった。理解したことといえば家が揺れていて、私も自分では立つこともできないくらいにぐらぐらぐらぐら揺れているということ。私は隣で寝ている姉に「おねえちゃん！！」と言ってしがみついた。姉もまだ小学4年生。起きてそのわけの分からない状況に姉のこわばった顔を覚えている。揺れているのに気が付いて起きて少したった時、私たちの寝ている部屋にドアを勢いよくバーンと開けるや否や「大丈夫か！！」と、お父さんが凄いい勢いで入ってきた。お父さんが来てくれた…と分かっただけで私は安心した。そして自分の足元を見ると、タンスの上に置いてあった大きなダンボールが落ちてきていた。そして父は私たちを両親と妹が寝ていた隣の和室の部屋に連れて行ってくれた。そこには布団にくるまった妹と、いつもとは雰囲気の違いの母がいた。私と姉は恐々布団の中に入った。母はラジオをつけ、父は1階（私たちが家族が寝ていたのは3階建ての1軒家の2階）に懐中電灯を探しにいった。余震が続く父を除く私たちがリビングに行けたのは大分経ってからだったように思う。テレビを付けた途端に真っ黒な煙に覆われている町を見た。この町はどうなってしまうのだろうと分からないながらに怖かったし信じられなかった。朝だったためやはり外は真っ暗で恐ろしさが格段に増した。こんなに家が揺れるのは初めてだった。

父は祖父と祖母の住んでいる長田区海運町に向かった。祖父母の家には1階に父の仕事場があり、2階に祖父母が住んでいるというものだ。後から父にその当時の状況をその時父が撮った写真を見ながら聞いた話だが、それは壮絶なものだった。まず家は両側の家から押し潰され1階も2階もぐちゃぐちゃで原形をとどめていなかったそうだ。そんな中にまだ父の父、私のおじいちゃんを取り残された。うちの祖父は片手片足が不随だったため自力での脱出は無理。歳をとった祖母だけではどうも救出はできない。自分が原形をとどめていない自分の家から自力脱出するのも精一杯だということを知っていたご近所のみなさんは祖父を助けてくれたそうだ。残念ながら長田区一体は火の海になった。しかし、祖父母の家のあるあたりは火から免れた。なぜかというところ近所にあった教会があったおかげだったそうだ。マリア様の像も焼け崩れてはいなかった。

この話を聞いたときがひととひとのつながりを感じた瞬間だった。この話をきいたのは何歳だっただろう。これが私の環境防災科に入りたいと思ったきっかけの1つだったことは確かである。

祖父と祖母の家はさっき述べたように全壊だった為、1月17日の震災当日に私の家にあのガレキの中から使えるものと一緒にやってきた。2階の和室を部屋にしてもらいかれこれ3ヶ月いただろうか。私はこんなにずっと一緒にいられることなどないので嬉しいと感じていたと思う。いつもは年に数回しか会えないおじいちゃんとおばあちゃんが一緒に生活していたのだから。水も出ない、ガスも使えない不自由な生活が続いていた中で1月24日、付随の祖父は息を引き取った。身内で誰かが死ぬなんて初めてでよく分からなかった。おじいちゃんはいなくなるの？もうお話できないの・・・？分からなかった。不思議だった。私は震災で祖父を失った。人が死ぬということを始めて体験した。祖父ともっと一緒に時間をすごしていたかったなあ。震災は得るものがあるというけれど、これから先には得るものがたくさんあると言えるけれど、失った側にしてみれば、得たものは辛かった体験も含まれると感じる。

お葬式では父が親族を代表して喋っていた。私たち姉妹は父が泣いているのを始めてみた。父が泣いているのを見ていたらこっちまで泣けてきた。おじいちゃんは死んでしまったんだ、とお骨を拾うことはできなかった。おじいちゃんが骨になってしまったのを見た瞬間部屋の隅っこに逃げてしまったのだ。いとこのお姉ちゃんに付き添ってもらいながらのお骨拾いとなった。おじいちゃんはどうしてこうなってしまったのか。この時私は地震というものを恨んだ。そして3ヶ月たったとき祖母は1人、大阪府松原の祖母から言えば娘、私から言えばおばちゃん、の家に移って行ってしまった。

震災があった前夜からばらばらで寝ていたけれど、家族5人全員リビングで寝るようになった。リビングに5人寝るのはきつかったけれど、みんながいると思うと結構安心だった。リビングで5人寝るなんて日常じゃない事だったので、私は地震が怖いという感情となんだかキャンプのような楽しい心境が

あった。4人は川の字に並んで寝て、あとの1人はソファで寝ていた。17日以降も余震は続き、みんなばらばらの日中なんかは不安だった。いつまたあの大きな地震が来るかわからない、いつこの家もおじいちゃんとおばあちゃんの家のように潰れてしまうか分からない・・・と思っていた。テレビを見ても地震情報ばかり。楽しいことはなかったと思う。

何日かたっても余震は続いていた。余震がやってくる度に怖かった。家がつぶれてしまうのではないだろうかと思った。テレビの中は見たこともないような画だった。真っ黒な町や、あたり一面見渡せてしまうような町、泣いている人、おにぎりを配る人、、家は家でなくなりただのガレキ。一夜でこんなことになるなんて想像もつかない。避難所と呼ばれる学校は人の群れだった。運動場にもテントがいっぱいだった。体育館ではダンボールで敷居を作り生活しているようだ。考えられなかった。家が潰れていたらこんな状況だったのかと思った。とにかくテレビの映像は怖かった。何人もの死者の名前が読み上げられ、どうか知り合いはいないでくださいと願っていた。

まだかたづかない家の中では食器棚のガラス、食器達は割れ、床に飛び散っている。水道も使えずガスもダメ。水を出そうと蛇口をひねってみても水はまだ一向に出なかった。即座に大きなバケツに昨日の残り湯を入れ、少しの水を確保し、ガスボンベを引っ張り出してきた。このガスボンベは震災が起こる数年前にもらったもので、本当に助かった。幸いにも電気は使えていたので電子レンジという心強い味方もいた。電子レンジがなくても生活が危うかったと思う。

すこしここで話を切り替えたいと思う！震災当時私は素敵なメニューに出会う。まず洗わなくてすむようにお茶碗にラップを敷き、そこにご飯をよそう。そして缶詰のミートソースをかけて食べる。おいしーい！！

数日たって落ち着いたころ、小学校に行くことになった。いつもの通学路を通る。もともと結構年季の入った廉売市場という古い市場を通るのだけれど、ひびが入っていて地面はボコボコになっていた。薄暗くていつもとは違う雰囲気だった。いつもの道が怖いと感じた。しかし周りの家は意外と普通で、見た目的には震災前と震災後では大して被害はなかった。しかしいつもとは違う状況に緊張ではなくわくわく感満載だったように思う。学校についてみると校舎には入らずに運動場にクラスで並ばされた。そこで1人の女の先生がなくなったことを聞かされた。「自分の子供を守ってなくなったのです。」とその先生は辛そうに教えてくれた。しかし死んだと言われても実感できなかったし、分からなかった。

そのころといえば、母方の祖父母の家は明石市魚住の方にあったので震災の影響はあまり受けておらず、家も水も電気もガスも大丈夫だった。そこで私たちは水をもらいにいったり、お風呂にはいらせてもらったりした。たくさん水をいたる物に汲んで帰りご近所の皆さんにも渡したりした。

父は実家の近くの小学校や中学校にボランティアに行っていたそう。そこで被災者で自分の家族を探している人に間違えられ、インタビューをされた。その映像を私は見た。後に父にその時の心情を聞いてみると、俺は近所の人さがしとただけやのになぁ～と語っていた。

そうして何日かたっていったが、まだ水は出ないし、もらってきた水もなくなってしまうということで、小学校に給水車がやってきていると聞いたので、家族で学校まで水を貰いにいくことになり学校へ行った。小学校に給水車がやってきていると聞いたので、家族で行った。そこには“愛知”と書かれた給水車が来てくれていた。とてもありがたい気持ちでいっぱいだった。

だからトイレは外に大きなバケツのようなものに雨水をためておいたものが一応あったので、その大きなバケツを家の中に持ってきて、用を足した後そのバケツから水を汲み取って勢いよく流すのだ。最初は気が引けていたが、やはり慣れてくるものでその行為が億劫にならなくなった。水は大切に使わなくては…。

前のほうで言ったようにお父さんはこの震災で仕事場を失った。しかし、“仮設工場”の抽選に応募したところ運良く当選し仕事を再開させることができた。

仮設工場に入ると、父は震災前よりも早く家を出るようになり、遅く帰ってくるようになった。場所が遠くなったので仕方がないことなのだが、小さかった私はとても悲しく感じていた。今その抽選に外れていたら…と思う。父の仕事をする場所がない。生活できない。恐ろしいことになっていたのだろう。本当に運がよかった。運がよかったと言っても不幸中の幸いでしかないのだけれど。

全壊した祖父母の家兼父の仕事場はとても古いものだった。私はその家がとても好きだった。父が生まれてそのままの家だった。1階（仕事場）から2階に上がる階段に小さな小窓がついており、その小さな小窓から父が仕事をしている姿を何度も見ていた。震災はその小さな窓も、父があの家で仕事をしている姿も壊してしまった。あの家に最後に入れたのはいつだっただろう。こんなことならもっとあの家の風景を目に焼きつけておけばよかったと今思う。その全壊した家を見たのはいつだったのだろうか？父はその自分の実家が全壊した様子を写真に収めていた。その写真を父は人と防災未来センターに寄付してほしいと言われ寄付したそうだ。

うちの祖父ははじめ震災によって死んだと認められなかった。家で息を引き取ったため死因がわからなかったからだ。病院で息を引き取ったのなら医者によって死因が発表されるが、家で亡くなったためはじめは震災でなくなったとみとめてもらうことができなかった。そこで、どうにか認めてもらいたくて震災前にかかっていた主治医の先生を、訪ねた。“震災がなかったら死ぬなんて考えられなかったと”一筆書いてもらって、神戸市の役所の方に主治医先生に書いていただいた診断書をそえて提出した。そしてようやく震災によってうちの祖父は息を引き取ったと認めてもらえた。

そういうことがあって祖父は認められ、阪神淡路大震災によって亡くなった一人として実家近くの町内の公園ちかくにある町内でなくなった人の慰霊碑に名前が刻まれた。三宮にある慰霊碑にも名前が刻まれている。三宮の方の慰霊碑は地下に名前が刻まれていて、凄く冷たい空間だった。そこには親戚と一緒にその碑を見に行き、祖父の名前を手でなぞった。冷たかったけれど、祖父を感じることはできた。祖父は認められたのだ。

震災があって私の生活はその日を境にがらりと変わってしまったと思う。あの体験はした方がよかったのか？しなかったほうが幸せに暮らせていたのか？それは今となってはとうてい分からない。

みんな分からないと思う、実際失ったものがある人がほとんどであんな地震なんて来なければよかったのにと考えている人がほとんどかもしれない。しかし、あの地震を意味のあったものにするか、破壊してわたしたちから大切なものをただ奪っていつってしまったものにするかは自分しだいなのだと今は思うことが出来る。昔はやっぱりおじいちゃんを奪ったんだ、おじいちゃんとおばあちゃんとお父さんの家と仕事場を奪ったんだというとらえ方だったのだけれど前に進まないと、あの地震の思うがままになりかねない！と、いつからか思うようになっていた。ちょうど小学2年生、あのときの記憶はちょうどいいというか悪いというかその年頃で震災を体験したため思い出せるぎりぎりの年齢だ。おそらく私の世代の子は覚えているだろう。その体験を今の小さな子に分かってもらうことも前に進む方法だろう。

しかし私は、震災を体験したのだけれど震災を日々感じていたわけではない。しかし年に1回1月17日が来れば震災を思い出すわけで忘れていたわけではない。小学校のときの体験なんてそうそう覚えているわけではない。今となってはポツリポツリと断片的にしか思い出せないけれど今になっても体は何かしら覚えているもので、夜中小さな揺れが来ると必要以上に怯えてしまう自分がいる。こういう時体験とはいやなものだと思ってしまう。

私はこの震災体験をしてよかったかはわからない。しかし生きていくうえでの何かは得たと思う。現に私は今震災を体験して、環境防災科の一員になっている。

震災を体験していなかったら普通の高校で、普通の高校で学ぶベンキョウをしていたのだと思う。環境防災科ができてよかったと思う。この科ができなかったら私たちの世代の体験というのは風化してしまっていただろう。震災の体験を伝えていくためにはそれなりの場所が必要となってくる。その場所こそ環境防災科なのだと思う。ここからいろいろなところへ発信していく。これは本当に大切なことで、これから何年もつづけていかなくてはならないこと。私たちの世代の体験というのは風化させてはいけな。これから先つづく環境防災科の生徒のみんなにも続けていってもらいたい。そして環境防災科の授業はベンキョウではなく本当に自分のためにする勉強でもあり、命を考え、命を守る勉強なんだと感じている。それに大切な人を守る知識を学ぶことができるのだと思う。この科に入っていなかったら、防災のことなんてまったく関心なかったと思うし、次来る地震についても無知。家族を守ることはとうていできなかったと思う。家の耐震補強について両親に聞いてみたり、タンスは金具で固定しなくてはいけない…などみんなを守る知識を学ぶことができる。今地震や自然災害がやってきたら、私はもう17歳。もう人を助ける立場にいる。阪神淡路大震災の時のように小学生で助けてもらってばかりの私ではいられない。前とは違う。父も母ももう前ほど若くはないし、やっぱりこれから私の立場は守られるのではなく守っていかななくてはいけなくなるのが増えていくと思う。これからもし結婚して夫と子ど

もがいたのならみんなを守っていかなくてはいけないし、そのためにはきちんとじぶんのことも分かっていないといけない。そして、この環境防災科で学んだ知識を、覚えておかななくてはいけないし、今まで学んだことよりもさらに上の知識が必要となると思う。そのために日々そのことを頭においておかないといけないし、守りたいという気持ちを忘れてはいけないと思う。私はもう急に誰かがいなくなってしまうのは耐えられない。私が助けたいと思う。

これから自分の進路を考える上で私は環境防災とは直接には関係のない方向に向かおうとしているが、今、この歳で学んでいる命の勉強は生きていくという事に何かしら関係してくるであろう。介護の方面でお年寄りに防災のことを教えてあげたい。そしてもし地震が来るとなっても、自分でできる何かを教えてあげたいし、学んでもらいたい。お年寄りだって自分の身はまず自分で守ることができないといけない。私はそのためにももっとたくさんの知識が必要だと思う。そういう方法で地震や自然災害によって、少しでも被害が抑えられるのだと思う。私は介護の方向で進んでいく。

失ったものは多すぎるけれど得たものもあったといえるだろう。つくづく環境防災科ができてよかったと思う。

今まであった命と引き換えにこれからの命が守られる術が考えられる。それには犠牲が多すぎた。この犠牲の上に立っている私たちは何があってもこの体験は伝えないといけないのだとやはり実感する。人の記憶の風化は抑えられるものではない。次々と頭に入れていかないといけない。私の小学2年生の記憶でさえ風化しつつある今このような形で自分の過去を記録できたことは、ありがたいと思う。この記憶は頭の中にあったままではいずれなくなってしまうけれど、このように形に残せるとはとても嬉しい。

今では私の震災当時の家は新しい人が住んでいる。その前の建て替える家だったら売れるような家ではなかったし私たちへの被害ももっとひどかったのだろう。そして今の家、この家はきちんと耐震補強のできる業者に頼んでいるので一応は安心だ。そしてあの日全壊したおばあちゃんの新しい家は翌年の8月に完成した。よって父の仕事場も確保されたわけである。今祖母はその家でまだまだ元気に暮らしている。うちの家の父・母・姉・妹・それと私は元気に暮らしている。あの震災のことは今ではほとんど話さなくなった。けれどみんなの中にはあのときの記憶があると思う。これからはもうちょっとあのときのことをみんなで話してみようと思う。昔のこと、今のこと、これからのこと、話していきたいと思う。震災が来ても、みんなで今まで頑張って、全員そろっていままでがんばってきたことを今もう一度生きていて幸せだということを感じたいと思う。

あと、あの阪神淡路大震災でボランティアなどに来てくれたすべての人に感謝したいと思う。おそらくそのような人たちが来てくれていなかったらもっと大変なことになっていたと思う。私は本当に来てくれた人たちは凄いと思う。あの悲惨な状態であったまちに私だったら怖くていけない。私はそれを直接的に感じたわけではなく、テレビを見てそう思ったのだから、直接助けられた人は相当感じるものがあつたに違いない。本当にありがとうございました。

最後の最後に、いま阪神淡路大震災の上に立って生きているのだけれど本当に生きていてよかったと思う。これからも、助かった命をたいせつに生きていこうと思う。

教訓

山本 健矢
神戸市垂水区

1995年1月16日。阪神淡路大震災が起こる1日前。その日は明日に誕生日を迎える妹の誕生日パーティーの準備で盛り上がっていた。部屋の装飾や誕生日プレゼントの準備、大きな丸型のケーキも買って準備は万端で明日を迎えるだけだった。

17日朝まだ冬の寒さを存分に感じる朝だった。近所の犬が「ワンワン」朝から鳴いていたのをおぼえている。その日は珍しく目覚ましのセットもしていなかったのに5時に目が覚めた。もう一度寝ようと布団に入ったがなかなか寝付けずに30分が過ぎた。布団はしっかりと被っていたが、35分頃急に身震いがしてトイレに行きたくなったので寝ぼけてフラフラの足でトイレに向かい用をたした。そして今一度寝ようとして布団に入って数分後に突然「ゴゴゴゴゴ」と大きな地鳴りと共にアパートの二階のこの部屋が激しく揺れた。家族全員一つの部屋で寝ていたので恐怖心はほとんどなかった。むしろ遊園地の乗り物にのっているような感覚だったので笑っていたかもしれない。まず隣に寝ていた母親が全員に向かって「ちゃんと布団の中に入ってなさい」と叫んだ。まだ小学校1年生と幼稚園に通っていた妹二人は何も言わずに言われるがままに布団に入ったまま固まっていた。父親はまだ寝ていた。僕は面白半分で幾度か布団の小さな隙間から顔を外にのぞかせ、あちこち見ていた。しかし母親にきつく叱られ布団の中で押さえつけられた状態でいた。その顔を覗かせていたほんの数秒間に見た光景は強く心に残った。食器棚からはありとあらゆる食器、グラスなどが大きな音を立てて床にたたきつけられるかのように落ち、テレビは今にも台の上から落ちそうに揺れ、僕の頭上にあった棚は「ガタガタ」音を立てて、中に入っていたビデオテープが落ちてきた。その落ちてきたものの中には裁縫用の縫い針なんかも混じっていた。もし母親がしっかりと僕を布団の中で捕まえていなければ、また僕は顔を出し、その落ちてきた縫い針が刺さって大怪我を負っていたかもしれない。今思えば子供のときの好奇心はちょっと角度を変えてみれば大怪我につながる人が多いと感じた。

一番印象に残ったのは父親が寝ていた場所を挟むようにして置いてあったタンスがゆっくりと倒れかかっているのを見たときだ。そのタンスが一つだけだったら父親は間違いなく下敷きになっていただろう。それが丁度T字の形で止まったので父親はかすり傷一つもなかった。しばらくして揺れはおさまった。こうしてみるとこの部屋はとても危ない部屋だったなあと感じる。みんなが寝ている頭の上にはタンスや、机、赤ちゃん用のもう使っていないベッド、壁に貼り付けただけの棚、このどれもがしっかりと固定されておらず本当に助かってよかったなあとしみじみ思う。神戸に地震の恐怖というものがある市民の心になかったあの頃ほとんどの家がほとんど補強や、非常持ち出し品などの備えをしていなかっただろう。そういう安心感はとても怖い。一回経験してからでないと行動を起こさないという人間の悪い癖がでていたのではないかと思った。経験してからでは遅いともっと早く気付くべきだったと思う。

少し落ちついてきたところで、まず母親がテレビをつけた。すると丁度ニュースでこの地震の速報が入ったところだった。ニュースキャスターの人もあまりにも突然のことだったのであわてていて、うまく原稿を読めていなかった。そのままテレビを見ていると外から大きな声で「山本さん大丈夫?」という声が聞こえた。窓を開けるとそこにはまだ朝日もかすかに昇っている程度の薄暗い道にそのアパートに住んでいた人たちが数人いた。母親はすぐに外に出て行き、しばらく話をしていた。その話の間には笑っている声もあった。僕が住んでいたアパートは建てられてからだいぶたっていたが幸いにも少し亀裂が入っただけで大惨事にはいたらなかった。しかしその亀裂も数センチほどのものではなく、縦に4、5mはいったものだった。一階下に住んでいるおばさんも、このアパートが崩れなくてよかったとほっと胸をなでおろしていた。・・・がそれもつかの間余震が続いていたので、部屋に戻ろうとしていたのをやめた。それからはいつ崩れてしまうか心配になったのか一向に部屋に戻ろうとはしなかった。僕の家が二階でその上には、おじいさん、おばあさんが住んでいるのだからなかなかでこないのでみんなで見に行った。幸い部屋の中は荒れていたが無事でとても元気な姿を見せてくれた。

次第にアパートの人も近所に住む人も慌ただしくでてきて、いろいろな会話がはじめていった。

その母親が話をしている間にタンスに挟まれていた父親は自力でそこから抜け出して、ずっとテレビを見ていた。するとまもなくいつものようにスーツに着替えだした。

そして僕ら兄弟3人はこの状況を楽しむかのように、部屋の中で走ったりして暴れていた。机の上から教科書が落ちていたり、作った工作物が無残にもバラバラになっていたり部屋の中は本当に足の踏み場もないくらいに散らかっていた。この状況を残しておこうと写真を撮ったりもした。全く経験したことのないことだったのでこの状況を怖いとは思わなかった。でも親の様子がぜんぜん違うのはなぜだか分からなかった。

一番ひどかったのはキッチンだった。食器棚からいろんなものは落ち、フライパンややかん、そして冷蔵庫の中のものまで飛び出して、汁物を入れていたタッパーから汁がこぼれたりして、くさい臭いも漂った。昨日買ってきていた妹の誕生日ケーキも冷蔵庫から出ていた。そこまでぐちゃぐちゃといったほどではなかったが楽しみにしていた妹は泣いていた。

母親が戻ってきて、電話をかけようとしていた。実家に連絡をしようとしていたのだ。しかし電話はつながらなかった。

その日の朝食は食パンだけで、ほかに何も食べなかった。コンビニに何か買いに行く様子もなく「これからどないすんの?」の言葉しかいっていなかった。テレビもだんだんと慌しくなってきた、いろいろな情報が飛び交っていた。どのチャンネルを見ても、この神戸で起こった地震のニュースばかりで子供の僕たちには何も見るものがなかったのでとても面白くなかったのを覚えている。

しばらくすると父親が、仕事に行くと言って家を慌てて飛び出していった。一番頼りになる父親がいなくなったのでとても不安だった。

電話が鳴った。母親がその電話に出た。その電話の相手は実家からの電話でひどく息が切れていた声だったらしい。実家の姫路も震度4を記録し、テレビをつけて震度7を記録していた神戸を見て心配してかけてきたらしい。

その間もずっと余震は続き、「まだ揺れてんでえ」と電話でも話していた。いつもならもう学校に行く準備をしているところだが、この日はそんなこともすっかり忘れて、ただどうしたらいいか分からずにいた。電話が終わって、どうするのかと思えば、いきなり荷物をまとめ始めて、旅行にでも行くかのように鞆の中にいろんなものを一気に詰め込みはじめた。もう神戸は離れて実家にひとまず帰ることになった。「学校は今こんな状況やからしばらくないやろ」と言って、僕たちにも荷物をまとめるように言った。電話の話によると、実家の姫路は被害もそんなに大きくなく、水がでない神戸とは違って、井戸の水を使っているのでも止まることはないし、ガスもしっかりと出る。食料もたくさんあるのでここにいるよりは一旦実家に帰ったほうがずっと楽に生活できるだろうということだった。しかしその実家付近でも、土砂崩れが数件あったりしたそう。とりあえずはこの神戸にいるよりも姫路に帰ったほうが安全ということで母親は安心して大きく「フー」と息を吐いた。

その間もテレビではいろんな速報が次々流れ、初めに映っていた画面の光景は、もうそこにはなかった。神戸の町の風景は薄暗い色から、徐々に赤と黒の炎と煙をまとった、すさまじい光景へと変わっていったのだった。起きたころには、まだ朝日もあまり差し込んでいない状態だったのに、1分、1秒たつにつれ、その光景は姿、形を変え、僕らの目にまざまざと見せ付けてきた。

家の状態は、いったん部屋を片付けるということになりいろいろと手伝わされた。食器が無残にもバラバラに壊れていたのでもみなスリッパを履き、素手で食器の破片を取り慎重にダンボールの中に運んでいった。布団はたたんで押し入れにしまい、倒れていたタンスも母親だけでは起こすことができなかったのでも、妹も加えて三人で必死に踏ん張ってやっともとの場所に戻すことができた。ガスの元栓を締め、窓を開けっぱなしにしていた。冷たい風が体を突き刺すように吹いてきていた。その冷たい風を断ち切るために窓を閉めた。その部屋の片づけをしているときに「今日あんたの誕生日やったのになあ」というと一度はそのことで泣き止んでいたのがまた大きな声で泣き出したので、泣き止まずのも大変、部屋の片付けもあるといった状況でその日は最悪の朝だった。

身支度をして、部屋の片付けもほとんど終わって、やっと出発することになった。車に乗り込み「さあ行こう」というときに電話がかかってきた。その電話の主は姫路にいる（僕の）母親の妹からだった。その内容は「今そっち車で向かっているからどこかで待ち合わせて行こう」ということだった。母親はもう一つの実家に行くということで、僕ら兄妹はその車に乗って一足先に姫路に向かうことになった。いつもは高速道路を使って、約一時間半で家には着くのだが、高速には乗ることができず、一般道路を使って姫路までの道のりを急ぐことにした。しかし、その一般道路がかなりの大渋滞でなかなか前に進むことができない。長いアリの行列のようにどこまでも長く、しかもゆっくりゆっくりと進み列が長くなるだけだった。車のクラクションが絶えず鳴り響いていた。その姫路までの車の中から見た光景は神戸とは異なっていた。つぶれている家やマンションなどはほとんどなく、人だけが慌てふためいている様子であり被害はなかった。コンビニや、スーパーなんかも普段通り営業しているところもあった。その頃はまだ携帯電話もなく、連絡を取り合うことができなかったので家族の安否や、いろんな情報を知るのにはとても不便だった。

幸い僕の身内で震災によって亡くなった人は誰もいず、父親と姫路の祖父に軽いかすり傷があっただけだった。

母親の妹の車の中では、ほとんど質問攻めにあっていた。「どんくらい揺れたん？」、「怖かった？」、「ちゃんとご飯食べた？」などなどずっと喋っていた。正直なところ朝からずっと興奮しっぱなしだったので車ではぐっすり寝たかった。まああれだけの震災をものに体験したのだから質問ばかりされるのは当然とは思っていたがそれにしても眠かった。朝ごはんをちゃんと食べていなかったのも、コンビニに寄っておにぎりを数個買って食べた。おなかがいっぱいになって余計に睡魔が襲ってきた。

景色がだんだんと変わって、緑の多い山々へ車は進んでいった。奥に進んでいくにつれ木造住宅の割合が高くなっていくのがよく分かる。しかし、つぶれている家屋は一軒もなかった。

約二時間半かけてやっと姫路の家に着いた。そこには心配そうな顔をして祖父と祖母が立っていた。母親の弟もいてみんなが僕ら三人に声をかけてきた。それからすぐ家に入って、テレビをつけた。そこには、神戸でテレビを見ていたときは大きく変わった光景が映っていた。長田の町が赤く煙で染まっている様子や、高速道路が傾いている様子などが映されていた。赤かった煙も次第に黒煙となり、町のほとんどがその黒煙で埋め尽くされた。恐怖におびえていた僕たちに「あんたらほんま助かってよかったなあ」と祖母が言うと、その後ろからは小さいときによくお世話になった近所の方が数名立っていた。

しばらく近所の方たちと雑談したあとのどが渴いたので水を飲もうと思ったが、ここでふと思った。神戸では蛇口をひねっても水が全くでてこなかったのでもこでも水は出ないのではないかと思った。そのことを祖母に話すと、祖母は軽く笑ってこう言った「まあちょっとこっちにおいで」。そういつて僕の手を引っ張ってキッチンの流しまで行くと僕の体をひょいと持ち上げて蛇口をひねった。すると水が蛇口から溢れるように勢いよくでてきたのだ。これほど水が出たことで喜んだことあったらだろうか。普段普通にでるものがでなくてこれほど苦労したことがあったらだろうか。蛇口から水が出てきたときは本当に大喜びした。この水は水道管を通った水ではなく井戸の水だったので、全く困ることはなかった。食料も豊富にあるし、生活に困ることはほとんどなかったように思う。でもあの震災のとき自分は本当に自分のことだけしか考えていなかった。自分が助かった。自分がご飯を食べられる。自分が水を飲める。そんな生活をしている間に多くの人が苦しんだり、困ったりしていることを全く考えていなかったのだ。そういったなんの不自由ない生活をしていたことをとても恥ずかしく思う。

その日一日はいろいろと大変なこともあったし、突然姫路の家に行ったりととても忙しかったのでまだまだ子供だった僕は夜になる前には寝てしまっていた。

次の日の朝僕はまた早く目が覚めた。六時頃だったのだろうか。今日の朝も何か起きるのだろうかとも見えない恐怖に襲われていた。

ゆっくりと階段を下り、長い廊下を歩くと、「ガタガタ」とまた家が揺れた。咄嗟に仏壇のある居間の机の下に身を隠した。仏壇が音を立ててゆれていたのもとても怖く小さくまるまっていたのを覚えて

いる。まだ昨日の余震が続いていたのだろう。その揺れは昨日の大地震とは違いとても小さくほとんどの人も気付かないぐらいのなんでもない揺れだった。しかし僕にはなぜかみんなが思っているほど小さい地震には感じなかったのだ。昨日の大地震の恐怖がずっと続いていたのだろうか。揺れてすぐに僕は「ビクッ」とした。昨日の長田の恐ろしい光景が一瞬脳裏をよぎった。しかしその揺れはすぐにおさまった。誰も今の揺れに気付いていなかったのかとても家全体は静まり返っていた。机の下に隠れていた僕は、そこから出ようとは思うもののなかなか体が言うことをきいてくれなかった。どれぐらいいいだろうか揺れがおさまって一、二分たってからようやく出ることができた。そのまま立ってリビングまで歩いていった。すると「サクサク」とキッチンのほうから音が聞こえてきた。なんだろうと思って、ゆっくり恐る恐ると近づいて見ると、祖母がもうおきて朝ごはんの準備をしていることだった。そこでさっきの揺れについて聞いてみた。「さっきめっちゃ揺れへんかったあ？」と聞くと、「なんも感じひんかったけどなあ」とあっさり返された。そこまで昨日の恐怖が残っていたのかと心では思っていなかったのだろうが、体はその時の恐怖をしっかりと覚えていたようだ。

その恐怖をまぎらわしてくれたのが、この家で飼っている犬の「ポッキー」だった。真っ白な毛で、とても細い中型の犬だ。立てば間違いなく僕より大きいだろう。その犬の散歩に行くことにした。首輪についたリールを外そうとすると上から飛び乗ってきて、僕の顔をペロペロと嘗め回してきた。数分間ずっとじゃれあっていた。ようやく散歩にしようとしてリールを持つと勢いよく走り出した。僕はぐいと引っ張られ、思いっきり犬の思うように走り回った。もうこのときにはさっきの恐怖というものはなくなっていた。動物の力って本当に人を癒す力があつたんだと、とても感動した。なぜか知らないけど犬を見ていたら、楽しい気持ちになったし、自然と笑みがでてきた。この後からだったのだろうか、動物を使ったりハビリテーションが使われたり、盲導犬の育成が活発になったり、人命救助犬が育てられたりと動物が注目され始めたのは・・・。

その日母親も父親も家族全員が姫路の家に集まった。久しぶりに家族全員がそろった日だった。父親の会社も被害はほとんどなく少しの改修を行うだけで営業が再開できるらしい。篠山の祖父、祖母の家も全く被害がなかったらしく、やっとこれでみんなが安心できた。今まで連絡が取れなかった人などがたくさんいたので、連絡が取れて本当にみんな表情が一気にゆるんだ。それから数日間姫路に泊まって、みんなが笑顔で暮らしていた。学校再開も近くなって帰ることになったその日、家族全員と、祖父、祖母、母親の妹、弟、近所の方数名を連れて、近くの神社にお参りに行った。その後もチャリティー募金を行っていたデパートに行き、全員がお金を持って募金をしにいった。

この震災で地震に対する気持ちがとても強くなったし、世間の地震に対する考え方や、対応が大きく変わっていった。何かが起こってからでないと行動を起こさない人間の悪い考えを変える出来事となったに違いない。僕の家では今、耐震補強をさらにすべきか考えているところである。今まで勉強をしてたくさん学んだことを生かして、ぜひ耐震補強を行うことをすすめていこうと思っている。さらに緊急のときに必要になる、非常持ち出し品も用意してあるし、家具の固定なんかも、ゆっくりとだがおこなっているところである。震災を経験したことで災害に対する意識もかなり高まってきた。まだまだ知らないことも多いし、まだ災害についてほんのちょっとしか触れていないのかもしれない。もっと知識を増やして、それを伝えたり、実際にやってみたりする技術も身につけていきたいと思う。この五十年間、いや、三十年間の間に東海地震や、南海地震が起こるといわれている。今はそれに控えているいろんな対策や対応を考えてそれを実行していきたい。

あのときを振り返って

山本 真巨
神戸市兵庫区

日常は大地の力の前では、ただの枯れ木のようにだった。

午前 5 時 46 分という早い時間に、小さな私が起きているはずもなく、その地震は起こった。小さいのなら何度か経験した。それはちょっとした遊具のようで、小さい私にとっては日常を少し変えてくれる、善き災害だった。しかし今回は違う。地面が波打っていた。「地震が起きた」なんてすぐには理解できず、その唐突な揺れ、突き上げるような衝撃に、私はただ揺らされるばかりであった。

物が倒れ壊れる音、何か分からないが「ゴォー」と鳴る音。様々な怖い音が鳴り響く。日常が凶器に変わった。落ちてくるテレビ、倒れるタンス、破片となった食器。その中で、隣の母はまず私をかばった。そのとっさの行動は、今でも頭に焼き付いている。

揺れて揺れて揺れて…壊れて壊れて壊れて…落ちてくるガラスにビクビクしながら、倒れるタンスを丸くなって避ける。今思えば、落ちてくるガラスが刺さらなかったのは、母のおかげで。その母が隣にいてくれたのは偶然で。倒れたタンスに押しつぶされなかったのは、運が良かったおかげ。今の私は幸運の上に成り立っているのかもしれない。

時間の感覚が狂ったように長く感じた。少しずつ治まっていく揺れに比例して、私の心も落ち着きを取り戻した。おそろおそろ布団から這い出ると、部屋は破壊の跡でいっぱいだった。壊れていない物がないぐらいに破壊されていた。地面には破片が凶器となって散らばり、道はタンスで塞がれていた。まるで家の中を嵐が通ったみたいだった。家の中は完全に閉鎖された空間だった。

父が家族の安否を確かめる。幸い、両親も妹も、そして私も怪我ひとつなかった。

「中学校に避難しよう」その結論は当然だった。

散らばるガラスの上に本を置き、道を作る。お金やペットを置いて、家を出る。パジャマのままで、学校へ。私はいつも一緒にぬいぐるみを探す。母が「早くしなさい」と声をかける。素早くぬいぐるみを持ち母の元へ駆けつけた。

家を出ると、近所の人がいた。誰も怪我はないようだった。ふと、私のマンションを振り返ると、ヒビが入っているぐらいで、火災などはなかった。家の周りはシーンとしていて、薄闇があたりを包んでいた。空気に色などないけれど、その時だけは灰色だった。それと対照的に、向こうに見える山のほうでは家が燃えていて、どす黒い煙に、燃え上がる赤色が見えた。

目の前の中学校。そこに着くと、様々な人がいた。子供に大人、老人まで様々な人に悲痛の色が漂っていた。学校も同調しているかのように暗く、しかし避難した人を優しく迎え入れた。

何をしようにもすることがない。行く小学校は避難場所、働く会社には行けず、救援物資など届いているわけもない。とりあえず寝ることにした。教室まで行く余裕もなく、行ったとしても満員だったろう。廊下に布団代わりの新聞紙をひき、かぶって寝た。冬の風があたりを包む。新聞紙のそれでは寒かったが、疲れたのかすぐ寝てしまった。

いつおきたのだろう。目が覚めると、母が取材されていた。それは日本人ではなく、私は少し構えた。いつも見るカメラとは違った大きなそれに、私たちに白い光が向けられる。リポーターが何か言った。しかし周りの音にかき消され、何といったのか、私には聞き取れなかった。少しするとその人達はすぐに立ち去った。それと同時に私の緊張も解けた。外国人が特別だと思っていた私は、自分の状況がひどいものだと、再確認した。

「親戚はどうなのだろう」「友達は無事かな」ひと段落着いたころだっただろうか。電話することになった。どの電話も人で埋まっていて、順番待ちをした。長い列に、喜ぶ声や泣く声が混じる。中には繋がらないこともあり、不安をかきたてた。

実際にかけていたのは母で、何を話して、誰にかけたのかは分からないが、親戚もどうやら無事らしい。安心したのもつかの間、友達の母がやってきた。お互いの安否を喜ぶ間もなく、興奮した様子でその人は言った。

「…U 君、火事で亡くなったのよ…」

同じクラスで、色の黒い元気な男の子だった。今でも名前と顔は覚えている。今生きていたら、どこの高校に行っただろうか。どれぐらい大きくなっているだろうか。かつて家があった場所を見ると、そ

う思わずにはいられない。

地震は小さい子にまで、ひどい程に平等だった。火事の原因はストーブ。どこかに燃え移り、家族の何人かと一緒に亡くなったそうだ。

私はあ然とした。人の死を体験したのはこれが初めてで、いまいち実感できなかった。心のどこかで嘘だと思い、また学校が始まれば会えるものだと思っていた。実際、もう会うことなどないのだけど。

隣を見ると、母が泣いていた。私の中では絶対的な存在の母が泣いているのを見たのは初めてで、「お母さんも泣くんだ」と驚いた。そして死んだのは本当なのだ、と心のどこかで理解した。

父は用心のため家に帰り、私達は教室へ移動した。そこで何人かの家族と共同生活することになった。各家庭がいろいろな物を持ち寄り、それを共同で使う。今までに無い体験だった。教室の中をダンボールでしきり、境界線を作る。初めは知らない人と暮らすことに抵抗はあったけれど、慣れればそれが日常となり、苦でなくなる。教室が私の家となった。

水を入れるためのビニール袋を用意し、配給の水を首を長くして待った。いざ、配水車が来ると、走ってもらいに行った。それが私の唯一の仕事だった。小さい私は楽もないが苦もない生活が送れた。今考えてみると比較的にな生活が送れていたのだと思う。

ある日、母方の祖父の家に私だけ移動することになった。車で移動するいつもの道。少し遠回りして安全な道を選ぶ。立ち往生する車がちらほら見えた。あたり一面焼け野原、とまではいかないものの、炭のような家、木屑のような家、落ちた看板など、どれも地震の凄さを表していた。祖父の家に近づくにつれて、普通の街並みを取り戻していた。田舎特有の広々とした土地、イチジクの木が連なる道、周りにはスーパーもなく不便な家、どれもがいつもより綺麗で、落ち着いて見えた。

配給でもらった勉強道具を持って、家を訪れた。玄関で母と別れるときになってから、こうなることを二つ返事で承諾した自分を悔やんだ。祖父達は温かく迎え入れてくれたし、近くには親戚で同学年の子もいる。初めは大丈夫だと思っていた。もう小学生だし、我慢できると思っていた。けれどいざいつ会うか分からない母と離れると思うと、一緒に帰りたくなった。

「やっぱり一緒に帰る。学校行かなくてもいい。」

私はそう素直に言った。いまさら帰れないことだって知っている。こっちの環境の方が楽しく暮らせることも分かっていた。だからこれはただの悪あがきだったのだろう。母の答えを待つまでもなかった。「少しの間だけやから、我慢し。お母さんだって小さいころは同じことしたんよ。」どうやら、母は小さいころに火事にあい、私と同じように疎開したそうだ。その言葉に勇気づけられた私はおとなしく、祖父の家に住むことになった。

学校は親戚の子と同じ学校、同じクラスに転校することになった。その子がいると思うと心強く、楽しいものになるかもしれない、と希望が持てた。実際、紹介されるまで廊下で待っている時間は生きた心地がしなかった。どれも杞憂なのだけど、声が裏返らないだろうか、いじめられないだろうか、マイナス面ばかり考えてしまう。

「山本さん、入ってきて。」

今までで一番緊張した時だっただろう。それから先は覚えていない。きっと精一杯の自己紹介に、直角なお辞儀でもしていたのだと思う。予想以上に暖かく迎え入れてくれた転校初日。緊張しながらも、楽しい1日だった。

しばらくして、祖父母共に、具合が悪くなり、親戚の家に行くことになった。いくら見知った仲とはいえ、長期間いることは苦痛だと予想できるし、そのトイレはまだ旧式だったため、行くのものはばかれた。嫌で仕方が無かった。まだ、避難所の方がマシだと何度も考えて、まぶたを閉じる。思い出すのは家族と家のことばかり。「ペットはどうしたのだろう」「向こうはもう家に帰っているかな」。色々なことが頭をめぐる。夜ごと声を押し殺して泣いた。一睡も出来ない日もあった。しかし、子供の順応性は高いのだと思う。何日かするとその家や家族にも慣れ、学校で友達もできた。ケンカもしたし、遊びにもいった。この生活がかなり昔からずっと続いているように、ページをめくるように過ぎていく。ここではたくさんのことが起こった。小さい私にとって記憶しておくのも困難なほど、毎日は季節のように色を変え、神戸の家族を思い出すことも少なくなった。

別れのときは突然。いきなり帰ることになった。家もある程度綺麗になったし、何より学校が再開したのだと言う。うれしさ半分、悲しさ半分。そんな気持ちを抱え、行く道はいつもより短い。その日は、私のためのホームルームがあった。みんなで似顔絵を描いて、コメントを書く。今では色あせてしまった冊子や寄せ書きは、今でも大切に保管してある。見返すと、たどたどしい文字や、似てない似顔絵。そのどれもが暖かいココアのような、そんな優しさに包まれていた。

家へ帰ると地震はあったのだと確実に思い返される。中は片付いているものの、無くなったもの、使えないもの、そして死んでしまったペット。ところどころ欠けていて、落ち着かなかった。

家の中だけではない。外だってそうだ。目の前の隆起した道路は当たり前のように、直っていなかったし、燃えカスのような家もそのままあった。

夜、父と外を散歩することになった。散歩なんて今までした事なかったけれど、その外の情景を頭の中にとどめておくために、私も暗闇の中を歩いた。信号なんて機能していないことに、少し驚いた。するとペットショップにたどり着いた。そこは大変な被害が出たらしく、いらなくなったのか、ビー玉がたくさん落ちていた。散乱と言ってもいいだろう。色とりどりのそれが道路まで転がっていて、綺麗だった。父が「綺麗なやつだけ、拾っていけ。」と言った。私は少し罰当たりで、不謹慎なことだと思ったけれど、結局拾った。欠けているものがたくさんあって、それは地震が起きたという証拠のような気がして、1個だけ自分のポケットに入れた。その近くにあるスーパーは全壊らしく、面影がなかった。象にでも踏まれたような、ペしゃんこのそれが、ただ結果として残っていた。

あまり遠出はせずにそこで終わった短い散歩。家に着くと何だか、肩が重く感じた。それは私が見てきた、無くなった物の重さのように、今は思う。その短い散歩を思い返すと、やりきれなさをぎゅっと詰めたような、そんな気持ちになる。

小学校もまだ避難所だった。一時期よりかなり減っているものの、そこには老人が多く残っていた。自分のクラスへ向かう途中、廊下に寝ている人を見つけた。また、クラスへ行っても来ている人はまだ少ない。今こうして無事に学校に通えることはとても幸運なのだと感じた。授業らしい授業は行わなかったように思う。みんなで生徒が来るのを待っているような、そんな時間を過ごした。

街が回復するにつれ、避難者も減り、生徒も増えた。授業がいつもの授業へと戻っていく。いくら待っても帰ってこない人もいた。そんな人達は違うところへ行ったのだと、しだいに理解した。

明確な区切りなどなく、潮がすーっと引いていくように、地震の被害は見えなくなっていく。道路は舗装され、家は新たに立ち、仮設住宅と言う単語を頻繁に聞くようになった。ちやくちやくと進んでいく復興。流れるように時は過ぎた。その間、私はいくつかのボランティアに参加した。仮設住宅の掃除に行くなど、小さいことをした。初めて仮設住宅を見た時に、何とも言えない圧迫感に、無機質で簡素な作り。それを見て、電話ボックスのようだと思った。夏に行ったため、余計に暑く感じ、住んでいる人の健康状況が気になった。実際その人達と話すことは少なかったけれど、そういったことに参加するたびに、「まだ被害は完全には消えてない」と語られているような気がした。

そして現在。地震などあったのかと思わせるほどに復興した「まち」。糊で貼るようなちぐはぐは無く、壊れた物はほとんど別の物に作り変わった。まるでブロックのよう、容易に組み替えたようだ。不気味な静寂と乾いていた街の雰囲気も、潤いを増し、音が耐えない街へと変化した。そして記憶も。あんなにも衝撃的で、私の人生を大きく変えた出来事にもかかわらず、薄れていってしまう。あの時感じた思い、かいだ臭い、見た情景。そのどれもが自分の物でないように、文章や写真から考えたと思うぐらいに不確かだ。自分の記憶なのに、自信がもてない、人の物のように落ち着かない。これでは誰かに伝えていくことが出来ないと思う。

私には転校先の学校からもらった冊子と拾ったビー玉が残っている。特に意識をして残していたわけではない。しかしこれがあると、これは自分の記憶だと、それが証拠になっていると、胸を張って言える。取って置いて良かった、と思う。

人間はどうしても忘れてしまう。良いこと、悪いこと関係なく。目の前の新しい物の前には昔の記憶はどうしても負けてしまう。今後このような地震や他の災害が起きたときには、語っていく人も、語らずに思いを残す人も、何か『モノ』は残していった欲しいと思う。経験を伝えていかなければならない。私達は、震災の記憶を風化させないようにしなければならない。伝えるための記憶、証拠となるものを今後の災害のときも何か残していくべきなのだと思う。

私は様々な体験をした。被災・避難所・転校…、そのどれもが普通では体験することなく、通り過ぎていくはずだった。神戸というこの地域に生まれたからこそこの体験。過去には東京で地震が起こり、北海道では噴火が起こった。それは阪神・淡路大震災と同様に、その土地で起こった災害。それはマスコミの発達した今なら容易に知ることが出来るが、それを本当の意味で知ることが出来るのは、その土地の現状を目で確かめた人だけだ。新聞で写真を見る。一般の人は「ああ、凄いなあ」と思うだろう。し

かし、しっかりと自分の目で確かめた人なら声を出すことも出来ずに、「ああ、恐ろしい」と感じるだろう。凄いと恐ろしいとはニュアンスは同じでも、他人事として見たときと、自分のものとして感じたときのような違いがある。他人の目からでは計り知れない恐怖を、今回の地震で私は感じ取ることが出来た。

結局は、地震を語れるのは被災者やその情景を生で見た人しかいないということ。いくら長く難しい肩書きがついた人でも、体験しなくてはその恐怖は語れないし、語ったところで他人の目から見た被害など、本当の体験話の前ではしおれてしまう。

しかし、客観的にみることも必要なのかもしれない。話の脈絡を欠く、主観的過ぎる話など、聞いていて飽きる人もいるだろう。どの話も結果的に「地震が怖かった」という結論にたどり着くことが分かって、聞かない人もいるだろう。また語る方もだんだんと脚色され、体験話とはかけ離れた空想の物語と化すかもしれない。あくびをかみ殺すような体験話よりも、手っ取り早く被害を理解する方が時には好まれる。

例えば、数字。これは地震の凄まじさを撮った写真の次に分かりやすい被害の記録だ。私達人間は数字を基本として、生きているようなところが多々ある。悪いことではない。例えば、成績。どんなに自分が頑張ったとは言え、数字でよい結果を出さなければ、この社会では何もしなかったように無視されてしまう。このように数字は私達が生きていく上で、欠かすことの出来ない、道具の一つだ。それは災害の被害を理解する方法にも当然のごとく使われる。実際に死者数や火事の件数など、被災者の私から見た場合でも分かりやすく、改めて地震の大きさを理解することもある。被害を語る上で欠かせない数字。これも無視してはいけない。

しかし、震災直後あんなにも求められた体験話の多くが、必要ない状態になり、数字だけが記録として残っている。体験話も記録に残ってはいるが、一部だけである。大多数の話は必要なくなり、そして自分たちの生活に役に立たない情報のため記憶の中から排除され始めている。記憶に縛り続けられるのも良くないが、1. 17の日に何があったかさえ忘れている人もいる。何があったかさえ忘れるなど、この地域に住んでいる同じ人間として、悲しく思う。

心で感じる被害と頭で理解する被害。このどちらもが大切で、どちらが欠けても、教訓は生まれない。どちらも記録・記憶として残し、次の災害の役に立つようにしたい。

あの時、私に出来た復興活動は何だったのだろう。夢から覚めたときのように、気が付くと前の姿を少し残した別の新しい街が完成していた。私の知らない所ではきっと、大人達が頭を悩ませるようなこともあっただろうし、湯水のようにお金もかかったことだろう。けれど、それは私の知るところではなかったし、小学校でも中学校でも習わなかった。

そして何より私の興味は時が経つにつれて、消えていった。様々な制度や、体験しなかった被害、その裏側で動いていた人達をこの科で学び、私は当時何もしなかったことに気付いた。「私は被災者だったから、支援を受ける側」と受身で消極的な姿勢ではいけなかったのだと思う。

けれど、一体あの時の私に何か出来たのだろうか。何かの会議に参加し、対策を考えるのか。それとも街で募金活動を行えばよかったのか。しかし、これらは小学生にできることではない。あの時の私にできたこと。それはただ学校に通うことだったのではないだろうか。学校へ行けない間、違う学校へ行く。それだけで、その先の学校は「転校しなければならぬほど、被害がひどかったのだろう」などと思うだろうし、その学校の避難所制度の改革が行われるかもしれない。生徒にしても、話の話題として被害の深刻さが上がるだろう。それはきっとマスコミから受け取る情報よりも、分かりやすく、近いものとなる。被災者側にしても、新たな環境に戸惑うこともあるが、心の傷を癒す効果は大いに期待できる。当時、私は当時通った学校のおかげで、嫌な震災の経験を少しでも楽しいものに変えることができたのだと思う。

子供が出来ることは少なく、大きなことは出来ない。「学校へ通う」という当たり前のことを、当たり前でないときに行う。早急にはできないことだけれど、子供が学校へ行く姿は日常を想像させ、きっと避難所の人達にも元気を与えるはずだ。その時の私達に出来た復興は、身近なところにあったのだ。

神戸には起こらないと言われていた地震。私たちの意識の水面下にいつも地震はあった。

「自分には起こらないだろう」

そう思うことも少ないほどに、地震という言葉は身近な物ではなかった。地震の前に、起こった異変。「空が赤く染まった」「動物が激しく鳴いた」など、こういったことに疑問を感じるものの、「何か大きなことが起こる」、そういった危機感というものを感じなかったのがほとんどだと思う。

危機感。自分の生活や地位、そういったものがいつかは無くなってしまいうんじやないかという不安感。

そして自分にもいつかは災害に合うときが来るという事実。これらから目を背けてはいけない。

「常に何かに追われている」というのはおかしいけれど、「追われるかもしれない」といったことは思っておくべきなのだと、そしてそれに伴う備えは必要だと、この震災を体験してそう思った。

私たちが地震に襲われたあの日。そう思っていた人が何人いただろう。思っていた人は少なく、そして備えをしていた人も少なかったはずだ。しかし、いざ地震が起こった時に、私達は思ったよりも冷静で正しい判断が出来た。記憶の底にあった少しの知識と、初めから備わっていた危機回避能力のようなものが私達に正しい判断を行わせた。「危機感などなくても対処できた。」この事もまた事実だ。

「地震大国、日本」とも呼ばれている私達が、実際にそれを意識している人は少ないだろう。また、次に来る地震を各マスコミは大きく取り上げているが、それを真剣に見ている人もまた少ないだろう。災害のために備えをしているひとも減ってきた。日々の慌しさの前には、いつ来るか分からない地震など現実味を失い、色あせていく。昔のように地震が意識の水面下に沈もうとしている。これでは私たちの受けた被害が無駄になってしまう。そこから何かを学び、発展させなくては意味がない。

次の災害時には正しい判断が同じように出来るだろうか。前できたことが必ずしも出来るとは限らない。そして次は自分が被災者を助ける側になるかもしれない。危機感、それは自分だけに対する言葉ではなく、他者のためにも存在する言葉であって欲しい。今回の地震にはうまく対応できたのかもしれない。けれど次の地震のときには自分が助ける側へいくかもしれない。危機感と、そういった助け合いの精神。これを被災者やまたこの震災を知っている人は持っておいて欲しい。

久しぶりに亡くなった友達の家の周辺を通った。前通ったときは確か工事中だった気がする。綺麗に整えられた道路。コンクリートの歩きやすい道。立ち並ぶ綺麗な家。そのどれもが地震などなかったように新しい街として息づいていた。この街は新しい命が芽生えたというよりは、成長過程の青春期といった感じだった。

その家があったであろう場所は、道路になっており、生きていた証が何も残っていないようで、胸が痛くなった。壊れ、家主がいなくなった家はただの箱で、存在している意味はもはや無い。新しいものへ作り変えるのは当然のことだ。ただ、少し戸惑う時がある。街の早い変わりよう、人の何も無かったような立ち直りように、私の時計が少し遅れて感じるような、そんな時がある。例えば久しぶりに故郷へ帰った人の反応と似ているかもしれない。「ここも変わったなあ」と。

けれど、地震が起こったことは私の胸に残っている。彼が生きていた頃のこともきっと忘れない。いや、忘れたくない。多くの人の胸の中には、地震が起こったという事実だけでも残っているだろう。彼を覚えている人もきっといる。彼を忘れることは地震を忘れることに繋がるから…。その復興の姿を夢見て、新しい明日へ一歩踏み出したあの時は、確実に今へと繋がっている。

地震は多くのものを奪ったが、少しの発達力と危機感を与えた。その少しだけのものを私たちは倍へ倍へと増やしていき、今に至ったのである。その契機としての地震、過程としての復興、結果としての現在。現在書いている私の作文も、その震災の過程となり記録として残るのだろう。